プロファイル管理 2603

Profile Management は、Citrix Virtual Apps サーバー、Citrix Virtual Desktops™ で作成された仮想デスクトップ、および物理デスクトップ向けのプロファイルソリューションとして意図されています。プロファイルを管理したい各コンピューターに Profile Management をインストールします。

Active Directoryグループポリシーオブジェクトを使用すると、Citrix®ユーザープロファイルの動作を制御できます。多くの設定を調整できますが、一般的には、これらのトピックで説明されているように、一部の設定のみを構成すれば十分です。

展開に適したポリシー選択のセットを選ぶ最善の方法は、構成を決定するの記事の質問に答えることです。

Profile Management の使用権は、EULAに記載されています。

これらのトピックで使用されている用語については、用語集を参照してください。

新機能

修正された問題

Profile Management 2603 には、以下の修正された問題が含まれています。

- ユーザーがログオン直後にログオフすると、Profile Management サービスがクラッシュする可能性があります。
- ユーザーが初めてマシンにログオンし、OneDrive コンテナが 有効になった後、「`OneDrive - XXXX` の `C:\Users\username\OneDrive - XXXX` フォルダーは元の `OneDrive - XXXX` フォルダーではありません」というエラーメッセージが OneDrive に表示されることがあります。
- フルプロファイルコンテナまたはOneDriveコンテナが有効な場合、ユーザーがマシンにログオンすると、次のメッセージが表示されます。
  - ユーザーがコンテナを有効にする前からOneDriveフォルダーを使用しており、
  - コンテナが有効になった後、ユーザーが初めてマシンにログオンします。



- ミラーフォルダーアクセラレーションディスクを再アタッチする必要がある場合、Fixサービスがクラッシュする可能性があります。
- メモリマップI/Oファイルをユーザーストアに保存することはサポートされていません。
- **Director > パーソナライズ**ページで、*全体*の**プロファイルコンテナ**と**プロファイルコンテナのローカルキャッシュ**の両方が有効になっている場合、**プロファイルパス**がユーザーストアパスではなくボリュームパスを表示することがあります。

- Citrix Profile Managementのフォルダーリダイレクトに使用される共有フォルダーのアクセス許可設定がログオン中に変更され、ログオンパフォーマンスが低下する可能性があります。
- プロファイルレプリケーションが期待どおりに機能しない場合があります。

既知の問題

Profile Management 2603 には、以下の既知の問題が含まれています:

- ユーザーがフォルダーをゴミ箱に移動すると、「フォルダーアクセス拒否」というメッセージが次の状況で表示されます:

  - 部分プロファイルコンテナまたはOneDriveコンテナが有効になっている場合、ユーザーはいずれかのコンテナからフォルダーを削除しようとします。
  - 完全プロファイルコンテナが有効になっている場合、ユーザーはユーザープロファイルフォルダー内にはないがプロファイルと同じディスク上にあるフォルダーを削除しようとします。

    フォルダーアクセス拒否(/en-us/profile-management/current-release/media/known-issues-2206-1.png)

  この問題を回避するには、代わりに完全に削除を実行します:

  - フォルダーを選択し、**Shift + Delete** を押して完全に削除します。
  - **ごみ箱のプロパティ** を **ファイルをゴミ箱に移動しないで、削除と同時にファイルを消去する。** に設定します。

    ごみ箱のプロパティ(/en-us/profile-management/current-release/media/known-issues-2206-1-workaround.png)

- 既存のユーザープロファイルに対してフォルダーリダイレクトを有効にすると、サブフォルダーが失われる可能性があります。

  この問題は、既存のCitrix Profile Management (CPM) ユーザープロファイルにのみ影響します。**フォルダーリダイレクト** (MicrosoftまたはCPM) がフォルダーに対して新しく有効にされ、かつ **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする** も有効になっている場合、サブフォルダーが新しい場所に移行しない可能性があります。

  たとえば、**ドキュメント** の下にサブフォルダー (**FolderA**) が存在し、**ドキュメント** がまだリダイレクトされていない場合、フォルダーリダイレクトを有効にすると、通常、次回のログオン時に **ドキュメント** フォルダーが新しいリダイレクト先に移行されます。しかし、**フォル**

ダーのプロファイルストリーミングを有効にする がオンになっていると、**FolderA** とそのコンテンツが移行されず、失われる可能性があります。

回避策:

a. 既存のユーザープロファイルに対して **フォルダーリダイレクト** を有効にする前に、**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする** ポリシーを無効にします。
b. 次回のユーザーログオン後、リダイレクトされたフォルダーが新しい場所に正常に移行されたことを確認します。
c. **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**ポリシーを再度有効にします。

- ユーザーが同じVDAマシンで重複セッションを起動すると、「The Group Policy Client service failed the sign-in". Access is denied.」というエラーメッセージが表示された黒い画面が表示されることがあります。

サードパーティ通知

Profile Management の現在のリリースには、以下のドキュメントで定義されている条件に基づいてライセンス供与されたサードパーティ製ソフトウェアが含まれている場合があります。

Profile Management サードパーティ通知

クイックスタートガイド

この記事では、Profile Management のインストールと構成に関するクイックリファレンスを提供します。

前提条件

すべてのシステム要件が満たされていることを確認します。詳細については、システム要件を参照してください。

Profile Management のインストール

Profile Management は、Virtual Delivery Agent (VDA) のインストールに含まれています。VDA の場合、Profile Management をインストールまたはアップグレードするには、VDA ソフトウェアをインストールまたはアップグレードするだけです。

Profile Management の展開は、.msi ファイルと、.adm または .admx ファイルのいずれかをインストールすることで構成されます。ファイルをインストールするには、インストールとセットアップの手順に従ってください。

> **注：**
>
> 潜在的な競合を避けるため、Citrix Profile Management プロセス (`%ProgramFiles%\Citrix\User Profile Manager\UserProfileManager.exe`) をウイルス対策ソフトウェアの除外リストに追加してください。詳細については、Citrix Antivirus Best Practicesを参照してください。

Profile Management を集中管理する場所を決定する

Profile Management を集中管理するには、次の3つの方法があります。以下のいずれかの方法を選択してください。

- Active Directory の GPO を使用する
- Citrix Studio のポリシーを使用する

- ワークスペース・エンバイロメント・マネージメント™ (WEM) を使用する

  Active Directory の GPO を使用して Profile Management を構成する手順については、Knowledge Center の記事 CTX222893を参照してください。

  Citrix Studioのポリシーを使用してProfile Managementを構成する手順については、Knowledge Centerの記事CTX222893を参照してください。

  WEMを使用してProfile Managementを構成する手順については、Knowledge Centerの記事CTX229258を参照してください。

Profile Managementを構成する

基本設定を構成する

1. ユーザー ストアを作成する

   安全なユーザー ストアを作成するための推奨事項（ファイル共有の作成やフォルダー権限の設定など）は、Microsoftの記事Deploying Roaming User Profilesで入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作において高レベルのセキュリティを確保します。

2. ユーザー ストアへのパスを指定する
3. Profile Managementを有効にする
4. 基本設定を確認する

   基本設定を確認するには、次の手順を実行します。

   a. Citrix Studioで、**Enable logging**、**Logon**、**Logoff**の各ポリシーを**Enabled**に設定します。

   b. VDAにログオンし、`gpupdate /force`を管理者として実行します。

   c. VDAからログオフし、再度ログオンします。

   d. デフォルトのログファイルパス`C:\Windows\System32\Logfiles\UserProfileManager`に移動し、`pm.log`ファイルを開き、ログオンイベントを探して、次のメッセージが存在することを確認します。

   ```
   Starting logon processing…

   Finished logon processing successfully in [s]:
   ```

Profile Management構成の計画

1. 環境とユーザーに適した構成を形成する一連のポリシー設定を決定するには、Profile Managementの展開を計画します。ユーザープロファイルの**自動構成**機能は、Citrix Virtual Apps and Desktopsの展開における意思決定の一部を簡素化します。

   展開の推奨アプローチを決定するには、環境に関する次の基本的な質問に答えてください。

   - パイロットまたは本番環境
   - プロファイルの移行または作成
   - 永続的またはプロビジョニング済み、専用または共有
   - モバイルまたは静的
   - 使用中のアプリケーション

2. それに応じてProfile Managementを構成するには、以下を実行します。

   - ユーザープロファイルをストリーム配信します。詳しくは、ユーザープロファイルのストリーム配信を参照してください。
   - アクティブライトバックを有効にします。詳しくは、アクティブライトバックの構成を参照してください。
   - 必須プロファイルを指定します。詳しくは、テンプレートまたは必須プロファイルの指定を参照してください。
   - 除外を構成します。詳しくは、項目の含める/除外を参照してください。
   - フォルダーリダイレクトを構成します。詳しくは、フォルダーリダイレクトの構成を参照してください。
   - アプリケーションを構成します。詳しくは、ネイティブOutlook検索エクスペリエンスの有効化を参照してください。

3. Profile Managementの設定を確認します。

   a. この記事で前述したように、基本設定を確認します。

   b. `pm_configure.log`ファイルでポリシー設定を確認します。以下のメッセージが存在することを確認します。

   ```
   Configuration value read from Policy: LoggingEnabled=

   Configuration value read from INI file: CEIPEnabled=
   ```

```
Configuration value PSAlwaysCache set neither in policy nor in INI
file. Defaulting to:
```

トラブルシューティング

詳細については、トラブルシューティングを参照してください。

Profile Management の仕組み

Profile Management は、同じユーザーによる同時ドメインログオンがプロファイルに複雑さと一貫性の問題を引き起こす環境において、ユーザープロファイルの欠点を解決します。たとえば、ユーザーがローミングプロファイルに基づいて2つの異なる仮想リソースへのセッションを開始した場合、最後に終了するセッションのプロファイルが、最初のセッションのプロファイルを上書きします。この「後勝ち」として知られる問題は、ユーザーが最初のセッションで行ったパーソナライズ設定をすべて破棄します。

各リソースサイロに個別のプロファイルを使用することで、この問題に対処できます。しかし、このアプローチでは、管理オーバーヘッドとストレージ容量の要件が増加します。もう1つの欠点は、ユーザーがアクセスするリソースサイロによって異なる設定を経験することです。

Profile Management は、簡単かつ信頼性の高い方法でプロファイルを最適化します。中間段階およびログオフ時に、レジストリの変更とプロファイル内のファイルおよびフォルダーは、各ユーザーのユーザー ストアに保存されます。一般的に、ファイルが存在する場合、タイムスタンプが古い場合は上書きされます。

ログオン時に、ユーザーのレジストリエントリとファイルがユーザー ストアからコピーされます。ローカルにキャッシュされたプロファイルが存在する場合、2つのセットは同期されます。その結果、すべてのアプリケーションとサイロのすべての設定がセッション中に利用可能になります。また、各サイロに個別のユーザープロファイルを維持する必要もなくなります。Citrix® ストリーミングユーザープロファイルは、ログオン時間をさらに向上させることができます。

Profile Management は、ネットワーク障害を経験するモバイルユーザー（オフラインプロファイル機能が構成されている場合）および異なるオペレーティングシステムからリソースにアクセスするユーザー（クロスプラットフォーム設定機能が構成されている場合）向けに、アプリケーション設定を保護するのに役立ちます。

注：Profile Management は、ローカルアカウントではなくドメインユーザーログオンを処理します。

ネットワークベースのプロファイルが使用されている場合は、組織で Profile Management の導入を検討してください。強制プロファイルやローミングプロファイルなどの他のソリューションを実装し、Microsoft Windows の標準的な知識でそれらを維持することもできるでしょう。ただし、展開が制限されている場合（たとえば、ユーザーのカスタマイズが制限されているため強制プロ

ファイルが適切なコールセンターなど）を除き、Profile Management が推奨される場合があります。

Citrix は、ユーザー固有のデータがプロファイルとは別に保存されるように、フォルダーリダイレクトを使用することを推奨します。

ホームフォルダーとテンプレートのパスは、ネットワークの場所のみで構成する必要があります。

プロファイルについて

プロファイルの割り当て

Windowsでユーザーにプロファイルを割り当てるには、どのような方法がありますか?

この記事は、Citrix Profile Managementではなく、Microsoft Windowsでのプロファイルの割り当てについて説明しています。

ユーザーにプロファイルを割り当てるには、いくつかの方法があります。

- Active Directory (AD) のユーザーアカウントプロパティを使用する
- グループポリシー (GP) を使用する
- 上記の方法を使用して、Remote Desktop Services (旧称 Terminal Services) セッションに固有のプロファイルを割り当てる

これらの方法の一部は、特定のオペレーティングシステムでのみ利用可能です。

- **Remote Desktop Services**。Windows Server 2008 R2 で Remote Desktop Services プロファイルを割り当てるには、GPO 設定「Set path for Remote Desktop Services Roaming User Profile」を使用します。これは、「Computer Configuration\\Administrative Templates\\Windows Component\\Remote Desktop Services\\Remote Desktop Session Host\\Profiles」にあります。以前のマルチセッションオペレーティングシステムでは、「Computer Configuration\\Administrative Templates\\Windows Components\\Terminal Services」にある設定「Set path for TS Roaming Profiles」を使用します。

  個々のユーザーのプロファイルを構成するには、AD のユーザーアカウントプロパティページで、個々のアカウントに「Set path for TS Roaming Profiles」を設定することもできます。ただし、通常はGPでこの割り当てを行う方がはるかに優れています。

  ターミナルサーバーで設定「Use mandatory profiles」を使用して、強制プロファイルの使用を強制できます。

- **Windows 7、Windows 8、および Windows Server**。ユーザーアカウントプロパティページを使用して、個々のアカウントに移動プロファイルを設定します。また、Windows Server 2008 AD および Windows 7 デバイスの場合、GPO 設定「Set roaming profile path for all users logging on to this computer」を使用できます。これは、「Computer\\Administrative Templates\\System\\User Profiles」にあります。Windows 8 または Windows Server 2012 コンピューターにログオンするユーザーの場合、Windows Server 2012 の Active Directory を使用してユーザーのホームフォルダーを設定することもできます。

複数の方法が使用されている場合、ドメインユーザーにプロファイルを配信する優先順位は何ですか?

Profile Management を使用してユーザーのプロファイルを管理する場合、他のどのプロファイル割り当て方法よりも優先されます。Profile Management によってプロファイルデータが管理されていないユーザーには、複数の方法を使用してプロファイルが割り当てられることがあります。実際に使用されるプロファイルは、次の優先順位に基づいています。

1. Citrix ユーザープロファイル (つまり、Profile Management によって作成されたプロファイル)
2. GPOによって割り当てられたリモートデスクトップサービスプロファイル
3. ユーザープロパティによって割り当てられたリモートデスクトップサービスプロファイル
4. GPOによって割り当てられた移動プロファイル (Windows Server 2008 AD および Windows 7 のみ)
5. ユーザープロパティによって割り当てられた移動プロファイル

Profile Managementのアーキテクチャ

この記事では、ユーザー ストアとクロスプラットフォーム設定ストアのフォルダー構造について説明します。ユーザー ストアは、Citrix®ユーザー プロファイルの中央の場所です。クロスプラットフォーム設定ストアは、別の場所です。

Profile Managementストアに関する重要な情報

ユーザー ストアとクロスプラットフォーム設定ストアの構造は、情報提供とローカライズおよびトラブルシューティングを支援する目的でここに記載されています。プロファイル データに関する問題を最小限に抑え、セキュリティを維持するために設計された、次の重要な推奨事項に従ってください。

- どちらのストアの構造も変更しないでください。
- ストアのどの部分にもファイルやフォルダーを直接書き込まないでください。ユーザー ストアは、この点でリダイレクトされたフォルダーとは異なります。

- ユーザー ストアは、リダイレクトされたフォルダーとは別に保管してください。たとえば、`\\server1\profiles\%username%`と`\\server1\folders\%username%`のように、同じファイル サーバーまたはDFS名前空間の別々の共有に保管できます。この手法により、バージョン1とバージョン2のプロファイルを一緒にサポートし、両方のプロファイル バージョンで共有される単一のリダイレクト フォルダー セットをサポートすることがはるかに容易になります。
- ユーザーはユーザー ストアを見る必要がないため、ドライブ文字を割り当てないでください。
- ユーザー ストアにクォータを課さないでください。プロファイル サイズを制限する場合は、クォータを使用するのではなく、項目を除外することを検討してください。

ユーザー ストアのフォルダー構造

ユーザー ストアは、デフォルトでユーザーのホーム ディレクトリにある**WINDOWS**フォルダーになります。これにより、パイロット インストールは簡素化されますが、本番システムの場合は、ユーザー ストアをネットワーク共有、または（最高の拡張性のために）DFS名前空間として構成してください。エンタープライズ対応のユーザー ストアのサポートされる構成については、「Profile Managementによる高可用性と災害復旧」で説明されています。

安全なユーザー ストアの作成に関する推奨事項は、Microsoft TechNet Webサイトの「ローミング ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高いレベルのセキュリティを保証します。また、ユーザー ストアへのアクセスを構成する際には、Citrixユーザー プロファイルを変更または削除するために必要なAdministratorsグループを含めてください。

注： Windows 7およびWindows 2008 R2クライアント デバイスでは、Windows 2012 R2ファイル サーバーで共有を作成する際に、**Encrypt data access**チェック ボックスを選択しないでください。

ルート レベルのユーザー ストアのフォルダー構造を次の表に示します。

フォルダ	注
	ユーザー ストア内のプロファイルのルート。
`\UPM_Profile`	このフォルダーには、プロファイルからのファイルとフォルダーが含まれています。
`\UPM_Drive_C`	このフォルダーには、プロファイル外から含まれる項目（この場合はドライブ C から）が含まれています。このフォルダーは、Profile Management 4.x 以前からのアップグレード時

フォルダ	注
	に存在します。Profile Management 5.0 では、プロファイル外の項目の管理はサポートされていません。
`\Pending`	このフォルダーには、ロック ファイル、保留中のファイル、およびストリーミング機能が使用されている場合はスタンプ ファイルが含まれています。

いくつかの例をこの表に示します。

フォルダー名の例	注
`\UPM_Profile\Data`	ユーザー プロファイル内の **Data** フォルダーの同期されたコンテンツ。
`\UPM_Profile\AppData_upm_var`	ユーザー プロファイル内の非ローカライズされた Application Data フォルダーの同期されたコンテンツ。このフォルダーは、Profile Management 4.x 以前からのアップグレード時に存在します。バージョン 1 プロファイル（Application Data はその例のフォルダーです）の管理は、Profile Management 5.0 ではサポートされていません。

保留領域

ユーザー ストアには保留領域が含まれます。この領域は、ストリーミングされたユーザー プロファイルとアクティブなライトバック機能で使用される一時的な保持領域です。ユーザーが最後のセッションからログオフした後、すべてのファイルは保留領域からユーザー ストアに同期されます。新しいセッションでは、ユーザー ストアと保留領域の両方からファイルがダウンロードされるため、ユーザーは常に最新のプロファイルを体験できます。

サーバーが応答しなくなった場合、保留領域内のファイルをユーザー ストアに戻すタイムアウトを設定できます（ストリーミングされたユーザー プロファイル機能の一部として構成されている場合）。

複数のプラットフォームを持つユーザー ストアのフォルダー構造

クロスプラットフォーム設定機能を使用する場合、複数のプラットフォームが関与します。各プラットフォームのプロファイルを分離するために、プラットフォーム固有のフォルダーを定義する必要があります。通常、これは「ユーザー ストアへのパス」ポリシーで Profile Management 変数を使用して行います（たとえば、パスに `%USERNAME%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` を使用します）。

クロスプラットフォーム設定ストアは、クロスプラットフォーム設定機能が構成された後、サポートされているアプリケーションの設定を保持します。ストアの名前と場所は、構成時に指定します（「クロスプラットフォーム設定ストアへのパス」ポリシーを使用）。このストアには、オペレーティング システム間でローミングするユーザー設定のサブセットが保持されます。

たとえば、Windows XP と Windows 7 の間で設定をローミングしたい場合があります。プラットフォーム固有のフォルダーには、Windows XP と Windows 7 に固有のユーザー設定が含まれます。クロスプラットフォーム設定ストアには、これらのオペレーティング システム間でローミングする設定のサブセットが含まれます。ログオン時に、このサブセットはプラットフォーム固有のフォルダーにコピーされ、その一部として残ります。ログオフ時に、サブセットへの変更が抽出され、クロスプラットフォーム設定ストアに戻されます。

各プラットフォーム固有のフォルダーには、標準のサブフォルダー（例：UPM_Profile）が含まれています。詳細については、「ユーザー ストアのフォルダー構造」を参照してください。さらに、UPM_CPS_Metadata サブフォルダーも存在します。このシステム作成フォルダーには、オペレーティングシステム間で共有される一時設定が含まれています。

ユーザー ストアと AD フォレスト

Citrix ユーザープロファイルは、フォレストをまたいで管理することはできません。同じフォレスト内のドメインをまたいで管理することは可能で、これにより、同じログオン名を持つ複数のユーザーがフォレスト内の同じリソースにアクセスできます。これには、ユーザー ストアへのパスにある `%USERDOMAIN%` および `%USERNAME%` 変数を使用してプロファイルを一意に識別することが含まれます。

ただし、この場合、ユーザー ストアへのパスを設定する際に、同じログオン名を区別するために変数を使用する必要があります。これを行うには、ドメイン名変数をパスに追加します。また、ユーザー ストアのアクセス許可を設定し、Active Directory のユニバーサル グループを使用して Profile Management の「処理済みグループ」設定を有効にする必要があります。

オペレーティングシステムのバージョンを設定するには、%ProfVer% のような手動で定義されたシステム変数を使用できます。または、Profile Management 変数を使用して、オペレーティングシステム名、ビット数、またはプロファイルバージョンを設定することもできます。AD フォレス

ト内のユーザー ストア パスの例については、「ユーザー ストアへのパスを指定する」を参照してください。

ユーザー ストアのローカライズ

次の表は、プロファイルデータがユーザー ストアとの間で移動される際に、Profile Management がフォルダーをローカライズおよび非ローカライズする方法の概要を示しています。フォルダー名のみがローカライズおよび非ローカライズされます。たとえば、スタートメニューのエントリやレジストリ設定は、Profile Management によって正しい言語に翻訳されません。

この情報は、Profile Management 4.x 以前からアップグレードする場合にのみ関連します。その場合、バージョン 1 のプロファイルが存在する可能性があります。Profile Management 5.0 では、バージョン 1 のプロファイルの管理はサポートされていません。

バージョン 1 英語フォルダー	ユーザー ストア フォルダー
アクセシビリティ	Accessibility_upm_var
アクセサリ	Accessories_upm_var
管理ツール	AdminTools_upm_var
アプリケーションデータ	AppData_upm_var
クッキー	Cookies_upm_var
デスクトップ	デスクトップ_upm_var
エンターテイメント	エンターテイメント_upm_var
お気に入り	お気に入り_upm_var
履歴	履歴_upm_var
リンク	リンク_upm_var
ローカル設定	ローカル設定_upm_var
マイドキュメント	マイドキュメント_upm_var
マイミュージック	マイミュージック_upm_var
マイピクチャ	マイピクチャ_upm_var

バージョン 1 英語フォルダー	ユーザー ストア フォルダー
マイビデオ	マイビデオ_upm_var
NetHood	NetHood_upm_var
PrintHood	PrintHood_upm_var
プログラム	Programs_upm_var
最近	Recent_upm_vars
スタートメニュー	StartMenu_upm_var
テンプレート	Templates_upm_var
一時インターネットファイル	TemporaryInternetFiles_upm_var
送る	SendTo_upm_var
スタートアップ	Startup_upm_var
システムツール	SystemTools_upm_var

プロファイルコンテナ (VHDX) アーキテクチャ

Profile Management は、ファイルベースとコンテナベースの2つのストレージモデルをサポートしています。以下のセクションでは、コンテナベース (VHDX) モデルについて説明します。

ファイルベースストアとコンテナベースストアの比較

ファイルベースモデルでは、プロファイルはログオン時にユーザーストアからローカルマシンにコピーされ、ログオフ時にコピーバックされます。プロファイルコンテナベースモデルでは、プロファイルはログオン時にアタッチされ、一括コピーなしでその場でアクセスされるVHDX仮想ディスク内に存在します。ユーザーのライブプロファイルフォルダーは、マウントされたディスクへのディレクトリジャンクションになります。

コンテナの種類とVHDXファイル

Profile Management は複数のコンテナタイプをサポートしています。各タイプは独自のポリシーによって制御されるため、すべての展開にそれらすべてが含まれるわけではありません。

コンテナ	VHDXファイル	有効化元
フルプロファイルコンテナ	ProfileContainer.vhdx (差分ディスク用の ProfileContainer_RW.vhdx および ProfileContainer_RO.vhdx を含む)	プロファイルコンテナポリシー
OneDriveコンテナ	OneDrive.vhdx (インデックス付きまたは差分の子 OneDrive_N.vhdx を含む)	OneDriveコンテナポリシー
アプリアクセスコンテナ	共有親ディスク、ボリュームラベル AppRepoContainer	アプリアクセスコンテナ機能
ミラーフォルダーアクセラレーション	MirrorFolders.vhdx	フォルダーミラーリングアクセラレーション
共有ファイル (重複排除) ストア	SharedFile.vhdx、ボリュームラベル DeduplicationVolume	ファイルの重複排除

完全なプロファイルコンテナのボリュームラベルは、ユーザーのsAMAccountNameに`-Profile`サフィックスを追加したものです。OneDriveコンテナは`-OneDrive`を使用し、ミラーフォルダーコンテナは`-MirrFldrs`を使用するため、各ユーザーのディスクは検査時に識別可能です。

コンテナファイルのユーザーストアパス

コンテナVHDXファイルは、以下のパスのユーザーストアに保存されます。

```
Full profile container:  <user store>\ProfileContainer\<OS-short-name>\ProfileContainer.vhdx

OneDrive container:      <user store>\OneDrive\OneDrive.vhdx

Mirror-folder:           <user store>\MirrorFolders\MirrorFolders.vhdx
```

`<OS-short-name>`は、ファイルベースのパスで使用される`!CTX_OSNAME!`変数に対応する短いOS識別子（例：Windows 2022またはWindows 11）であり、異なるOSバージョンのプロファイルを分離します。

プロファイルコンテナ内のフォルダーレイアウト

VHDXは、ドライブレターなしでボリュームGUIDパスとしてアタッチされます。ユーザーごとのマウントパスは、レジストリの次の場所に記録されます。

```
HKLM\Software\Citrix\UserProfileManager\<SID>    value:
ProfileContainerVolumePath
```

ユーザーのローカルプロファイルディレクトリは、ディスク内の`Profiles`フォルダーにジャンクションされます。コンテナボリュームには、以下のフォルダーが含まれています。

フォルダ	目的
プロファイル	ローミングされたWindowsプロファイルツリー (NTUSER.DATとUsrClass.datがここにあります)。これはジャンクションターゲットであり、ファイルベースモードのUPM_Profileに相当します。
SyncIncludeProfiles	プロファイルインクルードルール用のステージングルート
SyncIncludeFiles	ファイルインクルードルール用のステージングルート
SyncIncludeDirs	フォルダーインクルードルール用のステージングルート
ResetProfile	プロファイルリセット機能で使用されるマーカーファイル

ファイルベースの概念がコンテナーモードにどのようにマッピングされるか

ファイルベースの概念	コンテナーでの相当するもの
UPM_Profile (コピーされたプロファイルコンテンツ)	VHDX内のProfilesフォルダー。ジャンクションを介してアクセスされます。データのコピーは行われません。
保留中 (ストリーミングまたはアクティブなライトバック保持領域)	読み取り専用および読み書きボリュームハンドルを持つ個別のPendingArea.vhdx。コンテ

ファイルベースの概念	コンテナーでの相当するもの
	ナモードでは、共有上にPendingフォルダーは存在しません。
UPM_Drive_C (レガシーなストリーム配信されたフルツリー)	使用されません。完全なプロファイルはProfileContainer.vhdxディスクであり、SyncIncludeステージングルートがドライブごとのフォルダーを置き換えます。
OSごとの変数 !CTX_OSNAME!! CTX_OSBITNESS!	OSごとのProfileContainerストアサブフォルダーとして保持されます

プロファイル管理のユースケース

Citrix Profile Management は、アプリケーションがユーザーにどのように配信されるか、またはどこに格納されているかに関わらず、さまざまなシナリオでユーザーのプロファイルを管理するために実装できます。以下に、これらのシナリオの例を示します。

- Citrix Virtual Apps™ と公開アプリケーション
- Citrix Virtual Apps と公開デスクトップ
- Citrix Virtual Apps と分離環境にストリーミングされたアプリケーション
- Citrix Virtual Desktops™ にストリーミングされたアプリケーション
- Citrix Virtual Desktops にインストールされたアプリケーション
- 物理デスクトップにストリーミングされたアプリケーション
- 物理デスクトップにローカルにインストールされたアプリケーション

これらのシナリオのうち、Citrix は以下を最も一般的なユースケースと見なしています。

- **複数セッション** - ユーザーは複数のCitrix Virtual Appsサーバーサイロにアクセスし、そのため複数のセッションを開いています。ただし、サーバー上でのアプリケーション分離とストリーミングは、サーバーサイロの代替手段であることに注意してください。このシナリオについては、このトピックで詳しく説明します。
- **「最終書き込み優先」と移動プロファイルの整合性の問題** - 移動プロファイルへの最後の書き込みにより、すべての設定が保存されます。したがって、複数のセッションが開いていて一時的な変更が行われた場合、移動プロファイルは正しいデータを保持しない可能性があります。さらに、ネットワーク、ストレージの問題、またはその他の問題の結果として、設定がプロファイルに正しく書き込まれない可能性があります。このシナリオについては、このトピックで詳しく説明します。

- **大規模なプロファイルとログオン速度** - プロファイルの肥大化により、ユーザープロファイルが扱いにくくなり、ストレージと管理の問題が発生する可能性があります。通常、ログオン時にWindowsはユーザーのプロファイル全体をネットワーク経由でローカルユーザーデバイスにコピーします。肥大化したプロファイルの場合、この動作によりユーザーのログオン時間が長くなる可能性があります。

複数セッション

特に大規模な環境では、同じファーム内であろうと複数のファーム内であろうと、異なるCitrix Virtual Appsサーバーに格納されている異なるアプリケーションにアクセスするために、ユーザーが複数のセッションを開く必要がある場合があります。可能な場合は、アプリケーションを同じCitrix Virtual Appsサーバーに格納するためのアプリケーションの分離またはストリーミングを検討し、ユーザーが単一のサーバーからすべてのアプリケーションにアクセスできるようにして、単一のセッションを可能にしてください。ただし、事業部門が特定のサーバーを制御している場合や、アプリケーションをストリーミングできない場合は、これが不可能な場合があります。

ユーザーが様々なCitrix仮想アプリサーバーからアプリケーションにアクセスする必要があることが確認されたら、プロファイルへの影響を特定する必要があります。

以下の図は、複数のセッションが存在する場合にアプリケーション設定が失われる可能性がある例を示しています。

図(/en-us/profile-management/current-release/media/upm-multiple-sessions-1.png)

例えば、MaryはApp A、App B、App Cにアクセスしたいと考えており、それぞれServer 1、Server 8、Server 12にルーティングされます。各アプリケーションにログオンすると、Maryのターミナルサービスローミングプロファイルが各サーバーにロードされ、各セッションでフォルダーがリダイレクトされます。MaryがServer1のApp Aにログオンしているときに、Setting1を変更し、そのセッションからログオフします。その後、Maryは他の2つのアプリケーションでの作業を完了し、ログオフします。

ログオフ時、Server 1のセッション内でMaryが行った変更は上書きされます。これは、一時的な変更ではなく、最後に閉じられたセッションの設定が保持されるためです。翌日、MaryがApp Aにログオンすると、彼女が行った変更が表示されないため、不満を感じます。

Profile Managementは、一般的にこの状況の発生を防ぐことができます。Profile Managementは、セッション中に変更された特定のプロファイル設定のみを書き戻し、その他の変更されていない設定はそのまま残します。したがって、発生する可能性のある唯一の競合は、Maryが別のセッション内でSetting1を変更した場合です。ただし、このシナリオでProfile Managementが使用されている場合、ユーザーは最新の変更が保持されることを期待するでしょうし、実際にそうなります。

「最後の書き込みが優先される」問題とローミングプロファイルの整合性の問題

このシナリオは、このトピックの最初のシナリオと似ています。「最後の書き込みが優先される」問題は様々な形で現れる可能性があり、アクセスするデバイスの数が増えるにつれてユーザーの不満は募る可能性があります。

ローミングプロファイルは、リダイレクトされたフォルダーを除き、すべてのプロファイルデータを保持するため、ユーザープロファイルは大きくなる可能性があります。これにより、プロファイルをダウンロードする必要があるためログオン時間が増加するだけでなく、特にネットワークの問題がある場合、ログオフの書き込みフェーズ中に整合性の問題が発生する可能性が高まります。

Profile Managementを使用すると、特定のデータをユーザープロファイルから除外できるため、ユーザープロファイルを最小限のサイズに保つことができます。差分のみがプロファイルに書き込まれるため、ログオフの書き込みフェーズではデータ量が少なく、高速になります。Profile Managementは、一時データにプロファイルを使用するものの、アプリケーション終了時にクリーンアップしないアプリケーションにとって有益です。

複数のリソースにアクセスする

ユーザーが複数のリソースにアクセスするにつれて、プロファイルはより複雑になります。ネットワークに保存されたプロファイルでは、Microsoft Windows はレジストリを使用してユーザー設定を保存します。プロファイルはログオン時にネットワークからローカルデバイスにコピーされ、ログオフ時にネットワークにコピーし直されます。日常的に、ユーザーは複数のコンピューターにアクセスし、デスクトップとラップトップを切り替え、Citrix Virtual Apps and Desktops™ または Citrix DaaS (旧 Citrix Virtual Apps and Desktops service) で作成された仮想リソースにアクセスします。

この図は、単一の Citrix® ユーザープロファイルが、複数のリソースにログオンするユーザーにどのように追従するかを示しています。

次のグラフィックは、複数の Citrix リソースにログオンするユーザーと、コンピューター間でユーザーに追従する Citrix ユーザープロファイルを示しています。(/en-us/profile-management/current-release/media/upm-access-multiple-resources.png)

たとえば、ユーザーはローカルの物理デスクトップを持ち、そこから Citrix Virtual Apps で公開されたアプリケーションにアクセスします。また、Citrix Virtual Desktops で作成された仮想デスクトップにもアクセスします。設定が適切に構成されていない限り、ユーザーの設定はこれらすべてのリソースで統一されません。

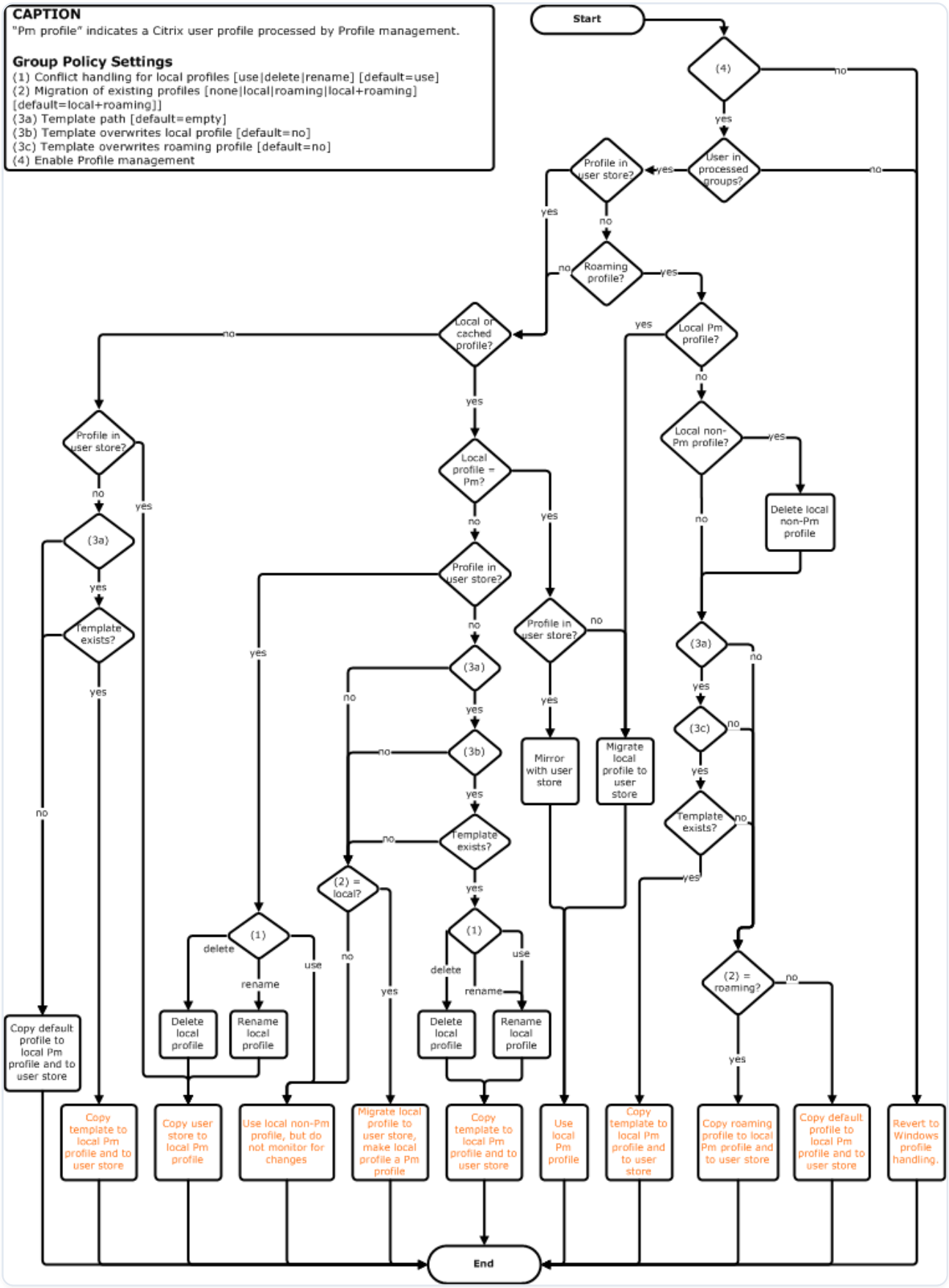
さらに、共有リソースにアクセスする場合、移動プロファイルの動作は「最後の書き込みが優先される」ことを意味します。たとえば、管理者が移動プロファイルを有効にし、ユーザーがローカルデスクトップの背景色を変更したとします。その後、ユーザーは Citrix 仮想デスクトップにログオンし、ローカルデスクトップからログオフし、仮想デスクトップからログオフします。ローカルデスクトップと仮想デスクトップの両方が同時に開いており、最後のログオフは仮想デスクトップからでした。したがって、仮想デスクトップセッションからの設定がプロファイルに最後に書き込まれたものであり、背景色の変更は失われます。

ログオン図

この図は、ユーザープロファイルの移行戦略の詳細を検討するのに役立ちます。また、パフォーマンスに関する以下の側面も説明しています。

- プロファイルを移行すると、2つのネットワークコピーが発生する可能性があり、ログオンプロセスが遅くなります。たとえば、**デフォルトプロファイルをローカルPmプロファイルおよびユーザー ストアにコピー**という操作には、以下の2つのコピーが含まれます。ローミングプロファイルストアからローカルコンピューターへの完全なプロファイルコピーと、ローカルコンピューターからユーザー ストアへのもう1つの完全なプロファイルコピーです。
- キャッシュされたプロファイルが使用される場合、ネットワークを介したプロファイルデータのコピーは行われません。

図を下から上に読みます。下部のボックスで目的の操作（例: **デフォルトプロファイルをローカルPmプロファイルおよびユーザー ストアにコピー**）を確認し、パスをたどって必要な移行設定を特定します。


CAPTION
"Pm profile" indicates a Citrix user profile processed by Profile management.
Group Policy Settings
(1) Conflict handling for local profiles [use|delete|rename] [default=use]
(2) Migration of existing profiles [none|local|roaming|local+roaming] [default=local+roaming]]
(3a) Template path [default=empty]
(3b) Template overwrites local profile [default=no]
(3c) Template overwrites roaming profile [default=no]
(4) Enable Profile management
Start
(4)
User in processed groups?
Profile in user store?
Roaming profile?
Local or cached profile?
Local Pm profile?
Local non-Pm profile?
Delete local non-Pm profile
Local profile = Pm?
Profile in user store?
(3a)
Template exists?
(3b)
(2) = local?
(1)
Delete local profile
Rename local profile
Mirror with user store
Migrate local profile to user store
(3c)
(2) = roaming?
Copy default profile to local Pm profile and to user store
Copy template to local Pm profile and to user store
Copy user store to local Pm profile
Use local non-Pm profile, but do not monitor for changes
Migrate local profile to user store, make local profile a Pm profile
Use local Pm profile
Copy roaming profile to local Pm profile and to user store
Revert to Windows profile handling.
End

ログオフ図

この図は、ログオフ時にプロファイルデータをコピーまたはマージするために使用されるロジックを説明します。

図(/en-us/profile-management/current-release/media/upm-logoff-diagram-1.png)

展開計画

ファイルベースプロファイルとコンテナベースプロファイルの選択

Citrix Profile Management (CPM) は、**ファイルベース**と**コンテナベース**の2種類のプロファイルをサポートしています。適切な種類を選択することで、ユーザーエクスペリエンスの向上、ストレージ要件の削減、プロファイル管理の簡素化に役立ちます。また、両方の種類を組み合わせて、さまざまなユーザーケースをサポートすることもできます。

2種類のプロファイルを理解する

どのプロファイルタイプを使用するかを決定する前に、それぞれの仕組みと、どのような環境に適しているかを理解することが重要です。

- ファイルベースプロファイル

  ファイルベースプロファイルは、ユーザーデータと設定をプロファイルストア内の個別のファイルとフォルダーに保存します。ログオン時に、CPMはプロファイルをローカルセッションにコピーし（プロファイルストリーミングが有効でない場合）、ログオフ時にストア内のプロファイルを更新します。

  この軽量で柔軟な方法は、ストレージ容量やネットワークパフォーマンスが懸念される場合に最適です。

- コンテナベースプロファイル

  コンテナベースプロファイルは、ユーザープロファイルをプロファイルストア内の仮想ハードディスク（VHDX）ファイルに保存します。コンテナはログオン時にマウントされ、セッション中は更新がプロファイルストアに直接書き込まれます。

  このアプローチは、プロファイルの包含および除外ロジックを簡素化し、OneDriveやUWPアプリなどの最新のアプリを扱う場合にしばしば推奨されます。

ファイルベースプロファイルを使用する場合

次の場合にファイルベースプロファイルを選択します。

- **ストレージ容量が限られている場合。** ファイルベースプロファイルは、コンテナベースプロファイルよりもはるかに少ないストレージ容量を使用します。デフォルトでは、CPMコンテナはユーザーあたり50 GBのストレージ容量を持ちます。
- **プロファイルが小さいかシンプルである場合。** ユーザーが通常1 GB未満のプロファイルデータしか持たず、大規模なアプリケーションキャッシュやパーソナライゼーションを必要としない場合、ファイルベースプロファイルはうまく機能します。
- **ネットワークへの依存度を減らしたい場合。** ファイルベースプロファイルは、ログオン時にデータをVDAにコピーするため（プロファイルストリーミングが無効な場合）、セッション中のネットワーク中断による影響はありません。トラブルシューティングにネットワークチームの助けが必要な場合に遅延を避けるため、ネットワークへの依存度を減らしたい場合もあります。
- **既存のセットアップに満足している場合。** ファイルベースのプロファイルをすでに正常に使用している場合は、新しいアプリケーション要件が発生しない限り、切り替える必要はないかもしれません。

コンテナベースのプロファイルを使用する場合

次の場合にコンテナベースのプロファイルを選択します。

- **OneDrive同期アプリをサポートする必要がある場合。** ファイルベースのプロファイルはOneDrive同期をサポートしていません。コンテナベースのプロファイルを使用するか、プロファイルの残りの部分をファイルベースのままにして、プロファイルのこの部分にOneDriveコンテナを有効にします。

  > **注:**
  >
  > Microsoftは、同じコンテナを使用した複数の同時OneDrive同期セッションをサポートしていません。詳細については、このMicrosoftの記事を参照してください。同期アプリで複数の同時セッションが必要な場合は、セッションごとに個別のコンテナを使用するか、セカンダリセッションでブラウザを介してOneDriveにアクセスしてください。

- **よりシンプルなプロファイル構成が必要な場合。** コンテナベースのプロファイルは、詳細な包含ルールや除外ルールを必要としません。すべてのプロファイルデータはVHDXファイルに保存されるため、管理作業は軽減されますが、ストレージ要件は増加します。
- **堅牢なストレージとネットワークがある場合。** コンテナベースのプロファイルは、リアルタイムの読み取りと書き込みのために、VDAとプロファイルストア間の安定した接続に依存します。

ハイブリッドアプローチを使用する場合

ファイルベースのプロファイルとコンテナベースの機能を組み合わせて、パフォーマンスとストレージの両方を最適化できます。このアプローチは、プロファイルの一部のみがコンテナベースのプロファイルを必要とする場合に役立ちます。

Citrix Profile Managementは、次のコンテナ機能をサポートしています。

- Outlookの検索インデックスローミング: Microsoft Outlook `.OST` ファイルと検索インデックスを別のVHDXに保存します。
- OneDriveコンテナ: OneDriveデータを別のVHDXファイルに保存し、OneDrive同期をサポートします。
- UWPアプリのロード高速化: ユニバーサルWindowsプラットフォーム (UWP) アプリをVHDXに保存し、ロード時間を高速化します。
- フォルダミラーリングの高速化: ミラーリングされたフォルダ (ブラウザのCookieなど) をVHDXに保存し、データ整合性を維持します。

> **注記:**
>
> フォルダミラーリングは、データ整合性を維持するためにプロファイルのサブフォルダ全体を単一の単位として同期させる必要がある場合に使用されます。例えば、フォルダ内のファイルが互いに参照し合う場合などです。一般的な使用例としては、ブラウザのCookieがあります。この場合、インデックスファイルが同じフォルダ内の個々のCookieファイルを指します。

概要

最適なプロファイルタイプは一つではありません。ユーザーペルソナ、アプリケーション要件、ITリソースに最も適したものを選択してください。決定に際してサポートが必要な場合は、Citrixチームにご相談ください。

構成を決定する

Profile Management を構成するには、環境に関する以下の基本的な質問に答えることをお勧めします。

1. パイロットまたは本番
2. プロファイルの移行または作成

3. 永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有
4. モバイルまたは静的
5. 使用中のアプリケーション

回答に基づいて、展開環境に合わせて Profile Management を構成します。その他のすべてのポリシーはデフォルトのままにできます。

次のステップ

- インストールとセットアップ
- トラブルシューティング

ヒント

Profile Management の設定を確認および展開する際は、以下のヒントを参照してください。

UPMConfigCheck ツールを使用した設定の確認

UPMConfigCheck は、稼働中の Profile Management 展開を検査し、最適に構成されているかどうかを判断する PowerShell スクリプトです。詳しくは、Knowledge Center の記事 CTX132805 を参照してください。

コンピューターをOUにグループ化する

質問に対する回答が、異なるコンピューターのセットで同じである場合は、それらをActive Directory組織単位 (OU) にグループ化することを検討してください。また、そのOUにアタッチされた単一のグループポリシーオブジェクト (GPO) を使用して、プロファイル管理を構成することも検討してください。

これらの質問に対する回答が異なる場合は、コンピューターを別々のOUにグループ化することを検討してください。

あるいは、ドメインがWMIフィルタリングをサポートしている場合は、すべてのコンピューターを同じOUにグループ化し、WMIフィルタリングを使用して適切に構成されたGPOの中から選択できます。

パイロットまたは実稼働

パイロット展開の目的は、ソリューションを迅速かつ確実に実証できるようにすることです。重要な目標は、パイロット内のコンポーネントの数を減らすことかもしれません。Profile Managementの場合、2つのコンポーネントはユーザーストアと、プロファイルが処理されるユーザーの選択です。

ポリシー: ユーザー ストアへのパス

Citrix®ユーザープロファイル用のユーザーストアのセットアップは、Windowsローミングプロファイル用のプロファイルストアのセットアップとまったく同じです。

パイロット展開の場合、これらの考慮事項を無視できることがよくあります。ユーザーストアへのパス ポリシーのデフォルト値は、ユーザーのホームディレクトリにある**Windows**フォルダーです。これは、1つのオペレーティングシステム（したがって1つのプロファイルバージョン）のみが展開されている限り、シングルプラットフォームのパイロットでうまく機能します。プロファイルバージョンの詳細については、「プロファイルについて」を参照してください。このオプションは、ユーザーのホームディレクトリに十分なストレージが利用可能であり、ファイルサーバークォータが適用されていないことを前提としています。Citrixは、プロファイルでのファイルサーバークォータの使用を推奨していません。その理由については、「複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する」を参照してください。

実稼働展開の場合、セキュリティ、負荷分散、高可用性、および災害復旧を慎重に検討する必要があります。ユーザーストアの作成と構成については、以下のトピックの推奨事項に従ってください。

- Profile Managementアーキテクチャ
- ユーザーストアを作成する
- ユーザーストアへのパスを指定する
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

ポリシー：処理対象グループ、除外グループ

実稼働展開の複雑さにより、Profile Managementの展開をすべてのユーザーに同時にリリースするのではなく、段階的に行う必要がある場合があります。展開が進行中である間、ユーザーは異なるリソースに接続する際に異なるプロファイルエクスペリエンスを受け取ることを伝えることができます。

パフォーマンス上の理由から、Profile ManagementはEULAによってライセンスされており、組み込みのライセンスチェックではありません。ユーザーをActive Directory (AD) ユーザーグループに割り当てるか、適切な既存のADグループを使用することで、ライセンス割り当てを管理することを選択できます。

パイロット展開では、Profile Managementの使用は、単一の代表的なADグループを使用できない、おそらく複数の部門からの少数のユーザーグループへの招待によって制限されます。この場合、処理対象グループと除外グループのポリシーを未構成のままにします。Profile Managementはグループメンバーシップのチェックを行わず、すべてのユーザーが処理されます。

これらのポリシーの詳細については、「どのグループのプロファイルを処理するかを定義する」を参照してください。

重要: いずれの場合も、Profile Management によって処理されるユーザー数が、関連するEULAで設定された制限を超えないようにしてください。

プロファイルの移行または作成

Profile Managementの展開を利用して、組織のプロファイルを更新できます。最初は、小規模でカスタマイズされたプロファイルを使用し、それへの追加を厳密に制御します。あるいは、既存のプロファイルをProfile Management環境に移行し、長年にわたって蓄積されたパーソナライズを保持する必要があるかもしれません。

既存のプロファイルを移行することを決定した場合は、「既存のプロファイルの移行」および「ローカルプロファイルの競合処理」ポリシーを構成します。

次の図は、この質問に対する回答に基づいてこれらのポリシーを構成する方法を示しています。

図(/en-us/profile-management/current-release/media/upm-migrate.png)

ポリシー: テンプレートプロファイル

まったく新しいプロファイルセットを作成する場合は、「テンプレートプロファイル」ポリシーを使用して、この目的のためのテンプレートを作成することを検討してください。詳細については、「テンプレートまたは必須プロファイルを指定する」を参照してください。テンプレートを作成しない場合、Profile ManagementはユーザーにデフォルトのWindowsプロファイルを提供します。テンプレートが不要な場合は、このポリシーを無効のままにします。

テンプレートプロファイルポリシーは、**ユーザーストアへのパス**ポリシーに似ています。このポリシーは、ユーザーがProfile Managementによって管理されているコンピューターに初めてログオンしたときに、ユーザープロファイルを作成するための基礎として使用できるプロファイルの場所を指定します。

オプションで、テンプレートをすべてのログオンに対するCitrix®必須プロファイルとして使用できます。計画の一環として、ユーザーがアクセスするアプリケーションの特定などのタスクを実行する必要があります。それに応じて、プロファイル内のレジストリの状態、ショートカット、およびデスクトップ設定を構成する必要があります。プロファイルフォルダーのアクセス許可を設定し、ユーザーのログオンスクリプトを変更する必要があります。

> **注:**

> Citrix virtual desktops™展開で必須プロファイルを選択する場合は、Profile Management の.admまたは.admxファイルではなく、Citrix Studioを使用することをお勧めします。

永続的かプロビジョニング済みか、専用か共有か

プロファイルを作成するマシンの種類は、構成の決定に影響します。主な要因は、マシンが永続的かプロビジョニング済みか、および複数のユーザーで共有されるか、1人のユーザー専用であるかです。

永続システムには何らかのローカルストレージがあり、その内容はシステムがオフになっても保持されることが期待されます。永続システムは、ローカルディスクを模倣するためにSANなどのストレージテクノロジーを使用する場合があります。対照的に、プロビジョニング済みシステムは、ベースディスクと何らかのIDディスクから「オンザフライ」で作成されます。ローカルストレージは通常、RAMディスクまたはネットワークディスクによって模倣され、後者は高速リンクを備えたSANによって提供されることがよくあります。プロビジョニングテクノロジーは通常、Provisioning ServicesまたはMachine Creation Services™（あるいはサードパーティの同等品）です。プロビジョニング済みシステムが永続的なローカルストレージを持つ場合もあり、これはPersonal vDiskによって提供されることがあります。これらは永続的として分類されます。

これら2つの要素を組み合わせると、次のマシンタイプが定義されます。

- **永続的かつ専用** - 例としては、Machine Creation Services（Citrix Virtual Desktops™内）で作成された静的割り当てとPersonal vDiskを持つシングルセッションOSマシン、物理ワークステーションやラップトップで作成されたPersonal vDiskを持つデスクトップなどがあります。
- **永続的かつ共有** - 例としては、Machine Creation Services（Citrix Virtual Desktops内）で作成されたマルチセッションOSマシン、およびCitrix Virtual Apps™サーバーなどがあります。
- **プロビジョニング済みかつ専用** - 例としては、Provisioning Services（Citrix Virtual Desktops内）で作成された、静的割り当てを持つがPersonal vDiskを持たないシングルセッションOSマシンなどがあります。
- **プロビジョニング済みかつ共有** - 例としては、Provisioning Services（Citrix Virtual Desktops内）で作成されたランダム割り当てを持つマルチセッションOSマシン、Citrix Virtual Apps サーバーで作成されたPersonal vDiskを持たないデスクトップなどがあります。

以下のProfile Managementポリシー設定は、異なるマシンタイプに対する推奨ガイドラインです。これらは通常うまく機能しますが、展開の要件に応じて変更することもできます。

注：Citrix Virtual Desktops展開では、「ログオフ時にローカルキャッシュされたプロファイルを削除」、「プロファイルストリーミング」、および「常にキャッシュ」は自動構成機能によって適用されます。

ポリシー	永続的かつ専用	永続的かつ共有	プロビジョニング済みかつ専用	プロビジョニング済みかつ共有
ログオフ時にローカルキャッシュされたプロファイルを削除	無効	有効	無効 (注 5)	有効
プロファイルストリーミング	無効	有効	有効	有効
常にキャッシュ	有効 (注 1)	無効 (注 2)	無効 (注 6)	無効
アクティブライトバック	無効	無効 (注 3)	有効	有効
ローカル管理者によるログオンを処理する	有効	無効 (注 4)	有効	有効 (注 7)

注

1. このマシンタイプではプロファイルストリーミングが無効になっているため、 設定は常に無視されます。
2. を無効にします。ただし、このポリシーを有効にし、ファイルサイズ制限 (MB単位) を定義することで、ログオン後できるだけ早く大きなファイルがプロファイルにロードされるようにすることができます。このサイズ以上のファイルは、できるだけ早くローカルにキャッシュされます。
3. Citrix Virtual Appsサーバー間をローミングするユーザーのプロファイルに変更を保存する場合を除き、 を無効にします。この場合は、このポリシーを有効にします。
4. ホスト型共有デスクトップの場合を除き、 を無効にします。この場合は、このポリシーを有効にします。
5. ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルの削除を無効にします。これにより、ローカルにキャッシュされたプロファイルが保持されます。マシンは個々のユーザーに割り当てられているため、プロファイルがキャッシュされているとログオンが高速になります。
6. 常にキャッシュを無効にします。ただし、このポリシーを有効にし、ファイルサイズ制限 (MB単位) を定義することで、ログオン後できるだけ早く大きなファイルがプロファイルに読み込まれるようにすることができます。このサイズ以上のファイルは、できるだけ早くローカルにキャッシュされます。

7. Citrix Virtual Appsサーバー間をローミングするユーザーのプロファイルを除き、ローカル管理者のログオンを処理することを有効にします。この場合、このポリシーを無効にします。

モバイルまたは静的

お使いのマシンはActive Directoryドメインに常時接続されていますか？ノートPCや同様のモバイルデバイスは、おそらく接続されていません。同様に、一部の展開では、永続的なローカルストレージを持つ固定マシンがあるものの、長期間にわたってデータセンターから分離されている場合があります。たとえば、遠隔地の支社が衛星通信によって本社と接続されている場合などです。別の例としては、インフラストが復旧中で電力や通信が断続的になる災害復旧が挙げられます。

通常、Profile Managementは、ユーザーがネットワークが利用できない間にログオフしない限り、短時間のネットワーク障害（24時間未満）に対して回復力があります。このような状況では、ログオンプロセスを大幅に高速化するいくつかの方法でProfile Managementを最適化できます。これが静的ケースです。

長期間の切断が予想される場合、またはユーザーが企業ネットワークから切断されている間にコンピューターをログオフまたはシャットダウンできる必要がある場合、Profile Managementを最適化することはできません。ユーザーが再接続すると、プロファイル全体がユーザーストアからフェッチされるため、ログオンが遅くなります。これがモバイルケースです。

モバイルケース

長期間の切断（およびActive Directoryドメインへの断続的な接続のみ）の場合、Offline profile supportポリシーを有効にします。このアプローチにより、サポートされていない最適化を制御する以下のポリシーの効果が自動的に無効になります。これらのポリシーはGroup Policyでは無効になっていないように見えるかもしれませんが、効果はありません。

- プロファイルストリーミング
- 常にキャッシュ

注: オフライン プロファイル サポート が有効になっている場合、 **アクティブ ライトバック** は尊重されますが、コンピューターがネットワークに接続されている場合にのみ機能します。

静的ケース

ポリシー: オフライン プロファイル サポート

短期間の切断の場合、Offline profile supportポリシーを無効にします。これにより、以下のいずれかのポリシーを設定できます。

ポリシー: ストリーム ユーザー プロファイル グループ

Streamed user profile groupsポリシーを「未構成」に設定します。このポリシーを有効にしても、Profile streamingも有効になっている場合にのみ効果があります。Streamed user profile groups は、ストリーム配信プロファイルの使用を特定のActive Directoryユーザーグループに制限するために使用されます。Profile Managementの古いバージョンから移行する際の一部のシナリオで役立ちます。このポリシーの設定方法については、「ユーザープロファイルのストリーム配信」を参照してください。

このポリシーに適用される高可用性と災害復旧に関する情報については、「シナリオ4 - 移動するユーザー」を参照してください。

ポリシー: 保留中のエリアロックファイルのタイムアウト

「**保留中のエリアロックファイルのタイムアウト**」ポリシーを「未構成」に設定すると、保留中のエリアロックに対して1日間のタイムアウトを適用するデフォルトの操作が適用されます。これが唯一サポートされている値であるため、このポリシーを調整しないでください。

ポリシー: アクティブなライトバック

このポリシーの詳細については、永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有 を参照してください。

使用中のアプリケーション

展開環境で使用されているアプリケーションは、Profile Management の構成方法に影響します。ただし、他の構成決定とは異なり、単純な「はい」または「いいえ」の推奨事項はありません。決定は、アプリケーションが永続的なカスタマイズ（レジストリまたはファイルシステム内）をどこに保存するかによって異なります。

アプリケーションが設定とユーザーのカスタマイズをどこに保存するかを特定するために、ユーザーのアプリケーションを徹底的に分析し、理解してください。Process Monitor などのツールを使用して、アプリケーションバイナリを監視します。Google も別のリソースです。Process Monitor の詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sysinternals/downloads/procmon>`を参照してください。

アプリケーションの動作を理解したら、インクルージョンを使用して処理されるファイルと設定を定義します。除外を使用して、処理されないものを定義します。デフォルトでは、プロファイル内のすべてのものが処理されますが、`AppData\Local`内のファイルは除外されます。展開環境に次のいずれかのアプリケーションが含まれている場合は、`AppData\Local`のサブフォルダーを明示的に含める必要がある場合があります。

- DropBox

- グーグル クローム
- Visual Studio のワンクリック発行で作成されたアプリケーション

シンプルなアプリケーション

シンプルなアプリケーションとは、適切に動作するアプリケーションのことです。これらは、HKCU レジストリハイブにパーソナライズ設定を保存し、プロファイル内にパーソナライズファイルを保存します。シンプルなアプリケーションには基本的な同期が必要であり、そのためには次の方法で項目を含めたり除外したりする必要があります。

- これらのポリシーにおける相対パス（%USERPROFILE%に対する相対パス）：
  - 同期するディレクトリ
  - 同期するファイル
  - 除外リスト - ディレクトリ
  - 除外リスト - ファイル
  - ミラーリングするフォルダー

  注: %USERPROFILE% は Profile Management によって暗黙的に指定されます。これらのポリシーに明示的に追加しないでください。
- これらのポリシーにおけるレジストリ相対パス（HKCU ルートに対する相対パス）：
  - 除外リスト
  - 包含リスト

項目の含め方と除外方法については、「項目の含め方と除外方法」を参照してください。

レガシーアプリケーション

レガシーアプリケーションは適切に動作しません。パーソナライズファイルをプロファイル外のカスタムフォルダーに保存します。推奨される解決策は、レガシーアプリケーションで Profile Management を使用するのではなく、Citrix Virtual Desktops の Personal vDisk 機能を使用することです。

複雑なアプリケーション

複雑なアプリケーションには特別な処理が必要です。アプリケーションのファイルは相互参照することがあり、相互に関連するグループとして扱われる必要があります。Profile Managementは、複雑なアプリケーションに関連する2つの動作、つまりCookie管理とフォルダーミラーリングをサポートしています。

Internet ExplorerでのCookie管理は、以下の両方のポリシーが常に指定される基本的な同期の特殊なケースです。

- ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する
- ミラーリングするフォルダー

フォルダーミラーリング、Cookie管理、およびこれらのポリシーの設定方法の詳細については、トランザクションフォルダーの管理を参照してください。

クロスプラットフォームアプリケーション

クロスプラットフォームアプリケーションとは、複数のプラットフォームでホストされる可能性のあるアプリケーションです。Internet ExplorerおよびMicrosoft Officeの特定のバージョンでは、Profile Managementはプラットフォーム間でのパーソナライゼーション設定の共有をサポートしています。これらの設定は、レジストリまたはプロファイル内のファイルとして保存されます。

クロスプラットフォームアプリケーションの推奨ポリシー設定は、クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディに記載されています。

他のアプリケーションの設定をプラットフォーム間で共有したい場合は、SepagoのProfile Migratorを使用することをお勧めします。

JavaおよびWebアプリケーション

Javaアプリケーションはプロファイル内に多くの小さなファイルを残すことがあり、これによりプロファイルの読み込み時間が劇的に増加する可能性があります。したがって、`AppData\Roaming\Sun\Java`を除外することを検討してください。

ポリシーの概要

次の表は、さまざまな種類のアプリケーションに対してProfile Managementを構成するために使用するポリシーをまとめたものです。表では次の用語が使用されています。

- **相対パス**。ローカルボリューム上の相対パスで、%USERPROFILE%に対する相対パスです（%USERPROFILE%は指定してはいけません）。例: `AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat`、`AppData\Roaming\Adobe\`。
- **絶対パス**。ローカルボリューム上の絶対パスです。例: `C:\BadApp*.txt`、`C:\BadApp\Database\info.db`。
- **レジストリ相対パス**。HKCUハイブ内のパスを指します。例: `Software\Policies`、`Software\Adobe`。

- **フラグ**。パス情報が不要な処理を有効または無効にするためにフラグを使用します。例: 有効、無効。

ポリシー	ポリシータイプ (レジストリ、フォルダー、またはファイル)	ワイルドカードのサポート?	アプリケーションタイプ - シンプル	アプリケーションタイプ - レガシー	アプリケーションタイプ - 複雑
同期するディレクトリ	フォルダ	はい	相対	絶対値	
同期するファイル	ファイル	はい	相対	絶対値	
除外リスト - ディレクトリ	フォルダ	はい	相対	絶対値	
除外リスト - ファイル	ファイル	はい	相対	絶対値	
包含リスト	レジストリ		レジストリ相対		
除外リスト	レジストリ		レジストリ相対		
ミラーリングするフォルダー	フォルダ			絶対値	相対
ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する					フラグ

ファイル名とフォルダー名におけるワイルドカード処理

ファイルやフォルダー（レジストリエントリではなく）を参照するポリシーは、ワイルドカードをサポートしています。詳細については、「Use wildcards」を参照してください。

含めるルールと除外するルール

Profile Managementは、ユーザープロファイル内のファイル、フォルダー、およびレジストリキーをユーザープロファイルストアに含めたり除外したりするためのルールを使用します。これらのルールにより、合理的で直感的な動作が実現されます。すべての項目はデフォルトで含まれます。この開始点から、最上位の例外を除外として構成し、次に最上位の例外に対するより深い例外を含めるとして構成することができます。ルールの詳細、および項目の含め方と除外方法については、「Include and exclude items」を参照してください。

プロファイル内の英語以外のフォルダー名

Version 1プロファイルを使用する英語以外のシステムでは、含めるリストと除外するリストに相対パスをローカル言語で指定します。たとえば、ドイツ語システムでは、**Documents**ではなく**Dokumenten**を使用します。複数のロケールをサポートしている場合は、含める項目または除外する項目を各言語で追加します。

次のステップ

1. Decide on a configurationに記載されているすべての質問に回答します。
2. 回答に基づいて、展開環境のProfile Managementを構成します。その他のすべてのポリシーはデフォルトのままにしておくことができます。
3. 設定をテストおよび確認し、「Test Profile Management with a local GPO」で説明されているようにProfile Managementを有効にします。

複数のプラットフォームの計画

複数のプラットフォームでユーザープロファイルが課題となるのはなぜですか?

ユーザーが複数のコンピューティングデバイスにアクセスすることは一般的です。あらゆる種類のローミングプロファイルにおける課題は、これらのデバイス上のシステム間の違いから生じます。たとえば、別のデバイスに移動したときに存在しないローカルファイルへのショートカットをデスクトップに作成した場合、デスクトップに壊れたショートカットが残ります。

シングルセッションオペレーティングシステム（OS）とマルチセッションOSの間でローミングする場合にも同様の問題が発生します。一部の設定（電源設定やビデオ設定など）はサーバーに適用できない場合があります。さらに、各デバイスでアプリケーションが同様にインストールされていない場合、ローミング時に他の問題が発生する可能性があります。

一部のパーソナライズ設定（マイ ドキュメント、お気に入り、OSやアプリケーションのバージョンに依存しないその他のファイルなど）は、他の設定よりもはるかに管理が容易です。しかし、

ドキュメントの種類が1つのシステムでのみサポートされている場合、これらの設定でさえローミングが困難になることがあります。たとえば、あるユーザーがMicrosoft Projectを1つのシステムにインストールしているが、別のデバイスではそのファイルの種類が認識されない場合があります。同じアプリケーションが2つのシステムに存在し、一方のシステムに異なるアドオンがインストールされていてドキュメントによって期待される場合、この状況はさらに悪化します。

アプリケーションのインストール方法を変更すると、どのように問題が発生しますか?

プラットフォームが同じようにインストールされていても、各プラットフォームでアプリケーションが異なる構成になっている場合、アプリケーションの起動時にエラーが発生する可能性があります。たとえば、あるプラットフォームのExcelではマクロやアドオンがアクティブになるが、別のプラットフォームではアクティブにならない場合があります。

スタートメニュー

スタートメニューにはリンク（LNKファイルおよびLNK2ファイル）が含まれています。メニューのユーザー固有の部分はプロファイルに保存され、ユーザーはその部分を変更できます。カスタムリンク（実行可能ファイルやドキュメントへのリンク）を追加することは一般的です。さらに、言語固有のリンクは、同じアプリケーションに対して複数のスタートメニューエントリを生成します。また、ドキュメントを指すリンクは、他のコンピューターでは無効になる場合があります。その理由は、ドキュメントへのパスが別のシステムに対する相対パスであるか、アクセスできないネットワークパスであるためです。

デフォルトでは、Profile Managementはスタートメニューフォルダーの内容を保存しません。これは、実行可能ファイルを指すリンクがコンピューターに依存していることが多いためです。ただし、システムが類似している状況では、Profile Managementの構成にスタートメニューを含めることで、ユーザーがデスクトップ間をローミングする際の整合性が向上します。または、フォルダーリダイレクトを使用してスタートメニューを処理することもできます。

注： 最も無害に見える変更からでも、予期せぬ副作用が生じることがよくあります。たとえば、Sepagoブログの `<https://helgeklein.com/blog/2009/09/citrix-user-profile-manager-upm-and-the-broken-rootdrive/>` にある記事を参照してください。

常にプラットフォーム間でスタートメニューの動作をテストおよび検証してください。

クイック起動ツールバー

クイック起動ツールバーにはリンクが含まれており、ユーザーが構成できます。デフォルトでは、**クイック起動**ツールバーはProfile Managementによって保存されます。一部の環境では、リンクが

コンピューターに依存している可能性があるため、**クイック起動**ツールバーの保存が望ましくない場合があります。

ツールバーをプロファイルから除外するには、フォルダー除外リストに次のエントリを追加します: `AppData\Roaming\Microsoft\Internet Explorer\Quick Launch`。

作成するプロファイルの種類?

重要: 構造が異なるため、複数のプラットフォームを含む環境では、各ユーザーに対して個別のバージョン1およびバージョン2プロファイルを作成することをお勧めします。Windows VistaとWindows 7のプロファイル名前空間の違いにより、これらのプラットフォーム間でプロファイルを共有することは困難です。また、Windows XPとWindows Server 2003の間でも障害が発生する可能性があります。バージョン1およびバージョン2プロファイルの詳細は、 プロファイルについて を参照してください。

ここでの複数のプラットフォームの定義には、複数のオペレーティングシステム（異なるビット数を含む）だけでなく、同じオペレーティングシステム上で実行されている複数のアプリケーションバージョンも含まれます。以下の例は、この推奨事項の理由を示しています。

- 32ビットシステムには、オペレーティングシステムに32ビットオペレーティングシステムに固有の場所でアプリケーションを起動するように指示するレジストリキーが含まれている場合があります。これらのキーが64ビットシステム上のCitrix®ユーザープロファイルによって使用される場合、そのシステムにその場所が存在せず、アプリケーションが起動に失敗する可能性があります。
- Microsoft Office 2003、Office 2007、およびOffice 2010は、一部のWord設定を異なるレジストリキーに保存します。これらのアプリケーションが同じオペレーティングシステムで実行されている場合でも、Wordアプリケーションの3つの異なるバージョンに対して個別のプロファイルを作成する必要があります。

プロファイルの相互運用性を確保するために、CitrixユーザープロファイルでMicrosoftフォルダーリダイレクトを使用することをお勧めします。Windows VistaまたはWindows 7がWindows XPと共存する必要がある環境では、これはさらに重要です。

ヒント: 組織のデータ管理ポリシーによっては、Active Directoryから削除されたユーザーアカウントのプロファイルをユーザーストアおよびクロスプラットフォーム設定ストアから削除することをお勧めします。

複数のファイルサーバーでCitrix®ユーザープロファイルを共有する

Profile Managementの最もシンプルな実装は、ユーザーストアが1つの地理的場所のすべてのユーザーをカバーする1つのファイルサーバー上にあるものです。このトピックでは、複数のファイルサーバーを含む、より分散された環境について説明します。高度に分散された環境については、「Profile Managementによる高可用性と災害復旧」を参照してください。

注：ユーザーストアのサーバー側ファイルクォータは無効にしてください。クォータが満杯になるとデータ損失が発生し、プロファイルのリセットが必要になります。プロファイルに保持される個人データ（例：ドキュメント、音楽、写真）の量を制限するには、サーバー側ファイルクォータが有効になっている別のボリュームにフォルダーリダイレクトを使用する方が良いでしょう。

ユーザーストアは複数のファイルサーバーに配置でき、これは多くのプロファイルをネットワーク全体で共有する必要がある大規模な展開でメリットがあります。Profile Managementは、ユーザーストアを単一の設定である**ユーザーストアへのパス**で定義するため、この設定に属性を追加することで複数のファイルサーバーを定義します。Active Directoryのユーザースキーマで定義されている任意のLDAP属性を使用できます。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows/win32/adschema/attributes-all?redirectedfrom=MSDN>`を参照してください。

ユーザーが異なる都市にある学校にいて、#l#属性（場所を示す小文字のL）がこれを表すように構成されているとします。ロンドン、パリ、マドリードに拠点があります。ユーザーストアへのパスを次のように構成します。

```
\&num;l#.userstore.myschools.net\profile&num;sAMAccountName#\%ProfileVer%\
```

パリの場合、これは次のように展開されます。

```
\\Paris.userstore.myschools.net\profile\JohnSmith\v1\
```

次に、利用可能なサーバー間で都市を分割します。たとえば、DNSでParis.userstore.myschools.netをServer1を指すように設定します。

このように属性を使用する前に、そのすべての値を確認してください。それらはサーバー名の一部として使用できる文字のみを含んでいる必要があります。たとえば、#l#の値にはスペースが含まれていたり、長すぎたりする場合があります。

#l#属性を使用できない場合は、同様のパーティショニングを実現する#company#や#department#などの他の属性についてADユーザースキーマを調べてください。

カスタム属性を作成することもできます。特定のドメインでどの属性が定義されているかを確認するには、`Sysinternals`ツールであるActive Directory Explorerを使用します。Active Directory Explorerは`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sysinternals/downloads/adexplorer>`で入手できます。

注：プロファイルやサーバーを区別するために、%homeshare%などのユーザー環境変数を使用しないでください。Profile Managementはシステム環境変数を認識しますが、ユーザー環境変数は認識しません。ただし、関連するActive Directoryプロパティである`#homeDirectory#`を使用できます。したがって、ユーザーのHOMEディレクトリと同じ共有にプロファイルを保存したい場合は、ユーザーストアへのパスを`#homeDirectory#\profiles`として設定します。

ユーザーストアへのパスでの変数の使用については、以下のトピックで説明されています。

- ユーザーストアへのパスを指定する
- OU内およびOU間でプロファイルを管理する
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

OU内およびOU間でプロファイルを管理する

OU内

Profile Management が組織単位 (OU) 内でプロファイルを管理する方法を制御できます。Windows Server 2008 環境では、Windows Management Instrumentation (WMI) フィルタリングを使用して、.adm または .admx ファイルを OU 内のコンピューターのサブセットに制限します。WMI フィルタリングは、Service Pack 1 (GPMC with SP1) を含むグループポリシー管理コンソールの機能です。

WMI フィルタリングの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/previous-versions/windows/it-pro/windows-server-2003/cc779036(v=ws.10)>` および `<https://docs.microsoft.com/ja-jp/previous-versions/windows/it-pro/windows-server-2003/cc758471(v=ws.10)>` を参照してください。

GPMC with SP1 の詳細については、`<https://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=21895>` を参照してください。

次のメソッドを使用すると、単一の OU で単一のグループポリシーオブジェクト (GPO) を使用して、異なる OS を持つコンピューターを管理できます。各メソッドは、ユーザー ストアへのパスを定義するための異なるアプローチです。

- ハードコードされた文字列

- プロファイル管理変数
- システム環境変数

ハードコードされた文字列は、1種類のコンピューターのみを含む場所を指定します。これにより、それらのコンピューターからのプロファイルを Profile Management によって一意に識別できます。たとえば、Windows 7 コンピューターのみを含む OU がある場合、**ユーザー ストアへのパス**に `\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Windows7` を指定できます。この例では、Windows7 フォルダーがハードコードされています。ハードコードされた文字列は、Profile Management Service を実行するコンピューターでのセットアップを必要としません。

Profile Management 変数は、コンピューターを一意に識別するために柔軟に組み合わせることができ、セットアップを必要としないため、推奨される方法です。たとえば、異なるビット数のオペレーティングシステムで実行されている Windows 7 および Windows 8 プロファイルを含む OU がある場合、**ユーザー ストアへのパス**に `\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` を指定できます。この例では、2つの Profile Management 変数は、Win7x86 (Windows 7 32ビットオペレーティングシステムで実行されているプロファイルを含む) および Win8x64 (Windows 8 64ビットオペレーティングシステムで実行されているプロファイルを含む) フォルダーに解決される可能性があります。Profile Management 変数の詳細については、Profile Management ポリシー を参照してください。

システム環境変数には、いくつかの構成が必要です。これらは、Profile Management Service を実行する各コンピューターでセットアップする必要があります。Profile Management 変数が適さない場合は、次のようにシステム環境変数をユーザー ストアへのパスに組み込むことを検討してください。

各コンピューターで、%ProfVer% というシステム環境変数をセットアップします。(ユーザー環境変数はサポートされていません。) 次に、ユーザー ストアへのパスを次のように設定します。

```
`\\upmserver\upmshare\%username%.%userdomain%\%ProfVer%`
```

たとえば、Windows 7 32ビットコンピューターの場合は %ProfVer% の値を Win7 に、Windows 7 64ビットコンピューターの場合は Win7x64 に設定します。Windows Server 2008 32ビットおよび64ビットコンピューターの場合は、それぞれ 2k8 および 2k8x64 を使用します。これらの値を多くのコンピューターで手動で設定するのは時間がかかりますが、Provisioning Services を使用する場合は、ベースイメージに変数を追加するだけで済みます。

ヒント: Windows Server 2008 R2 および Windows Server 2012 では、グループポリシーを使用して環境変数の作成と適用を高速化できます。グループポリシー管理エディターで、次をクリックし

ます。 **コンピューターの構成** > **基本設定** > **Windows の設定** > **環境** をクリックし、次に **操作** > **新規** > **環境変数**。

OU間

OU間でプロファイル管理がプロファイルを管理する方法を制御できます。OU階層とGPO継承に応じて、複数のOUに適用されるプロファイル管理ポリシーの共通セットを1つのGPOに分離できます。たとえば、**ユーザー ストアへのパス**と**プロファイル管理を有効にする**は、すべてのOUに適用する必要があります。そのため、これらを専用のGPOに個別に保存し、これらのポリシーのみをそこで有効にする（そして他のすべてのGPOでは未構成のままにする）ことができます。

専用のGPOを使用して、継承されたポリシーを上書きすることもできます。GPO継承の詳細については、MicrosoftのWebサイトを参照してください。

Profile Management におけるドメインとフォレストのサポート

Profile Management は、Windows Server 2008 および Windows Server 2012 のドメインおよびフォレストの機能レベルをサポートしています。それ以前のオペレーティングシステムはサポートされていません。

システム環境変数を使用すると、複数のドメインにおけるユーザー名の曖昧さを解消できます。詳細については、「OU 内および OU 間でのプロファイルの管理」を参照してください。

Profile Management を使用した高可用性とディザスターリカバリ

前提条件として、ユーザー ストアの構造と作成方法を理解してください。詳細については、「Profile Management のアーキテクチャ」および「ユーザー ストアの作成」を参照してください。

これらのトピックでは、Citrix Profile Management に適用される高可用性とディザスターリカバリのサポートされているシナリオについて説明します。シナリオを関連する基盤となる Microsoft テクノロジーに関連付け、サポートされている内容を特定します。

- シナリオ 1: 地理的に隣接するユーザー ストアとフェールオーバー クラスターの基本的なセットアップ
- シナリオ 2: 複数のフォルダー ターゲットとレプリケーション
- シナリオ 3: ディザスターリカバリ

- シナリオ 4: 移動ユーザー
- シナリオ 5: ユーザー ストアの負荷分散

Profile Management は、信頼性の高い環境で動作することを前提としています。この信頼性は主に、Active Directory (AD) とネットワーク ユーザー ストア (NUS) の可用性に適用されます。どちらかが利用できない場合、Profile Management はプロファイルを提供できず、Windows に責任を委ねます。Windows は通常、デフォルトのプロファイルを提供します。

移動プロファイルとの比較

ディザスターリカバリおよび高可用性のシナリオでは、Citrix Profile Management は Microsoft の移動プロファイルに影響するのと同じ問題の影響を受ける可能性があります。特に明記されていない限り、Profile Management はそのような問題を解決しません。

特に、次の点に注意してください。

- Profile Management のサポートは、移動プロファイルもサポートされているシナリオに限定されます。
- オフライン ファイルのキャッシュ オプションは、移動ユーザー プロファイル共有で無効にする必要があります。同じ制限が Profile Management 共有にも適用されます。
- 移動プロファイルは DFS 共有からロードされません。同じ制限が Profile Management 共有にも適用されます。詳細については、`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2533009>` を参照してください。

シナリオ 1 - 地理的に隣接するユーザー ストアとフェールオーバー クラスターの基本設定

「ユーザーには、常に地理的に隣接した、優先されるネットワークユーザー ストア (NUS) をプロファイルに使用してほしい。」この場合、オプション 1 と 2 が適用されます。

「NUS をフェールオーバー クラスター上に配置し、高可用性を実現したい。」この場合、オプション 2 が適用されます。

次の図は、このシナリオを示しています。北米 (NA) のユーザーは、ブリスベンの NUS ではなく、ニューヨークの NUS を使用したいと考えています。目的は、遅延を減らし、オーストラリアまたはニュージーランド (ANZ) への大陸間リンクを介して送信されるトラフィックを最小限に抑えることです。

図(/en-us/profile-management/current-release/media/upm-ha-dr-scenario1-1.png)

オプション 1 – DFS 名前空間

背景情報

Microsoft DFS 名前空間テクノロジーの概要については、「DFS 名前空間の概要」を参照してください。

このオプションの実装

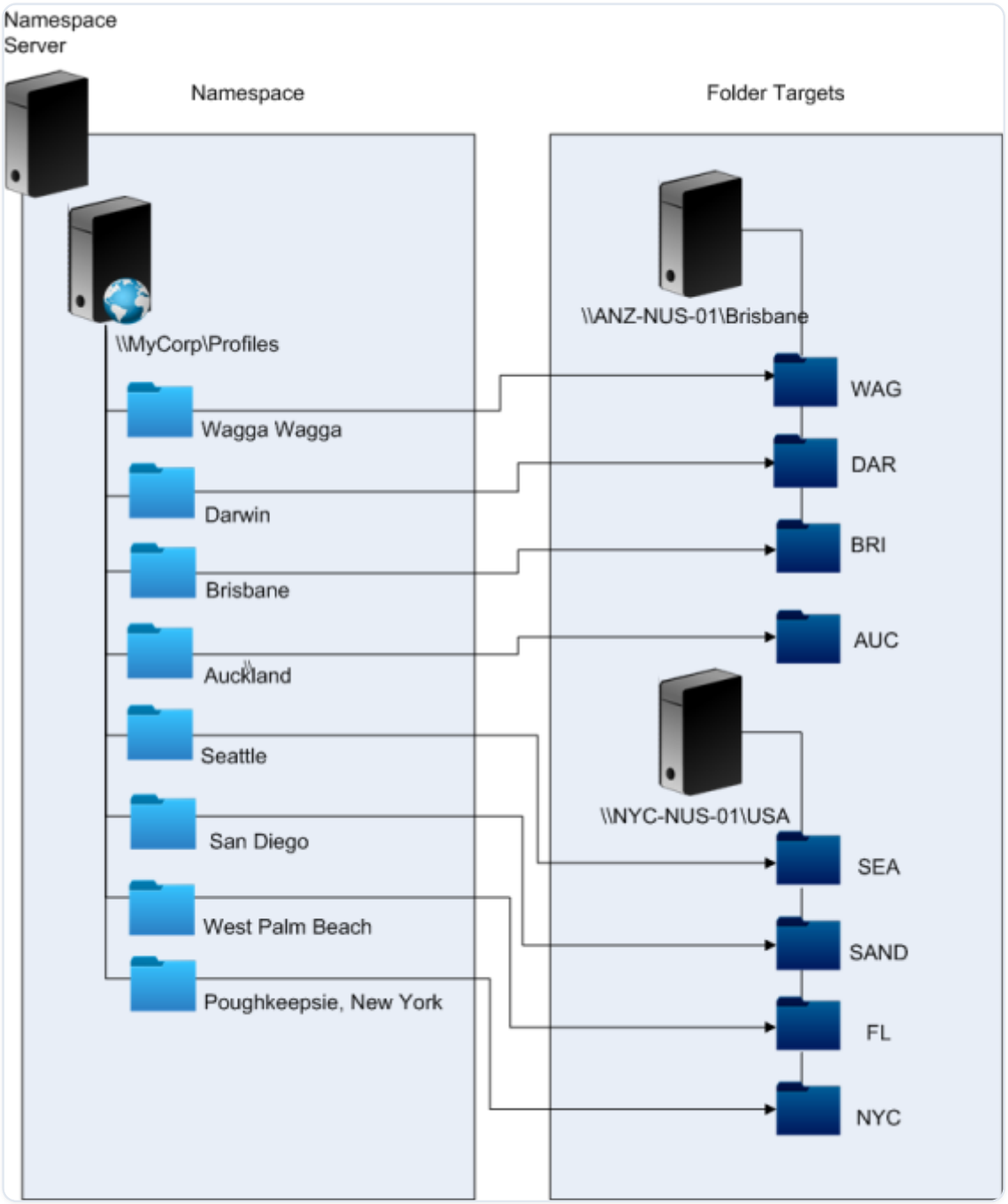
DFS 名前空間は、ブログ記事で提示された問題の一部を解決できます。

`\\MyCorp\Profiles` と呼ばれる NUS の名前空間を設定しましょう。これは名前空間のルートです。ニューヨークとブリスベン (およびその他のサイト) に名前空間サーバーを設定します。各名前空間サーバーには、各 Active Directory の場所に相当するフォルダーがあり、それらのフォルダーはニューヨークまたはブリスベンのサーバー上のターゲットを持っています。

Active Directory (ユーザー レコードの一部) には、次の場所が構成されている場合があります。

AD ロケーション属性 (#L#)	地理的な場所
ワガワガ	ANZ
ダーウィン	ANZ
ブリスベン	ANZ
オークランド	ANZ
シアトル	該当なし
サンディエゴ	該当なし
ウェストパームビーチ	該当なし
ポキプシー、ニューヨーク	該当なし

次の図は、DFS名前空間を使用してこれを設定する1つの方法を示しています。



設定が完了したら、「ユーザー ストアへのパス」設定を次のように構成します。

```
\\MyCorp\Profiles&num;l#
```

8つのサイトに属するユーザーのプロファイルは、わずか2つのサーバーに分散され、シナリオで必要とされる地理的制約を満たしています。

代替案

名前空間ターゲットを順序付けし、次のように順序付けルールを使用できます。DFS 名前空間が使用するターゲットを解決する際、ローカルサイト内のターゲットのみが選択されるように指定

できます。これは、特定のユーザーについて、すべてのデスクトップとサーバーが同じサイトに属することが保証されている場合にのみ機能します。

例えば、通常ポキプシーにいるユーザーがワガワガを訪れた場合、この手法は失敗します。そのユーザーのラップトッププロファイルはブリスベンから来るかもしれませんが、公開されたアプリケーションで使用されるプロファイルはニューヨークから来るかもしれません。

推奨される手法であるAD属性を使用すると、ユーザーが開始するすべてのセッションで同じDFS名前空間の選択が行われるようになります。その理由は、#I#がマシンの構成ではなく、ユーザーのAD構成から派生するためです。

オプション2 - フェールオーバークラスタリングを使用したDFS名前空間

背景情報

- 2ノードファイルサーバーフェールオーバークラスターの構成に関するステップバイステップガイドについては、2ノードクラスター化ファイルサーバーの展開を参照してください。
- 名前空間の種類の選択に関する情報については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-namespaces/choose-a-namespace-type>`を参照してください。

このオプションの実装

フェールオーバークラスタリングを追加することで、基本的な高可用性を提供できます。

このオプションの重要な点は、ファイルサーバーをフェールオーバークラスターにすることです。これにより、フォルダーターゲットは単一のサーバーではなく、フェールオーバークラスターでホストされます。

名前空間サーバー自体に高可用性が必要な場合は、スタンドアロンの名前空間を選択する必要があります。ドメインベースの名前空間は、名前空間サーバーとしてのフェールオーバークラスターの使用をサポートしていません。フォルダーターゲットは、名前空間サーバーの種類に関係なく、フェールオーバークラスターでホストされる場合があります。

重要: フェールオーバークラスター内のサーバーが失敗した場合、ファイルロックの状態が保持されない可能性があります。プロファイル管理は、プロファイル処理中の特定の時点でNUS上のファイルロックを取得します。重要な時点でのフェールオーバーがプロファイルの破損につながる可能性があります。

シナリオ 2 - 複数のフォルダーターゲットとレプリケーション

「ローカルのNUSが利用できない場合、ユーザーは企業ネットワーク上の別のバックアップ場所からプロファイルデータを取得できるようにしたい。変更を行った場合、その変更は、優先NUSが再び利用可能になったときに、そこに戻される必要がある。」

このシナリオにおける基本的な要件は、ネットワーク上のプロファイルの代替場所を提供することです。ユースケースには、ネットワークインフラストラクチャの部分的な障害や、フェールオーバークラスターなどのフォルダーターゲットの完全な利用不能が含まれます。

検討する必要があるオプションは、複数のフォルダーターゲットの使用とDFSレプリケーションの使用です。

オプション 1 - 複数のフォルダーターゲットへのリフェラル

参考資料

DFS名前空間のチューニングについては、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-namespaces/tuning-dfs-namespaces>`を参照してください。

このオプションについて

リフェラルとは、ユーザーデバイスによって順番に試行されるターゲットの順序付きリストです。これは、ソフトウェアライブラリのようにターゲットが読み取り専用であるシナリオ向けに設計されています。ターゲット間にリンクがないため、この手法をプロファイルで使用すると、同期できない複数のプロファイルが作成される可能性があります。

ただし、リフェラル内のターゲットに対して、順序付け方法とターゲット優先度の両方を定義することは可能です。適切な順序付け方法を選択すると、すべてのユーザーセッションによって一貫したターゲットが選択されるように見えます。しかし実際には、ユーザーのすべてのデバイスが同じサイト内にある場合でも、サイト内ルーティングの問題により、異なるセッションによって異なるターゲットが選択される可能性があります。この問題は、デバイスがリフェラルをキャッシュするとさらに複雑になる可能性があります。

重要: このオプションはProfile Managementの展開には適しておらず、サポートされていません。ただし、ファイルレプリケーションは、単一セッションのみが保証され、 アクティブライトバックが無効になっている一部の特殊な展開で使用されてきました。これらの特殊なケースについては、Citrix Consultingにお問い合わせください。

オプション 2 - 分散ファイルシステムレプリケーション

参考資料

- 分散ファイルシステムレプリケーション (DFSR) の概要については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-replication/dfsr-overview>`を参照してください。
- レプリケートされたユーザープロファイルデータに関するサポートステートメントについては、`<https://techcommunity.microsoft.com/t5/ask-the-directory-services-team/microsoft-8217-s-support-statement-around-replicated-user/ba-p/398230>`を参照してください。
- DFSR が分散ファイルロックをサポートしない理由を理解するには、`<https://blogs.technet.com/b/askds/archive/2009/02/20/understanding-the-lack-of-distributed-file-locking-in-dfsr.aspx>` を参照してください。

このオプションの実装

DFS レプリケーションは、帯域幅が制限されたネットワーク接続全体でフォルダー同期を提供します。このオプションは、単一の名前空間フォルダー定義が参照する複数のフォルダーターゲットを同期するため、オプション 1 の問題を解決するように見えます。実際、フォルダーがフォルダー定義のターゲットとして追加されると、レプリケーショングループに属するものとして指定できます。

考慮すべきレプリケーションには 2 つの形式があります。

- 一方向レプリケーション (アクティブ-パッシブ レプリケーションとも呼ばれる) は、重要なデータを安全なリポジトリにバックアップするために設計されています。このレプリケーションは、たとえば災害復旧サイトの維持に適しています。パッシブターゲットが参照に対して無効になっており、災害復旧計画がアクティブ化されたときにのみ呼び出される限り、Profile Management で機能させることができます。
- 双方向レプリケーション (アクティブ-アクティブ レプリケーションとも呼ばれる) は、グローバル共有データへのローカルな読み取り/書き込みアクセスを提供することを目的としています。ここでは、即時レプリケーションは必ずしも要件ではありません。共有データはめったに変更されない可能性があります。 重要: アクティブ-アクティブ DFSR はサポートされていません。

スケジュールは、データがレプリケートされる頻度を定義します。頻繁なスケジュールは CPU と帯域幅の両方でより集中的ですが、即時更新を保証するものではありません。

Profile Management は、その操作のさまざまな時点で、(共有) ユーザー ストアへの更新を調整するために、NUS 内の特定のファイルをロックする必要があります。通常、これらの更新はセッションの開始時と終了時、およびアクティブなライトバックが有効になっている場合はセッションの途中で行われます。DFS レプリケーションでは分散ファイルロックがサポートされていないため、Profile Management は NUS として 1 つのターゲットしか選択できません。この設定により、双方向レプリケーション (アクティブ-アクティブ レプリケーション) の価値が事実上排除され、Profile Management には適しておらず、サポートされていません。一方向レプリケーション (アクティブ-パッシブ レプリケーション) は、災害復旧システムの一部としてのみ Profile Management に適しています。その他の用途はサポートされていません。

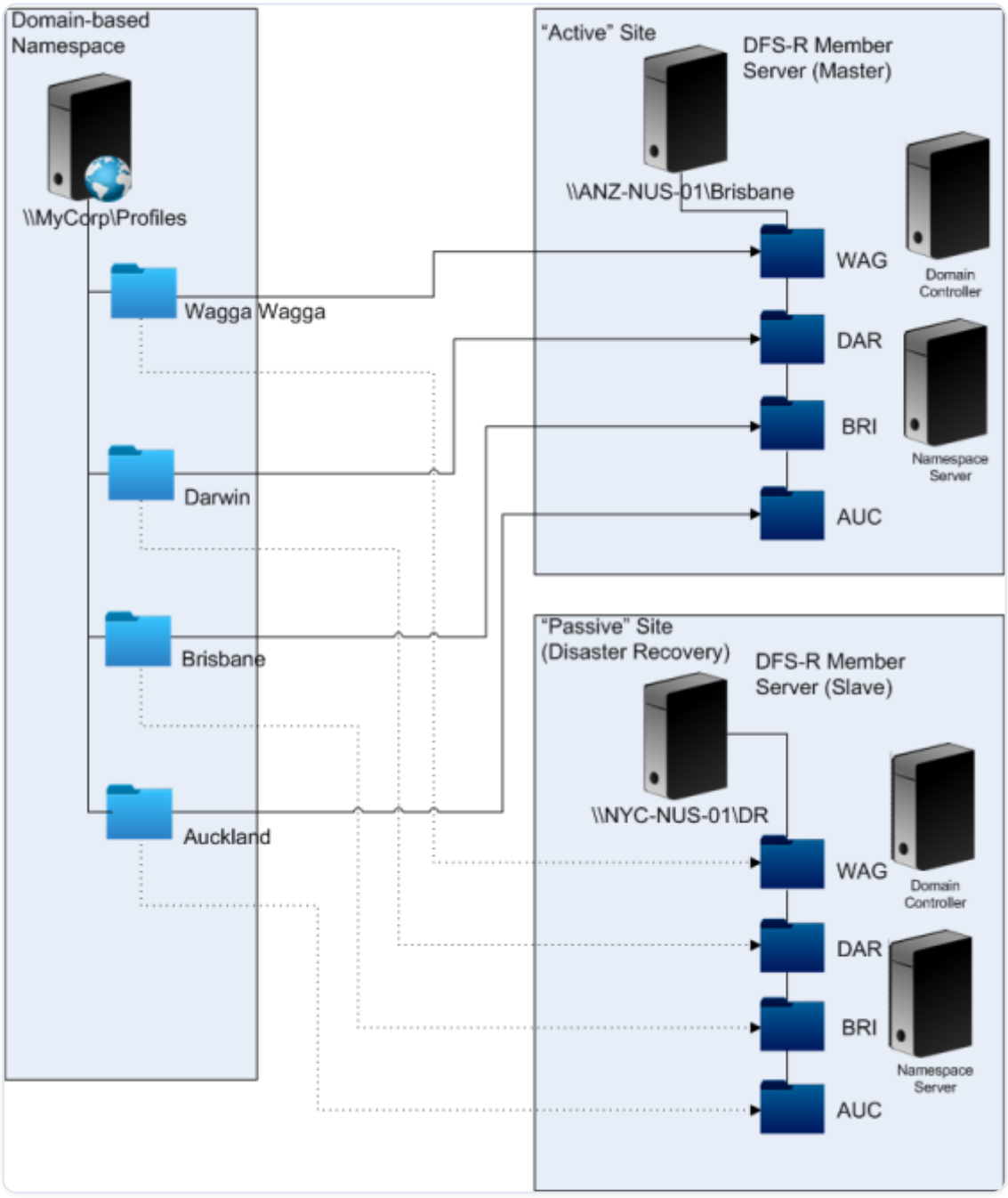
シナリオ 3 - ディザスターリカバリー

「Citrix®ユーザープロファイルを処理するための完全なディザスターリカバリーサイトをどのように設定すればよいですか？」

Profile Management は、ディザスターリカバリー (DR) に必要な主要な機能をサポートしています。

- **DFS 名前空間**。ドメインベースの名前空間サーバーは、DRサイトが独自の名前空間サーバーを持つことができるため、このシナリオでは推奨されます。(スタンドアロンの名前空間サーバーはレプリケートできませんが、フェールオーバークラスターでホストできます。)
- **複数のフォルダーターゲットとDFSレプリケーション**。各NUSに対して、少なくとも2つのターゲットを提供しますが、通常運用では1つのみを有効にします。無効になっているターゲット（DRサイトにある）が最新の状態に保たれるように、一方向のDFSレプリケーションを設定します。
- **個々のフォルダーターゲットをホストするためのフェールオーバークラスター**。オプション。DRサイトのリソースを無駄にする可能性があります。

この図では、ドメインベースの名前空間がNUSを管理しています。(シナリオ1の図では、意図的に名前空間を含んでいませんでした。) DRサイトを含む各サイトに名前空間サーバーを含めることができます。すべてのサーバーは、名前空間の同じビューをサポートします。



DR計画がアクティブ化された場合、DRサイトのNUSは、マスターNUSからレプリケートされた変更で最新の状態になります。ただし、名前空間サーバーはまだ名前空間の誤ったビューを反映しているため、その構成を更新する必要があります。各フォルダーについて、マスターサイトのフォルダーターゲットを無効にし、DRサイトのフォルダーターゲットを有効にする必要があります。

ADの更新が伝播した後、名前空間サーバーはDRフォルダーターゲットを正しく特定し、DRサイトはProfile Managementによって使用できるようになります。

注: 「ユーザー ストアへのパス」設定は、実際のサーバーではなく名前空間フォルダーを参照するため、Profile Management の構成を更新する必要はありません。

実際には、DRサイトは通常プロファイルには使用されないため、一方向または双方向のレプリケーションが可能です。災害が終了すると、DRサイトからマスターサイトへの接続により、災害中にNUSに加えられた変更がマスターサイトにレプリケートされます。

シナリオ 4 - 移動するユーザー

「スタッフが異なるオフィス間を移動する際、地理的に近いNUSを使い続けられるように、優先NUSを変更したい。」

このシナリオの難しさは、ユーザーのログオンセッションが複数の場所から集約される可能性があることです。通常、ユーザーはデスクトップセッションをあるサイトから別のサイトへと移動させます。しかし、多くのアプリケーションは、ユーザーのデスクトップの現在の場所を認識しないバックエンドサーバーでホストされています。

さらに、ユーザーは切断されたセッションに再接続する可能性がありますが、それらのセッションはおそらくホームロケーションでホストされています。何らかの理由でセッションがユーザーの新しい場所にあるNUSに切り替わることを強制された場合、パフォーマンスが低下します。

ホットデスクを利用する移動ユーザーにとって、**プロファイルストリーミング**と**常にキャッシュ**の設定を使用することが最善の選択肢です。固定マシンを使用する場合でも、Citrix®ストリーミングユーザープロファイルを使用して迅速にログオンできます。常にキャッシュを有効にすると、プロファイルの残りの部分がバックグラウンドでロードされます。

シナリオ 5 - ユーザー ストアの負荷分散

「複数の地理的に隣接するネットワーク ユーザー ストア (NUS) 間でユーザーの負荷分散を行いたい。」

背景情報

Microsoft DFS 名前空間テクノロジーの概要については、DFS 名前空間の概要 を参照してください。

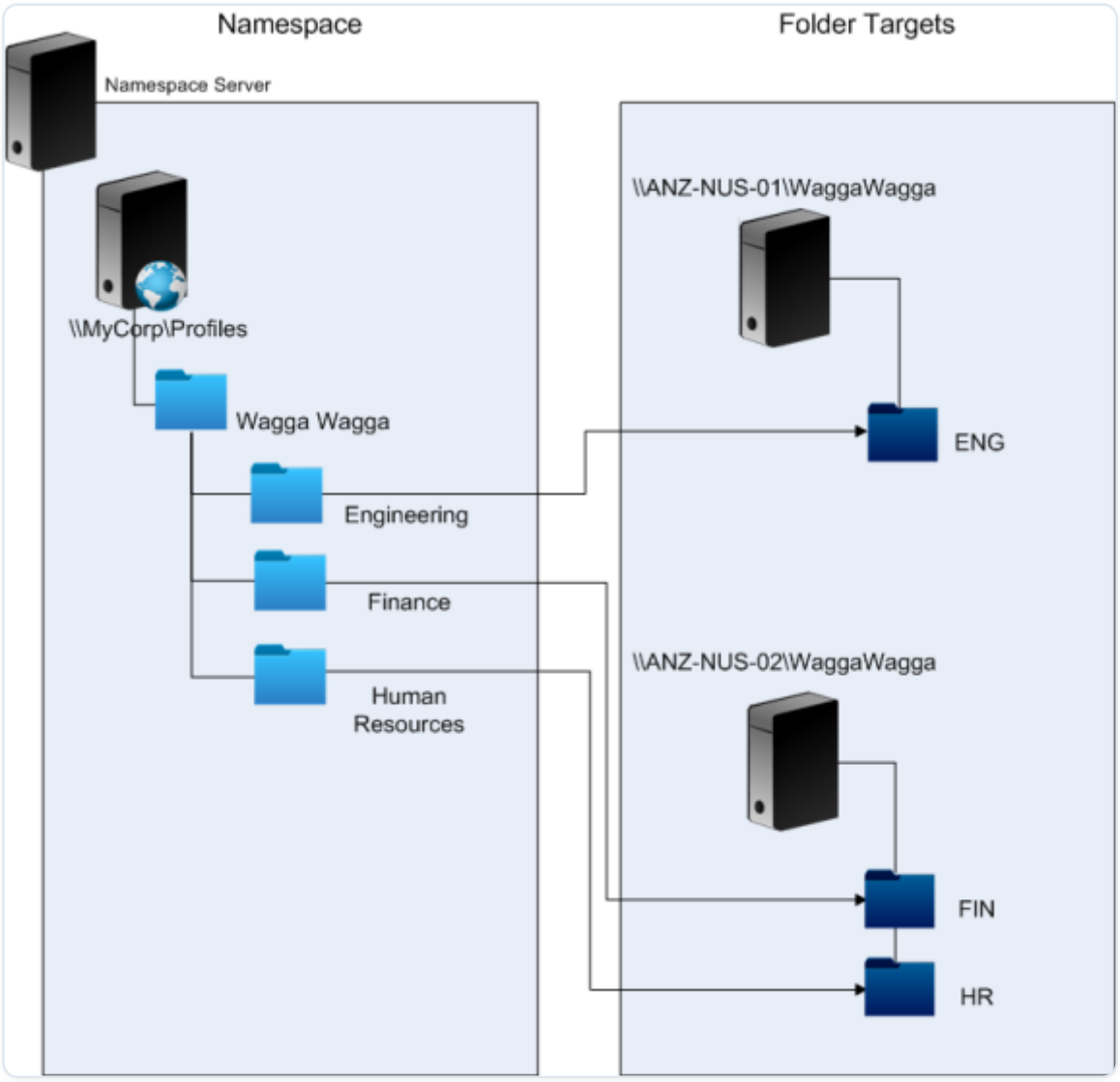
シナリオ 1 とは異なり、このシナリオでは、複数の NUS を必要とするほど大規模な単一サイトがあります。DFS 名前空間を使用することで、シナリオ 1 のソリューションを改善できます。

シナリオ 1 (オプション 1) では、DFS 名前空間を使用して、複数のサイトを同じサーバー上の異なるフォルダーにマッピングしました。同様の手法を使用して、名前空間のサブフォルダーを異なるサーバー上のフォルダーにマッピングできます。

理想的には、ユーザー アカウントを同様のサイズのチャンクに分割する AD 属性 (例: #department#) が必要です。シナリオ 1 と同様に、#department# は常に定義され、正しいフォルダー名が含まれていることが保証されている必要があります。

シナリオ 1 と同様に、`\\MyCorp\Profiles` という NUS の名前空間を設定します。

この図は、名前空間の設定方法を示しています。



セットアップが完了したら、「ユーザー ストアへのパス」設定を次のように構成します。

`\\MyCorp\Profiles#l##department#`

この構成により、ワガワガのユーザーは、両方ともローカルの 2 つの NUS サーバーに分散されます。

Profile Managementでのフォルダーリダイレクトの計画

Profile Managementはフォルダーリダイレクトをサポートしており、その使用が推奨されます。

Active Directory (AD)では、Application DataやDocumentsなどのフォルダーをネットワークの場所に保存（リダイレクト）できます。フォルダーの内容はリダイレクトされた場所に保存され、ユーザープロファイルには含まれないため、プロファイルのサイズが削減されます。ADのバージョンによっては、リダイレクトできるフォルダーとできないフォルダーがあります。さらに、フォルダーリダイレクトを構成することで、強制プロファイルのユーザーは、プロファイルの使用を制限しながらも、一部の設定、ファイル、その他のデータを保存できます。

一般的なガイドラインとして、ネットワーク帯域幅が許す場合、セッション内で定期的にアクセスされないすべてのユーザーデータに対してフォルダーリダイレクトを有効にすることをお勧めします。

リダイレクトできるすべてのフォルダーがADでアクセスできるわけではありません。特定のオペレーティングシステムでリダイレクトできるフォルダーは、レジストリの `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\User Shell Folders` にあります。

フォルダーリダイレクトに関する重要な情報

Profile Managementでフォルダーリダイレクトを使用する場合の次の重要な点に注意してください。

- XenDesktop 7では、Citrix Virtual Desktops™ポリシーを使用して、Studioでリダイレクトするフォルダーを指定します。詳細については、Citrix Virtual Desktopsのドキュメントを参照してください。
- フォルダーリダイレクトを正常に構成するには、バージョン1とバージョン2のプロファイル間のフォルダー構造の違いに注意してください。
- フォルダーリダイレクトを使用する際のセキュリティに関する詳細については、Microsoft TechNet WebサイトのSecureおよび記事Folder Redirection Overviewを参照してください。
- ユーザーストアは、リダイレクトされたフォルダーに使用される共有とは異なるものとして扱います。
- リダイレクトされたフォルダーを除外リストに追加しないでください。

このビデオを見て詳細はこちら:



サードパーティのディレクトリ、認証、およびファイルサービス

この記事では、Microsoftが提供するサービス以外のディレクトリ、認証、およびファイルサービスのサポートについて説明します。

ディレクトリサービス

重要： Active Directory（AD）は、Profile Managementの運用に不可欠です。その他のディレクトリサービスはサポートされていません。これらのサービスには以下が含まれます。

- ノベル eDirectory.
- Windows 2000 Server以前のオペレーティングシステム（OS）。Windows 2000 ServerはADをサポートしていますが、必要なレベルではありません。詳細については、「Profile Managementでのドメインとフォレストのサポート」を参照してください。Microsoft Windows NT 4.0はADより前のものです。
- Samba 4以前。

認証サービス

他の認証サービスはドメイン内でADと共存できますが、Profile Managementではサポートされていません。その理由は、Profile Management Serviceと同様に、winlogon.exeと相互作用し、ユーザーログオンプロセスに問題を引き起こす可能性があるためです。たとえば、Novellの認証サービスは、ユーザーがプリンターやファイル共有などのNovellリソースにアクセスすることを許可しますが、サポートされていません。

ファイルサービス

サードパーティのファイルサービスは、ユーザーストアおよびフォルダーリダイレクト（使用されているWindowsオペレーティングシステムでサポートされている場合）に使用できます。ファイルサーバーは、Server Message Block（SMB）またはCommon Internet File System（CIFS）タイプである必要があり、NTFSファイルシステムをサポートしている必要があります。これらの理由から、以下がサポートされています。

- ウィンドウズ サーバー 2003 以降
- サンバ 3

重要: Novell ディレクトリに対する認証が必要なため、Novell ファイルサービスはサポートされていません。

複数のプラットフォーム上のプロファイルとProfile Managementの移行に関するFAQ

このセクションでは、複数のWindowsオペレーティングシステム、または単一オペレーティングシステムの複数のバージョンやビット数を持つ環境でプロファイルを使用することに関する質問と回答を掲載しています。

プロファイルとの互換性の問題を確実に回避するにはどうすればよいですか?

異種環境をサポートする必要性と、ユーザーとそのデバイスを追跡するためのパーソナライズ設定の必要性のバランスを取ります。通常、これら2つのニーズのバランスは、管理者とIT部門のみが決定できます。ユーザープロファイルを次のように調整することで、異なるシステムを管理します。プロファイルがローミングする場合、問題は適切に処理されるか、必要に応じて設定は完全に無視され、まったく追跡されないようにする必要があります。これは、多くのサードパーティ製ソフトウェアソリューションの基礎となっています。

トラブルシューティングを最小限に抑えるには、同じデバイス設定（インストールされているアプリケーション、OSバージョンなど）間でプロファイルをローミングするようにしてください。しかし、現代の多くのシナリオでは、これは容易に達成できず、不完全なユーザーエクスペリエンスにつながります。たとえば、ユーザーが複数のオペレーティングシステムを使用しているからといって、お気に入りやマイドキュメントを複製する必要はありません。このような場合、管理者はフォルダーリダイレクトを使用することでユーザーエクスペリエンスを向上させることができます。このMicrosoft機能の使用は、他のシナリオでも推奨されます。

異なるシステム間でプロファイルを共有できますか?

Citrixでは、プラットフォームごとに1つのベースプロファイルを持つことを推奨しています。これは、オペレーティングシステムごとに1つのプロファイルを持つことと必ずしも同じではありません。この推奨事項の詳細については、「複数のプラットフォームの計画」を参照してください。これにより、互いに機能しない可能性のある設定や、特定のOSに適用されない設定の数を最小限に抑えることができます。たとえば、デスクトップの電源設定は、サーバーシナリオやリモートデスクトップサービス（旧ターミナルサービス）を含むシナリオには適用されません。

プロファイルの数を簡素化して減らそうとし、それらが複数のOSで使用されるようになると、設定の競合のリスクが高まります。システムが同じでない場合、このリスクはさらに増大します。たとえば、Microsoft Officeのアドインがすべてのデバイスに存在しない場合があります。幸いなことに、特定のデバイスに適用されないこのような設定は、多くの場合無視されます。無視されない場合にサポートの問題が発生します。アドインが存在しない場合、Microsoft Excelは起動に失敗します。

Profile Managementは、複数のバージョンまたはプラットフォーム間で設定をどのように有効にしますか?

Citrix®は、複数のベースプロファイル間で共通設定をローミングする機能を提供します。Citrixは、Microsoft Office、Internet Explorer、壁紙などの設定のローミングを可能にします。これらの種類のシナリオをサポートする能力は、アプリケーションがプラットフォーム間の設定のローミングをどの程度サポートしているかによって制限されます。次の質問のリンクでは、Microsoftの立場とベストプラクティスについて説明しています。

Microsoftは、プラットフォームとバージョンをまたがるローミングプロファイルをどのようにサポートしていますか?

関連情報については、「ローミングユーザープロファイルの展開」を参照してください。

Office 2007のツールバー設定については、「クイックアクセスツールバーのカスタマイズ」を参照してください。

標準のMicrosoft Windowsプロファイルソリューションが技術的、カスタム、またはビジネス要件を完全に満たさない場合、Profile Managementは実行可能なソリューションとなります。

x86プラットフォームとx64プラットフォーム間でプロファイルを共有することは可能ですか?

Windows x86 と x64 間で 1 つのプロファイルを共有することは一般的に可能ですが、いくつかの問題が発生する可能性があります。

理由はいくつかあります。たとえば、使用ごとのファイル関連付けが `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Classes` に保存されることがその 1 つです。非管理者が Firefox を既定のブラウザーとして設定すると、32 ビットシステムには次が保存されます。

`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Classes\FirefoxHTML\shell\open\command` -\> " `C:\Program Files\Mozilla Firefox\firefox.exe` " -requestPending -osint -url "%1"

このパスを含むプロファイルが Windows x64 で使用されると、OS は 64 ビット版の Firefox を探しますが、これは存在しません。代わりに、32 ビット版が `C:\Program Files (x86)\Mozilla Firefox` にインストールされている可能性があります。これにより、ブラウザーが起動しなくなります。

逆の場合も同様です。x64 プラットフォームでパスが設定され、x86 プラットフォームで使用される場合です。

複数のプラットフォームで 1 つのプロファイルがどのように動作するかをテストしたいのですが、どこから始めればよいですか?

複数のプラットフォームで 1 つのプロファイルを使用する実験には、テストと検証が重要です。推奨されるアプローチは、プラットフォームごとに 1 つのプロファイルを持つことです。単一のプロファイルが複数のプラットフォームでどのように動作するかを調べたい場合は、以下の情報が役立つかもしれません。

次の質問に答えることで、何が問題を引き起こす可能性があるかを特定することから始めます。このトピックの残りの質問を、問題への対処と追跡のアイデアとして使用してください。

プラットフォーム間で動作する項目:

- マイドキュメントとお気に入り
- 構成情報 (既定値を含む) を完全にプロファイル内に保存するアプリケーション

動作しない可能性のある項目:

- ハードコードされたデータ、パスデータなどを保存するアプリケーション
- x64 または x86 プラットフォームに固有の設定
- すべてのシステムに存在するわけではない Excel アドインなど、同一ではないアプリケーションのインストール。これらのインストールは、アプリケーションによって異なるあらゆる種類のエラー状態を引き起こす可能性があります

ユーザーがログオンするコンピューターに基づいてプロファイルを割り当てることができます?

はい。Profile Management は、ローカルデスクトップ、Citrix Virtual Apps、Citrix Virtual Desktops™、またはこれらの任意の組み合わせに基づいてプロファイルを適用できます。

適切な Profile Management 設定が有効になっている場合、Remote Desktop Services (旧 Terminal Services) プロファイルは、ユーザーがターミナルサーバーまたは Citrix Virtual Apps セッションを持っている場合にのみ使用されます。この設定は、ユーザーが Remote Desktop Services セッションを介してログオンするときに、既存のプロファイル (Citrix ユーザープロファイルを除く) をすべて上書きします。

Windows 7 では、GPO コンピューター設定を使用して、ユーザーがログオンするコンピューターに基づいてプロファイルを割り当てることができます。繰り返しになりますが、これは GP に基づいているため、プロファイルの割り当ては GPO が適用される OU に依存します。

コンピューターに基づくプロファイルの割り当てが望ましいのはなぜですか?

個別のユーザーエクスペリエンスが必要な場合、ユーザーがログオンするコンピューターにプロファイルを割り当てることは有用です。たとえば、管理者は、Remote Desktop Services (旧 Terminal Server) セッションで使用されるプロファイルを、デスクトップで使用されるプロファイルとは別に保持することを決定する場合があります。

Profile Management は Windows ユーザープロファイルを Citrix ユーザープロファイルに移行しますか?

Profile Management を構成して、ユーザーがログオンするときに既存のローミングプロファイルとローカルプロファイルを自動的に移行できます。また、テンプレートプロファイルまたはデフォルトの Windows プロファイルを新しい Citrix ユーザープロファイルのベースとして使用することもできます。

Profile Management の移行の計画と設定については、「プロファイルの移行または作成」を参照してください。ソフトウェアが Windows ユーザープロファイルを Citrix ユーザープロファイルに移行する方法の詳細については、「ログオン図」を参照してください。

どのプロファイルを Citrix ユーザープロファイルに移行できますか?

Profile Management は、Windows ローカルプロファイルと Windows ローミングプロファイルを移行できます。必須プロファイル (.man ファイル) は Profile Management によって無視されますが、Citrix ユーザープロファイルのテンプレートとして使用できます。Profile Management が正しく機能するように、すべてのユーザーへの必須プロファイルの割り当てを無効にしてください。

既存の Windows 必須プロファイルをテンプレートとして使用するには、「テンプレートまたは必須プロファイルの指定」を参照してください。

テンプレートプロファイルを使用するにはどうすればよいですか?

Profile Management を使用すると、新しい Citrix ユーザープロファイルの作成のベースとして使用されるテンプレートプロファイルを指定できます。通常、初めてプロファイルを割り当てられたユーザーは、ログオンする Windows デバイスのデフォルトユーザープロファイルを受け取ります。これは許容できるかもしれませんが、異なるデバイスのデフォルトユーザープロファイルにバリエーションがあると、ユーザー用に作成されるベースプロファイルに違いが生じることを意味します。したがって、テンプレートプロファイル機能はグローバルなデフォルトユーザープロファイルと見なすことができます。

ユーザーがプロファイルデータに変更を加えるのを防ぎたい場合は、テンプレートプロファイルを Citrix 必須プロファイルとして識別することもできます。

詳細については、「テンプレートまたは必須プロファイルを指定する」(/ja-jp/profile-management/current-release/configure/template.html)を参照してください。

インストールとセットアップ

インストールパッケージをダウンロードする

開始する前に、有効なCitrix®アカウントがあることを確認してください。

ダウンロードを完了するには、次の手順に従います。

1. Citrix Virtual Apps and Desktopsダウンロードページにアクセスします。
2. ダウンロードするバージョン（例：2206）を見つけて展開し、**「制限付きダウンロードにアクセスするにはサインイン」**をクリックします。
3. Citrixアカウントの資格情報でサインインします。
4. **Citrix Virtual Apps and Desktops™ 7 `<Version_Number>` > 製品ソフトウェア > Citrix Virtual Apps and Desktops 7 `<Version_Number>`、すべてのエディション**を選択します。
5. **「製品ISOに含まれるが個別にパッケージ化されているコンポーネント」ノードを展開し、「Profile Management」サブノードで「ファイルのダウンロード」**をクリックします。
6. 表示される**「ダウンロード契約」**ダイアログボックスで、契約に同意してダウンロードを開始します。

   ダウンロードが完了すると、`ProfileMgmt_<version_number>.zip`ファイル（例：ProfileMgmt_2206.zip）がダウンロードフォルダーに表示されます。

ダウンロードに含まれるファイル

ダウンロードしたパッケージを解凍します。パッケージに含まれるファイルについては、次の表を参照してください。

ファイル名	説明	場所
x86.msi	32ビットシステム用インストーラー	
x64.msi	64ビットシステム用インストーラー	

ファイル名	説明	場所
CitrixBase.adml と CitrixBase.admx	Profile Management ポリシー階層用の ADMX テンプレートファイル	`\Group Policy Templates\CitrixBase`
ctxprofile.adml と ctxprofile.admx	Profile Management ポリシー設定用の ADMX テンプレートファイル	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)

プロファイル管理のインストール

プロファイル管理は、VDAインストーラーのオプションコンポーネントです。VDAと同時に、または個別にインストールできます。この記事では、プロファイル管理を独自のインストーラーを使用してインストールする方法について説明します。

VDAと同時にプロファイル管理をインストールする方法の詳細については、Citrix Virtual Apps and DesktopsのドキュメントでVDAのインストールを参照してください。

概要

管理したいユーザープロファイルを持つ各コンピューターにプロファイル管理をインストールする必要があります。通常、配布ツール、イメージングソリューション、またはストリーミングテクノロジーを使用して、コンピューター上でMSIインストーラーを実行します。任意のコンピューターに直接インストールすることもできます。サイレントインストールがサポートされています。

一般的なインストール手順は次のとおりです。

1. MSIインストーラーを実行する。
2. グループポリシーを使用してプロファイル管理を構成するには、ADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加します。

> **注:**
>
> すべてのユーザーコンピューターに同じバージョンのプロファイル管理をインストールすることをお勧めします。また、同じバージョンのADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加してください。このアプローチにより、異なるユーザープロファイルストア構造

> （異なるバージョンからのもの）が存在する場合に発生する可能性のあるプロファイルデータの破損を防ぐことができます。

MSIインストーラーを実行する

この手順では、プロファイル管理を単一のコンピューターにインストールします。

1. 管理者としてコンピューターにログオンします。
2. インストールパッケージのルートフォルダーにあるMSIインストーラーを実行します。インストールウィザードが表示されます。
3. 画面の指示に従ってインストールを完了します。
4. コンピューターを再起動します。

DLLやその他のファイルに加えて、インストーラーはインストール場所にこれらのファイルを作成します (デフォルトでは、`C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager`)。

ファイル名	説明
UPMPolicyDefaults_all.ini	Profile Management .iniファイル
UserProfileManager.exe	Profile Managementによって管理されるコンピューター上で機能を実行するWindowsサービス

コマンドラインからMSIインストーラーを実行する

コマンドラインからMSIインストーラーを実行すると、ユーザーの操作なしでインストールを完了できます。

コマンドラインインストールでは、以下のインストールオプションも提供されます。

- `/norestart`オプションを使用して再起動を抑制します。

  オペレーティングシステムによっては、コンピューターが再起動するまでProfile Managementが機能しない場合があります。たとえば、Windows 7ワークステーションを再起動する必要はありません。
- 必要に応じて`INSTALLDIR`を指定します。
- Profile Managementの.iniファイルのインストールを防ぐには、`INSTALLPOLICYINIFILES`を`no`に設定します。

以前のバージョンで.iniファイルを使用しており、その以前の設定をこのバージョンで使用したい場合は、インストール後に各設定をGroup Policy Editorの対応するProfile Managementポリシーに手動で転送してください。

- アップグレードには`OVERWRITEINIFILES=yes`オプションを使用します。詳しくは、Profile Managementのアップグレードを参照してください。

次の例では、ユーザーインターフェイスと再起動を表示せずにProfile Managementをインストールします。UACが有効になっている場合は、昇格された特権で`msiexec`コマンドを実行します。たとえば、管理者として実行したコマンドプロンプトから実行します。

```
msiexec /i <path to the MSI file> /quiet [/norestart]
[INSTALLDIR=<installation directory>]   [OVERWRITEINIFILES=yes]
[INSTALLPOLICYINIFILES=no]
```

Profile Managementをアンインストールする

この手順では、単一のコンピューターからProfile Managementをアンインストールします。開始する前に、コンピューターの管理者であることを確認してください。

1. データ損失を避けるため、すべてのユーザーがログオフしていることを確認してください。
2. プログラムと機能のインストール済みプログラムの一覧から、**Profile Management**を選択し、**アンインストール**をクリックします。
3. **はい**をクリックします。
4. コンピューターを再起動します。

サイレントモードでProfile Managementをアンインストールすることもできます。

ADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加する

グループポリシーを使用してProfile Managementを構成する方法に応じて、ADMXテンプレートファイルを*ドメインコントローラー*または*コンピューター*に追加します。

- OU内のコンピューターに対してProfile Managementを一元的に構成するには、ADMXテンプレートファイルをすべてのドメインコントローラーに追加します。
- 各コンピューターに対してProfile Managementを個別に構成するには、ADMXテンプレートファイルをコンピューターに追加します。

インストールパッケージから以下のファイルをコピーし、ドメインコントローラーまたはコンピューター上の場所に貼り付けます。詳細な手順については、次の表を参照してください。

ファイル名	元の場所（インストールパッケージ）	コピー先（ドメインコントローラーまたはコンピューター）
CitrixBase.adml	`\Group Policy Templates\CitrixBase`	`C:\Windows\PolicyDefinitions\<language>` (例: `C:\Windows\PolicyDefinitions\en-US`)
CitrixBase.admx	`\Group Policy Templates\CitrixBase`	`C:\Windows\PolicyDefinitions`
ctxprofile.adml	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)	`C:\Windows\PolicyDefinitions\<language>` (例: `C:\Windows\PolicyDefinitions\en-US`)
ctxprofile.admx	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)	`C:\Windows\PolicyDefinitions`

ADMXテンプレートファイルについて詳しくは、こちらのMicrosoftの記事を参照してください。

GPOでProfile Managementポリシーを構成する

ADMXファイルをドメインコントローラーに追加したら、次の手順に従ってProfile Managementポリシーを表示および構成します。

1. ドメインコントローラーで、**Active Directoryユーザーとコンピューター**を開きます。Profile Managementがインストールされているコンピューターを含むOUを特定します。
2. **グループポリシーの管理**を開き、OUを右クリックして、**このドメインにGPOを作成し、ここにリンク**を選択し、GPOを作成します。

> **注:**

> GPOにセキュリティフィルターを適用する場合は、認証済みユーザーグループまたはコンピューターグループのいずれかを使用します。個々のユーザーのみを含むセキュリティグループは使用しないでください。

3. **グループポリシーオブジェクト**から、新しく作成したGPOを右クリックし、**編集**を選択します。グループポリシー管理エディターウィンドウが表示されます。
4. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート... > Citrix Components > Profile Management**を選択します。すべてのProfile Managementポリシーが表示されます。
5. 必要に応じてProfile Managementを構成します。

ローカルGPOでプロファイル管理をテストする

プロファイル管理を本番環境に展開する前に、テスト環境をセットアップすることをお勧めします。設定をドメイングループポリシーオブジェクト (GPO) に転送するための完全にサポートされた簡単な方法は、マシンへのローカルインストールに基づいています。

一般的なワークフローは次のとおりです。

1. マシンにプロファイル管理をインストールします。
2. 構成の決定に記載されている質問への回答に基づいて、ローカルGPOでプロファイル管理ポリシーを構成します。
3. プロファイル管理を有効にする。
4. ログオンおよびログオフの動作をテストします。
5. 満足のいく結果が得られるまで、ローカルGPO設定を調整します。

概要

マシンが本番OUのメンバーである場合、ローカルGPOを使用してプロファイル管理を安全にテストできます。ローカルGPOポリシーは、OUおよびドメインのポリシーが利用できない場合に有効になります。ローカルGPOを使用する場合は、他の場所（たとえば、ドメインやサイトなど）でプロファイル管理GPOが使用されていないことを確認してください。

ドメインGPOを使用してグループポリシーを構成できない場合、ローカルGPOを長期的なソリューションとして使用できます。ただし、この方法では、次のような複雑さが環境に導入されます。

- 各マシンには、プロファイル管理ADMXファイルがインストールされている必要があります。

- ドメインユーザーは、複数のマシンにアクセスする際に設定を維持できない可能性があります。

> **重要:**
>
> ローカルGPOを長期的なエンタープライズソリューションとして使用することはお勧めしません。

ユーザーエクスペリエンスをテストする

プロファイルソリューションを実装する際は、ユーザーがさまざまなマシンからリソースにアクセスする際のユーザーエクスペリエンスの違いを最小限に抑える必要があります。

ユーザーのレジストリとファイルは、物理マシン、プロファイル構成、およびオペレーティングシステムによって異なる場合があります。したがって、ユーザーがローミングするマシンのシステムインストール間の違いに対処するようにProfile Managementを構成する必要があります。

そのためには、本番環境を模倣する方法で、ユーザーのリソースへのアクセスを確認します。これらのリソースには、以下が含まれる場合があります。

- ローカルにインストールされたアプリケーションを持つマシン
- ストリーミングされたアプリケーションまたはローカルにインストールされたアプリケーションを含む仮想デスクトップ
- 仮想アプリサーバーで公開またはストリーミングされた仮想アプリ
- ターミナルサービスクライアント

オペレーティングシステムのバリエーションをテストする

ユーザーは異なるオペレーティングシステムからアプリケーションにアクセスする場合があります。それらの間のバリエーションは、単一のユーザープロファイル内で競合する設定を作成する可能性があります。

詳細については、「プロファイルバージョン」を参照してください。

アップグレードと移行

Profile Management のアップグレード

この記事では、Active Directory を使用して Profile Management の展開をアップグレードする方法についてガイダンスを提供します。

重要: このアップグレードプロセスでは、手順の順序に従うことが重要です。新しい .adm または .admx ファイルをグループポリシーに追加した後にのみ、すべてのコンピューターでソフトウェアをアップグレードしてください。事前にアップグレードすると、ログファイルが2つの場所に保存される可能性があります。1つは古いバージョンのログファイルを含み、もう1つは新しいバージョンのファイルを含みます。この考慮事項は、特に Citrix virtual desktops™ の展開に影響します。

スケジュールされたメンテナンス期間中にアップグレードすることも重要です。または、Active Directory のレプリケーションによって変更が展開全体に伝播できるときにアップグレードしてください。通常、アップグレードには最大24時間かかる場合があります。

アップグレードプロセスには以下が含まれます。

1. グループポリシーオブジェクト (GPO) を作成し、新しい .adm または .admx ファイルを新しい GPO に追加する

   \- または -

   この記事の後半で説明するように、既存の .adm または .admx ファイルをアップグレードする。
2. この記事の後半で説明するように、すべてのコンピューターで .msi ファイルをアップグレードする。
3. GPO を適用する。

既存の .adm ファイルをアップグレードするには

Profile Management の .adm ファイルの以前のバージョンがグループポリシーに存在する場合、次の手順を使用してアップグレードできます。アップグレードすると、以前のバージョンのすべてのポリシー設定が保持されます。

1. ドメインコントローラーで、次のいずれかを実行します。

   - 既存の .adm ファイルをインポートします。このファイルは、ダウンロードパッケージの GPO_Templates フォルダーにあります。
   - ダウンロードパッケージの GPO_Templates フォルダーから .admx ファイルを `C:\Windows\PolicyDefinitions` フォルダーにコピーし、.adml ファイルを `C:\Windows\PolicyDefinitions\<localized` フォルダー\> にコピーします。たとえば、英語のオペレーティングシステムでは、\<ローカライズされたフォルダー\> は en-US です。

2. Profile Management の構成に使用するコンピューターで、グループポリシーオブジェクトエディターを開きます。
3. グループポリシーオブジェクトエディターで、**管理用テンプレート**を右クリックし、**テンプレートの追加と削除**を選択します。
4. 既存の Profile Management .adm ファイル（例: ctxprofile5.4.1）を選択し、**削除**をクリックしてから**閉じる**をクリックします。管理用テンプレート\\Citrix フォルダーが削除されます。
5. **管理用テンプレート**を右クリックし、もう一度**テンプレートの追加と削除**を選択します。
6. **追加**をクリックし、新しいバージョンの .adm または .admx ファイルの場所（例: ctxprofile5.5.0）を参照して選択し、**閉じる**をクリックします。新しいファイルがインポートされますが、以前の設定は保持されます。

.msi ファイルをアップグレードするには

すべてのユーザーデバイスに同じバージョンの Profile Management をインストールし、その同じバージョンの .adm または .admx ファイルをすべてのドメインコントローラーの各グループポリシーオブジェクトに追加することをお勧めします。これにより、異なるユーザープロファイルストア構造（異なるバージョンからのもの）が存在する場合に発生する可能性のあるプロファイルデータの破損を防ぐことができます。

新しい設定を有効にする前に、すべてのコンピューターを最新バージョンの Profile Management にアップグレードすることをお勧めします。使用しているバージョンで新しい設定があるかどうかを確認するには、「Profile Management ポリシー」を参照してください。

1. アップグレードするコンピューターからすべてのユーザーがログオフしていることを確認します。
2. 各コンピューターで .msi ファイルを実行して、既存のバージョンに新しいバージョンの Profile Management をインストールします。詳細については、「インストールとセットアップ」を参照してください。

.ini ファイルをアップグレードするには

以前のバージョンの Profile Management で .ini ファイルを編集し、新しいバージョンにアップグレードする場合、ソフトウェアはファイルが編集されたことを検出し、デフォルトでは上書きしません。既存の .ini ファイル設定を保持し、新しいバージョンの新しい設定を使用するには、次のいずれかを実行する必要があります。

- 新しいバージョンの .ini ファイルから新しい設定を、既存の編集済み .ini ファイルに手動で追加します。
- 既存の編集済みバージョンの .ini ファイルのコピーを保存します。アップグレード中にファイルを強制的に上書きするには、OVERWRITEINIFILES=yes コマンドラインオプションを使用します。保存した設定をアップグレードされた .ini ファイルに追加します。例:

  ```
  msiexec /i <path to the MSI file\> /quiet [INSTALLDIR=<installation directory>] [OVERWRITEINIFILES=yes] [INSTALLPOLICYINIFILES=no]
  ```

注記

HDX™ を介して Profile Management ポリシーを構成するには、次の手順を実行する必要があります。

- Delivery Controller をアップグレードします。その理由は、HDX が XenApp および XenDesktop のレイアウト `image-full\x64\Citrix Desktop Delivery Controller` にある UserProfileManager_PowerShellSnapIn.msi ファイルから Profile Management ポリシー設定を読み取るためです。
- VDA をアップグレードして、最新バージョンの Profile Management を入手します。

その他のリソース

- Profile Management のポリシー
- インストールとセットアップ

構成

構成の優先順位

Profile Management は、グループポリシーと .ini ファイルを使用して構成できます。構成設定は次のように適用されます。

1. グループポリシーによって定義された設定が優先されます。ポリシー設定が**未構成**に設定されている場合にのみ、.ini ファイルが照会されます。

   注：

   - 組織単位内のサイトとドメインにグループポリシーオブジェクト（GPO）を選択的に適用する場合、さらに優先順位が適用されます。Group Policy: Filtering and Permissionを参照してください。ドメインおよびOUグループポリシーは、ローカルポリシーよりも優先されます。
   - Workspace Environment Management（WEM）を使用してProfile Managementを構成する場合、WEMはGPOと同じ優先順位レベルで設定を適用します。

2. ポリシーによって設定が定義されていない場合、Profile Management は .ini ファイルから設定を読み取ろうとします。
3. グループポリシーまたは .ini ファイルで設定が構成されていない場合、デフォルト設定が使用されます。

グループポリシーと .ini ファイルで同じ設定を異なる方法で構成したい場合があります。たとえば、グループポリシー設定でデフォルトのログ記録を有効にし、トラブルシューティングに使用するコンピューターで .ini ファイルを使用して詳細なログ記録を有効にする場合などです。

Profile Management .ini ファイルについて

デフォルト構成

Profile Management には、.ini ファイルに保存されたデフォルト構成が付属しています。Profile Management Service が認識できるように、このファイルはインストールフォルダーにある必要があります。デフォルト構成はほとんどの環境に適しています。すべてのグループのすべてのユーザーのプロファイルを処理します。

Windows XP または Windows Server 2003 で実行されている英語以外の Profile Management 展開がある場合、UPMPolicyDefaults_all.ini を使用して、.ini ファイルの適切な言語バージョンを作成する必要があります。このファイルのコピーを言語に合わせて名前を変更し（例：スペイン語の場合は UPMPolicyDefaults_all_es.ini）、フォルダー名をローカライズします。次のファイル名を使用します。

- フランス語のオペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_fr.ini
- ドイツ語のオペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_de.ini
- スペイン語のオペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_es.ini
- 日本語のオペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_ja.ini
- 簡体字中国語のオペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_zh-CN.ini

.iniファイルを変更する

.iniファイルにエントリを追加する場合は、変数と値が正しい形式であることを確認してください。

フラグ（オン/オフインジケータ）は次の形式である必要があります。

```
<variable>=<value>
```

値が1の場合は設定が有効になり、その他の値または値がない場合は無効になります。たとえば、次のエントリは`ServiceActive`設定を有効にします。

```
ServiceActive=1
```

次のいずれかのエントリは、設定を無効にします。

```
ServiceActive=ON

ServiceActive=OFF

ServiceActive=TRUE

ServiceActive=FALSE

ServiceActive=
```

リストエントリは次の形式である必要があります。

```
<value>=
```

次のエントリは、同期するMicrosoft Officeファイルを指定します。

```
[SyncFileList]

AppData\Local\Microsoft\Office\*.OfficeUI
```

グループポリシー設定の変更は、ターゲットコンピューターで手動または自動のポリシー更新が行われたときに有効になります。.iniファイルの変更は、推奨されるコマンド **gpupdate /force** を発行したときに有効になります。または、ターゲットコンピューターでProfile Management Serviceを再起動したときに変更が有効になります。

プロファイル管理を有効にする

デフォルトでは、展開を容易にするため、プロファイル管理はログオンまたはログオフを処理しません。プロファイル管理は、他のすべてのセットアップタスクを実行し、Citrix®ユーザープロファイルが環境でどのように動作するかをテストした後でのみ有効にしてください。

グループポリシーを使用してプロファイル管理を有効にするには、次の手順に従います。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理**で、**プロファイル管理を有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

UPMPolicyDefaults_all.ini ファイルを使用してプロファイル管理を有効にすることもできます。これを行うには、次の手順に従います。

1. プロファイル管理がインストールされているマシンで、`C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager\UPMPolicyDefaults_all.ini` に移動します。
2. メモ帳を使用してUPMPolicyDefaults_all.iniを開きます。
3. 設定を編集して、ご自身の環境に合わせてください。

この設定がグループポリシーで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がグループポリシーまたは.iniファイルのいずれでも構成されていない場合、プロファイル管理はWindowsユーザープロファイルを一切処理しません。

プロファイル管理は、以下を使用して有効にすることもできます。

- Citrix Studio。Citrix Studioを使用してプロファイル管理を有効にする手順については、Knowledge Centerの記事 CTX222893 を参照してください。
- Workspace Environment Management (WEM)。WEMを使用してプロファイル管理を有効にする手順については、Knowledge Centerの記事 CTX229258 を参照してください。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

このビデオを見て、詳細を確認してください:



ユーザー ストアへのパスを指定する

ユーザー ストアへのパスを指定する前に、 Profile Management architectureを参照し、展開に関連する場合は、次の影響を理解してください。

- 多言語プロファイルの保存
- インクルージョンとエクスクルージョンの組み合わせ

1. Profile Managementで、ポリシーをダブルクリックします。
2. を選択し、ユーザー設定（レジストリの変更と同期されたファイル）が保存されるディレクトリ（ユーザー ストア）へのパスを入力します。

パスは次のいずれかです。

- **相対パス**。このパスは、ホームディレクトリに対する相対パスである必要があります。ホームディレクトリは通常、Active Directory (AD) のユーザーの #homeDirectory# 属性として構成されます。
- **UNCパス**。このパスは通常、サーバー共有またはDFS名前空間を指定します。
- **無効または未構成**。この場合、`\#homeDirectory#\Windows`の値が想定されます。

この設定には、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数（例: %ProfVer%）。システム環境変数には通常、追加のセットアップが必要です。詳しくは、(/ja-jp/profile-management/current-release/plan/administer.html)を参照してください。
- ハッシュで囲まれたADユーザーオブジェクトの属性（例: #sAMAccountName#）。
- Profile Management変数。詳しくは、(/ja-jp/profile-management/current-release/policies/settings.html)を参照してください。

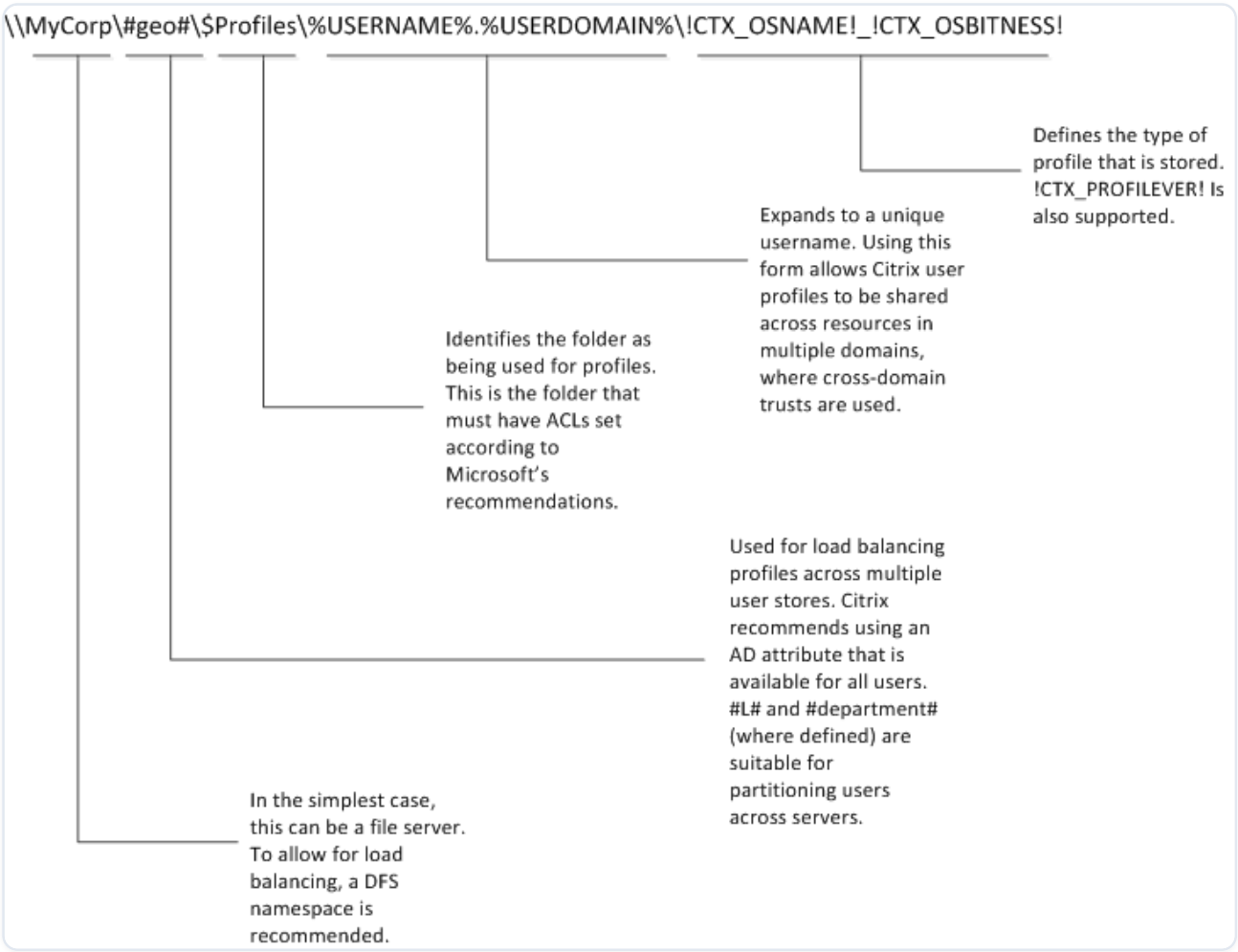
`%username%`と`%userdomain%`を除き、ユーザー環境変数は使用できません。場所やユーザーなどの組織変数を定義するために、カスタムAD属性を作成することもできます。属性では大文字と小文字が区別されます。

例:

- `\\server\share#sAMAccountName#`は、ユーザー設定をUNCパス`\\server\share\JohnSmith`に保存します（現在のユーザーに対して#sAMAccountName#がJohnSmithに解決される場合）。
- `\\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`は`\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64`に展開される場合があります。

重要: どの属性または変数を使用する場合でも、この設定がNTUSER.DATを含むフォルダーの1つ上のフォルダーに展開されることを確認してください。たとえば、このファイルが`\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64\UPM_Profile`に含まれている場合、ユーザー ストアへのパスを`\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64`に設定します（`\UPM_Profile`サブフォルダーではありません）。

この図は、AD属性、環境変数、およびProfile Management変数を組み込んだユーザー ストアへの一般的なパスのコンポーネントを示しています。



ユーザー ストアへのパスを指定する際に変数を使用する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

- 複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する
- OU内およびOU間でプロファイルを管理する
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

ユーザーストアへのパスが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。

ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、ホームドライブのWindowsディレクトリが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

自動構成を使用する

自動構成は、Profile Management の展開を簡素化するのに役立ちます。Citrix 環境に基づいて推奨されるポリシー設定を自動的に適用し、 手動での構成を減らし、パフォーマンスを向上させます。

仕組み

Profile Management は、実行時に環境を評価し、それに応じてポリシー設定を調整します。次のような要素を確認します。

- Windows OS のバージョン
- Citrix Virtual Desktops およびパーソナル vDisk の有無
- インストールされているアプリケーション（例：Microsoft 365 Apps）
- 既存の Citrix Profile Management (CPM) ポリシー設定

自動構成は、ポリシーを次の2つの方法で調整します。

- カスタマイズが保持されるポリシー
- カスタマイズが上書きされる可能性があるポリシー

カスタマイズが保持されるポリシー

Profile Management は、以下のポリシーが **未構成** に設定されている場合にのみ調整します。カスタム設定は変更されません。

- アクティブライトバック
- 常にキャッシュする
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する
- キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延
- プロファイルストリーミング

カスタマイズが上書きされる可能性のあるポリシー

プロファイル管理は、スタートメニューローミングやMicrosoft 365資格情報ローミングなどの機能との互換性を確保するために、以下のポリシーを調整する場合があります。

- ミラーリングするフォルダー
- 除外リスト - ディレクトリ、除外リスト - ファイル
- 同期するディレクトリ、同期するファイル

- プロファイルコンテナから除外するフォルダー、プロファイルコンテナに含めるフォルダー
- 除外リスト (レジストリ)、デフォルト除外リスト (レジストリ)
- プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ

表: 自動構成によって行われる調整

条件	機能サポート	構成の変更
ファイルベースのプロファイルソリューションまたは**コンテナベースのプロファイルソリューション**で**プロファイルコンテナのローカルキャッシュ**が有効になっている場合	スタートメニューのローミング。詳細については、スタートメニューのローミングのベストプラクティスを参照してください。自動構成を無効にすると、スタートメニューに問題が発生する可能性があります。	• `AppData\Local\Packages` と `AppData\Local\Microsoft\Windows\Caches` を**ミラーするフォルダー**と**同期するディレクトリ**に追加します。これらのパスを**除外リスト - ディレクトリ**から削除します。
		• `AppData\Local\Microsoft\Windows\UsrClass.Dat*` を**同期するファイル**に追加します。このパスを**除外リスト - ファイル**から削除します。
	OneDrive の同期を防止します。詳細については、Profile	`OneDrive` と `OneDrive -*` を**除**

条件	機能サポート	構成の変更
	Manager および仮想デスクトップでの Microsoft OneDrive の使用に関する制限事項を参照してください。	**除外リスト - ディレクトリ**に追加します。
	アイテムまたはその親ディレクトリが除外されている場合でも、ミラーフォルダーが常に有効になるようにします。	**ミラーするフォルダー**内のすべてのアイテムを**同期するディレクトリ**に追加します。
前述と同じプロファイルソリューションで、`AppData\Local\Microsoft\OneNote` とそのサブパスが**除外リスト - ディレクトリ**に含まれていない場合	OneNote キャッシュフォルダーの同期	`AppData\Local\Microsoft\OneNote` を**ミラーするフォルダー**と**同期するディレクトリ**に追加します。
前述のプロファイルソリューションと同じで、Office 365がインストールされている	Office 365の資格情報ローミング。自動構成を無効にすると、Office 365の資格情報ローミングで問題が発生する可能性があります。（新しいユーザーセッションを開始する際に、Office 365の資格情報を再入力する必要がある場合があります。）	以下のパスを**ミラーするフォルダー**と**同期するディレクトリ**に追加し、これらのパスを**除外リスト - ディレクトリ**から削除します。 • `AppData\Local\Packages` • `AppData\Local\Microsoft\Windows\Caches`

条件	機能サポート	構成の変更
		• `AppData\Local\Microsoft\Credentials` • `AppData\Local\Microsoft\IdentityCache` • `AppData\Local\Microsoft\OneAuth` • `AppData\Local\Microsoft\TokenBroker` • `AppData\Local\Microsoft\Vault` • `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies` • `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache` • `AppData\Roaming\Microsoft\Credentials` • `AppData\Roaming\Microsoft\Crypto` • `AppData\Roaming\Microsoft\Protect`

条件	機能サポート	構成の変更	
		• `AppData\Roaming\Microsoft\SystemCertificates` • `AppData\Roaming\Microsoft\Vault` • `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`	
「**プロファイルコンテナのローカルキャッシュ**」が有効になっていないコンテナベースのプロファイルソリューション	プロファイルコンテナ全体が有効になっている場合にAutoCADが開けない問題の回避策	`AppData\Local\Temp`、`AppData\Roaming\Autodesk\AutoCAD 2025*`、および `AppData\Local\Autodesk\AutoCAD 2025*`を「**プロファイルコンテナから除外するフォルダー**」に追加します。 **注:** `*`は、「**BindLinkリダイレクトを有効にする**」が無効になっている場合にのみこの項目が追加されることを示します。	
App-Vが無効になっている	App-Vレジストリ統合を無効にする	`Software\Microsoft\AppV\Client\Integration`と `Software\Microsoft\AppV\Client\Publishing`を「**除外**	

条件	機能サポート	構成の変更
		リスト（レジストリ）」および「**デフォルトの除外リスト（レジストリ）**」から削除します。
OneDriveコンテナが有効になっている	OneDrive SSOローミング。自動構成を無効にすると、**OneDriveコンテナ**のSSOに問題が発生する可能性があります。	`AppData\Local\Packages\Microsoft.AAD.BrokerPlugin_cw5n1h2txyewy`を「**ミラーリングするフォルダー**」および「**同期するディレクトリ**」に追加します。このパスを「**除外リスト**」から削除します。
Desktop OS で有効になっている**フォルダーのプロファイルストリーミング**	フォルダーリダイレクトの移行の回避策。たとえば、フォルダーリダイレクトの AppData (Roaming) が新しく有効になった場合、一部のファイルが新しい場所に正しく移動せず、エクスプローラーのクイックアクセスで問題が発生する可能性があります。	**プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**に`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Recent`と`AppData\Roaming\Microsoft\Internet Explorer\Quick Launch\User Pinned\TaskBar`を追加します。

自動構成の管理

自動構成はデフォルトで*有効*になっています。トラブルシューティングを行う場合や、高度なカスタマイズを適用する場合にのみ無効にしてください。

自動構成を無効にするには、次の手順に従います。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。

2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**に移動します。
3. **自動構成を無効にする**を開きます。
4. **有効**を選択します。
5. 変更を保存するには、**OK**を選択します。
6. 影響を受けるマシンで `gpupdate /force` を実行します。
7. 変更を有効にするには、ログオフしてから再度ログオンします。

トラブルシューティング

自動構成に関連する問題のトラブルシューティングや、Profile Management の問題のトラブルシューティングが必要な場合は、自動構成を無効にして、必要な設定を手動で構成してください。

1. 自動構成の管理の手順を使用して、自動構成を無効にします。
2. 前の表のガイダンスに基づいて、ポリシー設定を更新します。
3. 影響を受けるマシンで`gpupdate /force`を実行します。
4. 変更を適用するために、ユーザーにログオフして再度ログオンさせます。

ファイルベースのプロファイルソリューションの項目を含めるおよび除外する

> **注:**
>
> この記事では、ファイルベースのプロファイルソリューションに焦点を当てています。コンテナベースのプロファイルソリューションの同等のポリシーの詳細については、「プロファイルコンテナのセットアップ」を参照してください。

> この記事では、Profile Management がファイルベースのプロファイルソリューションのユーザープロファイルから項目を含めたり除外したりするために使用するプロセスについて説明します。ユーザーのログオンおよびログオフエクスペリエンスを向上させるために、デフォルトの包含リストまたは除外リストを変更することを決定した場合は、このプロセスを理解していることを確認してください。この変更が必要かどうかを判断するには、「使用中のアプリケーション」を参照してください。

たとえば、Microsoft Word は高度にカスタマイズ可能で頻繁に使用されるアプリケーションであり、どのようにアクセスされてもローミングユーザーに同じエクスペリエンスを提供する必要があるため、含めることができます。逆に、一部のグループではめったに使用されないエンタープライズアプリケーションは、ログオンおよびログオフのたびにプロファイルデータをダウンロードする必要がないため、除外することができます。

デフォルトでは、ローカルプロファイル内のすべてのファイルとフォルダーはユーザーストアと同期されます。同期したくないファイルとフォルダーは、除外リストに追加することで指定できます。フォルダーを除外した場合でも、同期したいサブフォルダーは包含リストに追加することで指定できます。

含めることができる項目と除外できる項目:

- プロファイル内に含まれるファイルとフォルダー。
- 個人設定を保存するHKCUハイブのレジストリエントリ。HKLMハイブのエントリはデフォルトでは処理されず、処理するように構成することもできません。

> **注:**
>
> Profile Management バージョン 2407 以降、レジストリの除外および包含ポリシーは、*ファイルベース*と*コンテナベース*の両方のプロファイルソリューションに適用されます。

項目を含めるおよび除外する前に

ユーザープロファイルの内容を調整する前に、組み込みのWindowsパフォーマンス監視（Perfmon）カウンターのセットを使用することを検討してください。これらはプロファイルの動作に関する洞察を提供します。利用可能なカウンターには、プロファイルサイズとローカルコンピューターでCitrix®ユーザープロファイルを作成するのにかかる時間の測定値が含まれます。

プロファイルをローカルにキャッシュするかどうか（Profile Managementを実行するコンピューター上）を決定する必要がある場合があります。この決定に影響する要因には、展開内のCitrix製品、ローカルコンピューター上の利用可能なスペース、および展開内のユーザー数があります。

ファイルとフォルダー

含まれるフォルダー名と除外されるフォルダー名はすべて言語固有です。ただし、ユーザー ストア内のフォルダー名は、オペレーティング システムの言語に依存しない形式です。

オペレーティング システムによってローカルとして扱われるディスク上のファイルまたはフォルダーを同期できます。ネットワーク マップされたドライブ上のファイルまたはフォルダーは同期できません。

レジストリ

既存のユーザーの場合、HKCU ハイブ全体がユーザー ストアにコピーされます。新規ユーザーの場合、Microsoft のローカル、ローミング、デフォルト、またはテンプレート プロファイルのハイブがコピーされます。ユーザー ストアに変更が加えられると、ハイブにインクルージョンが追加され、エクスクルージョンが削除されます。

不要なキーを含むテンプレート プロファイルがある場合は、Sepago の Profile Nurse などのツールを使用して、ユーザー ストアからそれらを削除します。

除外について

除外はログオン時ではなくログオフ時に処理されます。これらはユーザー ストアからデータを削除するのではなく、新しいデータが書き込まれるのを防ぎます。

デフォルトの除外を除けば、通常、Profile Management を最初に展開するときに項目を除外する必要はありません。その後、アプリケーションのパフォーマンスを追跡し、ユーザーからのフィードバックを収集するにつれて、複数のアプリケーションの設定が競合する場合や、不要な設定の収集によりユーザーの NTUSER.DAT ファイルが大きくなった場合に、項目を除外する必要があるかもしれません。

リダイレクトされたフォルダーを除外として追加しないでください。

重要: Citrix は、`AppData\LocalLow` フォルダーを同期から除外することを推奨します。デフォルトの構成では、除外リストにすでに `AppData\LocalLow` が含まれています。さらに、`AppData\Local` フォルダーから一部のコンテンツを除外することも選択できます。`AppData\LocalLow` または `AppData\Local` を除外しない場合、大量のデータがネットワーク経由で転送され、ユーザーはログオンの遅延を経験する可能性があります。これらのフォルダーは、標準の Windows ローミング プロファイルでは同期されません。

包含と除外のルール

Profile Management がファイル、フォルダー、およびレジストリ キーを包含および除外する際に、次のルールが使用されます。

1. すべての項目はデフォルトで含まれます
2. 同じパスが包含と除外の両方として構成されている場合、包含が優先されます

3. 同じフォルダー内の除外よりも包含が優先されます
4. 包含は、フォルダ階層の上位にある除外よりも優先されます。
5. 除外は、フォルダ階層の上位にある包含よりも優先されます。

これらのルールにより、合理的で直感的な動作が実現されます。すべての項目はデフォルトで含まれます。その出発点から、最上位の例外を除外として構成し、次に、最上位の例外に対するより深い例外を包含として構成し、以降同様に設定できます。

既定の包含と除外

> **注:**
>
> 既定の包含と除外は、ファイルベースのプロファイルソリューションにのみ適用されます。

> このトピックでは、Profile Managementが処理に含める既定の項目と、処理から除外する既定の項目について説明します。展開内のアプリケーションによっては、追加の（既定以外の）項目が必要になる場合があります。含めるまたは除外する追加の項目を決定するには、「使用中のアプリケーション」を参照してください。

重要: .iniファイルではなくグループポリシーを使用する場合（または、.iniファイルでのテストが成功した後でグループポリシー展開を展開する場合）、インストールされている.iniファイルとは異なり、.admまたは.admxファイルでは既定で項目が包含または除外されません。既定の項目は手動でファイルに追加する必要があります。これらの項目は、このトピックの表に示されています。以下に注意してください。

- .iniファイルと.admまたは.admxファイルの設定名をマッピングし、Profile Management変数（例: \!ctx_internetcache\!）がどのように展開されるかを理解するには、「Profile Managementポリシー」を使用してください。
- .iniファイルから包含と除外を貼り付ける際は、各項目の末尾にある = (等号) を削除してください。
- 包含と除外の先頭にバックスラッシュを追加しないでください。

レジストリ包含リスト

デフォルト値
空

レジストリ除外リスト

デフォルト値
`Software\Microsoft\AppV\Client\Integration=`
`Software\Microsoft\AppV\Client\Publishing=`
`Software\Microsoft\Speech_OneCore=`

注: Microsoft App-V を使用している場合、この除外は正しくなく、以下のドキュメントに記載されているように、異なる除外が必要です。 Profile ManagementとApp-V。

フォルダー包含リスト

デフォルト値
空

プロファイル内のすべてのフォルダーは既定で含まれます。

フォルダー除外リスト

この表のフォルダーは同期から除外されます。

デフォルト値
!ctx_internetcache!=
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\Cache=`
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\Cached Theme Images=`
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIcons=`
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIconsOld=`
`\\!ctx_localappdata!\GroupPolicy=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\AppV=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Messenger=`

デフォルト値
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Office\15.0\Lync\Tracing=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\OneNote=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Terminal Server Client=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\UEV=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows Live=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows Live Contacts=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Application Shortcuts=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Burn=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\CD Burning=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Notifications=`
`\\!ctx_localappdata!\Packages=`
`\\!ctx_localappdata!\Sun=`
`\\!ctx_localappdata!\Windows Live=`
`\\!ctx_localsettings!\Temp=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Microsoft\AppV\Client\Catalog=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\cache=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\log=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\tmp=`
$Recycle.Bin=
`AppData\LocalLow=`

デフォルト値
トレース=

ファイルの包含リスト

デフォルト値
<空>

プロファイル内のすべてのファイルは、デフォルトで含まれます。

ファイルの除外リスト

デフォルト値
<空>

プロファイル内のファイルは、デフォルトでは除外されません。

項目の包含と除外

> **注:**
>
> この記事では、ファイルベースのプロファイルソリューションにおける包含および除外ポリシーについて説明します。コンテナベースのプロファイルソリューションの同等のポリシーについて詳しくは、「プロファイルコンテナのセットアップ」を参照してください。

> 前提条件として、包含と除外の仕組みを理解していることを確認してください。詳しくは、「項目の包含と除外」を参照してください。デフォルトで含まれる項目と除外される項目については、「デフォルトの包含と除外」を参照してください。

ミラーリングするフォルダーポリシーと除外ポリシーの優先順位は、Citrix Profile Managementのバージョンによって異なります。これらのポリシーを適切に構成することで、トランザクションフォルダーの正確な同期が保証され、不要なデータ転送が防止されます。

> **注:**

> Profile Managementバージョン2407以降、レジストリの除外および包含ポリシーは、*ファイルベース*と*コンテナベース*の両方のプロファイルソリューションに適用されます。

項目を除外する

プロファイル同期からファイル、フォルダー、またはレジストリ項目を除外するには、次の手順に従います。

1. **Profile Management** \> **Registry**で、**Exclusion list**ポリシーをクリックします。
2. **Enabled**を選択します。
3. **Show**をクリックし、ログオフ時にProfile Managementで同期させたくない`HKCU`ハイブ内のレジストリキーを追加します。例：`Software\Policies`。
4. **Profile Management** \> **File system**で、**Exclusion list - directories**ポリシーをダブルクリックします。
5. **Enabled**を選択します。
6. **Show**をクリックし、Profile Managementで同期させたくないフォルダーを追加します。項目を除外するときは、複数のエントリを区切るにはEnterキーを使用します。

   以下の点に注意してください。

   - ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) を基準とした相対パスを使用してフォルダーを指定し、パスの先頭のバックスラッシュは省略してください。
   - プロファイルの場所を特定するには変数`%USERPROFILE%`を使用しますが、このポリシーに変数を直接入力しないでください。
   - Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

     例：

     - `Desktop`。`Desktop`フォルダーは同期されません。
     - `MyApp\tmp`。`%USERPROFILE%\MyApp\tmp`フォルダーは同期されません。
7. **Profile Management** \> **ファイルシステム**の下で、**除外リスト - ファイル**ポリシーをダブルクリックします。
8. **有効**を選択します。
9. **表示**をクリックし、Profile Managementで同期したくないファイルを追加します。項目を除外する際に複数のエントリを区切るには、Enterキーを使用します。

以下の点に注意してください。

- ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) を基準とした相対パスでファイル名を指定します。このポリシーに変数を (%USERPROFILE%) 直接入力しないでください。
- ファイル名でのワイルドカードはサポートされており、再帰的に適用されます。Profile Management 7.15以降、垂直バー (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限できます。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

  例：

  - `Desktop\Desktop.ini`。`Desktop`フォルダー内の`Desktop.ini`を無視します。
  - `AppData*.tmp`。`AppData`フォルダーとそのサブフォルダーにある、`.tmp`拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
  - `AppData*.tmp|`。`AppData`フォルダー内にある、`.tmp`拡張子を持つすべてのファイルのみを無視します。
  - `Downloads*\a.txt`。`Downloads`フォルダーの直下のサブフォルダーにある`a.txt`を無視します。

除外リストが無効になっている場合、レジストリキーは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、レジストリキーは除外されません。

除外リスト - ディレクトリが無効になっている場合、フォルダーは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

除外リスト - ファイルが無効になっている場合、ファイルは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

項目を含める

除外されたファイル、フォルダー、またはレジストリ項目のサブフォルダーをプロファイル同期に含めるには、次の手順に従います。

ヒント:

特定のトップレベルフォルダーを含めることができます。共同作業環境では、この手順により、重要なフォルダーを他の管理者に通知できるという利点があります。

1. **Profile Management** \> **Registry**で、**包含リスト**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ログオフ時にProfile Managementで処理させたい `HKEY\_CURRENT\_USER` ハイブ内のプロファイル関連のレジストリキーを追加します。例: `Software\Adobe`。項目を含める際に複数のエントリを区切るには、Enterキーを使用します。
4. **Profile Management** \> **ファイルシステム** \> **同期** で、**同期するディレクトリ** ポリシーをダブルクリックします。
5. **有効** を選択します。
6. **表示** をクリックし、除外されたフォルダー内にあるが、Profile Managementで同期させたいフォルダーを追加します。例: `Desktop\exclude\include` は、フォルダー `Desktop\exclude` が同期されない場合でも、`include` サブフォルダーが同期されるようにします。項目を含める場合は、Enterキーを使用して複数のエントリを区切ります。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイルに対する相対パスを使用してフォルダーを指定します。
   - Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。
7. **Profile Management** \> **ファイルシステム** \> **同期** で、**同期するファイル** ポリシーをダブルクリックします。
8. **有効** を選択します。
9. **表示** をクリックし、除外されたフォルダー内にあるが、Profile Managementで同期させたいファイルを追加します。項目を含める場合は、Enterキーを使用して複数のエントリを区切ります。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイルに対する相対パスでファイルを指定します。

- ファイル名でのワイルドカードはサポートされており、再帰的に適用されます。ただし、ワイルドカードをネストすることはできません。Profile Management 7.15以降、垂直バー (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限し、サブフォルダーに適用されないようにすることができます。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

  例：

  - `AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat`。デフォルト構成で除外されているフォルダー内のファイルを指定します。
  - `AppData\Local\MyApp*.cfg`。`AppData\Local\MyApp`フォルダーとそのサブフォルダー内の、`.cfg`拡張子を持つすべてのファイルを指定します。
  - `Downloads*\a.txt`。`Downloads`フォルダーの直下のサブフォルダー内の`a.txt`を指定します。
- Profile Management は、インストールされているシステムとユーザー ストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。このリストにファイルを追加して、ユーザープロファイルに含める必要はありません。

ここで**インクルージョンリスト**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、HKEY_CURRENT_USERハイブ全体が処理されます。

ここで**同期するディレクトリ**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないフォルダーのみが同期されます。この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

ここで**同期するファイル**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないファイルのみが同期されます。この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

ワイルドカードを使用する

ファイルやフォルダーを参照するポリシーでは、疑問符 (`?`) やアスタリスク (`*`) などのDOS形式のワイルドカード文字を使用できます。例としては、ファイルの包含リストと除外リスト、フォルダーの包含リストと除外リストなどがあります。疑問符 (`?`) は1文字に一致します。アスタリスク (`*`) は0文字以上の文字に一致します。

Profile Management 7.15以降では、垂直バー (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限できます。

次の点に注意してください。

- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に機能しますが、フォルダー名内のワイルドカードは機能しません。ワイルドカードを使用する場合は、有効なパスを指定してください。
- ワイルドカードをサポートするポリシーは、環境変数やActive Directory属性の使用など、他の種類の変数をサポートしません。レジストリエントリを参照するポリシーではワイルドカードを使用できません。

例

ワイルドカード `<path name>\h*.txt` は house.txt、h.txt、house.txt.txt に一致しますが、ah.txt には一致しません。

ワイルドカード `<path name>\a?c.txt` は abc.txt に一致しますが、ac.txt には一致しません。

ワイルドカード `<path name>\a?c*d.txt` は abcd.txt と abccd.txt に一致しますが、acd.txt には一致しません。

プロファイルのルートフォルダーでポリシーを構成する:

- `*.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内の拡張子 .txt を持つすべてのファイルを指定します。
- `*h.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `h*.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `a?c.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `*.txt|` は、ルートフォルダー内の .txt 拡張子を持つファイルのみをすべて指定します。

プロファイル以外のルートフォルダーでのポリシーの構成:

- `AppData*.txt` は、AppData フォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `AppData*h.txt` は、AppData フォルダーとそのサブフォルダー内でこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。

ログオン除外チェックを有効にする

「**ログオン除外チェックを有効にする**」機能は、ユーザーがログオンしたときに、ユーザー ストア内のプロファイルに除外ファイルとフォルダーが含まれている場合に、Profile Managementが何を行うかを制御します。デフォルトでは、この機能は無効になっています。

除外ファイルとフォルダーとは、それぞれ**除外リスト - ファイル**ポリシーと**除外リスト - ディレクトリ**ポリシーに追加するファイルとフォルダーを指します。ユーザーがログオフするとき、Profile Managementは除外ファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期しません。ただし、除外リストに追加する前に、除外ファイルとフォルダーがユーザー ストアに存在する場合があります。「**ログオン除外チェックを有効にする**」ポリシーを使用すると、ユーザーがログオンしたときに、Profile Managementにそれらのファイルとフォルダーを無視させるか、ユーザー ストアから削除させることができます。

この機能を使用するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルシステム**で、**ログオン除外チェック**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. ドロップダウンメニューからオプションを選択します。デフォルトでは、**除外ファイルまたはフォルダーを削除**が選択されています。
5. **OK**をクリックします。

この機能には、次の3つのオプションがあります。

- **除外ファイルまたはフォルダーを削除**。ユーザーがログオンしたときに、ユーザー ストアから除外ファイルとフォルダーを削除します。
- **除外ファイルまたはフォルダーを無視**。ユーザーがログオンしたときに、ユーザー ストアから除外ファイルとフォルダーを無視します。
- **除外ファイルまたはフォルダーを同期**。ユーザーがログオンしたときに、ユーザー ストアから除外ファイルとフォルダーをローカルプロファイルに同期します。

> **警告:**
>
> **除外ファイルまたはフォルダーを削除**を選択した場合、Profile Managementはユーザー ストアから除外ファイルとフォルダーを完全に削除します。除外ファイルとフォルダーを再度含めた場合でも、ログオン時にProfile Managementはキャッシュされたローカルプロファイルからそれらを削除します。

> 変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。ログオフして再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

.iniファイルを使用してログオン除外チェックを有効にするには、次の手順を実行します。

1. Profile Management の .ini ファイルを開きます。
2. セクションにEnableLogonExclusionCheck項目を追加します。
3. EnableLogonExclusionCheck項目の値を次のように設定します。
    - ユーザーストアから除外リストで指定された除外ファイルとフォルダーを無視するには、値を1に設定します。例: EnableLogonExclusionCheck=1。
    - ユーザーストアから除外リストで指定された除外ファイルとフォルダーを削除するには、値を2に設定します。例: EnableLogonExclusionCheck=2。
    - チェックを無効にするには、値を0に設定します。例: EnableLogonExclusionCheck=0。
4. Profile Management の .ini ファイルを保存して閉じます。
5. 変更を有効にするには、`gpupdate /force`コマンドを実行します。

構成の優先順位:

1. この設定がグループポリシーオブジェクト (GPO) で構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定がGPOにも.iniファイルにも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

トランザクションフォルダーの管理

トランザクションフォルダーとは、相互依存するファイルを含むフォルダーのことで、あるファイルが他のファイルを参照します。「**ミラーするフォルダー**」ポリシーは、プロファイル同期中

にトランザクションフォルダーの整合性を確保します。このポリシーを使用すると、Profile Management はユーザー ストアとローカルユーザープロファイルの間でトランザクションフォルダー全体をミラーリングします。

「**フォルダーミラーリングの高速化**」ポリシーは、Profile Management 2106以降で利用可能です。

この記事では、「**ミラーするフォルダー**」ポリシーを使用してトランザクションフォルダーを管理するプロセスについて説明します。また、このポリシーを使用してInternet ExplorerのCookieフォルダーを管理する方法の例も示します。

フォルダーミラーリングの仕組み

通常、Profile Management がユーザー ストアとローカルプロファイル間でユーザープロファイルを同期する場合、タイムスタンプを比較して更新されたファイルのみを同期します。しかし、トランザクションフォルダーでは、その中のファイルは関連付けられており、整合性の問題を避けるためにProfile Managementはフォルダー全体を同期する必要があります。トランザクションフォルダーの例としては、トランザクションログファイルとそれに対応するデータベースファイルを含むフォルダーがあります。異なるセッションからのトランザクションログファイルとデータベースファイルを混在させると、トランザクションの整合性の問題を引き起こす可能性があります。

トランザクションフォルダーを正しく同期するために、Profile Management は「**ミラーするフォルダー**」ポリシーを提供します。トランザクションフォルダーをターゲットに同期する際、Profile Management は以下の手順を使用してフォルダーをターゲットにミラーリングします。

1. フォルダー内のすべてのコンテンツを、タイムスタンプを無視してターゲットにコピーします。
2. ターゲット内の追加コンテンツをすべて削除します。

> **注意:**
>
> トランザクションフォルダーをミラーリングするということは、「最後の書き込みが優先される」ことを意味します。複数のセッションで変更されたファイルは、最新の更新によって上書きされ、プロファイルの変更が失われる可能性があります。

考慮事項

Windows環境では、プロファイル内の多くのアプリケーションフォルダーがトランザクションフォルダーです。プロファイル同期を最適化するには、「**ミラーするフォルダー**」ポリシーを包含および除外ポリシーと組み合わせて使用します。

「**ミラーするフォルダー**」ポリシーと除外ポリシーの優先順位は、Citrix Profile Managementのバージョンによって異なります。これらのポリシーを適切に構成することで、トランザクションフォルダーの正確な同期が保証され、不要なデータ転送が防止されます。

ミラーするフォルダーの指定

「**ミラーするフォルダー**」ポリシーを有効にし、ミラーするフォルダーを指定します。

Google Chromeを例にとってみましょう。`AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default` 内のブックマーク関連ファイルとサブフォルダーは相互に依存しており、プロファイル同期中に全体として処理される必要があります。この目標を達成するには、このフォルダーを「**ミラーするフォルダー**」ポリシーに追加する必要があります。

ミラーするフォルダーからファイルやサブフォルダーを除外することもできます。前の例では、`AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default` フォルダーにはブックマークとは無関係のファイルやサブフォルダーも含まれています。「**除外リスト – ディレクトリ**」および「**除外リスト – ファイル**」ポリシーを使用して、それらを除外できます。

詳細な手順は次のとおりです。

1. **Profile Management \> File system \> Synchronization** に移動し、「**ミラーするフォルダー**」ポリシーをダブルクリックします。
2. 「**有効**」を選択します。
3. 「**ミラーするフォルダーのリスト**」フィールドに、ユーザー ストアへの相対パスの形式でミラーするフォルダーのリストを入力します。フォルダーを区切るには、`Enter` と入力します。

> **注：**
>
> このポリシーは再帰的に機能します。サブフォルダーをリストに追加しないでください。

> たとえば、`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies` を追加した場合、`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies\Low` は追加しないでください。

4. 「**OK**」をクリックします。
5. ミラーリングプロセスから、ミラーされたフォルダー内の特定のファイルやサブフォルダーを除外するには、次の手順に従います。
   a. **Profile Management \> File system** に移動し、「**除外リスト – ディレクトリ**」ポリシーまたは「**除外リスト – ファイル**」ポリシーをダブルクリックします。
   b. 除外するファイルとサブフォルダーを指定します。

構成の優先順位：

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーはミラーリングされません。

フォルダーミラーリングの高速化

Profile Management 2106以降、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを有効にすることで、フォルダーミラーリングを高速化できます。

このポリシーを有効にすると、Profile Managementはミラーリングされたフォルダーを VHDXベースの仮想ディスクに保存します。Profile Managementはログオン時に仮想ディスクをアタッチし、ログオフ時にデタッチするため、ユーザープロファイルストアとローカルプロファイルの間でフォルダーをコピーする必要がなくなります。

注：

- この機能は、ミラーリングされたフォルダーにVHDXベースのディスクコンテナを使用します。そのため、ユーザープロファイルストアでのストレージ消費量は、従来のフォルダーミラーリングよりも高くなる可能性があります。
- Profile Management 2507から2511では、**フォルダーミラーリングの高速化**はデフォルトで**有効**になっています。
- Profile Management 2507 CU2および2603以降、**フォルダーミラーリングの高速化**はデフォルトで**無効**になっています。

> - この機能が無効になっている場合、フォルダーの内容全体がマウントされるのではなくコピーされる必要があるため、ログオンとログオフに時間がかかる場合があります。

> このポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**で、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **OK**をクリックします。

構成の優先順位：

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ポリシーが有効になります。

例: Internet ExplorerのCookieフォルダーの管理

Internet ExplorerのCookieフォルダーを管理する場合、プロファイルの肥大化を抑えながら、トランザクションの整合性を確保する必要があります。この目標を達成するには、**ミラーリングするフォルダー**ポリシーと**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーを使用します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. ミラーリングするCookieフォルダーを指定する。
2. プロファイルの肥大化の問題が発生した場合、ユーザーログオフ時に古いCookieの削除を有効にする。

変更を有効にするには、このMicrosoftの記事に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

概要

このセクションでは、2つのポリシーがCookieフォルダーの管理にどのように役立つかを説明します。

Internet Explorer 8のCookieフォルダーを例にとってみましょう。このフォルダーには、index.datとCookieファイルが含まれています。index.datは、ユーザーがインターネットを閲覧する際にCookieファイルを参照します。たとえば、ユーザーがそれぞれ異なるデバイスから2つのInternet

Explorerセッションを持ち、各セッションで異なるサイトにアクセスするとします。各サイトからのCookieは、対応するデバイスに追加されます。

トランザクションの整合性を確保する方法

前述の例で、ユーザーが両方のセッションからログオフした場合に何が起こるかを見てみましょう。セッションからのCookieはマージされ、index.datファイルは最後にログオフしたセッションのものと同期されます。その結果、Cookieファイルとindex.dat内のそれらのCookieファイルへの参照が一致しなくなります。

ミラーリングするフォルダーポリシーがこの問題を解決します。このポリシーが設定されている場合、Profile Managementはプロファイル同期中にフォルダー全体をターゲットにコピーします。このポリシーの動作の詳細については、トランザクションフォルダーの管理を参照してください。

プロファイルの肥大化を回避する方法

新しいセッションでブラウジングすると、Cookieフォルダーが肥大化します。また、Webサイトを再訪問すると、古いCookieが蓄積されます。**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーは、ユーザーがログオフするときにプロファイルから古いCookieを削除することで、この問題を解決します。

> **注：**
>
> Internet Explorer 9以前のCookieおよび閲覧履歴情報は、Internet Explorer 10以降のCookieおよび閲覧履歴情報と互換性がありません。ユーザーは、異なるバージョンのInternet Explorerがインストールされている複数のシステム間で移動しないことをお勧めします。\[#474200\]

ミラーリングするCookieフォルダーを指定する

ミラーリングするフォルダーポリシーを有効にします。ポリシーで、展開でサポートされているOSバージョンに基づいて、ミラーリングするCookieフォルダーを指定します。

1. **Profile Management > ファイルシステム > 同期**に移動します。
2. **ミラーリングするフォルダー**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **ミラーリングするフォルダーのリスト**フィールドに、次のCookieフォルダーを追加します。フォルダーを区切るには`Enter`を使用します。

- バージョン2プロファイルの場合の`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`。
- `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies`（Windows 8.1以降のCookieフォルダー）
- `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`（Windows 7およびWindows 8のCookieフォルダー）
- `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache`（Cookieデータベースファイル`Webcache01.dat`が保存されているInternet Explorer 10以降で利用可能なフォルダー）

5. **OK**をクリックします。
6. Profile Management 2106以降を使用している場合は、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーをダブルクリックし、**有効**を選択します。

(オプション) ログオフ時に古いCookieを削除する

Profile Managementでユーザーログオフ時に古いCookieを削除するには、**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーを有効にします。

このポリシーはログオフ時間を増加させるため、プロファイルの肥大化の問題が発生した場合にのみ有効にしてください。

1. **Profile Management** > **詳細設定**に移動します。
2. **ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **OK**をクリックします。

ユーザープロファイルのストリーミング

既定では、Citrix Profile Management は、ユーザーがログオンするときに、ユーザープロファイル全体をユーザー ストアからローカルコンピューターにフェッチします。ユーザープロファイル内の大きなファイルは、ログオンの遅延を引き起こす可能性があります。ユーザーのログオンエクスペリエンスを向上させるには、プロファイルストリーミング機能を有効にできます。

この機能を有効にすると、Profile Management は、ログオン後にアクセスされたときにのみプロファイルファイルとフォルダーをフェッチします。

> **注:**

- ユーザープロファイルには、ファイル、フォルダー、およびレジストリエントリが含まれます。この機能はファイルとフォルダーに適用されますが、レジストリエントリには適用されません。レジストリエントリは常にユーザーログオン時にフェッチされます。
- バージョン 2402 以降、ファイルベースのプロファイルソリューションでは、以下のプロファイルストリーミング機能が既定で有効になっています: プロファイルストリーミングとフォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする。
- 「**ユーザー ストアのレプリケート**」ポリシーが有効になっている場合、アクティブなユーザー ストアが利用できなくなると、Profile Management は後続のストリーミング要求のために自動的に利用可能なストアに切り替わります。この機能強化により、フェールオーバー後もファイルとフォルダーを継続的にストリーミングでき、データの中断を最小限に抑えることができます。

プロファイルストリーミング機能を有効にする

次のポリシーを使用して、プロファイルストリーミング機能を有効にします。

- **プロファイルストリーミング。**このポリシーを有効にすると、ユーザーがアクセスしたときにプロファイル*ファイル*がローカルコンピューターにフェッチされます。
- **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする。**このポリシーを有効にすると、ユーザーがアクセスしたときにプロファイル*フォルダー*がローカルコンピューターにフェッチされます。

ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ストリーミングユーザープロファイル**にアクセスします。
3. **プロファイルストリーミング**をダブルクリックします。**有効**を選択し、**OK**をクリックします。
4. **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**をダブルクリックします。**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

プロファイルストリーミングの機能強化を有効にする

プロファイルストリーミング機能を有効にすると、必要に応じてさまざまな機能強化を適用できます。

例1：ユーザーから、サイズの大きいプロファイルファイルの読み込みが遅いという報告がありました。この場合、**常にキャッシュ**ポリシーを有効にし、サイズの大きいファイルの最小サイズを指定します。Profile Managementは、ユーザーログオン*中に*、そのサイズより大きいファイルをローカルプロファイルにキャッシュします。

例2：組織内で、ユーザーが特定のプロファイルフォルダーに頻繁にアクセスします。そのため、プロファイルストリーミングが有効になっている場合でも、ユーザーログオン時にそれらのフォルダーをローカルプロファイルにフェッチしたいと考えています。この目標を達成するには、**プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーを有効にし、プロファイルストリーミングからフォルダーを除外します。

必要に応じて機能強化を有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

1. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrix Components > Profile Management > ストリーミングユーザープロファイル**にアクセスします。
2. サイズの大きいファイルの読み込み時間を短縮するには、Profile Managementでログオン*中に*サイズの大きいファイルをローカルプロファイルにキャッシュできるようにします。詳細な手順は次のとおりです。

   a. **常にキャッシュ**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. キャッシュするプロファイルファイルのサイズの下限（MB）を設定します。プロファイル全体をキャッシュするには、制限をゼロに設定します。

      注:

      - 制限を超えるファイルは、Profile Managementがユーザーログオン*中に*バックエンド処理スレッドを開始するとすぐにローカルプロファイルにキャッシュされます。
      - 制限を下回るファイルは、ユーザーがアクセスしたときに引き続きローカルプロファイルにフェッチされます。

   d. **OK**をクリックします。

3. ドメイン内の特定のユーザーグループにのみプロファイルストリーミングを適用するには、次の手順に従います。

   a. **ストリーミングユーザープロファイルグループ**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. ユーザーグループのリストを入力します。エントリを区切るには`Enter`を押します。

d. **OK**をクリックします。

注：デフォルトでは、このポリシーは無効になっており、プロファイルストリーミングはドメイン内のすべてのユーザーグループに適用されます。

4. プロファイルストリーミングから特定のプロファイルフォルダーとファイルを除外するには、次の手順に従います。

   a. **プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーをダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. **表示**をクリックします。

   d. Profile Managementでストリーミングしたくないフォルダーを追加します。詳細については、この記事の後半にあるプロファイルストリーミング除外の有効化を参照してください。

5. 同じユーザーの同時セッションで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、次の手順に従います。

   a. **保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. **OK**をクリックします。 詳細については、この記事の後半にある保留領域のプロファイルストリーミングを参照してください。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。詳細については、`<https://technet.microsoft.com/ja-jp/library/bb490983.aspx>`を参照してください。

構成の優先順位

ストリーミングされたユーザープロファイルの各ポリシーの構成の優先順位は次のとおりです。

- GPOまたは.iniファイルで**プロファイルストリーミング**が構成されていない場合、**プロファイルストリーミング**は無効になります。
- GPOで**常にキャッシュ**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、無効になります。
- **ストリーミングされたユーザープロファイルグループ**が無効になっている場合、すべてのユーザーグループが処理されます。この設定がGPOで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がGPOまたは.iniファイルで構成されていない場合、すべてのユーザーが処理されます。

- GPOまたは.iniファイルで**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**が構成されていない場合、フォルダーのプロファイルストリーミングは無効になります。
- GPOまたは.iniファイルで**プロファイルストリーミング除外を有効にする**が構成されていない場合、すべてのフォルダーがストリーミングされます。
- 「**保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする**」がGPOまたは.iniファイルで構成されていない場合、保留領域のプロファイルストリーミングは無効になります。

プロファイルストリーミング除外を有効にする

プロファイルストリーミングの除外が有効になっている場合、Profile Management は除外リスト内のフォルダーをストリーミングしません。除外リスト内のすべてのフォルダーとファイルは、ユーザーがログオンしたときにユーザー ストアからローカルコンピューターにすぐにフェッチされます。

プロファイルストリーミングの除外を有効にするには、次の手順に従います。

1. Profile Management で、「**ストリーミングされたユーザープロファイル**」をダブルクリックします。
2. 「**プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**」ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. 「**表示**」をクリックします。
5. Profile Management でストリーミングしないフォルダーを追加します。フォルダー名は、絶対パスまたはユーザープロファイルに対する相対パス (`%USERPROFILE%`) として指定できます。その変数を使用してプロファイルの場所を特定しますが、このポリシーに変数自体を入力しないでください。パスの先頭のバックスラッシュは省略してください。

例:

- Desktop。Desktop フォルダーは、ユーザーログオン時にフェッチされます。
- `MyApp\tmp` 。 `%USERPROFILE%\MyApp\tmp` フォルダーは、ユーザーログオン時にフェッチされます。

この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイル内の次のフォルダーがデフォルトで除外されます。

- `AppData\Local\Microsoft\Credentials`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Credentials`

- `Appdata\Roaming\Microsoft\Crypto`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Protect`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\SystemCertificates`

注:

- このポリシーは、プロファイルストリーミングが有効になっている場合にのみ適用されます。
- このポリシーは、ワイルドカード `*` および `?` をサポートしていません。
- エントリを区切るには、`Enter` と入力します。
- プロファイルストリーミング除外リストを手動で編集する場合は、ログオンがハングするのを避けるために、前述のデフォルトで除外されているフォルダーを追加する必要があります。

保留領域のプロファイルストリーミング

プロファイル管理は、待機領域 を使用して、同じユーザーの同時セッションで変更されたプロファイルファイルとフォルダーを一時的に保存します。デフォルトでは、その領域はプロファイルストリーミング機能の例外です。この機能が有効になっている場合でも、ユーザーがログオンするときに、その領域のファイルとフォルダーはローカルプロファイルにフェッチされます。

同じユーザーの同時セッションで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、プロファイルストリーミング機能の拡張として、**待機領域のプロファイルストリーミングを有効にする**機能を有効にします。このポリシーが有効になっている場合、プロファイル管理は、ユーザーがログオンするときではなく、アクセスするときに、待機領域のファイルとフォルダーをローカルプロファイルにフェッチします。その領域に大きなファイルがある場合、ユーザーのログオン時間が大幅に短縮されます。

> **注:**
>
> このポリシーが有効になっている場合、ユーザーがセッションを開始すると、ユーザーごとにユーザーストアに `PendingArea.vhdx` という名前のディスクが作成されます。ユーザーが複数の同時セッションを開始した場合、各セッションに対して、`Diff-V<version number>.vhdx` (例: Diff-V1.vhdx) という名前の追加ディスクが作成されます。

ユーザー ストアをレプリケートする

「**ユーザー ストアのレプリケート**」ポリシーを使用すると、ユーザーのログオンおよびログオフごとに、ユーザー ストアを複数のパスにレプリケートできます。これにより、プロファイルの冗長性が提供され、ユーザー プロファイルの高い可用性が保証されます。

注:

- この機能は、ファイルベースとコンテナベースの両方のプロファイル ソリューションに適用されます。
- デフォルトでは、レプリケートされたプロファイル コンテナは、ユーザー ログオン時のみ冗長性を提供し、セッション全体には提供しません。セッション全体にわたるプロファイルの冗長性を確保する方法とその前提条件の詳細については、「プロファイル コンテナのセッション内フェールオーバーを有効にする」を参照してください。
- このポリシーを有効にすると、システムI/Oが増加し、ログオフ時間が長くなる可能性があります。

仕組み

ユーザー ストアへのパスポリシーを使用して構成されたユーザー ストアに加えて、「**ユーザー ストアのレプリケート**」ポリシーを使用して、さらにユーザー ストアを構成できます。複数のユーザー ストアが環境に展開および構成されている場合、Profile Managementは次のように動作します。

- ユーザーの*ログオン*中、Profile Managementは、ユーザーの最新プロファイルを持つユーザー ストアを選択します。複数のユーザー ストアが最新プロファイルを持っている場合、デフォルトでは、Profile Managementは最初に構成されたストア（構成順序で最も早いもの）を選択します。Profile Managementが最適なアクセス パフォーマンスを持つストアを選択するように有効にすることもできます。詳細については、「ユーザー ストアの選択方法を変更する」を参照してください。
- ユーザーの*ログオフ*中、Profile Managementはローカル プロファイルをすべてのユーザー ストアに書き戻します。

レプリケートされたユーザー ストアを構成する

プロファイルの冗長性を提供するには、**ユーザー ストアへのパス**ポリシーを使用して構成されたユーザー ストアに加えて、追加のユーザー ストアを設定します。グループ ポリシーを使用してレプリケートされたユーザー ストアを構成するには、次の手順に従います。

1. グループ ポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスし、「**ユーザー ストアのレプリケート**」ポリシーをダブルクリックします。
3. ポリシーを「**有効**」に設定します。
4. **ユーザー ストアを複製するパス**の横にある**表示**をクリックします。
5. **値**フィールドに、複製されたユーザー ストアのパスを入力します。他の複製されたユーザー ストアについても、この手順を繰り返します。

   プロファイルコンテナがユーザープロファイルの一部で有効になっている場合、コンテナベースのプロファイルとファイルベースのプロファイルを異なる場所に複製できます。これを行うには、`<path to the replicated file-based profiles>|<path to the replicated container-based profiles>` の形式でパスを入力します。例: `\\path_a|\\path_b` は、Profile Managementがファイルベースのプロファイルを `\\path_a` に、コンテナベースのプロファイルを `\\path_b` に複製することを示します。
6. **OK**をクリックし、もう一度**OK**をクリックします。

> **注：**
>
> セッション中に変更されたファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期するには、アクティブなライトバックを有効にするポリシーを有効にします。

ユーザー ストアの選択方法を変更する

デフォルトでは、複数のユーザー ストアが利用可能な場合、Profile Managementは最新のプロファイルを持つストアを選択します。複数のオプションがある場合は、最も早く構成されたものを選択します。必要に応じて、Profile Managementが最適なアクセスパフォーマンスを持つストアを選択するように設定できます。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループ ポリシー管理エディターを開きます。

2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスし、**ユーザー ストアの選択方法**ポリシーをダブルクリックします。
3. ポリシーを**有効**に設定します。
4. **選択方法**フィールドで、**アクセスパフォーマンス**を選択します。構成順序に基づく選択に戻すには、**構成順序**を選択します。
    - **構成順序。**Profile Managementは、最初に構成されたストア（構成順序で最も早いもの）を選択します。
    - **アクセスパフォーマンス。**Profile Managementは、最適なアクセスパフォーマンスを持つストアを選択します。
5. **OK**をクリックします。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、**構成順序**が使用されます。

> **ヒント:**

> ユーザーログオン時のストア選択イベントをトレースするには、マシンで**Windows イベントビューアー**を開き、**Windows ログ > アプリケーション**に移動して、ID **5**の**Citrix Profile Management イベント**のフィルターを適用します。

ログオフ時のプロファイル同期を制限する

「**ログオフ時に同期されるユーザー ストアの数を制限する**」ポリシーは、複数のユーザー ストアがある環境でのログオフ パフォーマンスの向上に役立ちます。このポリシーを使用すると、ログオフ中に同期されるユーザー ストアの数を制御でき、ログオフ時間の短縮とパフォーマンスの最適化に貢献します。

> 「**注:**」:

> このポリシーは、Citrix Profile Management バージョン 2503 以降でサポートされています。

仕組み

デフォルトでは、Profile Management はログオフ時にプロファイル データを構成されているすべてのユーザー ストアに同期します。複数のストアや大規模なプロファイルがある環境では、この動作が遅延を引き起こす可能性があります。

「**ログオフ時に同期されるユーザー ストアの数を制限する**」ポリシーを使用すると、ログオフ中に同期されるストアの数 (メイン ストアを含む 1〜8 個) を指定できます。この動作は、環境が**永続的**か**非永続的**かによって異なります。

永続的な環境

永続的な環境 (オペレーティング システムの変更が再起動後も保持される環境) では、次のようになります。

- **ログオフ中:** メインのユーザー ストアと、構成された数の追加ストア (合計 1〜8 個) がログオフ中に同期されます。
- **ログオフ後:** 残りのストアは、ログオフが完了した後にバックグラウンドで*非同期に*同期されます。

結果: すべてのストアが最終的に同期される間、ログオフはより速く完了します。データ損失は発生しません。

例: 5つのユーザー ストアが構成されており、制限を「**2**」に設定した場合:

- メイン ストアと1つの追加ストアがログオフ中に同期されます。
- 残りの3つのストアは、ログオフ後にバックグラウンドで同期されます。

非永続環境

非永続環境（ログオフ後にリセットされるプールされた仮想デスクトップなど、オペレーティングシステムの変更が永続しない環境）では、次のようになります。

- **ログオフ中:** メインのユーザー ストアと、構成された数の追加ストア（合計1〜8個）のみが同期されます。
- **ログオフ後:** その制限を超えるストアは、このログオフ中には*同期されません*。
- **次回のログオン時:** すべての古いストアがメインストアから同期され、整合性が確保されます。

結果: ユーザーはログオフ時間が短縮されますが、一部のユーザー ストアには一時的に古いデータが含まれる可能性があります。

例: 5つのユーザー ストアが構成されており、制限を**2**に設定した場合：

- メインストアと1つの追加ストアがログオフ中に同期されます。
- 残りの3つのストアは、次回のログオンまで古い状態のままになります。

ポリシーを構成する

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**に移動します。
3. **ログオフ時に同期されるユーザー ストアの数を制限する**を見つけてダブルクリックします。
4. **有効**を選択し、ログオフ中に同期するストアの数（メインストアを含む1〜8個）を指定します。
5. **OK**をクリックして構成を保存します。
6. 変更を適用するには、影響を受けるマシンで `gpupdate /force` を実行します。
7. ポリシーが有効になるように、ログオフしてから再度ログオンします。

> **注:**
>
> このポリシーは、**ユーザー ストアのレプリケート** ポリシーが有効になっている場合にのみ適用されます。

ベストプラクティス

一般的な推奨事項:

- **要件の評価:** ログオフ中に同期する必要があるストアの最小数を決定し、重要なデータの可用性を維持します。
- **他の最適化との組み合わせ:** このポリシーを、**プロファイル ストリーミング**、**フォルダー ストリーミング**、または**フォルダー ミラーリングの高速化**などの機能と組み合わせて使用し、パフォーマンスをさらに向上させます。
- **結果の監視:** `C:\Windows\System32\LogFiles\UserProfileManager` のプロファイル管理ログを確認するか、プロファイル管理ヘルスチェック を使用して、このポリシーがログオフおよびその後のログオンパフォーマンスに与える影響を監視および評価します。
- **まずテスト:** 展開する前に、非本番環境で構成を検証します。

永続環境

- ログオフをブロックせずにバックグラウンド同期を許可するために、より高い制限（*たとえば*、3〜5ストア）を構成します。
- バックグラウンド同期に十分なネットワーク帯域幅を確保します。
- バックグラウンド同期スレッドがシステムに与えるパフォーマンスへの影響を監視します。

非永続環境

- ログオフ速度を優先するために、下限（*例えば*、1〜2ストア）を設定します。
- 同期制限内に、重要なストアまたは頻繁にアクセスされるストアを含めます。
- すべてのストアがメインストアから再同期されるため、次回のログオンには時間がかかる場合があります。
- 高可用性構成では、非同期ストアにおける一時的なデータの陳腐化を考慮してください。

トラブルシューティング

ログオフのパフォーマンスが向上しない場合、または同期の問題が発生した場合は、次の点を確認してください。

- ポリシーが適用されていること（`gpupdate /force`）を確認し、Citrix Profile Managementログでその効果を検証します。
- すべてのユーザーストアにアクセス可能であり、適切に許可されていることを確認します。
- 同期を遅延させたり妨げたりする可能性のあるネットワークの中断がないか確認します。
- 永続的な環境では、バックグラウンド同期スレッドが期待どおりに開始されることを確認します。
- 非永続的な環境で、ユーザーが古いデータを報告する場合は、ログオフ時に同期されるストアの数を増やします。

プロファイルコンテナを設定する

> **重要:**

> この機能はWindows 7では動作しません。

> ユーザープロファイル内の大きなフォルダーは、ユーザーログオンの遅延を引き起こす可能性があります。ログオンエクスペリエンスを向上させるために、Profile ManagementはVHDXベースのプロファイルソリューションであるプロファイルコンテナを提供します。このソリューションを使用すると、選択したプロファイルフォルダーをVHDXプロファイルディスクに保存できます。ユーザーがログオンすると、VHDXプロファイルディスクがマウントされ、プロファイルフォルダーがすぐに利用可能になります。

プロファイルコンテナを使用すると、次のいずれかの目標を達成できます。

- コンテナベースのプロファイルソリューションを設定する: ユーザープロファイル全体をプロファイルコンテナに保存します。
- ファイルベースのプロファイルソリューションのユーザーエクスペリエンスを最適化する: ユーザープロファイルの一部をプロファイルコンテナに保存します。

ワークフロー

プロファイルコンテナを展開するための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. (オプション) プロファイルコンテナのストレージ容量とパスをカスタマイズする。
2. ニーズに合わせてプロファイルコンテナを有効にします。

   - ユーザープロファイルの一部に対してプロファイルコンテナを有効にする（ファイルベースのプロファイル最適化ソリューション）
   - ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にする（コンテナベースのプロファイルソリューション）

   > **注:**
   >
   > コンテナベースのプロファイルソリューションが有効になっている場合、以下のユーザープロファイル（存在する場合）は、初回使用時に自動的にコンテナに移行されます。
   >
   > - ローカル Windows ユーザープロファイル
   > - Citrix® ファイルベースのプロファイルソリューションからのユーザープロファイル

3. プロファイルコンテナの肥大化を防ぐには、(#optional-include-and-exclude-folders-and-files) フォルダとファイルを除外します。

4. 展開環境でマルチセッションシナリオが一般的な場合は、必要に応じて(#optional-enable-multi-session-write-back-for-profile-containers)プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にします。
5. プロファイルデータが拡張するにつれてプロファイルコンテナが動的にサイズを拡大できるようにするには、(#optional-enable-and-configure-vhd-auto-expansion)プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にして構成します。
6. ユーザープロファイル内の同一ファイルによって生じるストレージコストを削減するために、ファイル重複排除ポリシーを有効にして構成できます。

    a. (/ja-jp/profile-management/current-release/configure/enable-file-deduplication#include-files-in-the-shared-store-for-deduplication)プロファイルコンテナから重複排除するファイルを指定します。

    b. (オプション) (/ja-jp/profile-management/current-release/configure/enable-file-deduplication#exclude-files-from-the-shared-store)重複排除から除外するファイルを指定します。

    c. (オプション) (/ja-jp/profile-management/current-release/configure/enable-file-deduplication#specify-the-minimum-size-of-files-to-deduplicate-from-profile-containers)プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズを指定します。

7. 複数のユーザーストアが展開されており、プロファイルコンテナが展開環境で有効になっている唯一のコンテナタイプである場合、セッション全体のプロファイル冗長性を提供するために、(#optional-enable-in-session-profile-container-failover-among-user-stores)ユーザーストア間のセッション内プロファイルコンテナフェールオーバーを有効にできます。
8. (オプション) (#optional-grant-ad-users-read-access-to-profile-containers)ADユーザーにプロファイルコンテナへの読み取りアクセスを許可します。
9. ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナ（コンテナベースのプロファイルソリューション）を有効にしている場合は、必要に応じて以下のいずれかのポリシーを有効にできます。

    - 高レベルのプロファイル可用性を保証するためにプロファイル冗長性を提供するには、(/ja-jp/profile-management/current-release/configure/replicate-user-stores.html)ユーザーストアのレプリケートを有効にします。
    - ローカルコンピューターにユーザープロファイルをキャッシュするには、(#optional-enable-local-caching-for-profile-containers)プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にします。

- プロファイルコンテナへの同時アクセスを1つのみ許可するには、(#optional-enable-exclusive-access-to-profile-containers)プロファイルコンテナへの排他的アクセスを有効にします。
- HKCUハイブ内のレジストリキーをユーザーログオフ時のプロファイル同期から除外するには、(/ja-jp/profile-management/current-release/configure/include-and-exclude-items/overview)。

> **注:**
>
> プロファイルコンテナで**プロファイルコンテナへの排他的アクセスを有効にする**設定が有効になっている場合、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**設定は自動的に無効になります。

- ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーをログオフするかどうかを指定する(/ja-jp/profile-management/current-release/configure/citrix-profile-management-profile-container/#optional-specify-whether-to-log-off-users-when-the-profile-container-is-not-available-during-logon)。

考慮事項

コンテナベースのプロファイルソリューションが有効になっている場合、以下の考慮事項に注意してください。

- ファイルベースのプロファイルソリューションは自動的に無効になり、以下のポリシーは適用されなくなります。
  - プロファイルストリーミング

    例外: プロファイルストリーミングは、*プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする*ポリシーが有効になっている場合にのみ、プロファイルコンテナに適用されます。詳細については、(#optional-enable-local-caching-for-profile-containers)を参照してください。
  - ファイルシステム
  - アクティブライトバック
  - ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

コンテナベースのプロファイルソリューションに適用されるポリシーを表示するには、(/ja-jp/profile-management/current-release/policies/policy-application-table.html)を参照してください。

- Outlookの検索インデックスローミング機能との下位互換性を維持するため、Profile Managementは以下のファイルをそれぞれ保存するために使用される2つのVHDXディスクを保持します。
  - Outlook検索インデックスデータベース
  - オフライン Outlook データファイル (`.ost`)

(オプション) プロファイルコンテナのストレージ容量とパスをカスタマイズする

デフォルトでは、プロファイルコンテナはユーザー ストアに保存され、デフォルトのストレージ容量は50 GBです。

たとえば、ユーザー ストアのパスを次のように構成します。 `\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!`。

プロファイルコンテナは、次の場所に保存されます。 `\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!\ProfileContainer\!ctx_osname!`。

プロファイルコンテナの別のネットワークの場所を指定し、そのデフォルトのストレージ容量を変更できます。詳しくは、「VHDファイルのストレージ容量とパスを指定する」を参照してください。

ユーザープロファイルの一部に対してプロファイルコンテナを有効にする

ユーザー ストアでのログオン時間を短縮するには、プロファイルコンテナ機能を有効にし、それらの大きなプロファイルフォルダをプロファイルコンテナに追加できます。

> **注：**
>
> プロファイルコンテナに追加したフォルダは、ユーザー ストアにも存在します。プロファイルコンテナ機能を有効にすると、Profile Managementはプロファイルコンテナとユーザー ストアの間でフォルダを同期させます。

> プロファイルコンテナ機能を有効にしてから無効にしたとします。一貫性のあるユーザープロファイルを確保するために、Profile Managementはユーザー ストアプロファイルをプロファイルコンテナと同期させます。この同期は、ユーザーログオン時に行われます。除外リスト内のフォルダはユーザー ストアにコピーされません。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート：ポリシー定義（ADMXファイル） > Citrix Components > Profile Management > Profile container settings**で、**Profile container**ポリシーをダブルクリックします。
3. **Enabled**を選択します。
4. **Show**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式でフォルダを追加します。サイズの大きいキャッシュファイルを含むフォルダを追加することをお勧めします。たとえば、Citrix Filesコンテンツキャッシュフォルダをリストに追加します。`AppData\Local\Citrix\Citrix Files\PartCache`。

コンテナベースのプロファイルソリューションを有効にする

コンテナベースのプロファイルソリューションを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナ**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **表示**をクリックし、アスタリスク (`*`) をプロファイルコンテナリストに追加します。
5. **OK**をクリックします。

(オプション) フォルダーとファイルを含める/除外する

プロファイルコンテナが肥大化するのを防ぐため、フォルダーやファイルをプロファイルコンテナから除外できます。必要に応じて、親フォルダーが除外されている場合でも、フォルダーやファイルを含めることができます。

プロファイルコンテナからフォルダーを除外する

> **重要:**

> ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にしても、フォルダーリダイレクト設定は引き続き有効です。リダイレクトするフォルダーを**プロファイルコンテナから除外するフォルダー**リストに入れないでください。そうしないと、フォルダーリダイレクトが機能しません。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナから除外するフォルダー**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で除外するフォルダーを入力します。

   フォルダ名内のワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。例:

   - `Desktop` は `Desktop` フォルダを示します。
   - `Downloads*` は `Downloads` フォルダのすべての直下サブフォルダを示します。

> **注:**
>
> ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にすると（*コンテナベースのプロファイルソリューション*）、`appdata\local\temp` フォルダはプロファイルコンテナから自動的に除外されます。

> 構成の優先順位:

1. 設定が無効になっている場合、フォルダは除外されません。
2. ここで設定が構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. ここでも .ini ファイルでも設定が構成されていない場合、フォルダは除外されません。

プロファイルコンテナにフォルダを含める

除外されたフォルダのサブフォルダをプロファイルコンテナに含めるには、次の手順に従います:

1. **プロファイル管理 > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナに含めるフォルダ**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で含めるフォルダを入力します。

次の点に注意してください:

- このリストのフォルダーは、除外されたフォルダーのサブフォルダーである必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。
- フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。
- ポリシーを有効にして空のリストを構成することは、設定を無効にすることと同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. 設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、除外リストにないフォルダーはプロファイルコンテナに含まれます。

プロファイルコンテナーにファイルを含める

プロファイルコンテナからフォルダーを除外した後、そのフォルダー内のファイルをプロファイルコンテナに含めることができます。詳細な手順は次のとおりです。

1. **Profile Management > Profile container settings**の下で、**Files to include in profile container**ポリシーをダブルクリックします。
2. **Enabled**を選択します。
3. **Show**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で含めるファイルを入力します。

次の点に注意してください:

- このリストのファイルは、除外されたフォルダー内にある必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。
- ファイル名でのワイルドカードは再帰的に適用されます。ポリシーを現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

例:

- `Desktop\Desktop.ini` は `Desktop\Desktop.ini` ファイルを示します。
- `AppData*.tmp` は、`AppData` フォルダーとそのサブフォルダー内の `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを示します。

- `AppData*.tmp|` は、`AppData` フォルダー内のみの `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを示します。
- `Downloads*\a.txt` は、`Downloads` フォルダーの直下のサブフォルダー内の `a.txt` を示します。

ポリシーを有効にして空のリストを構成することは、設定を無効にすることと同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. ここで設定が構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. ここで、または .ini ファイルで設定が構成されていない場合、除外リストにないファイルはプロファイルコンテナーに含まれます。

プロファイルコンテナーからファイルを除外する

Profile Management 2112以降、プロファイルコンテナーからファイルを除外できます。詳細な手順は次のとおりです。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナー設定**で、**プロファイルコンテナーから除外するファイル**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で除外するファイルを入力します。

次の点に注意してください。

- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。ポリシーを現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名内のワイルドカードはサポートされますが、再帰的には適用されません。

構成の優先順位:

1. 設定が無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここで、または.iniファイルのいずれでも設定が構成されていない場合、ファイルは除外されません。

（オプション）ユーザー ストア間のセッション内プロファイル コンテナ フェールオーバーを有効にする

デフォルトでは、複数のユーザー ストアが展開されている場合、プロファイル コンテナのフェールオーバーは*ユーザーログオン時*にのみ発生します。その結果、プロファイルの冗長性は*ユーザーログオン時*にのみ利用可能です。**ユーザー ストア間のセッション内プロファイル コンテナ フェールオーバーを有効にする**ポリシーを使用すると、フェールオーバーの範囲をセッション全体に拡大し、セッション全体でプロファイルの冗長性を確保できます。このポリシーを有効にすると、Profile Managementがアクティブなプロファイル コンテナ、OneDriveコンテナ、またはOutlookコンテナへの接続を*セッション中に*失った場合、自動的に別の利用可能なコンテナに切り替わります。

> **注：**
>
> - このポリシーを有効にすると、プロファイル コンテナ、OneDriveコンテナ、およびOutlookコンテナにのみ適用されます。**UWP**、**フォルダーミラーリング**、または**保留領域のプロファイルストリーミング**などの他のコンテナが有効になっている場合、このポリシーは適用されません。
> - このポリシーは、デフォルトで有効になっている**セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする**機能に基づいて実装されます。この機能が手動で無効になっている場合、ポリシーは正常に機能しません。
> - このポリシーを有効にすると、差分ディスクがローカルディスクに保存され、ローカルディスクに追加のストレージ要件が発生します。

GPOを使用してこのポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. **Profile Management > 詳細設定**の下で、**ユーザー ストア間のセッション内プロファイル コンテナ フェールオーバーを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **OK**をクリックします。

構成の優先順位：

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここで、または.iniファイルのいずれでもこのポリシーが構成されていない場合、設定は無効になります。

（オプション）VHDの自動拡張を有効にして構成する

ユーザープロファイルは通常、時間の経過とともに増加します。ストレージ管理を簡素化するために、プロファイルコンテナのVHD自動拡張機能を有効にします。この機能を有効にすると、コンテナが使用率90%に達したときに、自動的に10 GB拡張され、最大容量は80 GBになります。必要に応じて、これらのデフォルト設定を特定のニーズに合わせてカスタマイズできます。

> **ヒント:**
>
> VHD自動拡張設定をより詳細に制御するには、ユーザーレベルのポリシー設定を使用できます。組織は標準的な自動拡張設定を持つことができますが、特定のユーザーに対しては、より大きな最大容量などの固有の設定を提供することもできます。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. 次の手順でVHD自動拡張を有効にします。
    a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix Components > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**に移動します。
    b. **プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
    c. **有効**を選択します。
    d. **OK**をクリックします。
3. プロファイルコンテナが自動拡張をトリガーするデフォルトのストレージ使用率を変更するには、次の手順に従います。
    a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**に移動します。
    b. **プロファイルコンテナの自動拡張しきい値**ポリシーをダブルクリックします。
    c. **有効**を選択します。
    d. **自動拡張しきい値 (%)** フィールドに、必要に応じてパーセンテージを入力します。
    e. **OK**をクリックします。
4. プロファイルコンテナが自動的に拡張するストレージ容量を変更するには、次の手順に従います。
    a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**に移動します。

b. **プロファイルコンテナの自動拡張増分**ポリシーをダブルクリックします。
c. **有効**を選択します。
d. **自動拡張増分 (GB)** フィールドに、必要に応じて数値を入力します。デフォルトは10 (GB) です。
e. **OK**をクリックします。

5. プロファイルコンテナが自動的に拡張できる最大ストレージ容量を変更するには、次の手順に従います。

a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**に移動します。
b. **プロファイルコンテナの自動拡張制限**ポリシーをダブルクリックします。
c. **有効**を選択します。
d. **自動拡張制限 (GB)** フィールドに、必要に応じて数値を入力します。デフォルトは80 (GB) です。
e. **OK**をクリックします。

(オプション) プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

プロファイル管理は、既定でプロファイルコンテナへの同時アクセスをサポートします。ただし、すべての同時セッションの中で、読み取り/書き込み権限を持ち、プロファイルの変更をコンテナにマージできるセッションは1つだけです。

Profile Management が同時アクセスを処理する方法は次のとおりです。

- セッションログオン時:

  読み書きセッションが存在するかどうかを確認します。存在する場合、現在のセッションは読み取り専用になります。それ以外の場合、読み書きセッションになります。

- セッションログオフ時:

  a. プロファイルコンテナをマウント解除します。
  b. 現在のセッションが読み取り専用の場合、プロファイルの変更を破棄します。
  c. 他の同時セッションがない場合、読み書きセッションのプロファイル変更をプロファイルコンテナにマージします。

マルチセッションライトバックを有効にするには、プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にするポリシーを使用します。

(オプション) プロファイルコンテナへの排他的アクセスを有効にする

デフォルトでは、プロファイルコンテナは同時アクセスを許可します。必要に応じて、**プロファイルコンテナ設定 > VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする** を介して、プロファイルコンテナへの同時アクセスを無効にできます。その結果、プロファイルコンテナは一度に1つのアクセスのみを許可します。

注:

- この設定は、ユーザープロファイル全体に対して有効になっているプロファイルコンテナにのみ適用されます。
- プロファイルコンテナでこの設定が有効になっている場合、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする** 設定は自動的に無効になります。

詳細については、VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にするを参照してください。

(オプション) プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする

プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする 機能は、プロファイルコンテナがユーザープロファイル全体に対して有効になっている場合にのみ有効になります。**プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする** ポリシーを有効にすると、ユーザーログオン時に、プロファイルコンテナ内のユーザープロファイルがユーザーのローカルユーザープロファイルにキャッシュされます。

重要:

OneDriveなど、コンテナベースのプロファイルソリューションでのみ機能するアプリケーションは、このポリシーが有効になっている場合、正常に動作しない可能性があります。OneDriveが正しく機能するようにするには、このポリシーを無効にするか、OneDriveコンテナポリシーを有効にしてください。

デフォルトでは、ユーザーログオン中にユーザープロファイル全体がキャッシュされます。ユーザーログオン時間を短縮するために、**プロファイルストリーミング**ポリシーを有効にできます。その結果、ユーザープロファイル内のプロファイルフォルダーは、ログオン後にオンデマンドでキャッシュされます。

> **注:**
>
> ローカルキャッシュからファイルまたはフォルダーを除外するには、**プロファイルコンテナ設定**ではなく、**ファイルシステム**の除外および包含ポリシーを使用してください。

(オプション) ログオン中にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーをログオフさせるかどうかを指定する

デフォルトでは、ユーザーログオン中にプロファイルコンテナが利用できない場合、ユーザーは一時プロファイルを使用してログオンします。ただし、この動作はセッション中に行われた変更のデータ損失につながります。あるいは、**ログオン中にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーをログオフする**ポリシーを有効にして、そのような場合にユーザーを強制的にログオフさせることができます。このポリシーが有効になっている場合、ユーザーは「**プロファイルを設定できません: プロファイルコンテナが利用できません。OKをクリックするとログオフされ、このセッション中に行われた変更はすべて失われます。**」というエラーメッセージを受け取ります。このメッセージで**OK**をクリックすると、すぐにログオフされます。必要に応じて、このポリシーを有効にする際にエラーメッセージをカスタマイズすることもできます。

GPOを使用してこのポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. **プロファイル管理 > プロファイルコンテナ設定**の下で、**ログオン中にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーをログオフする**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **エラーメッセージ**フィールドに、ログオン中にプロファイルコンテナが利用できない場合にユーザーに表示されるメッセージを入力します。空のままにすると、デフォルトのメッセージが表示されます。
4. **OK**をクリックします。

> **注:**
>
> Studioを使用してプロファイル管理ポリシーを構成する場合、**無効**アクションを実行しても、このポリシーを無効にすることはできません。代わりに、それを無効にするには、ポリシーを編集してその値を**無効**に変更し、その後、ポリシーのチェックボックスをオフにします。

> 構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、設定は無効になります。

(オプション) ADユーザーにプロファイルコンテナへの読み取りアクセスを許可する

適用対象: ファイルベースおよびコンテナベースの両方のプロファイルソリューション。

デフォルトでは、プロファイルコンテナはその所有者のみがアクセスできます。ADドメイン内の他のユーザーにアクセスを拡張するには、**プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ**ポリシーを有効にできます。Profile Managementは、このポリシーで指定されたユーザーおよびユーザーグループに**読み取りと実行**のアクセス許可を付与します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ**フィールドで、**表示**をクリックし、コンテナへの `Read and Execute` アクセス許可を付与するADユーザーとグループを追加します。ADユーザーまたはグループを識別するには、`domain name\user or group name` 形式またはセキュリティ識別子 (SID) を使用します。
4. **OK**をクリックし、もう一度**OK**をクリックします。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイルコンテナはその所有者のみがアクセスできます。

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

> **ヒント:**

> FSLogix Profile Containerの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/fslogix/configure-profile-container-tutorial>` を参照してください。Citrix Profile

> Managementプロファイルコンテナの詳細については、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナを参照してください。

概要

VHDベースのプロファイルソリューション（FSLogix Profile ContainerやCitrix Profile Managementプロファイルコンテナなど）は、マルチセッションシナリオでの変更の保存をサポートしていません。これらは、1つのセッション（読み取り/書き込みモード）のみが変更を書き込むことを許可し、他のセッション（読み取り専用モード）での変更は破棄されます。

しかし、マルチセッションシナリオはCitrix仮想アプリのユースケースで一般的です。これらのユースケースを容易にするために、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを提供しています。このポリシーにより、FSLogix Profile ContainerとCitrix Profile Managementプロファイルコンテナの両方でマルチセッションライトバックを有効にできます。同じユーザーが異なるマシンで複数のセッションを起動した場合、Profile Managementは各セッションで行われた変更をユーザーのプロファイルコンテナに同期して保存します。

ユーザーログオン中、ユーザーのプロファイルコンテナディスクがマウントされ、I/O要求はマウントされたディスクにリダイレクトされます。その後、Profile Managementはユーザーストアからローカルプロファイルに変更を同期します。

ユーザーログオフプロセス中、Profile Managementはセッションで使用されているFSLogix Profile Containerのモードによって動作が異なります。

- 読み取り専用モードが使用されている場合、Profile Managementは変更をユーザーストアに書き戻します。
- 読み取り/書き込みモードが使用されている場合、Profile Managementはユーザーストアからの変更をローカルプロファイルに適用します。その後、変更はユーザーのプロファイルコンテナにマージされます。

> **注:**

> FSLogix Profile Containerが使用されている場合、マルチセッションライトバック機能はプロファイルストリーミングと互換性がありません。

> 以下のイベントが変更と見なされます。

- 作成

- 変更
- 削除
- 名前変更

ライトバック戦略

Profile Management は、「最後の書き込みが優先される」戦略を使用して変更を適用します。

- ファイル/フォルダーの作成と変更の場合、ファイル/フォルダーの最終書き込み時刻を比較して変更をライトバックします。
- ファイル/フォルダーの削除と名前変更の場合、変更に関連付けられたタイムスタンプを比較して変更をライトバックします。Profile Management は、変更が発生したときにタイムスタンプをログに記録します。

プロファイルコンテナーのマルチセッションライトバックを有効にする

プロファイルコンテナーのマルチセッションライトバックを有効にするポリシーを**有効**に設定することで、マルチセッションライトバック機能を使用できます。このポリシーは、デフォルトで**無効**に設定されています。

- FSLogix Profile Container でこの機能を使用するには、次の手順を完了します。
  - FSLogix プロファイル コンテナー
    - FSLogix Profile Container がインストールされ、有効になっていることを確認します。
    - プロファイルの種類が**読み取り/書き込みプロファイルを試行し、読み取り専用にフォールバックする**に設定されていることを確認します。
  - Citrix プロファイル管理
    - **Profile Management を有効にする**ポリシーを有効に設定します。
    - **ユーザー ストアへのパス**ポリシーを有効なパスに設定します。
    - (オプション)「**処理されたグループ**」および「**除外されたグループ**」ポリシーを設定します。処理するユーザーグループが、FSLogixプロファイルコンテナ内のグループと一致していることを確認します。
    - 「**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**」ポリシーを「**有効**」に設定します。このポリシーはGPOまたはCitrix Studioで設定できます。手順については、この記事の後半を参照してください。

- Citrix Profile Managementプロファイルコンテナのマルチセッションライトバック機能を使用するには、次の手順を実行します。
  - 「**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**」ポリシーを「**有効**」に設定します。
  - Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ機能を有効にする(/ja-jp/profile-management/current-release/configure/citrix-profile-management-profile-container.html)。

「**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**」ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. 「**コンピューターの構成**」>「**管理用テンプレート**」>「**Citrixコンポーネント**」>「**Profile Management**」>「**詳細設定**」で、「**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**」ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**有効**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

変更を有効にするには、Profile Managementがインストールされているマシンで、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

アプリケーションへのアクセスを制御する

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、ルールを使用してアプリケーションへのアクセスを制御できます。この機能により、アプリケーションとイメージの管理を効率化できます。たとえば、異なる部門に同一のマシンを提供しながら、それぞれの固有のアプリケーション要件を満たすことができ、イメージの数を削減できます。

この記事では、アプリケーションアクセス制御を有効にし、制御ルールを構成するプロセスについて説明します。また、この機能を使用して仮想環境でのイメージ管理を簡素化する例も示します。

> **注:**
>
> この機能は、Active Directory (AD) 環境と非ドメイン参加 (NDJ) 環境の両方に適用されます。

概要

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、非表示ルールを構成することで、ユーザー、マシン、プロセスからアプリケーションを非表示にできます。

非表示ルールは次の2つの部分で構成されます。

- **非表示にするオブジェクト。** アプリケーションに対して非表示にするファイル、フォルダー、およびレジストリエントリ。

  たとえば、アプリケーションを非表示にするには、ファイル、フォルダー、レジストリエントリなど、そのアプリケーションに関連付けられているすべてのオブジェクトを指定する必要があります。
- **割り当て。** アプリケーションを非表示にする対象のユーザー、マシン、およびプロセス。

割り当ての種類

非表示ルールにおける割り当ては、プロセス、ユーザー、マシンの3つのカテゴリに分類されます。具体的な割り当ての種類は次のとおりです。

カテゴリ	タイプ
プロセス	任意のプロセス
ユーザー	• AD および Azure Active Directory (AAD) ユーザー • AD および AAD ユーザーグループ
マシン	• AD、AAD、およびNDJマシン • ADマシンのグループ（組織単位（OU）でグループ化） • NDJマシンのグループ（マシンカタログでグループ化）

注:

- In the context of the **アプリのアクセス制御**ポリシーでは、OUはマシンのみのコンテナとして使用され、ユーザーのコンテナとしては使用されません。その結果、OUの割り当ては、OU内のマシンからのみアプリを非表示にし、OU内のユーザーからは非表示にしません。
- NDJマシンは、Citrix®が作成および電源管理するマシンに限定されます。

非表示ルールに複数の割り当てが構成されている場合は、次の考慮事項に注意してください。

- これらの割り当てが同じカテゴリ（たとえば、*ユーザー*Aと*ユーザーグループ*B）である場合、アプリケーションはこれらの割り当てで指定されたすべてのオブジェクト（ユーザーAとユーザーグループBのすべてのユーザー）から非表示になります。
- これらの割り当てが異なるカテゴリ（たとえば、*ユーザー*Aと マシンX）である場合、アプリケーションはそれらのすべての割り当てで指定された条件が満たされたときに非表示になります（ユーザーAがマシンXにサインインしたとき）。
- これらの割り当てが*プロセス*カテゴリである場合、アプリケーションはこれらの割り当てで指定されたすべてのプロセスから非表示になります。

注:

ルールに割り当てが構成されていない場合、ルールで指定されたアプリケーションは非表示になります。

ワークフロー

アプリのアクセス制御機能を使用すると、Profile Managementは、提供されたルールに基づいて、ユーザー、マシン、プロセスからアプリケーションを非表示にできます。アプリのアクセス制御を実装するワークフローの概要は次のとおりです。

1. 非表示ルールを作成および生成します。使用できるツールは2つあります。
    - GUIベースのツール – WEM Tool Hub > アプリのアクセス制御用ルールジェネレーター

- PowerShellツール – Profile Managementインストールパッケージに含まれています。詳細については、「ルールジェネレーターを使用してルールを作成、管理、展開する」を参照してください。

2. GPOを使用して、環境内のマシンに非表示ルールを適用します。詳細については、「GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする」を参照してください。

Rule Generator を使用してルールを作成、管理、展開する

このセクションでは、PowerShell ベースの Rule Generator を使用してルールを作成、管理、展開する方法について説明します。

開始する前に、ツールを実行するマシンが次の要件を満たしていることを確認してください。

- Windows 10 または 11、あるいは Windows Server 2016、2019、または 2022 で動作します。
- (AD 環境のみ) ユーザーおよびマシンと同じドメインに属していること。

一般的な手順は次のとおりです。

1. **Windows PowerShell** を管理者として実行します。
2. Profile Management インストールパッケージ内の **\tool** フォルダーにアクセスし、**CPM_App_Access_Control_Config.ps1** を実行します。

> **注:**
>
> デフォルトでは、`\tool` フォルダーに CPM_App_Access_Control_Config.ps1 と CPM_App_Access_Control_Impl.ps1 の 2 つのファイルがあります。
> CPM_App_Access_Control_Config.ps1 は、正しく動作するために CPM_App_Access_Control_Impl.ps1 に依存しています。
> CPM_App_Access_Control_Impl.ps1 をフォルダーから移動しないでください。

3. 画面の指示に従って、非表示ルールを作成、管理、生成します。

   a. マシンにインストールされている各アプリケーションとその状態を表示します。

      - **未構成**。アプリケーションのルールは構成されていません。
      - **構成済み**。アプリケーションに対して1つ以上のルールが構成されていますが、それらのルールはマシンに適用されていません。

- **構成済みで適用済み**。アプリケーションに対して1つ以上のルールが構成されており、少なくとも1つのルールがマシンに適用されています。

```
List of apps to manage:
Index Status           Name
----- ------           ----
    1 Not configured   Adobe Acrobat (64-bit)
    2 Not configured   AppUp.IntelGraphicsExperience
    3 Not configured   AppUp.ThunderboltControlCenter
    4 Not configured   Citrix Secure Access
    5 Not configured   Citrix Workspace 2303
    6 Not configured   DolbyLaboratories.DolbyAccess
    7 Not configured   ELANMicroelectronicsCorpo.ELANTrackPointforThinkpa
    8 Not configured   Git
    9 Not configured   Google Chrome
```

b. アプリケーションリストから、非表示にしたいアプリケーションをインデックスを入力して選択します。そのアプリケーションに関連付けられているすべてのファイル、フォルダー、およびレジストリエントリが表示されます。

```
App details:

File and registry list:

Index Type         Path
----- ----         ----
    1 Folder       C:\Program Files\Git
    2 Registry key HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Uninstall\Git_is1
    3 File         c:\users\huanw1\AppData\Roaming\Microsoft\Internet Explorer\Quick Launch\User Pinned\TaskBar\Git Bash.lnk
    4 Folder       C:\ProgramData\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\Git
    5 File         C:\ProgramData\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\Git\Git Bash.lnk
    6 File         C:\ProgramData\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\Git\Git CMD.lnk
    7 File         C:\ProgramData\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\Git\Git GUI.lnk
    8 File         C:\ProgramData\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\Git\Git Release Notes.lnk


Assignment list:
No assignments configured. This app is not visible to any users, computers, or processes.

************************************************************



Do you want to add a file or registry entry for this app? Or want to delete one?


[1] Discard the changes you made to the app and continue adding rules for other apps
[2] Save your changes and continue adding rules for other apps
[3] Generate the rules for deployment to machines
    If no assignments are configured, this app is not visible
------------------------------------------------------------
[4] Add files
[5] Add folders
[6] Add registry keys
[7] Add registry values
[8] Delete specific entries
[9] Delete all entries
------------------------------------------------------------
[0] Go to the next step to manage assignments

Enter value:
```

c. 選択したアプリケーションの追加のファイル、フォルダー、またはレジストリエントリを非表示にするには、対応するアクションタイプを選択し、その名前とパスを入力してオブジェクトを追加します。さらに追加するには、この手順を繰り返します。

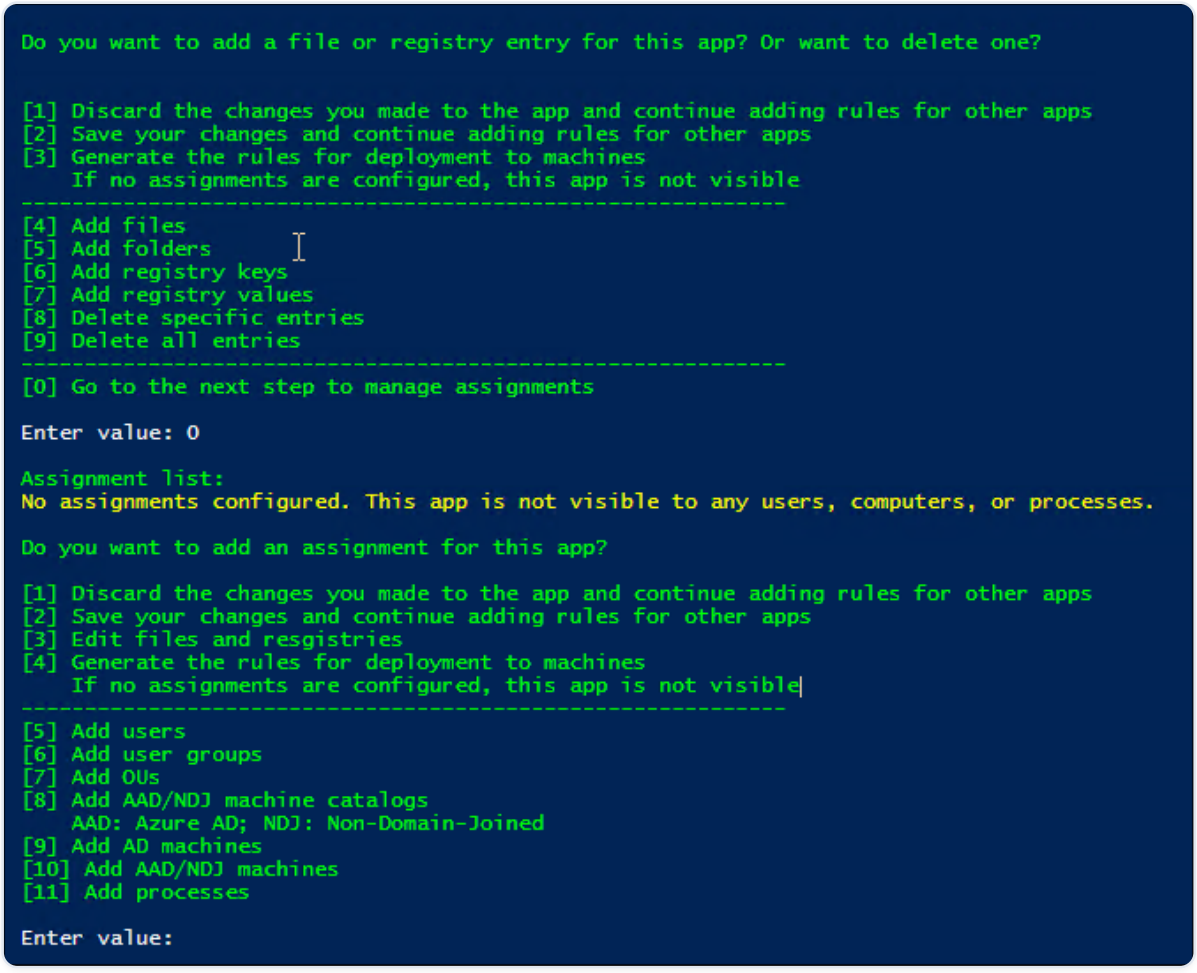
考慮事項:

- パス内のシステム環境変数（%windir%など）はサポートされていますが、ユーザー環境変数（%appdata%など）はサポートされていません。
- ファイルとフォルダーでは、ワイルドカード `*` と `?` がサポートされています。文字列内に複数のアスタリスク（'*'）がある場合、2つのアスタリスク間の文字は無視され

ます。たとえば、文字列 `c:\users\Finance*Manangement*` では、文字 `*Management*` は単一のアスタリスク（*）として扱われます。

> **注:**
>
> 特定のファイル、フォルダー、およびレジストリエントリに関連付けることで、アプリケーションを手動で定義することもできます。

d. ルールの割り当てを構成します。詳細には、割り当てタイプを指定し、アプリケーションを非表示にしたい特定のオブジェクトを入力します。詳細については、次の表を参照してください。



> **注:**
>
> ルールに割り当てを構成しない場合、ルールで指定されたアプリは非表示になります。

割り当ての種類	説明
ADユーザー、ユーザーグループ、またはOU	ADドメイン名を縦棒（|）で区切って入力します。
ADマシン	DNSホスト名を縦棒（|）で区切って入力します。
NDJマシンカタログ	カタログ名を縦棒（|）で区切って入力します。例: `Machine_catalog_name1|Machine_catalog_name2`
NDJマシン	WEM WebコンソールでAAD/NDJオブジェクトセレクターを使用してマシン名を取得し、それらの名前を縦棒 (|) で区切って入力します。例: `Machine_name1|Machine_name2`。ドメインに参加していないすべてのマシンを追加するには、「**NDJ***」と入力します。
	NDJマシン名では、ワイルドカード `*` と `?` がサポートされています。
	注: 文字列に複数のアスタリスク (`*`) がある場合、2つのアスタリスク間の文字は無視されます。たとえば、文字列 `ResearchDep*Virtual*TeamMachine*` では、文字 `*Virtual*` は単一のアスタリスク (`*`) として扱われます。
Azure ADユーザー	WEM WebコンソールでAAD/NDJオブジェクトセレクターを使用してユーザーのSIDと名前を収集し、次の形式で入力します: `sid1\name1|sid2\name2`。例: `/azuread/989c2938-6527-4133-bab1-f3860dd15098\Tester1|/azuread/82bdde32-d5d9-4d64-b0ff-9876d4488d05\Tester2`

割り当ての種類	説明
Azure ADグループ	WEM WebコンソールでAAD/NDJオブジェクトセレクターを使用してグループのSIDと名前を収集し、次の形式で入力します: `sid1\name1|sid2\name2`。例: `/azuread/989c2938-6527-4133-bab1-f3860dd15098\TestGroup1|/azuread/82bdde32-d5d9-4d64-b0ff-9876d4488d05\TestGroup2`
注: 特定のユーザーまたはマシンを除外するには、識別子の前に `EX>` を追加します。特定のプロセスを除外するには、識別子の前に `?` を追加します。除外を割り当てられたグループから縦棒 (|) を使用して区切ります。	

4. 手順3を繰り返して、他のアプリケーションの非表示ルールを作成します。
5. 画面の指示に従って、構成したルールの生データを生成し、将来の使用のために.txtファイルに保存します。
6. ルールが期待どおりに機能するかどうかをテストするには、画面の指示に従って、このマシンまたはマシンのグループにルールを展開します。

GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする

非表示ルールを作成して生成したら、GPOを使用してそれらを環境内のマシンに適用できます。

GPOを使用して制御ルールをマシンに適用するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > アプリケーションアクセス制御**にアクセスします。
3. **アプリケーションアクセス制御**をダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択します。
5. 生成されたルールを保存した.txtファイルを開き、内容をコピーして、**アプリケーションアクセス制御ルール**フィールドに貼り付けます。

6. ルールが`\r\n`ではなく`\n`で区切られていることを確認するために、ルールコンテンツを再確認してください。Windowsでは、コンテンツを貼り付けると`\n`が自動的に`\r\n`に変換されることがあり、エラーの原因となる可能性があります。
7. **OK**をクリックします。

この機能の構成の優先順位は次のとおりです。

1. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用していない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

例

このセクションでは、イメージのアプリケーションアクセス制御を実装するための例を説明します。

要件

この例の要件は次のとおりです。

- 営業、人事、およびエンジニアリング部門の仮想マシンを作成するために、単一のイメージを使用します。
- 次のアプリケーションへのアクセスを制御します。
  - Microsoft Excel: 人事部門のユーザーには表示されません。
  - Visual Studio Code: 営業部門または人事部門のユーザーには表示されません。

解決策

インストールされているアプリケーションへのアクセスを制御するために、Profile Managementをインストールします。

テンプレートマシンのインストール

イメージをキャプチャするためのテンプレートマシンをインストールします。手順は次のとおりです。

1. 新しいマシンを、ユーザーおよびマシンと同じADドメインに参加させます。
2. マシンに次のソフトウェアをインストールします。
   - 必要に応じて、Windows 10または11、またはWindows Server 2016、2019、または2022
   - Profile Management バージョン2303以降

- 必要なすべてのアプリケーション

非表示ルールを作成および生成する

1. テンプレートマシンで、Rule Generator ツールを使用して非表示ルールを作成および生成します。
   - ルール1：人事部門のユーザーからMicrosoft Excelを非表示にする（アプリケーション：Microsoft Excel; 割り当て：HRユーザーグループ）
   - ルール2：営業部門または人事部門のユーザーからVisual Studio Codeを非表示にする（アプリケーション：Visual Studio Code; 割り当て：営業ユーザーグループおよびHRユーザーグループ）
2. 2つのルールの生データを生成し、.txtファイルに保存します。

ツールの使用方法の詳細については、「Rule Generator を使用してルールを作成、生成、および展開する」を参照してください。

これで、テンプレートマシンからイメージをキャプチャできます。

GPO を使用してアプリのアクセス制御を有効にする

仮想マシンが作成されたら、GPO を使用してアプリのアクセス制御を一元的に有効にし、生成されたルールをマシンに適用します。詳細については、「GPO を使用してアプリのアクセス制御を有効にする」を参照してください。

FSLogix からルールセットを移行する

ルールジェネレーターツールを使用して、FSLogix で構成されたルールセットを Profile Management のアプリのアクセス制御に移行できます。

> **注:**

> FSLogixで使用される一部のルールタイプと割り当てタイプは、アプリアクセス制御でサポートされていません。環境を確認し、必要に応じて代替構成を検討してください。

> FSLogix ルールセットを移行するには：

1. WEM Tool Hub > アプリのアクセス制御用ルールジェネレーター を開きます。
2. **>** をクリックして、移行を開始します。

3. 「**参照**」をクリックし、FSLogix Rule Editorを使用して保存されたFSLogixルール定義ファイルを見つけて、「**開く**」をクリックします。

   > **注:**
   >
   > ルール定義ファイルとそれに関連付けられた割り当てファイルが同じフォルダーに保存されていることを確認してください。このツールは、サポートされているルールセットとその割り当てを移行します。

4. 移行が完了したら、詳細を確認します。

   サポートされていないルールやデータがないか確認し、結果を検証します。移行後にルールを編集または追加できます。

5. 「**インポート**」をクリックしてプロセスを完了します。

   移行されたルールはテスト可能になり、既存のルールとともに保存できます。

マシンレベルのリダイレクトを実装する

「**アプリアクセス制御**」ポリシーを使用すると、ルールを使用してファイル、フォルダー、レジストリキー、およびレジストリ値のマシンレベルのリダイレクトを実装できます。この機能の一般的なユースケースは次のとおりです。

- データローミングを実装します。ユーザープロファイル以外のデータをファイル共有にリダイレクトし、ユーザーがどのマシンにサインインしても同じデータにアクセスできるようにします。
- データ保護を強化します。重要なデータを代替の場所または値にリダイレクトし、不正なアクセスから保護します。
- ユーザーエクスペリエンスをカスタマイズします。特定の要件に基づいてアプリのエクスペリエンスを調整します。

> **注:**
>
> この機能は、Active Directory (AD) および非ドメイン参加 (NDJ) 環境に適用されます。

概要

リダイレクトルールは次の情報を指定します。

- **データ型**。ファイル、フォルダー、レジストリキー、またはレジストリ値など、リダイレクトするデータの種類。
- **ソースパスと宛先パス**。指定されたデータ型のソースパスと宛先パス。
- **割り当て**。このリダイレクトを適用するユーザー、マシン、およびプロセス。詳細については、「割り当ての種類」を参照してください。

割り当ての種類

リダイレクトルールにおける割り当ては、プロセス、ユーザー、およびマシンの3つのカテゴリに分類されます。特定の割り当ての種類は次のとおりです。

カテゴリ	種類
プロセス	任意のプロセス
ユーザー	• ADユーザー • ADユーザーグループ
マシン	• ADおよびNDJマシン • ADマシンのグループ（組織単位（OU）でグループ化） • NDJマシンのグループ（マシンカタログでグループ化）

注:

- **App access control**ポリシーのコンテキストでは、OUはマシンのみのコンテナとして使用され、ユーザーのコンテナとしては使用されません。
- NDJマシンは、Citrix®が作成し、電源管理するマシンに限定されます。

ルールに複数の割り当てが構成されている場合、以下の考慮事項に注意してください。

- それらの割り当てが同じカテゴリ（たとえば、ユーザーAとユーザー グループB）である場合、ルールはそれらの割り当てで指定されたすべてのオブジェクト（ユーザーAとユーザーグループBのすべてのユーザー）に適用されます。
- それらの割り当てが異なるカテゴリ（たとえば、ユーザーAと マシンX）である場合、ルールはそれらのすべての割り当てで指定された条件が満たされたときに適用されます（ユーザーAがマシンXにサインインしたとき）。

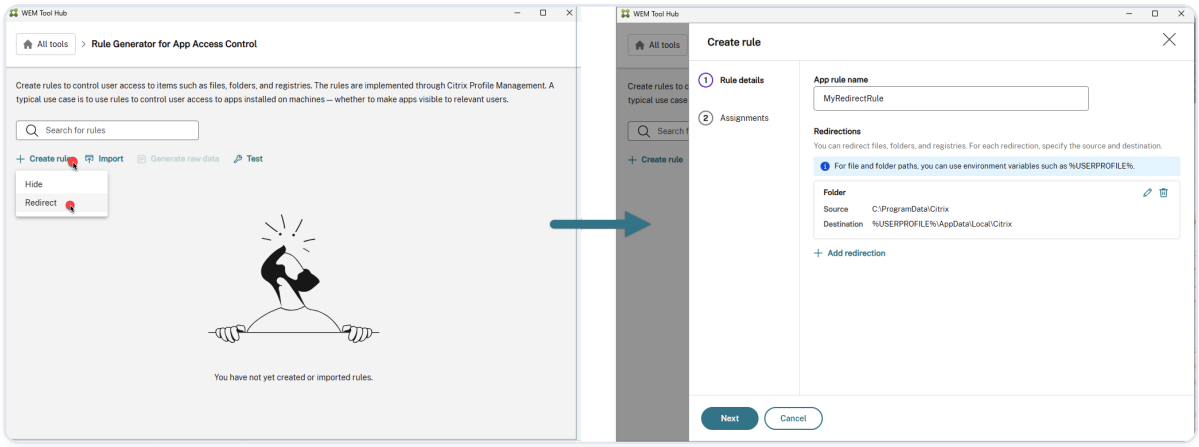
注:

ルールに割り当てが構成されていない場合、このルールで構成されたリダイレクトは、どのような条件でも有効になります。

ワークフロー

大まかに言えば、マシンレベルのリダイレクトを実装するワークフローは次のとおりです。

1. 次のいずれかのツールを使用して、リダイレクトルールを作成および生成します。
    - GUIベースのツール – WEM ツールハブ > アプリケーションアクセス制御用ルールジェネレーター



    - PowerShellツール – Profile Managementインストールパッケージに含まれています。詳細については、「Rule Generator を使用してルールを作成、管理、展開する」を参照してください。

注:

> より良いユーザーエクスペリエンスのために、GUIベースのツールを使用してアプリアクセスコントロールルールを作成、管理、生成することをお勧めします。このツールは、**Citrix Cloud™ > WEM service > Utilities** からダウンロードできるWEM Tool Hubで入手できます。

2. **App access control** ポリシーを使用して、リダイレクトルールをマシンに展開します。詳細については、「リダイレクトルールをマシンに展開する」を参照してください。

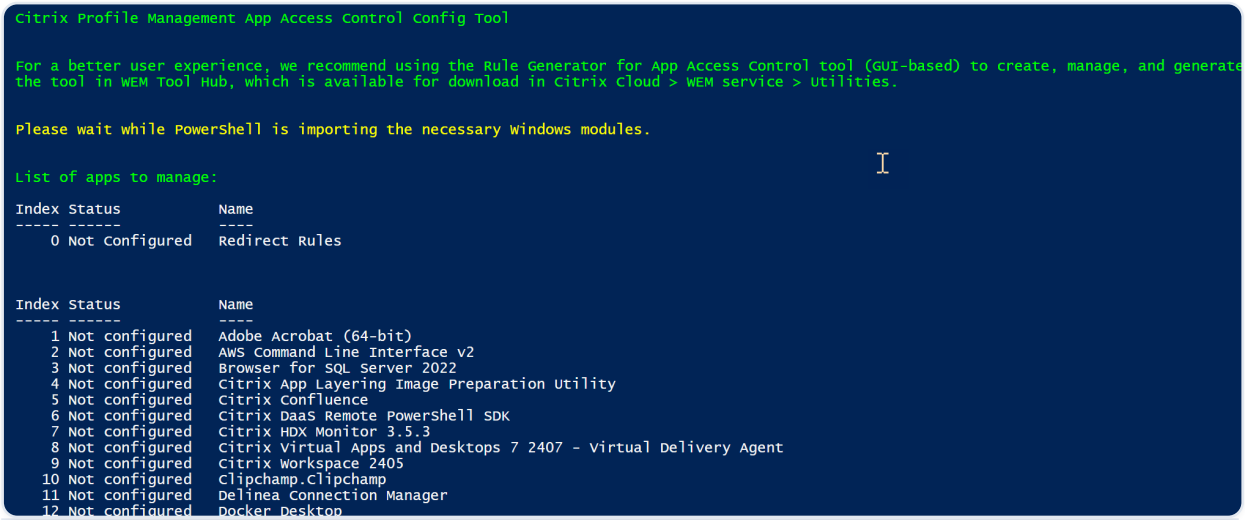
ルールジェネレーターを使用してルールを作成、管理、展開する

このセクションでは、PowerShellベースのルールジェネレーターを使用してルールを作成、管理、展開する方法について説明します。 開始する前に、ツールを実行するマシンが次の要件を満たしていることを確認してください。

- Windows 10または11、あるいはWindows Server 2016、2019、2022で実行されます。
- (AD環境のみ) ユーザーおよびマシンと同じドメインに属していること。

一般的な手順は次のとおりです。

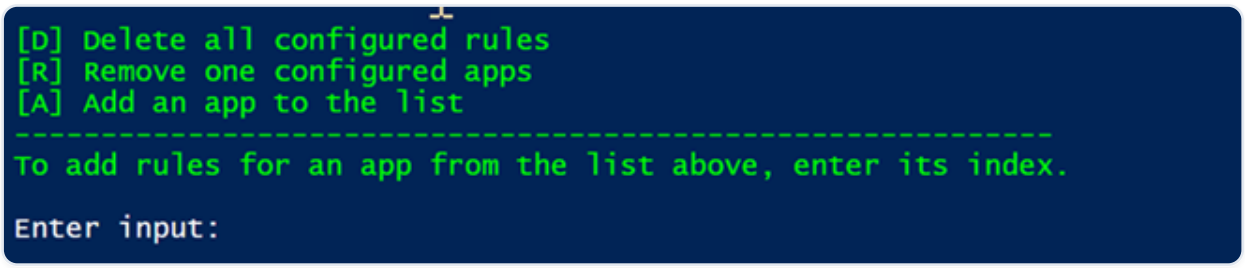
1. **Windows PowerShell**を管理者として実行します。
2. Profile Management インストールパッケージにある**\tool**フォルダーにアクセスし、**CPM_App_Access_Control_Config.ps1**を実行します。ルールのステータス情報が表示されます。



フィールド	説明
インデックス	- リダイレクトルールには0を表示します。

フィールド	説明
	- アプリケーション非表示ルールのインデックスを表示します。
ステータス	ルールのステータスを表示します。**構成済み**、**未構成**、**構成済み & 適用済み**が含まれます。
名前	- リダイレクトルールの場合、**リダイレクトルール**を表示します。
	- アプリケーション非表示ルールの場合、マシンにインストールされているアプリケーションの名前を表示します。

3. リダイレクトルールを管理するには、**0**を入力します。構成済みのリダイレクトルールがすべて表示されます。



4. リダイレクトルールを追加するには、**1**を入力します。
5. 画面の指示に従ってルールを構成します。

- **リダイレクトオブジェクトの種類。** ファイル、フォルダー、レジストリキー、またはレジストリ値から種類を選択します。
- **リダイレクト元とリダイレクト先。** 指定したリダイレクトオブジェクトのソースパスと宛先パスを指定します。
- **割り当て。** このリダイレクトを適用するユーザー、マシン、プロセスをコンマで区切って指定します。詳細については、次の表を参照してください。

割り当ての種類	説明
ADユーザー、ユーザーグループ、または OU	それらのADドメイン名をコンマで区切って入力します。

割り当ての種類	説明
ADマシン	それらのDNSホスト名をコンマで区切って入力します。
NDJマシンカタログ	カタログ名をコンマで区切って入力します。例: `Machine_catalog_name1,Machine_catalog_name2`
NDJマシン	WEM WebコンソールでAAD/NDJオブジェクトセレクターを使用してマシン名を収集し、それらの名前をコンマで区切って入力します。例: `Machine_name1,Machine_name2`。すべてのドメインに参加していないマシンを追加するには、**NDJ***と入力します。ワイルドカード`*`と`?`はNDJマシン名でサポートされています。
注: 特定のユーザーまたはマシンを除外するには、それらの識別子の前に`EX>`を追加します。特定のプロセスを除外するには、それらの識別子の前に`?`を追加します。除外を割り当てられたグループから垂直バー (|) を使用して区切ります。	

6. 手順4と5を繰り返して、リダイレクトルールを追加します。
7. 画面の指示に従って、構成したルールの生データを生成し、将来の使用のために.txtファイルに保存します。
8. ルールが期待どおりに機能するかどうかをテストするには、画面の指示に従って、それらをこのマシンまたはマシンのグループに展開します。

リダイレクトルールをマシンに展開する

リダイレクトルールを作成および生成したら、GPO、Studio、またはWEMを使用して、アプリアクセスコントロールポリシーを使用してマシンに展開します。詳細については、GPOを使用してアプリアクセスコントロールを有効にするを参照してください。

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にして構成する

デフォルトでは、ほとんどのProfile Managementポリシーはマシンレベルで機能します。これらのポリシー設定をコンテナ（サイト、ドメイン、またはOU）に適用すると、誰がログオンしても、そのコンテナ内のマシンに適用されます。

「*ユーザーレベルのポリシー設定*」機能が有効になっている場合、これらのマシンレベルのポリシーはユーザーレベルで機能します。つまり、ユーザーまたはグループ固有の設定を構成できます。これらの設定をコンテナに適用すると、指定されたユーザーまたは指定されたグループのユーザーがそのコンテナ内のマシンにログオンした場合にのみ適用されます。

設定の競合が発生した場合、Profile Managementは次の優先順位で処理します。

1. ユーザー固有の設定
2. ユーザーグループ固有の設定
3. マシンレベルの設定

構成手順

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にして構成するには、次の手順に従います。

1. ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする
2. ユーザーまたはグループのポリシー設定を構成する
3. （オプション）ユーザーグループの優先順位を指定する。

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする

ユーザーレベルのProfile Management設定を適用するには、まず「*ユーザーレベルのポリシー設定*」機能を有効にする必要があります。この目標は、グループポリシーオブジェクト（GPO）、Workspace Environment Management™（WEM）、またはWeb Studioなどのさまざまなツールを使用して達成できます。

GPOを使用してこの機能を有効にするには、次の手順に従います。

1. GPOを作成し、サイト、ドメイン、またはOUなどのターゲットマシンを保持するコンテナにリンクします。
2. GPO のグループポリシー管理エディターを開きます。
3. **ポリシー \> 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) \> Citrix コンポーネント \> Profile Management \> 詳細設定**にアクセスします。
4. **ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする**ポリシーをダブルクリックします。

5. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、無効になります。

ユーザーとグループのポリシー設定を構成する

このセクションでは、ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成する方法について説明します。

たとえば、組織に経理、営業、マーケティングなどのグループがあるとします。経理グループは独自のユーザー ストアを使用し、他のグループはユーザー ストアを共有します。この要件を満たすには、経理グループに対してユーザーレベルの**ユーザー ストアへのパス**ポリシーを構成し、組織に対してマシンレベルの**ユーザー ストアへのパス**設定を構成します。

ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成するには、次の手順に従います。

1. ユーザーとグループのセキュリティ識別子 (SID) を取得する
2. ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成する

ユーザーとグループのセキュリティ識別子 (SID) を取得する

ユーザーまたはグループに対してユーザー固有の Profile Management 設定を構成する前に、まずそのドメイン名に基づいて SID を取得します。詳細な手順は次のとおりです。

1. ドメインコントローラーにログオンします。
2. **Windows PowerShell** を管理者として実行します。
3. PowerShell コマンドラインから、必要に応じて次のいずれかのコマンドを実行します。
   - ユーザーの SID を取得するには、`Get-ADUser -Identity <ADUser>` と入力します。例: `Get-ADUser -Identity user5`
   - グループの SID を取得するには、`Get-ADGroup -Identity <ADGroup>` と入力します。例: `Get-ADGroup -Identity HR_Group`
4. 返された結果から SID をコピーします (たとえば、次の結果の `S-1-5-21-2069497100-3951106413-1778302672-1117`)。

```
PS C:\Users\Administrator> get-aduser -identity user5

DistinguishedName : CN=user5,CN=Users,DC=bvt,DC=local
Enabled           : True
GivenName         : user5
Name              : user5
ObjectClass       : user
ObjectGUID        : 9cc82246-4939-4068-aeb3-4a6025206c1f
SamAccountName    : user5
SID               : S-1-5-21-2069497100-3951106413-1778302672-1117
Surname           :
UserPrincipalName : u
```

ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成する

ユーザーレベルのポリシー設定は、以下を使用して構成できます。

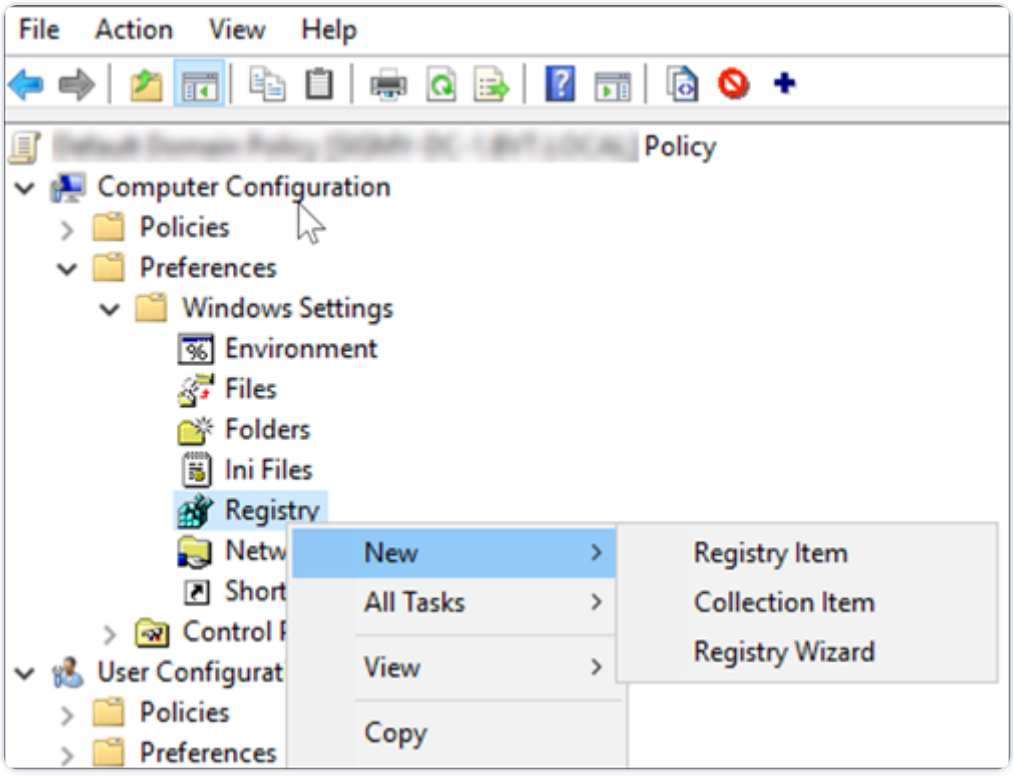
- グループポリシー設定 (GPP)
- WEM Web コンソール

GPP を使用して設定を構成する

GPP を使用してユーザーレベルのポリシー設定を構成できます。グループポリシーの一部として、GPP 設定は GPO を介してドメイン参加済みコンピューターに自動的に配布されます。

ユーザーまたはグループのポリシー設定を構成するには、次の手順に従います。

1. ターゲット GPO のグループポリシー管理エディターを開きます。



2. 「**コンピューターの構成 \> 基本設定 \> Windows の設定 \> レジストリ**」に移動し、「**新規 \> レジストリ項目**」を右クリックします。「**新規レジストリのプロパティ**」ウィンドウが表示されます。

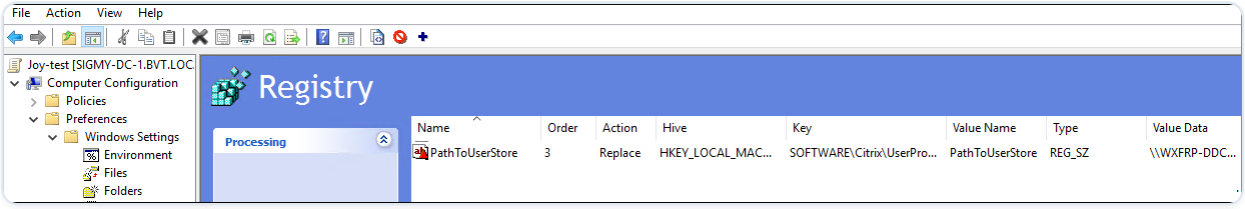
   GPP レジストリエントリ(/en-us/profile-management/current-release/media/gpp-initial-page.png)

3. **全般**タブで、次の表に示すように、ユーザーまたはグループ固有のポリシーを構成します。この表には、ユーザー（SID: `S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108`）の *ユーザー ストアへのパス* ポリシーを設定する構成例も示されています。

フィールド	説明	例
アクション	デフォルトのままにします。	更新
ハイブ	デフォルトのままにします。	HKEY_LOCAL_MACHINE
キーパス	ユーザーまたはグループ固有のポリシーのレジストリキーパスを入力します。まず、GPP プロパティ設定テーブルでポリシー名を検索してキーパスを取得します。次に、キーパス内の `<SID>` を実際の SID に置き換えます。	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108`
値の名前	ポリシーのレジストリ値の名前を入力します。ポリシーの値の名前を見つけるには、GPP プロパティ設定テーブルでポリシー名を検索します。	ユーザーストアへのパス
値のタイプ	ポリシーのレジストリ値のタイプ（REG_SZ または REG_DWORD）を選択します。ポリシーの値のタイプを見つけるには、GPP プロパティ設定テーブルでポリシー名を検索します。	REG_SZ

フィールド	説明	例
値のデータ	ポリシーのレジストリ値のデータ（設定値）を入力します。値のデータはポリシーによって異なります。詳細については、GPP プロパティ設定テーブルを参照してください。	`\\WXFRP-DDC-1\UPM1\#sAMAccountName#\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`!

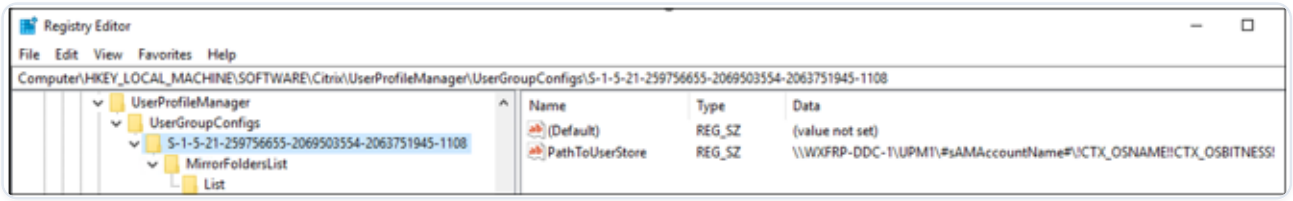
4. 「**共通**」タブをクリックし、「**適用されなくなったときにこの項目を削除する**」を選択します。メッセージボックスが表示されます。
5. 「**OK**」をクリックして確認します。「**全般**」タブの「**アクション**」オプションが「**置換**」に変わります。
6. 「**OK**」または「**適用**」をクリックします。変更はドメインコントローラーに保存されます。構成結果（例: *ユーザー ストアへのパス* ポリシー）が表示されます。



7. このGPOに対して、さらにユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成するには、それぞれの手順2～6を繰り返します。「例」セクションの構成例を参照してください。

これらのポリシー設定をコンピューターに手動で同期するには、コンピューターで `groupupdate/force` コマンドを実行します。ユーザーレベルのポリシー設定を有効にするには、コンピューターからログオフし、再度ログオンします。

次のスクリーンショットに示すように、ユーザーレベルのポリシー設定は次のレジストリキー `HKLM\SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>` に表示されます。



WEM Web Console を使用して設定を構成する

WEM Web Console を使用して、ユーザーレベルのポリシー設定を構成できます。詳細については、Workspace Environment Management Service ドキュメントの「GPO の作成」を参照してください。

例

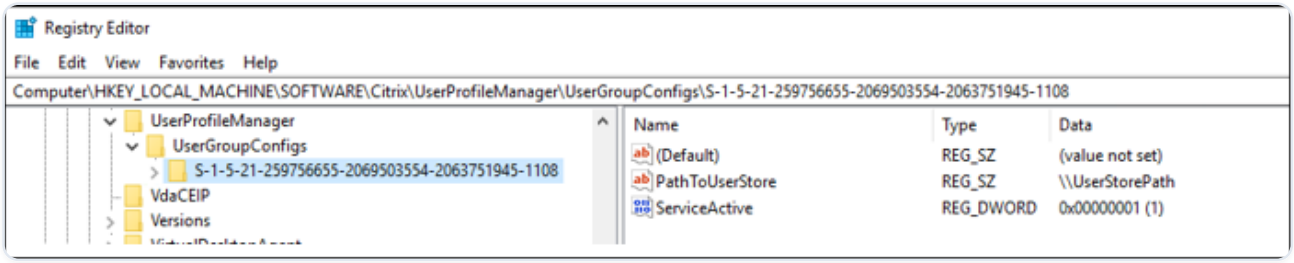
このセクションでは、ユーザーレベルのポリシー設定を構成するためのいくつかの例を示します。

Profile Management を有効にする

GPP 設定を使用して、ユーザーまたはグループの「**プロファイル管理を有効にする**」ポリシーを構成します。

フィールド	値
キーパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108
値の名前	ServiceActive
値のタイプ	REG_DWORD
値のデータ	1

レジストリ内の場所:



ミラーリングするフォルダー

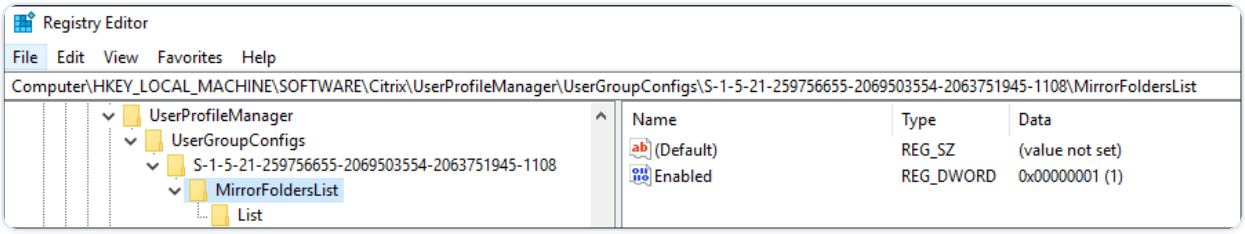
> **注:**
>
> ファイルとフォルダーのリストを含むユーザー固有のポリシーを構成するには、複数のGPPレジストリアイテムを構成する必要があります。

ユーザーまたはグループの**ミラーリングするフォルダー**ポリシーを構成するには、次の手順に従います。

1. これらのGPP設定を使用してポリシーを有効にします。

フィールド	値
キーパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108\MirrorFoldersList
値の名前	有効
値のタイプ	REG_DWORD
値のデータ	00000001

レジストリ内の場所:

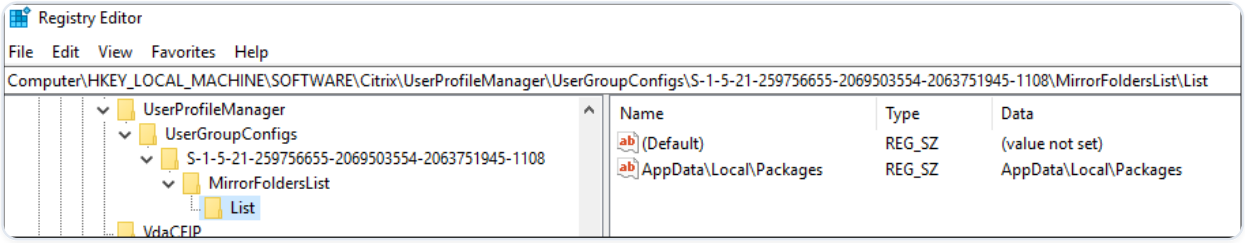


2. これらのGPP設定を使用して、ミラーリングするフォルダー（例: AppData\Local\Packages）を追加します。

フィールド	値
キーパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108\MirrorFoldersList\List
値の名前	AppData\Local\Packages
値のタイプ	REG_SZ
値のデータ	AppData\Local\Packages

> **注:**
>
> 「**値の名前**」フィールドと「**値のデータ**」フィールドの両方に、ミラーリングするフォルダーを入力します。

レジストリ内の場所:



3. このポリシーにフォルダーを追加するには、手順2を繰り返します。

(オプション) ユーザーグループの優先順位を指定する

競合するポリシー設定を持つ複数のグループにユーザーが属している場合、それらのグループの優先順位を指定します。

設定の競合が発生した場合、最も優先順位の高いグループのポリシー設定が優先されます。優先順位が指定されていない場合、アルファベット順で最も早いSIDを持つグループが優先されます。

GPOを使用して優先順位を設定するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー \> 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) \> Citrix コンポーネント \> Profile Management \> 詳細設定**にアクセスします。
3. 「**ユーザーグループの優先順位を設定する**」ポリシーをダブルクリックします。ポリシーウィンドウが表示されます。
4. 「**Enabled**」を選択します。
5. 「**ユーザーグループの優先順位**」フィールドに、グループのセキュリティ識別子 (SID) またはドメイン名を優先順位の降順で入力し、セミコロン (`;`) で区切ります。

   例:

   `ctxxa.local\groupb;S-1-5-21-674278408-26188528-2146851469-1174;ctxxa.local\groupc;`
6. **OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、優先順位は指定されません。

GPPプロパティ設定

この表は、ユーザーレベルのProfile ManagementポリシーのGPPプロパティ設定を一覧表示します。

注:

この表には6つの列があります。一部はビューポートを超えて表示される場合があります。非表示の列を表示するには、下にスクロールして水平スクロールバーを使用してください。

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
Profile Management を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ServiceActive	0:無効; 1:有効;	
処理されるグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProcessedGroups`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProcessedGroups\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
除外されるグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`UserGroupConfigs\<SID>\ExcludedGroups`				
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ExcludedGroups\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ローカル管理者によるログオンの処理	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ProcessAdmins	0:無効; 1:有効;	
ユーザーストアへのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	PathToUserStore	絶対パス、またはホームディレクトリからの相対パス。	
ユーザーストアの移行	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	MigrateUserStore	以前使用していたユーザー ストア パス。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
アクティブライトバック	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSMidSessionWriteBack	0:無効; 1:有効;	
アクティブライトバックレジストリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSMidSessionWriteBackReg	0:無効; 1:有効;	
セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSMidSessionWriteBackSessionLock	0:無効; 1:有効;	
オフラインプロファイルのサポート	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OfflineSupport	0:無効; 1:有効;	
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	DeleteCachedProfilesOnLogoff	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	ProfileDeleteDelay	遅延 (秒単位)。	
既存プロファイルの移行	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	MigrateWindowsProfilesToUserStoreEnabled	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	MigrateWindowsProfilesToUserStore	1:ローカルとローミング; 2:ローカル; 3:ローミング; 4:なし;	
既存のアプリケーションプロファイルの自動移行	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ApplicationProfilesAutoMigrationEnabled	0:無効; 1:有効;	
ローカルプロファイルの競合処理	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	LocalProfileConflictHandling	1:ローカルプロファイルを使用; 2:ローカルプロファイルを削除; 3:ローカルプロファイ	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
				ルの名前を変更;	
テンプレートプロファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	TemplateProfilePath	テンプレートプロファイルへのパス。	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	TemplateProfileOverridesLocalProfile	0:無効; 1:有効;	テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	TemplateProfileOverridesRoamingProfile	0:無効; 1:有効;	テンプレートプロファイルが移動プロファイルを上書きする
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	TemplateProfileIsMandatory	0:無効; 1:有効;	すべてのログオンでCitrix必須プロファイルとして使用されるテンプレートプロファイル
ロックされたファイルへのアクセ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfil`	REG_DWORD	LoadRetries	再試行回数。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ス時の再試行回数	`eManager\UserGroupConfigs\<SID>`				
自動構成を無効にする	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	DisableDynamicConfig	0:無効; 1:有効;	
問題が発生した場合にユーザーをログオフする	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	LogoffRatherThanTempProfile	0:無効; 1:有効;	
カスタマーエクスペリエンス向上プログラム	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CEIP有効	0:無効; 1:有効;	
Outlook の検索インデックスローミングを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookSearchRoamingEnabled	0:無効; 1:有効;	
Outlook検索インデックスデータベース - バックアップと復元	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroup`	REG_DWORD	OutlookEdbBackupEnabled	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`Configs\<SID>`				
Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookOstVhdxMaxNum	Outlook OSTファイルを保存するためのVHDXディスクの最大数。	
プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	FSLogixProfileContainerSupport	0:無効; 1:有効;	
ユーザーストアをレプリケートする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MultipleRemoteStoreReplication`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MultipleRemoteStoreReplication\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CredBasedAccessEnabled	0:無効; 1:有効;	
VHDX ファイルのストレージ パスをカスタマイズする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	PathToVhdStore	VHDXファイルを保存するパス。	
セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	EnableVolumeReattach	0:無効; 1:有効;	
ログオン時のユーザーグループポ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfil`	REG_DWORD	SyncGpoStateEnabled	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
リシーの非同期処理を有効にする	`eManager\UserGroupConfigs\<SID>`				
OneDriveコンテナを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\OneDriveContainer`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\OneDriveContainer\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CompactVHDFreePortion	空き容量の比率 (%)。	
VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroup`	REG_DWORD	CompactVHDIterations	ログオフの回数。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`Configs\<SID>`				
VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CompactVHDnDefrag	0:無効; 1:有効;	
プロファイルコンテナ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainer`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainer\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ProfileContainerLocalCache	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
プロファイルコンテナから除外するフォルダー	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListDir`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListDir\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルコンテナに含めるフォルダー	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListDir`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfil`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`eManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListDir\List`				
プロファイルコンテナから除外するファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListFile`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListFile\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
プロファイルコンテナに含めるファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListFile`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListFile\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
VHDディスクの圧縮を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	EnableVHDCompact	0:無効; 1:有効;	
除外リスト	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\Excl`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`usionLis tRegistry`				
	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>\Excl usionList Registry\ List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
包含リスト	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>\Incl usionList Registry`	REG_DWO RD	有効	0:無効; 1: 有効;	
	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>\Incl usionList Registry\ List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
NTUSER.DATのバックアップ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	LastKnownGoodRegistry	0:無効; 1:有効;	
除外リスト - ファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListFiles`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListFiles\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
除外リスト - ディレクトリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListDir`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListDir\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ログオン除外チェック	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	LogonExclusionCheck	0:除外されたファイルまたはフォルダーを同期する; 1:除外されたファイルまたはフォルダーを無視する; 2:除外されたファイルまたはフォルダーを削除する;	
大容量ファイルの処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\LargeFileHandlingList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\LargeFileHandlingList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
同期するディレクトリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncDirList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncDirList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
同期するファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncFileList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncFileList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ミラーリングするフォルダー	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MirrorFoldersList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MirrorFoldersList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
フォルダーのミラーリングを高速化する	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AccelerateFolderMirroring	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
プロファイルストリーミング	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PS有効	0:無効; 1:有効;	
ペンディングエリアのプロファイルストリーミングを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSForPendingAreaEnabled	0:無効; 1:有効;	
常にキャッシュ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSAlwaysCache	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSAlwaysCacheSize	このサイズ以上のファイルをキャッシュします (MB単位)。	
保留中のエリアロックファイルのタイムアウト (日数)	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSPendingLockTimeout	保留中のエリアロックファイルのタイムアウト (日数)。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ストリーミングされたユーザープロファイルグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\PSUserGroupsList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\PSUserGroupsList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\StreamingExclusionList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\StreamingExcl`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`usionLis t\List`				
クロスプラットフォーム設定を有効にする	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>`	REG_DWO RD	CP有効	0:無効; 1:有効;	
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>\CPUs erGroupLi st`	REG_DWO RD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>\CPUs erGroupLi st\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
クロスプラットフォーム定義へのパス	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>`	REG_SZ	CPSchema Path	クロスプラットフォーム定義へのパス。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	シーピーパス	クロスプラットフォーム設定ストアへのパス。	
クロスプラットフォーム設定の作成元	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	CPMigrationFromBaseProfileToCPStore	0:無効; 1:有効;	
Citrix Virtual Appsの最適化を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	XenAppOptimizationEnabled	0:無効; 1:有効;	
Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	XenAppOptimizationDefinitionPath	Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス。	
重複排除のために共有ストアに含めるファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFi`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`leInclusionList`				
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFileInclusionList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
共有ストアから除外するファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFileExclusionList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFileExclusionList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
プロファイルコンテナの自動拡張しきい値	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AutoExtendThreshold	自動拡張のしきい値 (パーセント)	
プロファイルコンテナの自動拡張増分	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AutoExtendSize	自動拡張の増分 (GB)	
プロファイルコンテナの自動拡張制限	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AutoExtendLimit	自動拡張の制限 (GB)	
VHD コンテナーのデフォルト容量	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	VhdCapacity	デフォルト容量 (GB)	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	DisableConcurrentAccessToProfileContainer	0:無効; 1:有効;	プロファイルコンテナ
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	DisableConcurrentAccessToOneDriveContainer	0:無効; 1:有効;	OneDriveコンテナ
UWPアプリのローミング	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	EnableUwpAppsRoaming	0:無効; 1:有効;	

Azure AD参加済みおよびドメイン非参加のVDAマシンのサポートを有効にする

Citrix Profile Managementは、顧客管理のAzureサブスクリプションで、Azure AD参加済みおよびドメイン非参加のVDAマシン向けにプロファイル管理を提供できるようになりました。

前提条件

- プロファイル管理 2203 以降
- VDAバージョン2203以降
- Workspace Environment Management (WEM)を使用してプロファイルストレージサーバーの資格情報を保存する場合は、WEMエージェントバージョン2109.2.0.1以降

Profile Managementを有効にする

Azure AD参加済みまたはドメイン非参加のVDAマシンでProfile Managementを有効にするには、次の設定を完了します。

1. **Profile Management**で、**Profile Managementを有効にする**ポリシーを**有効**に設定します。
2. **ユーザーストアへのパス**ポリシーを、VDAからアクセス可能な有効なパスに設定します。たとえば、ユーザーストアがファイルサーバーまたはAzure Files共有上にある場合、アクセス可能です。
3. **プロファイルコンテナ**ポリシーを**有効**に設定し、プロファイルコンテナリストにアスタリスク（*）を追加します。詳しくは、「ユーザープロファイル全体のプロファイルコンテナを有効にする」を参照してください。
4. **ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**ポリシーを**有効**に設定します。次に、Profile Managementがユーザーストアにアクセスできるように、WEMまたはWindows資格情報マネージャーにプロファイルストレージサーバーの資格情報を保存します。詳しくは、「ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする」を参照してください。

ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

デフォルトでは、Citrix Profile Management は現在のユーザーを偽装してユーザー ストアにアクセスします。この動作では、現在のユーザーがユーザー ストアに直接アクセスする権限を持っている必要があります。対照的に、**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**ポリシーを使用すると、Profile Management はストア自身の資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできます。

このポリシーにより、ユーザー ストアの展開とアクセスにおいて、より柔軟性が得られます。たとえば、このポリシーを使用すると、現在のユーザーがアクセス権を持たないファイル共有 (Azure Files など) にユーザー ストアを展開できます。または、ユーザー ストアへのアクセス時に Profile Management が現在のユーザーを偽装しないようにしたい場合は、このポリシーを有効にできます。

> **注：**
>
> Profile Management は 2 種類のプロファイル ソリューションを提供しており、ユーザー ストアは両方のストレージ場所として機能します。

- ファイルベースのソリューション。ユーザー プロファイルは、ログオン時にリモート ユーザー ストアからローカル コンピューターにフェッチされ、ログオフ時に書き戻されます。
- コンテナーベースのソリューション。ユーザー プロファイルは VHDX ファイル (プロファイル コンテナーとして知られています) に保存されます。これらの VHDX ファイルは、ログオン時にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。

このポリシーは、ファイルベースとコンテナーベースの両方のソリューションで利用できます。Profile Management バージョン 2212 より前のバージョンでは、このポリシーはコンテナーベースのソリューションでのみ利用できます。

セキュアなユーザー ストアの作成について詳しくは、Microsoft TechNet Web サイトの「移動ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」を参照してください。

Profile Management がストア自身の資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできるようにするには、次の両方のアクションを実行する必要があります。

- Profile Management が実行されている各マシンで、**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**ポリシーを有効にします。
- ストアの資格情報をそれらのマシンに追加します。

その目標を達成するには、次のいずれかの方法を使用できます。Workspace Environment Management™ (WEM) サービス と GPO。

注：

コンテナーベースのソリューションが有効になっている場合、ユーザー ストアの NTFS アクセス許可は保持されます。

WEMサービスを使用して資格情報ベースのアクセスを有効にする

WEMを使用すると、Profile Managementが実行されている各マシンで同じ資格情報を入力する必要がなくなります。WEMサービスコンソールでポリシーを有効にし、ユーザープロファイルストアの資格情報を一度だけ入力します。その後、WEMサービスはこれらの設定を各マシンに適用します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. 管理コンソールで、**ポリシーとプロファイル > Citrix Profile Management設定 > ユーザープロファイルストアの資格情報**に移動します。
2. **ユーザープロファイルストアの資格情報**タブで、**ユーザープロファイルストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**チェックボックスをオンにします。

   WEMでユーザープロファイルストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にするチェックボックスを選択する(/en-us/profile-management/current-release/media/selecting-the-enable-credential-based-access-to-user-store-check-box-in-wem.png)
3. **追加**をクリックします。**新しい資格情報**ダイアログボックスが表示されます。

   WEMの新しい資格情報ダイアログボックス(/en-us/profile-management/current-release/media/the-new-credential-dialog-box-in-wem.png)
4. プロファイルストレージサーバーのFQDNまたはIPアドレスと、その資格情報を入力します。
5. **OK**をクリックします。

GPOを使用して資格情報ベースのアクセスを有効にする

GPOを使用してポリシーを有効にする場合、Profile Managementが実行されている各マシンで資格情報を手動で追加する必要があります。

ポリシーを有効にする

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. 「**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**」にアクセスし、「**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**」をダブルクリックします。
3. 「**有効**」を選択します。
4. 「**OK**」をクリックします。

Windows 資格情報マネージャーに資格情報を追加する

Profile Management は、ユーザー ストアにアクセスするために、マシンに保存されている資格情報を使用します。Profile Management が実行されている各マシンで、ユーザー ストアの資格情報を **Windows 資格情報マネージャー**に追加します。詳細な手順は次のとおりです。

1. Sysinternals Web サイトから **PsExec** をダウンロードし、ファイルを `C:\PSTools` に解凍します。
2. **スタート**メニューから、**コマンド プロンプト**を右クリックし、**管理者として実行**を選択します。コマンド シェルが起動します。
3. `C:\PSTools\PsExec -s -i cmd` コマンドを実行します。別のコマンド シェルが起動します。

> **注:**
>
> `-s` パラメーターは、Local System アカウントを使用してツールを実行していることを示します。その結果、資格情報を安全に保存できます。

4. 新しいコマンド シェルで、`rundll32.exe keymgr.dll, KRShowKeyMgr` コマンドを実行します。**保存されているユーザー名とパスワード**ダイアログ ボックスが表示されます。
5. **保存されているユーザー名とパスワード**ダイアログ ボックスで、**追加**をクリックします。
6. プロファイル ストレージ サーバーの FQDN または IP アドレスとその資格情報を入力し、既定の資格情報タイプはそのままにし、**OK**をクリックします。

ラージファイル処理を有効にする

プロファイル内に存在するラージファイルは、ログオンまたはログオフが遅くなる一般的な原因です。Citrix®は、ラージファイルをユーザーストアにリダイレクトするオプションを提供します。このオプションにより、これらのファイルをネットワーク経由で同期する必要がなくなります。

グループポリシーでラージファイル処理を有効にするには、次の手順を実行します。

1. **Profile Management**の下で、**File system**フォルダーを開きます。
2. **Large File Handling - Files to be created as symbolic links**ポリシーをダブルクリックします。
3. 処理するファイルを指定します。

UPMPolicyDefaults_all.iniファイルでラージファイル処理を有効にするには、次の手順を実行します。

1. .iniファイルに**\[LargeFileHandlingList\]**セクションを追加します。
2. そのセクションの下で、処理するファイルを指定します。

ファイルを参照するポリシーではワイルドカードを使用できます。例：`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook*.ost`

これらのファイルがCitrix Profile Managementの除外リストに追加されていないことを確認してください。

> **注**
>
> 一部のアプリケーションでは、ファイルの同時アクセスが許可されていません。Citrixでは、大容量ファイル処理ポリシーを定義する際に、アプリケーションの動作を考慮することをお勧めします。

> Citrixは、Microsoftセキュリティ更新プログラムMS15-090を適用することを推奨します。一般的なセキュリティ対策として、Microsoft Windowsシステムを常に最新の状態に保つようにしてください。

ファイル重複排除を有効にする

ユーザーストア内のさまざまなユーザープロファイルに同じファイルが存在する可能性があります。ユーザーストアにファイルの重複インスタンスが保存されていると、ストレージコストが増加します。

ファイル重複排除ポリシーにより、Profile Managementはユーザーストアから重複ファイルを削除し、それらの1つのインスタンスを中央の場所（*共有ストア*と呼ばれます）に保存できます。これにより、ユーザーストアでのファイルの重複が回避され、ストレージコストが削減されます。重複排除は、ユーザーストアと各レプリケートされたユーザーストアに適用されます。

ファイル重複排除を有効にし、共有ストアに含めるファイルを指定するには、次のポリシーを構成します。

1. **ファイル重複排除 > 重複排除のために共有ストアに含めるファイル**
2. (オプション) **ファイル重複排除 > 共有ストアから除外するファイル**
3. (オプション) **ファイル重複排除 > プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズ**

> **注:**

> 2311以降、ファイル重複排除ポリシーはプロファイルコンテナにも適用されます。最適なユーザーログオンエクスペリエンスを確保するために、Profile Managementはプロファイルコンテナから最大10個のファイルを重複排除します（ただし、**重複排除のために共有ストアに含めるファイル** ポリシーで10個を超えるファイルを定義できます）。重複排除は、リストされたファイルが更新または作成され、指定されたサイズを超えた場合に、重複排除されたファイルが10個未満である限り発生します。

ファイル重複排除ポリシーを構成すると、Profile Managementはユーザーストアと同じパスに共有ストアを作成します。例：

- ユーザーストアへのパス: `\\server\profiles$\%USERDOMAIN%\%USERNAME%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`!
- 共有ストアへのパス: `\\server\profiles$\%USERDOMAIN%\SharedFilesStore`

重複排除のために共有ストアにファイルを含める

ユーザーストアに重複ファイルが存在する場合、ファイル重複排除を有効にし、重複排除のために共有ストアに含めるファイルを指定します。

> **重要:**

> 共有ストアに重複排除されたすべてのファイルは、すべてのドメインユーザーが読み取れるため、個人データや機密データの重複排除は推奨しません。

> 詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > ファイルの重複排除**にアクセスします。
3. **重複排除のために共有ストアに含めるファイル**をダブルクリックします。
4. **有効**を選択します。
5. **共有ストアに含めるファイルのリスト**フィールドで、**表示**をクリックします。
6. ユーザープロファイルに対する相対パスでファイル名を入力します。

   ワイルドカードは、以下の考慮事項とともにサポートされています。

- ファイル名のワイルドカードは再帰的に適用されます。現在のフォルダーのみに制限するには、垂直バー (`|`) を使用します。
- フォルダー名のワイルドカードは再帰的に適用されません。

例:

- `Downloads\profilemgt_x64.msi` — Downloads フォルダー内の profilemgt_x64.msi ファイル
- `*.cfg` — ユーザープロファイルフォルダーとそのサブフォルダー内の .cfg 拡張子を持つファイル
- `Music*` — Music フォルダーとそのサブフォルダー内のファイル
- `Downloads*.iso` — ダウンロードフォルダーとそのサブフォルダー内の.iso拡張子を持つファイル
- `Downloads*.iso|` — ダウンロードフォルダー内のみの.iso拡張子を持つファイル
- `AppData\Local\Microsoft\OneDrive**.dll` — AppData\Local\Microsoft\OneDriveフォルダーの直下にあるサブフォルダー内の.dll拡張子を持つファイル

7. **OK** をクリックし、もう一度 **OK** をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定が無効になっている場合、共有ストアは無効になります。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、共有ストアは無効になります。

共有ストアからファイルを除外する

ワイルドカード文字を使用すると、ファイルのグループを一度に共有ストアに含めることができます。グループから一部のファイルを除外するには、**共有ストアから除外するファイル** ポリシーを次のように有効にして構成します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルの重複排除** にアクセスします。
3. **共有ストアから除外するファイル** をダブルクリックします。
4. **有効** を選択します。

5. **共有ストアから除外するファイルのリスト** フィールドで、**表示** をクリックします。
6. ユーザープロファイルからの相対パスでファイル名を入力します。

   ワイルドカードは、以下の考慮事項とともにサポートされています。

   - ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
   - フォルダー名内のワイルドカードは再帰的に適用されません。

   例:

   - `Downloads\profilemgt_x64.msi` — Downloadsフォルダー内のprofilemgt_x64.msiファイル
   - `*.tmp` — ユーザープロファイルフォルダーとそのサブフォルダー内の.tmp拡張子を持つファイル
   - `AppData*.tmp` — AppDataフォルダーとそのサブフォルダー内の.tmp拡張子を持つファイル
   - `AppData*.tmp|` — AppDataフォルダー内のみの.tmp拡張子を持つファイル
   - `Downloads*\a.txt` — Downloadsフォルダーの直下のサブフォルダー内のa.txtファイル
7. **OK** をクリックし、もう一度 **OK** をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定が無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズを指定します

プロファイルコンテナが有効になっている場合、プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズを指定できます。デフォルトでは、Profile Managementは、ファイルが256 MBを超える場合にのみプロファイルコンテナからファイルを重複排除します。必要に応じて、次の手順でこのしきい値サイズを増やすことができます。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。

2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルの重複排除**にアクセスします。
3. **プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズ**をダブルクリックします。
4. **有効**を選択します。
5. **最小サイズ (メガバイト)** フィールドに、必要に応じて256より大きい値を入力します。
6. **OK**をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、値は256になります。

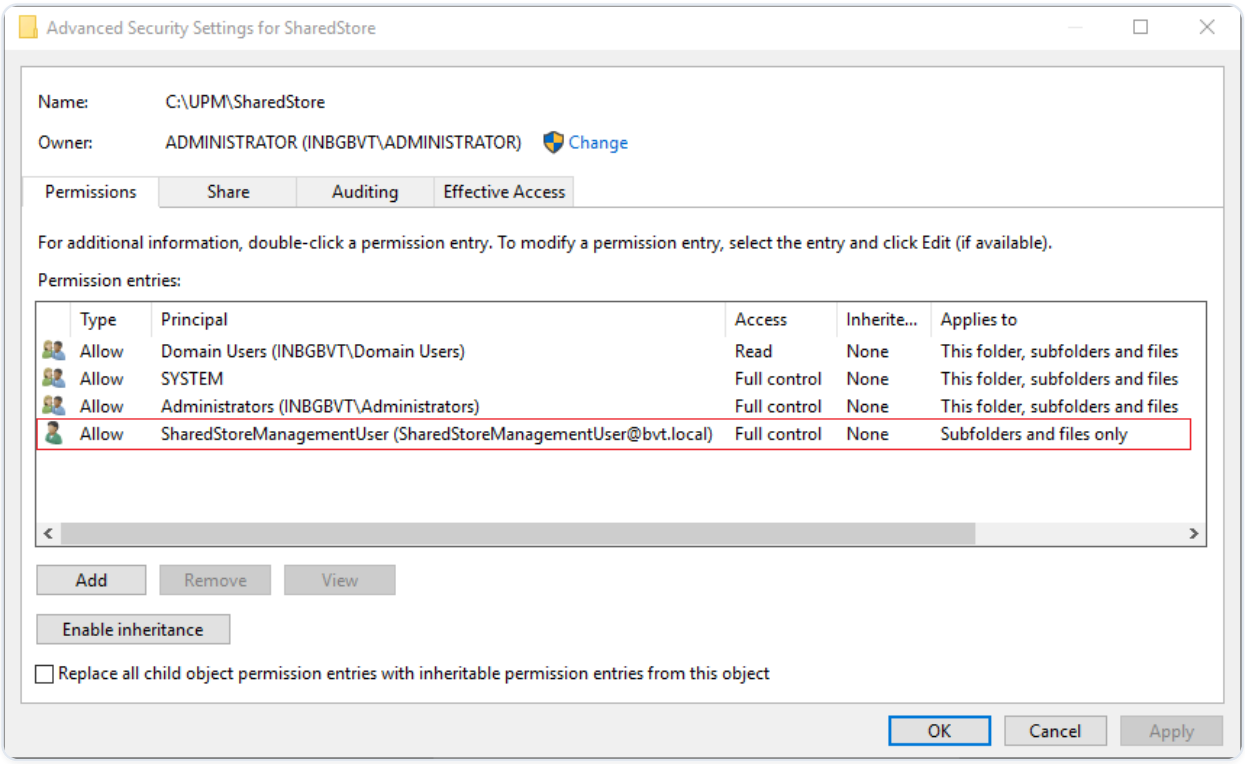
共有ストアのセキュリティ設定を構成する

共有ストアが存在しない場合、Profile Managementは以下のアクセス許可設定で自動的に共有ストアを作成します。

- ドメインコンピューター: フルコントロールアクセス
- ドメインユーザー: 読み取りアクセス

デフォルト設定ではドメインコンピューターにフルコントロールアクセス権が付与されるため、セキュリティを向上させるために、共有ストアを手動で作成し、資格情報ベースのアクセスを実装することをお勧めします。そのためには、次の手順に従ってください。

1. **Path to user store** 設定の `%USERNAME%` パラメーターと同じディレクトリレベルに共有ストアフォルダーを作成します。たとえば、**Path to user store** 設定が `\\SERVER\UPM_USER_STORE\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` の場合、共有ストアフォルダーは `\\SERVER\UPM_USER_STORE\SharedStore` である必要があります。
2. 共有ストアに次のアクセス許可を付与します。この図に示すように、ユーザー `SharedStoreManagementUser` は共有ストアへのアクセスに使用される資格情報です。



3. 各VDAで、共有ストアにアクセスするための `SharedStoreManagementUser` ユーザーアカウントのWindows資格情報を追加します。この目的のために、Windows資格情報マネージャーまたはWorkspace Environment Managementを使用できます。詳細については、ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする に記載されている手順を参照してください。

ネイティブの Outlook 検索エクスペリエンスを有効にする

Outlook の検索インデックスローミングを有効にする機能は、ネイティブの Outlook 検索エクスペリエンスを提供します。この機能により、オフライン Outlook データファイル (.ost) とユーザー固有の検索データベースが、ユーザープロファイルとともにローミングされます。

前提条件

この機能は、次の要件を満たすマシンで利用できます。

- オペレーティングシステム:
  - マイクロソフト Windows 10 1709 以降
  - ウィンドウズ サーバー 2016 以降
- Microsoft Outlook 2019、2016、または 2103、あるいは Microsoft Office 365

この機能が有効になるには、マシンで Microsoft Windows Search Service が有効になっていることを確認してください。既定では、Windows デスクトップでは有効になっており、Windows サーバーでは無効になっています。Windows サーバーでサービスを有効にする方法の詳細について

は、この Microsoft の記事を参照してください。以下のバージョンがテストされ、サポートされています。

- 7.0.20348.380, 7.0.20348.138,7.0.20344.1
- 7.0.21286.1000, 7.0.21343.1000
- 7.0.17134.376, 7.0.17134.285, 7.0.17134.228, 7.0.17134.1
- 7.0.16299.402, 7.0.16299.248, 7.0.16299.15
- 7.0.15063.413
- 7.0.14393.2457, 7.0.14393.2430, 7.0.14393.2368, 7.0.14393.2312, 7.0.14393.2273, 7.0.14393.2248, 7.0.14393.1884, 7.0.1493.1593
- 7.0.1393.2125, 7.0.1393.1884, 7.0.1393.1770
- 7.0.10240.17443
- 7.0.9600.18722

> **注:**
>
> この機能は、Microsoft Windows Search Service の将来のバージョンをサポートすることが期待されています。この機能が特定の将来のバージョンの Microsoft Windows Search Service をサポートしない場合は、Citrix テクニカルサポートにお問い合わせください。

仕組み

VHDX (Virtual Hard Disk) は、仮想マシン用の仮想および論理ディスクストレージ領域を表すために使用されるディスクファイル形式です。Outlook の検索インデックスローミングを有効にする機能は、VHDX ファイルに依存して動作します。

VHDX ファイルは、この機能を使用する各ユーザーに対して作成されます。VHDX ファイルは、ユーザー固有のプロファイルを、そのユーザーのプロファイル専用の個別の仮想ディスクに保存します。Profile Management は、ログオン時に VHDX ファイルをマウントし、ログオフ時にアンマウントします。VHDX ファイルは次の2種類です。

- OutlookOST.vhdx ファイル（オフライン Outlook データファイル (`.ost`) を保存）
- OutlookSearchIndex.vhdx ファイル（OutlookOST.vhdx ファイルに保存されているオフラインフォルダーファイルの検索インデックスデータベースを保存）

> **注:**
>
> デフォルトでは、Profile Management はセッション中にデタッチされた VHDX ファイルを自動的に再アタッチします。詳しくは、「セッションでデタッチされた VHDX ディスクを自動的に再アタッチする」を参照してください。

> Profile Management は、デフォルトで 30 GB の VHDX 容量を提供します。ストレージクォータを適切に計画してください。VHDX の実際の使用量が以前に構成したクォータを超えると、VHDX ファイルはアンマウントされます。

キャッシュされた Exchange モードとオンラインモード間の自動切り替え

Profile Management は、Outlook コンテナーが有効なマシンで中断のない Outlook サービスを提供します。

- ユーザーログオン時にOutlookコンテナが機能するためのすべての条件が満たされていることを検出すると、Profile ManagementはOutlookのキャッシュされたExchangeモードを自動的に有効にします。キャッシュされたExchangeモードが有効になっている場合、ユーザーはメールボックスデータのためにOutlookコンテナにリンクされます。これらの条件には以下が含まれます。
  - Outlookの検索インデックスローミングを有効にするポリシーが有効になっています。
  - Outlookコンテナがアタッチされています。
  - カスタマイズされたOSTパスが設定されていないか、Outlookコンテナのマウントパスである `appdata\local\microsoft\outlook` に設定されています。
- セッション中にコンテナがデタッチされたことを検出すると、Profile ManagementはOutlookをキャッシュされたExchangeモードからオンラインモードに切り替えます。ユーザーはメールボックスデータのためにExchange Serverにリンクされます。
- セッション中にコンテナが再アタッチされたことを検出すると、Profile ManagementはOutlookをキャッシュされたExchangeモードに戻します。

同時セッションのサポート

Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする機能により、Profile Managementは同じユーザーの同時セッションでネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供します。

この機能は、ユーザーの各同時セッションにOutlook OSTファイルのコピーを割り当てます。デフォルトでは、Profile ManagementはOutlook OSTファイルを保存するために2つのVHDXディスクを提供します（ディスクごとに1つのファイル）。ユーザーがさらにセッションを開始すると、追加のOutlook OSTファイルはローカルプロファイルに保存されます。

ストレージ容量に余裕がある場合は、VHDXディスクのデフォルト数を増やすことができます。たとえば、数を3に設定します。その結果、Profile Managementは最初の3つのセッションのOSTファイルをVHDXディスクに保存し、それ以降のセッションのOSTファイルはローカルプロファイルに保存します。

Outlook検索インデックスデータベースの自動バックアップと復元

Profile Managementは、検索インデックスデータベースの最後に確認された正常なコピーのバックアップを自動的に保存し、破損が発生した場合はそのコピーに戻すことができます。

この機能が有効になっている場合、Profile Managementは、ログオン時にデータベースが正常にマウントされるたびに、検索インデックスデータベースのバックアップを保存します。新しいバックアップが正常に保存された後、Profile Managementは以前に保存されたバックアップを削除します。Profile Managementは、バックアップを検索インデックスデータベースの正常なコピーとして扱います。検索インデックスデータベースのマウント試行が失敗した場合、Profile Managementは検索インデックスデータベースを最後に確認された正常なコピーに自動的に戻します。

> **重要:**
>
> - 検索インデックスデータベースが最初に作成され、ポリシーが有効になった後、Profile Managementは検索インデックスデータベースのバックアップを保存しません。
> - Profile Management は、新しいバックアップが正常に保存された後、以前に保存されたバックアップを削除します。バックアップは、VHDXファイルの利用可能なストレージスペースをより多く消費します。

機能を有効にする

ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供するには、「**Outlook の検索インデックスローミングを有効にする**」機能を有効にし、必要に応じてその拡張機能を有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。

2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定** にアクセスします。
3. 次の手順で機能を有効にします。
    a. 「**Outlook の検索インデックスローミングを有効にする**」ポリシーをダブルクリックします。
    b. 「**有効**」を選択します。
    c. 「**OK**」をクリックします。
4. 同じユーザーの同時セッションでこの機能をサポートするには、次の手順に従います。
    a. 「**Outlook 検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする**」ポリシーをダブルクリックします。
    b. 「**有効**」を選択します。
    c. 利用可能なストレージ容量がある場合は、「**Outlook OST ファイルを保存するための VHDX ディスクの最大数**」フィールドでデフォルトのVHDXディスクの数を増やします。このフィールドの詳細については、「同時セッションのサポート」を参照してください。
    d. 「**OK**」をクリックします。
5. この機能に高いレベルの安定性を提供するには、次の手順に従います。
    a. 「**Outlook 検索インデックスデータベースのバックアップと復元**」ポリシーをダブルクリックします。
    b. 「**有効**」を選択します。
    c. 「**OK**」をクリックします。
6. この機能の可用性を高めるには、次の手順に従います。
    a. 「**セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする**」ポリシーをダブルクリックします。
    b. 「**有効**」を選択します。
    c. 「**OK**」をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行し、すべてのセッションからログオフしてから、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

> **注:**
>
> この機能を Microsoft Windows 10 1809 以降、および Windows Server 2019 以降で動作させるには、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows Search` の下に DWORD 値 `EnablePerUserCatalog = 0` を追加します。レジストリ設定を有効にするには、VDA を再起動します。

OneDrive コンテナを有効にする

OneDrive コンテナを使用すると、OneDrive フォルダーをユーザーと共にローミングできます。その結果、ユーザーはどのコンピューターからでも同じ OneDrive フォルダーにアクセスできます。

OneDrive コンテナは、VHDXベースのフォルダーローミングソリューションです。Profile Management は、ファイル共有上にユーザーごとに VHDX ファイルを作成し、ユーザーの OneDrive フォルダーを VHDX ファイルに保存します。VHDX ファイルは、ユーザーがログオンするときにアタッチされ、ログオフするときにデタッチされます。

Profile Management は、次の2つのプロファイルソリューションを提供し、OneDrive コンテナはその両方に適用されます。

- **ファイルベース**。ユーザープロファイルは、ログオン時にリモートユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされ、ログオフ時に書き戻されます。
- **コンテナベース**。ユーザープロファイルは、VHDX ファイル（プロファイルコンテナとして知られています）に保存されます。これらの VHDX ファイルは、ログオン時に自動的にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。

OneDrive コンテナを展開するための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. （オプション）VHDX ファイルの保存パスを指定する(#optional-specify-the-storage-path-for-the-vhdx-files)
2. OneDrive コンテナを有効にして構成する(#enable-and-configure-the-onedrive-container)

> **注:**
>
> - Citrix Profile Management 2206以降、コンテナベースのソリューションを使用している場合、OneDrive フォルダーはデフォルトでユーザーと共にローミングされます。

ただし、別のコンテナを使用して OneDrive フォルダーをローミングしたい場合は、OneDrive コンテナを有効にすることもできます。

- Citrix Profile Management 2311以降、OneDrive コンテナは次の同期機能をサポートしています。
  - マルチセッションランタイム同期。ユーザーが1つのセッションで OneDrive ファイルに行った変更は、すべての同時セッションで即座に表示されるようになりました。
  - シングルサインオン (SSO) 同期。ユーザーは、その後のログオン時に OneDrive の資格情報を再入力する必要がありません。

（オプション）VHDX ファイルの保存パスを指定する

既定では、OneDriveコンテナのVHDXファイルは、ユーザーストアと同じストレージサーバーに保存されます。

たとえば、ユーザーストアのパスを次のように構成します。

`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!`!

OneDriveコンテナのVHDXファイルは、次に保存されます。

`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!\OneDrive`

必要に応じて、OneDriveフォルダーのVHDXディスクを保存する別のファイル共有を指定できます。詳細については、「VHDXファイルのストレージパスを指定する」を参照してください。

OneDriveコンテナを有効にして構成する

OneDriveコンテナポリシーを有効にし、VHDXファイルに保存するOneDriveフォルダーを指定します。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**にアクセスし、**OneDriveコンテナを有効にする**をダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **OneDriveフォルダーのリスト**フィールドで、**表示**をクリックします。

5. ユーザープロファイルに対する相対パスの形式でOneDriveフォルダーを入力し、**OK**をクリックします。

   たとえば、OneDriveフォルダーの絶対パスが`%userprofile%\OneDrive - Citrix`の場合、`OneDrive - Citrix`をリストに追加します。

   > **注：**
   >
   > 相対パスには、`!CTX_OSNAME!`や`!CTX_OSBITNESS!`などの変数を含めることはできません。

6. **OK** をクリックします。

プロファイル読み込みタイムアウトを有効にする

プロファイル読み込みタイムアウトを有効にするポリシーを使用すると、Citrix Profile Management がユーザープロファイルの読み込みを待機する最大秒数を設定し、その時間を超えると一時プロファイルに切り替えることができます。特定のタイムアウトを設定することで、プロファイルの読み込みの柔軟性が向上し、セッションの回復性が強化されます。

一般的なユースケースは次のとおりです。

- **Citrix Appsを実行している非永続的なマルチセッションVDA。**このような環境では、ユーザー固有のデータの読み込みは不要な場合があります。タイムアウトを0秒に設定すると、プロファイルの読み込みをバイパスして一時プロファイルを使用できます。
- **エラー処理。**このポリシーは、プロファイルの読み込みがタイムアウト設定を超過した場合に自動的に一時プロファイルに切り替えることで、ネットワークの中断を軽減します。

> **注：**
>
> - このポリシーは、*ファイル*ベースと*コンテナ*ベースの両方のプロファイルソリューションに適用されます。
> - このポリシーは、プロファイルの*移行*プロセスおよびプロファイルの*リセット*プロセスには適用されません。

GPOを使用してこのポリシーを有効にして構成するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスします。
3. **プロファイル読み込みタイムアウトを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択します。
5. **プロファイル読み込みタイムアウト**設定に、0から1800までの数値（秒単位）を入力します。

> **注：**
>
> - 特に必要がない限り、タイムアウトは10秒より長く設定することをお勧めします。タイムアウトが短いと、通常の状況でもユーザーが予期せず一時プロファイルにログオンしてしまう可能性があります。
> - 0を入力すると、Profile Managementはユーザーログオンの処理時に一時プロファイルをすぐに使用します。

6. **OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ポリシーはデフォルトで無効になります。

UWPアプリのローミングを有効にする

エンドユーザーは、個々のニーズに合わせてMicrosoft UWP (ユニバーサル Windows プラットフォーム) アプリをインストールすることがよくあります。特にデスクトップが非永続的である場合、これらのアプリがさまざまな仮想環境でアクセス可能であることを確認する方法が必要です。

UWPアプリは、ユーザーごとまたはマシンごとの2つの方法でインストールできます。マシンごとのインストールの場合、マスターイメージにアプリを事前に展開することをお勧めします。ユーザーごとのインストールの場合、**UWPアプリのローミングを有効にする**を有効にします。このポリシーにより、ユーザーごとにインストールされたUWPアプリが、ユーザーの仮想デスクトップ

間でローミングされるようになります。その結果、ユーザーは異なるデバイスから同じUWPアプリにアクセスできます。

注記:

- このポリシーはWindows 10のみに対応しています。他のWindowsまたはWindows Serverバージョンではサポートされていません。
- バージョン2503以降、このポリシーはAppXパッケージロードアクセラレーションポリシーとシームレスに連携します。この機能強化により、**AppXパッケージロードアクセラレーション**が有効になっている場合でも、UWPアプリはユーザーとローミングできるようになります。

仕組み

UWPアプリのローミングを有効にするポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは次のように動作します。

1. ユーザーがUWPアプリのインストールを開始すると、Profile Managementはインストールプロセスを監視します。
2. 環境内でアプリの初回インストールである場合、Profile Managementは`{User_Store_File_Share_Path}\AppStore\`フォルダーにVHDXディスクを作成し (*UWPアプリコンテナ* と呼ばれる)、そのディスクにアプリ (個人設定を除く) を保存します。同じアプリのその後のインストールの場合、Profile Managementは追加のVHDXディスクを作成しません。このように、各UWPアプリはUWPアプリコンテナ内に単一のVHDXディスクを持ちます。
3. ユーザーがマシンにログオンすると、ユーザーがインストールしたUWPアプリのVHDXディスクがアタッチされます。ユーザーがログオフすると、それらのディスクはデタッチされます。

重要:

- UWPアプリのローミングは、ポリシーが有効になった後にユーザーごとのパッケージを使用してインストールされたUWPアプリにのみ適用されます。言い換えれば、アプリがインストールされた後にポリシーが有効になった場合、そのアプリは、ユーザーごとのパッケージを使用して再インストールされるまでローミングの恩恵を受けません。

- すべてのユーザーがUWP VHDXディスクを共有します。

GPOを使用してUWPアプリのローミングポリシーを有効にする

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスします。
3. **UWP アプリのローミング**ポリシーをダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。
5. UWP ローミングのログオンおよびログオフエクスペリエンスを向上させるには、次のように**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを有効にします。
   a. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルシステム > 同期**にアクセスします。
   b. **フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーをダブルクリックします。
   c. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

- この設定がGPO、Studio、またはWorkspace Experience Management (WEM) を使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

UWPアプリの読み込み高速化を有効にする

Citrix®環境でMicrosoft UWPアプリを展開すると、Windowsのログオン時間が増加する可能性があります。デフォルトでは、WindowsはUWPアプリの登録データを各マシンにローカルに保存します。非永続環境では、そのデータは再起動後に失われる可能性があります。

AppXパッケージの読み込み高速化を有効にするポリシーが有効になっている場合、Profile ManagementはUWPアプリの登録データを保存するために、各マシン用の仮想ディスクコンテナ

を作成します。この機能は、UWPアプリの読み込みを高速化し、マシンの再起動時のデータ損失を防ぎます。

バージョン2603以降、Profile ManagementはAppXパッケージの読み込み高速化機能が有効になっている場合に、AppRepositoryデータベースの破損を自動的に検出して回復する機能を提供します。詳細については、「Automatic StateRepository recovery」を参照してください。

GPOを使用してポリシーを有効にする

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**にアクセスします。
3. **AppXパッケージの読み込み高速化を有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択します。
5. UWP登録データを保存するためのUNCパスを入力します。そのパスがドメインコンピューターからアクセス可能であることを確認してください。
6. **OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. この設定がGPO、Studio、またはWorkspace Experience Management (WEM) を使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

アプリの読み込み高速化を検証する

ポリシーを有効にした後、アプリの読み込み高速化が機能していることを確認するには、次の手順に従います。

1. 機能を確認する:
    a. **ディスクの管理** (`diskmgmt.msc`) を開いて、UWP アプリ登録データを格納しているコンテナがアタッチされているかどうかを確認します。

b. 一時フォルダを作成し、それがアタッチされたディスクに表示されるかどうかを確認することで、`C:\ProgramData\Microsoft\Windows\AppRepository` がアタッチされたディスクにリダイレクトされていることを確認します。

2. パフォーマンス高速化を検証する:

   WEM 管理ツールハブの**ログオン分析**ツール、または**ControlUp のログオン期間スクリプト**を使用して、**Appx パッケージの読み込み**フェーズ中に要した時間を測定します。

自動 StateRepository 回復

AppX パッケージの読み込み高速化機能がアクティブで、AppRepository コンテナストアパスが構成されている場合、自動 StateRepository 回復は自動的に有効になります。

AppX パッケージの読み込み高速化が AppRepository データベースをコンテナにリダイレクトすると、OS のアップグレード、予期しないシャットダウン、またはストレージの問題が原因で、AppRepository データベースが破損することがあります。

以前は、この問題を解決するには手動での介入が必要でした。Profile Management は現在、自動的に次のことを行います。

- Windows イベントログエントリ (イベント ID 100、270、272) を監視することで、AppRepository データベースの破損をリアルタイムで検出します。
- ユーザーまたは管理者の操作を必要とせずに、段階的な3段階戦略を使用して回復します。
- サービスライフサイクル全体にわたって破損を継続的に監視します。

ログメッセージを表示

回復の進行状況はProfile Managementログに記録されます。以下のメッセージを探してください。

- `Starting background monitoring for AppRepository database integrity...`.
- `AppRepository database corruption detected. Recovery stage: N`
- `Recovery Stage N completed.`.
- `All automatic recovery attempts exhausted. Corruption persists. Manual intervention required.`.

破損イベントを確認する

イベントビューアーで破損イベントを確認できます。

1. **イベントビューアー**を開きます。

2. **アプリケーションとサービスログ > Microsoft > Windows > StateRepository > Operational** に移動します。
3. イベントID 100 (エラー)、イベントID 270 (重大)、およびイベントID 272 (重大) を探します。

自動回復が失敗した場合の対処法

すべての自動回復試行が尽きた場合は、次の操作を行います。

1. 回復試行履歴についてProfile Managementログを確認します。
2. AppRepositoryコンテナパスにアクセスできることを確認します。
3. イベントID 100、270、272の発生頻度についてWindowsイベントログを確認します。
4. 基になるストレージまたはディスクのエラーがないか、システムイベントログを確認します。
5. Profile Managementサービスを停止し、破損したコンテナファイルを削除して、サービスを再起動します。新しいコンテナは自動的に作成されます。
6. 破損が繰り返し発生する場合は、潜在的なハードウェアまたはストレージの問題を調査してください。

マシン休止状態の同時セッションサポートを有効にする

ユーザーが仮想マシン (VM) を休止状態にしてから再開する場合、セッションがデータ損失なしで続行できるように、VHDX ベースのプロファイルディスクは一貫性を保つ必要があります。このポリシーは、休止状態が適用される同時セッション環境でのディスク競合を防ぎます。

このポリシーを有効にするタイミング

By default, VHDX-based Profile Management features don't support concurrent session scenarios when one session is hibernated, which can result in VHDX disk conflicts. Enable this policy when *both* of the following conditions apply:

- 同じユーザーが同時に複数のセッションを実行できる（同時セッション）。
- One or more of the following Citrix Profile Management policies is enabled:
  - プロファイルコンテナ
  - Outlook の検索インデックスローミング
  - フォルダーミラーリングの高速化
  - OneDrive コンテナ

仕組み

このポリシーがない場合、セッションが休止状態になると、接続されている VHDX ディスクはデタッチされます。新しい同時セッションがこれらのディスクを検出し、アタッチする可能性があります。休止状態のセッションが再開されると、それらのディスクはすでに使用中であるため、再アタッチできず、プロファイルの破損やセッションが使用不能になる可能性があります。

このポリシーが有効になっている場合、Citrix Profile Management はこのような競合を防ぐための追跡メカニズムを導入します。

1. ログオン時に、Profile Management はユーザー ストアの*Pending*フォルダーにレコードファイルを作成し、接続されている各VHDXディスクを一覧表示します。
2. If the session hibernates, the record remains so Profile Management knows which disks are still in use.
3. 別のセッションが開始されると、レコードファイルを確認し、休止状態のセッションに属するディスクがアタッチされないようにします。
4. 休止状態のセッションが再開されると、システムは予約済みのディスクを自動的に再アタッチし、シームレスな回復を可能にします。
5. ログオフ時に、レコードファイルが更新され、ディスクがデタッチされたものとしてマークされます。

このポリシーを有効にする

1. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > 詳細設定 > マシン休止状態のマルチセッションサポートを有効にする** に移動します。
2. ポリシーを **有効** に設定します。
3. **OK** をクリックして構成を保存します。
4. 影響を受けるマシンで `gpupdate /force` を実行し、変更を適用します。
5. ログオフして再度ログオンし、ポリシーが有効になっていることを確認します。

VHD設定を構成する

この記事では、VHDXベースの機能をカスタマイズおよび最適化する方法について説明します。

- VHDコンテナーのストレージ容量とパスを指定する

  適用対象: プロファイルコンテナー、OneDriveコンテナー、フォルダーミラーリングコンテナー、Outlook検索インデックスコンテナー。

- VHDディスク圧縮設定を有効にして構成する

  適用対象: プロファイルコンテナー、OneDriveコンテナー、フォルダーミラーリングコンテナー

- VHDコンテナーへの排他的アクセスを有効にする

  適用対象: プロファイルコンテナー、OneDriveコンテナー

- セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチを有効にする

  適用対象: プロファイルコンテナー、Outlook検索インデックスコンテナー、フォルダーミラーリングコンテナー、OneDriveコンテナー。

これらのコンテナーの詳細については、以下を参照してください。

- プロファイルコンテナー
- Outlook検索インデックスローミング (*Outlook検索インデックスコンテナー* と呼ばれます)
- フォルダーミラーリングソリューションの高速化 (*フォルダーミラーリングコンテナー* と呼ばれます)
- OneDriveコンテナー

VHDコンテナのストレージ容量とパスを指定する

デフォルトでは、各VHDXコンテナはユーザー ストアに50 GBのディスク容量で保存されます。必要に応じて、別のストレージパスを選択し、そのデフォルト容量を変更できます。

以下に、VHDXファイルのデフォルトおよびカスタムのストレージパスを示します。

- プロファイルコンテナー設定
  - デフォルト: `{USER_STORE_PATH}\ProfileContainer\{OS_NAME_SHORT}\`
  - カスタム: `{VHDX_STORE_PATH}\ProfileContainer\{OS_NAME_SHORT}\`
- Outlook検索インデックスのローミング
  - デフォルト: `{USER_STORE_PATH}\VHD\{OS_NAME_SHORT}\`
  - カスタム: `{VHDX_STORE_PATH}\VHD\{OS_NAME_SHORT}\`
- フォルダーのミラーリングを高速化する
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\MirrorFolders\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\MirrorFolders\

- OneDriveコンテナを有効にする
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\OneDrive\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\OneDrive\

Profile Managementは、VHDXファイルにアクセスするために現在のユーザーを偽装し、VHDXファイルのストレージパスにDomain Computers `full control`権限を付与しません。

ストレージパスを指定する

VHDXコンテナ用のネットワークストレージの場所を準備します。ストレージの場所にユーザーに`Modify`以上の権限を付与していることを確認してください。

次の手順に従って、VHDXコンテナのストレージパスを指定します。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**で、**VHDXファイルのストレージパスをカスタマイズ**ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. **VHDXファイルを保存するパス**フィールドに、ストレージの場所のフルパスを入力します。例：`\\myservername\vhdx_store`。
5. **適用**をクリックし、**OK**をクリックします。

設定を有効にするには、次の操作を行います。

1. ユーザープロファイルを使用しているすべてのセッションからログオフします。
2. コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

   ポリシーが有効になるタイミングは、ユースケースによって異なります。

   - VHDXファイルのストレージパスを初めて指定する場合、ポリシーはユーザーがログオンした後に有効になります。
   - VHDXファイルのストレージパスを変更する場合、ポリシーはユーザーが初めてログオフした後に有効になります。

`gpupdate`コマンドの詳細については、Microsoftドキュメントを参照してください。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Profile ManagementはVHDXファイルをユーザーストアに保存します。

VHDコンテナのデフォルトのストレージ容量を指定する

各VHDコンテナのデフォルトのストレージ容量は50 GBです。容量を変更するには、次の手順に従います。

1. 「**グループポリシー管理エディター**」を開きます。
2. 「**コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**」で、「**VHDコンテナのデフォルト容量 (GB)**」ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. 「**デフォルト容量 (GB)**」フィールドに、必要に応じて新しい数値を入力します。
5. **OK**をクリックします。

VHDディスク圧縮設定を有効にして構成する

VHDディスク圧縮は、空き領域を削除し、ファイル内のデータを結合することで、VHDファイルのサイズを削減するプロセスです。「**VHDディスク圧縮を有効にする**」ポリシーを使用すると、Profile ManagementのVHDディスク圧縮を有効にできます。Profile Managementによって作成されたVHDファイルは、特定の条件が満たされるとユーザーログオフ時に自動的に圧縮され、中央ストレージまたはクラウドストレージの領域を節約します。

このセクションでは、VHDディスク圧縮を有効にする方法、およびデフォルトの圧縮設定と動作を調整する方法について説明します。

概要

VHDXディスク圧縮は、Profile Managementの以下のVHDXファイルに適用されます。

- プロファイルコンテナ
- OneDriveコンテナ
- フォルダーミラーリングコンテナ

「**VHDディスク圧縮を有効にする**」ポリシーが有効になっている場合、以下のいずれかの条件が満たされると、VHDXファイルはユーザーログオフ時に自動的に圧縮されます。

- VHDファイルの空き領域の比率が指定された値 (デフォルトでは20%) を超えている

  空き領域の比率 = (現在のVHDファイルサイズ – 必要な最小VHDファイルサイズ*) ÷ 現在のVHDファイルサイズ

* Microsoft Windowsオペレーティングシステムの`MSFT_Partition`クラスのGetSupportedSizeメソッドを使用して取得されます。詳細については、「VHDファイルの必要な最小サイズを取得する」を参照してください。

- 最後の圧縮以降のログオフ回数が指定された値 (デフォルトでは5) に達している

> **注：**
>
> ユーザーがログオフすると、VHDディスクの圧縮プロセスはログオフプロセスと並行して実行されます。したがって、ディスク圧縮によってログオフ時間が長くなることはありません。ユーザーが再度ログオンしようとしたときにVHDディスク圧縮プロセスが完了していない場合、Profile Managementはログオン試行を阻止します。

ニーズと利用可能なリソースに応じて、**詳細設定**で以下のポリシーを使用してこれらのデフォルト設定を調整できます。

- VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率
- VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数

VHDディスクの圧縮が有効になっている場合、VHDディスクファイルはまずWindowsに組み込まれている`defrag`ツールを使用してデフラグされ、その後圧縮されます。VHDディスクのデフラグはより良い圧縮結果をもたらしますが、無効にするとシステムリソースを節約できます。必要に応じて、**詳細設定**で以下のポリシーを使用してデフラグを無効にできます。

- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

VHDディスクの圧縮を有効にする

VHDディスクの圧縮を有効にすると、プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびフォルダミラーリングコンテナによって消費されるストレージスペースを節約できます。

GPOを使用してVHDディスクの圧縮を有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > プロファイルコンテナ設定**にアクセスします。
3. **VHDディスクの圧縮**ポリシーをダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. この設定がGPO、Studio、またはWorkspace Environment Management™ (WEM) を使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、機能は無効になります。

圧縮設定と動作を変更する

VHDディスクの圧縮を有効にするとストレージスペースを節約できますが、システムI/Oとネットワーク帯域幅も消費します。圧縮プロセス中のシステムおよびネットワークリソースの使用状況を監視して、以下の設定を調整するかどうかを判断できます。

- VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率
- VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数
- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

GPOを使用してデフォルトの圧縮設定と動作を変更するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスします。
3. 圧縮をトリガーする空き領域の比率を変更するには、次の手順に従います。
    a. **VHD ディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率**ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、必要に応じてパーセンテージを入力して、**OK**をクリックします。
4. 圧縮をトリガーするログオフ回数（最後の圧縮以降）を変更するには、次の手順に従います。
    a. **VHD ディスク圧縮をトリガーするログオフ回数**ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、必要に応じて値を入力して、**OK**をクリックします。
5. VHD ディスク圧縮のデフラグを無効にするには、次の手順に従います。
    a. **VHD ディスク圧縮のデフラグを無効にする**ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

- VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率

a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフォルト値の20 (%) が使用されます。

- VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数

a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフォルト値の5が使用されます。

- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフラグはデフォルトで有効になります。

VHDファイルの必要な最小サイズを取得する

詳細な手順は次のとおりです。

1. VHDファイルがオペレーティングシステムに接続されていることを確認します。
2. 管理者として次のPowerShellコマンドを実行します。

   ```
   Get-WmiObject -Class MSFT_Partition -Namespace ROOT\Microsoft\Windows\Storage
   ```

   現在のデスクトップのすべてのパーティションが表示されます。
3. VHDファイルに対応するパーティションを見つけ、GetSupportedSizeメソッドを使用して必要な最小サイズ (`SizeMin`) を取得します。

VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする

> **注:**
>
> - この設定は、OneDriveコンテナと、ユーザープロファイル全体に対して有効になっているプロファイルコンテナに適用されます。
> - この設定がプロファイルコンテナに対して有効になっている場合、**複数セッションのプロファイルコンテナへのライトバックを有効にする**設定は自動的に無効になります。

> デフォルトでは、VHDコンテナは同時アクセスを許可します。必要に応じて、プロファイルコンテナとOneDriveコンテナの同時アクセスを無効にできます。

詳細な手順は次のとおりです。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrixコンポーネント > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. 排他的アクセスを有効にするコンテナを選択します。オプションには、**プロファイルコンテナ**と**OneDriveコンテナ**が含まれます。
5. **OK**をクリックします。

設定を有効にするには、次の手順を実行します。

1. ユーザープロファイルを使用しているすべてのセッションからログオフします。
2. コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、設定は無効になります。

セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチを有効にする

セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチ機能により、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーの高い安定性を確保します。

各VHDX関連ポリシーは、適切に機能するために該当するVHDXディスクに依存します。Profile Managementは、ログオン中にこれらのディスクをアタッチし、ログオフ中にデタッチします。ただし、これらのVHDXディスクはセッション中に誤ってデタッチされる可能性があり、ポリシーが適切に機能しなくなることがあります。VHDXディスクがデタッチされる可能性のある原因には、次のものがあります。

- ファイルサーバーで一時的なエラーが発生する
- ネットワーク接続が遅い

セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは、先行するVHDXベースのポリシーで使用されているVHDXディスクを監視します。いずれかのディスクがデタッチされた場合、Profile Managementはディスクを自動的に再アタッチします。

ポリシーを有効にする

デフォルトでは、このポリシーは有効になっています。VHDXベースのポリシーの高い安定性を確保するために、デフォルト設定を維持することをお勧めします。

VHDXベースのポリシーでパフォーマンスの問題が発生した場合は、次の手順に従ってポリシー設定を確認してください。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **Citrix Components > Profile Management > Advanced settings**の下で、**セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチ**ポリシーをダブルクリックします。
3. 設定が**無効**になっている場合は、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

変更を有効にするには、Microsoftの記事に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。これはデフォルトで**有効**になっています。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ポリシーはデフォルトで有効になります。

競合するプロファイルを解決する

既存の展開にProfile Managementを追加すると、ローカルのWindowsユーザープロファイルとCitrix®ユーザープロファイル（ユーザーストア内）の間で競合が発生する可能性があります。このシナリオでは、ローカルのWindowsプロファイル内のデータがどのように管理されるかを決定する必要があります。

1. Profile Managementで、「プロファイル処理」フォルダーを開きます。
2. **ローカルプロファイルの競合処理**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. ドロップダウンリストから、次のいずれかのオプションを選択します。

    - **ローカルプロファイルを使用する**。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルを処理しますが、一切変更しません。
    - **ローカルプロファイルを削除する**。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルを削除し、ユーザーストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。

- **ローカルプロファイルの名前を変更する。**Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルの名前を変更し（バックアップ目的）、ユーザーストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。

ここでローカルプロファイルの競合処理が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

テンプレートまたは強制プロファイルを指定する

デフォルトでは、新しいCitrix®ユーザープロファイルは、ユーザーが最初にログオンするコンピューターのデフォルトユーザープロファイルから作成されます。Profile Managementは、プロファイルを作成する際に、代わりに一元的に保存されたテンプレートを使用できます。テンプレートは、任意のネットワークファイル共有に存在する標準の移動プロファイル、ローカルプロファイル、または強制プロファイルにすることができます。

異なるデバイスのデフォルトユーザープロファイルにばらつきがあると、ユーザー用に作成されるベースプロファイルに違いが生じます。テンプレートプロファイルの選択は、グローバルデフォルトユーザープロファイルと見なすことができます。

前提条件として：

- テンプレートプロファイルにユーザー固有のデータが含まれていないことを確認します。
- ユーザーがテンプレートプロファイルへの読み取りアクセス権を持っていることを確認します。
- 強制プロファイルをテンプレートプロファイルに変換するには、ファイルNTUSER.MANの名前をNTUSER.DATに変更します。
- テンプレートプロファイルのNTUSER.DATからSACLを削除します。

既存のMicrosoftプロファイルをカスタマイズしてテンプレートプロファイルを作成する方法については、`<https://support.microsoft.com/kb/959753>`および`<https://support.microsoft.com/kb/973289>`を参照してください。

1. Profile Managementで、フォルダーを開きます。
2. **テンプレートプロファイル**ポリシーをダブルクリックします。

3. を選択します。
4. **テンプレートプロファイルへのパス**で、テンプレートまたは強制プロファイルとして使用するプロファイルの場所を入力します。このパスは、NTUSER.DATレジストリファイルと、テンプレートに必要なその他のフォルダーおよびファイルを含むフォルダーへの完全なパスです。

   重要：パスがNTUSER.DATのみで構成されている場合、パスにファイル名を含めないでください。たとえば、ファイル`\\myservername\myprofiles\template\ntuser.dat`の場合、場所を`\\myservername\myprofiles\template`として設定します。

   絶対パスを使用します。絶対パスは、UNCパスまたはローカルマシン上のパスのいずれかです。後者は、たとえば、Citrix Provisioning™ Servicesイメージ上にテンプレートプロファイルを永続的に指定するために使用できます。相対パスはサポートされていません。

   このポリシーは、Active Directory属性、システム環境変数、または`%USERNAME%`および`%USERDOMAIN%`変数の展開をサポートしていません。
5. オプションで、既存のWindowsユーザープロファイルを上書きするチェックボックスを選択します。ユーザーがCitrixユーザープロファイルを持たず、ローカルまたは移動Windowsユーザープロファイルが存在する場合、デフォルトではローカルプロファイルが使用されます。そして、これが無効になっていない場合、このファイルはユーザーストアに移行されます。**テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする**または**テンプレートプロファイルが移動プロファイルを上書きする**チェックボックスを有効にすることで、設定を変更できます。また、テンプレートをCitrix強制プロファイルとして識別します。Windows強制プロファイルと同様に、Citrix強制プロファイルには変更を保存できません。

ここで**テンプレートプロファイル**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、テンプレートまたは強制プロファイルは使用されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

移行ポリシーを選択する

Profile Management が有効になった後、ユーザーが初めてログオンするとき、そのユーザーの Citrix® ユーザープロファイルは存在しません。しかし、ログオン時に既存の Windows ユーザープロファイルを「オンザフライ」で移行できます。既存のどのプロファイル（ローミング、ローカル、またはその両方）をコピーして、それ以降のすべての処理で使用するかを決定します。

移行戦略の計画に関する詳細については、プロファイルの移行または作成 を参照してください。さらに、既存のプロファイルを移行するためのシステム要件については、システム要件 を確認してください。

1. Profile Management の下で、プロファイル処理フォルダーを開きます。
2. 既存のプロファイルの移行ポリシーをダブルクリックします。
3. 有効を選択します。
4. ドロップダウンリストから次のいずれかのオプションを選択します。
    - ローカル。ローカルプロファイルを移行する場合は、この設定を使用します。
    - ローカルとローミング。ローカルプロファイルとローミングプロファイル（以前はターミナルサービスプロファイルとして知られていたリモートデスクトップサービスプロファイルを含む）を移行する場合は、この設定を使用します。
    - ローミング。ローミングプロファイルまたはリモートデスクトップサービスプロファイルを移行する場合は、この設定を使用します。

既存のプロファイルの移行がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルとローミングプロファイルが移行されます。この設定が無効になっている場合、プロファイルは移行されません。この設定が無効になっており、ユーザーストアにCitrixユーザープロファイルが存在しない場合、Profile Managementを使用しないセットアップと同様に、プロファイルを作成するための既存のWindowsメカニズムが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

どのグループのプロファイルを処理するかを定義します

プロファイルが処理されるユーザーと、処理されないプロファイルを定義できます。コンピューターのローカルグループとドメイングループ（ローカル、グローバル、ユニバーサル）の両方を使用できます。ドメイングループは`<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`の形式で指定します。ローカルグループは「GROUP NAME」の形式で指定します。

注： コンピューターのローカルグループは、新しく作成されたローカルグループである必要があり、メンバーはドメインユーザーである必要があります。

1. Profile Managementで、**処理されたグループ**ポリシーをダブルクリックします。
2. 「**Enabled**」を選択します。

3. **表示**をクリックします。
4. Profile Managementで処理するプロファイルを持つユーザーが含まれるグループを追加します。複数のエントリを区切るにはEnterキーを使用します。

   ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここで、または.iniファイルでこの設定が構成されていない場合、除外されたグループポリシーを使用して除外しない限り、すべてのユーザーグループのメンバーが処理されます。
5. Profile Managementで、除外されたグループポリシーをダブルクリックします。
6. 「**Enabled**」を選択します。
7. **表示**をクリックします。
8. Profile Managementで処理したくないユーザーが含まれるグループを追加します。複数のエントリを区切るにはEnterキーを使用します。

   ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここで、または.iniファイルでこの設定が構成されていない場合、どのグループのメンバーも除外されません。
9. ローカル管理者のプロファイルを管理するには、Profile Managementで、**ローカル管理者のログオンを処理する**ポリシーをダブルクリックし、**有効**をクリックします。

   重要： デフォルトでは、Profile Managementは使用中のオペレーティングシステムを認識し、サーバーオペレーティングシステムではなく、デスクトップ上のローカル管理者のアカウントを処理します。その理由は、ユーザーは通常、デスクトップでのみローカル管理者グループのメンバーであり、サーバー環境での処理からローカル管理者を除外することはトラブルシューティングに役立つためです。したがって、デフォルトの動作を変更したい場合にのみ、このポリシーを有効にしてください。

   除外されたグループポリシーは、**ローカル管理者のログオンを処理する**ポリシーよりも優先されます。アカウントが両方のポリシーに表示される場合、Profile Managementはそれを処理しません。

   ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここで、または.iniファイルでこの設定が構成されていない場合、ローカル管理者のプロファイルは処理されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

プロファイルがクォータを超過した場合にユーザーに警告する

> **注:**
>
> この機能は、ファイルベースのプロファイルソリューションにのみ適用されます。

> 大容量のプロファイルは、ユーザーのログオンとログオフを遅くし、ユーザー ストアのストレージ使用量を増やし、ストレージ制限を超過した場合にはデータ損失につながる可能性があります。「**プロファイルサイズがクォータを超過した場合にユーザーに通知する**」機能を使用すると、プロファイルサイズのクォータを設定し、プロファイルサイズがそれを超えたときにユーザーに通知できます。ログオフする前にユーザーにデータの管理を促すことで、この機能はストレージの過負荷を防ぎ、データ損失のリスクを軽減するのに役立ちます。

この機能を有効にするには、以下のポリシーを使用します。

- **プロファイルサイズがクォータを超過した場合にユーザーに通知する:** プロファイルサイズが指定された制限を超過した場合に、ユーザーへの通知を有効にします。
- **プロファイルサイズがクォータを超過した場合の通知メッセージ:** ユーザーが受け取る通知メッセージをカスタマイズできます。

グループポリシーを使用してこの機能を有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスします。
3. この機能を有効にしてクォータを設定するには、次の手順を完了します。
    a. **プロファイルサイズがクォータを超過した場合にユーザーに通知する**をダブルクリックします。「**有効**」を選択します。
    b. **クォータ**の値を入力します (MB単位)。サポートされるクォータ範囲は0～100,000 MBです。
    c. 「**OK**」をクリックします。
4. ユーザーが受け取る通知メッセージをカスタマイズするには、次の手順を完了します。
    a. **プロファイルサイズがクォータを超過した場合の通知メッセージ** をダブルクリックします。**有効** を選択します。

b. 「**通知メッセージ**」フィールドに、プロファイルサイズが設定されたクォータを超過したときにユーザーが受け取るメッセージを入力します。(*例:* `Your profile size has exceeded the quota set by your administrator. Please delete unnecessary data before logging off to prevent potential data loss.`) **注:** プロファイルがクォータを超過している場合、ユーザーはこの通知を30分ごとに受け取ります。

c. **OK** をクリックします。

両方のポリシーの構成の優先順位:

1. ここでポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもポリシーが構成されていない場合、設定は無効になります。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおりに、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

ユーザー ストアの移行

プロファイル管理は、データ損失なしにユーザー ストアを移行するソリューションを提供します。この機能は、ユーザー ストアをよりスケーラブルなファイルサーバーに移行したい場合に役立ちます。

ユーザー ストアを移行するには、 ポリシーを ポリシーと組み合わせて使用します。 ポリシーを使用すると、ユーザー設定（レジストリの変更と同期されたファイル）が以前に保存されていたフォルダーへのパス（以前使用していたユーザー ストアのパス）を指定できます。

パスは、絶対 UNC パスまたはホーム ディレクトリに対する相対パスにすることができます。どちらの場合も、次の種類の変数を使用できます。

- システム環境変数（パーセント記号で囲まれています）
- Active Directory ユーザー オブジェクトの属性（ハッシュ記号で囲まれています）

例：

- フォルダー `Windows\%ProfileVer%` は、ユーザー ストアの `Windows\W2K3` というサブフォルダーにユーザー設定を保存します（%ProfileVer% が W2K3 に解決されるシステム環境変数である場合）。
- `\\server\share#SAMAccountName#` は、ユーザー設定を UNC パス `\\server\share\<JohnSmith>` に保存します（`#SAMAccountName#` が現在のユーザーに対して JohnSmith に解決される場合）。

パスでは、`%username%` と `%userdomain%` を除くユーザー環境変数を使用できません。

この設定が無効になっている場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

ここでこの設定が構成されていない場合、.ini ファイルの対応する設定が使用されます。

ここまたは .ini ファイルでこの設定が構成されていない場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

ポリシー設定の変更が有効になると、以前のユーザー ストアに保存されていたユーザー設定は、ポリシーで指定された現在のユーザー ストアに移行されます。

グループ ポリシーでユーザー ストアの移行を構成するには、次の手順を実行します。

1. 「グループポリシー管理エディター」を開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix Components > Profile Management** の下で、**ユーザー ストアの移行**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **オプション**ペインで、以前使用したユーザー ストアのパスを入力します。
5. **OK**をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

Citrix Studio でプロファイル管理ポリシーを構成することもできます。これを行うには、次の手順を実行します。

1. Citrix Studio の左ペインで、**ポリシー**をクリックします。
2. **ポリシーの作成**ウィンドウで、検索ボックスにポリシーを入力します。たとえば、「ユーザー ストアの移行」と入力します。
3. **選択**をクリックして、**ユーザー ストアの移行**ポリシーを開きます。
4. **有効**を選択し、以前使用したユーザー ストアのパスを入力します。
5. **OK**をクリックします。

既存のアプリケーションプロファイルの自動移行

Profile Management は、既存のアプリケーションプロファイルを自動的に移行できるソリューションを提供します。アプリケーションプロファイルには、**AppData** フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE` の下のレジストリエントリの両方が含まれます。

この機能は、異なるオペレーティングシステム (OS) 間でアプリケーションプロファイルを移行したい場合に役立ちます。たとえば、OS を Windows 10 バージョン 1803 から Windows 10 バージョン 1809 にアップグレードするとします。この機能が有効になっている場合、各ユーザーが初めてログオンするときに、Profile Management は既存のアプリケーション設定を Windows 10 バージョン 1809 に自動的に移行します。その結果、**AppData** フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE` の下のレジストリエントリが移行されます。ユーザーはアプリケーションを再度構成する必要がなくなります。

> **注:**

> この機能を使用するには、ユーザー ストア パスに `!CTX_OSNAME!` 変数を含めることで、OS の短い名前を指定する必要があります。

> この機能は現在、Windows 10 1909 以前、Windows Server 2019、Windows Server 2016、および Windows Server 2012 R2 をサポートしています。

> この機能はデフォルトで無効になっています。グループポリシーで有効にするには、次の手順を実行します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > プロファイル処理** の下で、**既存のアプリケーションプロファイルの自動移行** ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効** を選択し、**OK** をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

Citrix Studio で Profile Management ポリシーを構成することもできます。これを行うには、次の手順を実行します。

1. Citrix Studio の左ペインで、**ポリシー** をクリックします。
2. **ポリシーの作成** ウィンドウで、検索ボックスにポリシーを入力します。たとえば、「既存のアプリケーションプロファイルの自動移行」と入力します。
3. **選択** をクリックして、**既存のアプリケーションプロファイルの自動移行** ポリシーを開きます。
4. **有効** を選択し、**OK** をクリックします。

仕組み

Profile Management は、ユーザーがログオンし、ユーザー ストアにユーザープロファイルがない場合に移行を実行します。移行が開始される前に、Profile Management は移行するアプリケーションプロファイルを特定します。これは自動検出によって行われます。以下のものを自動的に特定し、移行します。

- %userprofile%\Appdata\Local\ および %userprofile%\Appdata\Roaming\. の下のアプリケーション設定。現在の OS プラットフォーム情報を含む以下の Microsoft フォルダーは無視されます。

```
- %userprofile%\AppData\Local\Temp

- %userprofile%\AppData\Local\Packages

- %userprofile%\AppData\Local\TileDataLayer

- %userprofile%\AppData\Local\Microsoft\Temp

- %userprofile%\AppData\Local\Microsoft\Credentials

- %userprofile%\AppData\Local\Microsoft\Windows

- %userprofile%\AppData\Local\Microsoft\Windows\InputPersonalization

- %userprofile%\AppData\Local\Microsoft\Windows\Side bars

- %userprofile%\AppData\Local\Microsoft\WindowsApps

- %userprofile%\Appdata\Roaming\Microsoft\Credentials
```

```
- %userprofile%\Appdata\Roaming\Microsoft\SystemCertificates
- %userprofile%\Appdata\Roaming\Microsoft\Crypto
- %userprofile%\Appdata\Roaming\Microsoft\Vault
- %userprofile%\Appdata\Roaming\Microsoft\Windows
```

- `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE` および `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Wow6432Node` の下のレジストリキー (ただし、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Microsoft` および `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Classes` を除く)

複数の既存のアプリケーションプロファイルがある場合、Profile Managementは次の優先順位で移行を実行します。

1. 同じOSタイプのプロファイル（シングルセッションOSからシングルセッションOS、マルチセッションOSからマルチセッションOS）。
2. 同じWindows OSファミリーのプロファイル（例：Windows 10からWindows 10、またはWindows Server 2016からWindows Server 2016）。
3. 以前のバージョンのOSのプロファイル（例：Windows 7からWindows 10、またはWindows Server 2012からWindows 2016）。
4. 最も近いOSのプロファイル。

注:

ユーザー ストア パスに `!CTX_OSNAME!` 変数を含めることで、OS の短い名前を指定する必要があります。これにより、Profile Management は既存のアプリケーション プロファイルを特定できます。

ユーザー ストア パスを `\\fileserver\userstore\%username%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` として構成し、OS が Windows 10 バージョン 1803 64 ビット (Win10RS4x64) であるとします。Profile Management は、まず以前のプロファイル フォルダーを特定し、次の順序でユーザー ストア内のアプリケーション プロファイル フォルダーに移行します。

1. `\\fileserver\userstore\user1\Win10RS3x64`

2. `\\fileserver\userstore\user1\Win10RS2x64`
3. `\\fileserver\userstore\user1\Win10RS1x64`
4. `\\fileserver\userstore\user1\Win10x64`
5. `\\fileserver\userstore\user1\Win10RS5x64`
6. `\\fileserver\userstore\user1\Win10RS6x64`
7. `\\fileserver\userstore\user1\Win8x64`
8. `\\fileserver\userstore\user1\Win7x64`
9. `\\fileserver\userstore\user1\Win2016`
10. `\\fileserver\userstore\user1\Win2012R2`
11. `\\fileserver\userstore\user1\Win2012`
12. `\\fileserver\userstore\user1\Win2008`
13. `\\fileserver\userstore\user1\Win2019`

それらのいずれも利用できない場合、Profile Management は移行プロセスを終了し、エラーを返します。

証明書を保存する

セッション中に証明書ストアにインポートされた個人証明書を保存するには、この手順に従ってください。デフォルトでは、証明書は自動的に同期されます。

設定 **同期するディレクトリ** にパス `Application Data\Microsoft\SystemCertificates\My` を追加します。オペレーティングシステムの言語によって、この場所のアプリケーションデータフォルダーが決まります。ポリシーを使用して多言語システムを構成する場合、各言語の場所をリストに追加します。

例

英語システムでは、パスは `Application Data\Microsoft\SystemCertificates\My` です。ドイツ語システムでは、`Anwendungsdaten\Microsoft\SystemCertificates\My` です。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているとおりに、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

クロスプラットフォーム設定の構成

クロスプラットフォーム設定でサポートされるオペレーティングシステムとアプリケーション

この記事では、Profile Management のこのリリースにおけるクロスプラットフォーム設定機能でサポートされるアプリケーションとオペレーティングシステム (OS) について説明します。

定義ファイルについて

定義ファイルには、選択された Windows アプリケーションの共通のパーソナライズ設定が含まれています。各ファイルとその中の定義により、ユーザーは複数の OS 上で同じアプリケーションに接続でき、各プラットフォームで実質的に同じプロファイルが提示されます。たとえば、ユーザーが Microsoft Office の2つのインスタンスにアクセスする場合があります。1つは Windows 7 仮想デスクトップにインストールされ、もう1つは Windows Server 2003 上の Citrix Virtual Apps™ で公開されています。どちらのインスタンスにアクセスしても、ユーザーの Office エクスペリエンスは一貫しています。

事前構成された定義ファイルは、クロスプラットフォーム設定機能の重要な側面です。サポートされている各アプリケーションには定義ファイルがあります。定義ファイルは XML 形式です。

重要: すべての OS におけるアプリケーションの動作を徹底的に分析し、この機能の操作を完全に理解することなく定義ファイルを編集すると、ユーザープロファイルに予期しない変更が生じ、トラブルシューティングが困難になる可能性があります。このため、Citrix® は提供されている定義ファイルの編集や新しい定義ファイルの作成をサポートしていません。さらに、Windows ユーザープロファイルの性質上、一部のアプリケーション設定は OS 間で複製できません。

さらに、この機能はレジストリおよびアプリケーション設定には適していますが、ファイルやフォルダー、またはフォルダーリダイレクトで通常使用されるオブジェクト (たとえば、ブラウザーのお気に入り、デスクトップ、スタートメニューの設定など) には適していないことに注意してください。

サポートされるオペレーティングシステム

サポートされているシングルセッション OS 間、およびサポートされているマルチセッション OS 間でプロファイルをローミングできます。

以下がサポートされています (該当する場合は x86 および x64 バージョン):

- **シングルセッション OS**。Windows XP、Windows 7、および Windows Vista。
- **マルチセッション OS**。Windows Server 2003、Windows Server 2008、および Windows Server 2008 R2。

サポートされる Citrix 製品

クロスプラットフォーム設定機能は、以下の Citrix 製品をサポートしています。

- Windows Server 2003 以降用の XenApp® 5 フィーチャーパック
- XenDesktop® 4 以降

サポートされるアプリケーション

このリリースでは、以下の定義ファイルが利用可能です。XML ファイル名には、サポートされるアプリケーションとバージョンが示されています。

- **Internet Explorer 7 Plus.xml**。このファイルは、Internet Explorer のバージョン 7、8、9 の設定（お気に入りを除く）のクロスプラットフォームでのローミングをサポートします。お気に入りおよびフィードのローミングはサポートされていません。
- **オフィス 2007.xml**。
- **オフィス 2010.xml**.
- **Wallpaper.xml**。このファイルは、デスクトップの壁紙のクロスプラットフォームでのローミングをサポートします。テーマのクロスプラットフォームでのローミングはサポートされていません。

重要: 各アプリケーションの定義ファイルは、上記のサポートされているシナリオでのみ使用してください。たとえば、Internet Explorer 7 Plus.xml は、そのブラウザの複数のバージョン間で設定をローミングします。ただし、Office 2007.xml または Office 2010.xml を使用して、Office のバージョン間で設定をローミングすることはできません。

クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ

計画を実行する

フェーズ1：新しいファイルサーバーを構成する

NewDomainに、クロスプラットフォーム設定の管理用 (`\\FileServ3`) と、 `2k12_Farm` のプロファイル保存用 (`\\FileServ2`) のファイルサーバーを設定します。

このケースでは、プロファイル用とクロスプラットフォーム設定用に個別のファイルサーバーを設定することを選択します。この方法は厳密には必要ありませんが、クロスプラットフォーム設定サーバーを利用可能にする簡単な方法です。プロファイルサーバーは、たとえばDFS名前空間を使用するなど、異なる設計になっている可能性があり、実装に時間がかかる場合があります。

どちらの場合も、共有フォルダー上の移動ユーザープロファイルに関するセキュリティ推奨事項に従ってサーバー共有を設定します。詳細については、 `<https://docs.microsoft.com/ja-jp/`

`windows-server/storage/folder-redirection/deploy-roaming-user-profiles>` を参照してください。

フェーズ2：2k8_Farmのマシンを Profile Management 5.0にアップグレードする

手順については、Upgrade Profile Management を参照してください。

フェーズ3：展開する定義ファイルを選択する

一部の構成ファイル（定義ファイルと呼ばれます）は、Microsoft Office、Internet Explorer、Windowsの壁紙用に提供されています。

重要：Citrix®担当者から指示がない限り、これらのファイルを更新しないでください。

展開に関連する構成ファイルを選択し、これらのファイルのみを `\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions` にコピーします。この例では、Office 2007.xmlのみをコピーします。

フェーズ4：2k8_Farmのマシンを Profile Management 5.0用に構成する

アップグレードが完了したら、クロスプラットフォーム設定機能を（部分的に）有効にするために、以下の構成変更を行います。この段階では、`\\FileServ3\CrossPlatform` のみが利用可能である必要があります。

ポリシー	値	注
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ1\Profiles#sAMAccountName#\%ProfVer%`	変更なし。このパスはOldDomainユーザーのみが使用するため、NewDomainユーザーをサポートするために変更する必要はありません。
クロスプラットフォーム設定を有効にする	有効	
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	無効	すべてのユーザーグループが処理されます。
クロスプラットフォーム定義へのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions`	このパスは定義ファイルが置かれている場所です。

ポリシー	値	注
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Store\%USERNAME%.%USERDOMAIN%`	クロスプラットフォーム設定ストアは両方のドメインのユーザーによって共有されるため、パスには`%USERNAME%`と`%USERDOMAIN%`の両方を指定する必要があります。
クロスプラットフォーム設定の作成元	有効	ユーザーがNewDomainリソースにアクセスする前に、OldDomainからのクロスプラットフォーム設定がクロスプラットフォーム設定ストアの初期化に使用されるようにします。

マシンログオンスクリプトに変更は必要ありません。

フォルダーリダイレクトポリシーに変更は必要ありません。

OU `2k8_Farm`はこれで実行状態のままにできます。ユーザーがログオンすると、Profile Managementは定義ファイルOffice 2007.xmlで識別された設定をクロスプラットフォーム設定ストアにコピーします。

フェーズ5：2k12_Farm内のマシンを準備する

ファイルサーバーが`2k8_Farm`にセットアップされたので、Citrix仮想デスクトップサイトを構築する時が来ました。Windows 7仮想デスクトップが実行されているときにProfile Management 5.0をインストールします。適切な構成を以下に示します。

ポリシー	値	注
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ2\Profiles\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\%ProfVer%`	このファイル共有は両方のドメインのユーザーによって使用されるため、ドメイン情報を含めることも重要です。
アクティブライトバック	無効	
クロスプラットフォーム設定を有効にする	有効	

ポリシー	値	注
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	無効	すべてのユーザーグループが処理されます。
クロスプラットフォーム定義へのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions`	このパスは定義ファイルが置かれている場所です。この設定は`2k8_Farm`の設定と一致する必要があります。
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Store\%USERNAME%.%USERDOMAIN%`	両方のドメインのユーザーがクロスプラットフォーム設定ストアを共有するため、パスには`%USERNAME%`と`%USERDOMAIN%`の両方を指定する必要があります。この設定は`2k8_Farm`の設定と一致する必要があります。
クロスプラットフォーム設定の作成元	無効	NewDomainからの設定がクロスプラットフォーム設定ストア内のプロファイルデータの初期設定に使用されるのを防ぎます。これにより、OldDomainからの設定が優先されるようになります。

システム環境変数%ProfVer%を設定するマシンログオンスクリプトは、OU内のすべてのマシンで実行されます。

マシンタイプ	%PROFVER%	注
Windows 2012 上の XenApp サーバー	ウィン2012x64	計画されている 64 ビットサーバーが利用可能になったときに必要です。詳細については、「その他の考慮事項」を参照してください。
Windows 7 デスクトップ	Win7	Windows 7 の 32 ビット版と 64 ビット版の両方が展開されている場合、それぞれに個別のプロファイルを持たせる

マシンタイプ	%PROFVER%	注
		ことをお勧めします。そのため、%ProfVer% は各プラットフォームで異なるように構成する必要があります。

したがって、OldDomain ユーザーの john.smith は、Windows 7 デスクトップ用に `\\FileServ2\Profiles\john.smith.OldDomain\Win7` に、Citrix Virtual Apps サーバー用に `\\FileServ2\Profiles\john.smith.OldDomain\Win2012x64` にプロファイルを持っています。

また、NewDomain ユーザーの william.brown は、Windows 7 デスクトップ用に `\\FileServ2\Profiles\william.brown .NewDomain\Win7` に、XenApp サーバー用に `\\FileServ2\Profiles\william.brown.NewDomain\Win2012x64` にプロファイルを持っています。

ここでも、グループポリシーを使用してフォルダーリダイレクトを設定します。ドメインは Windows Server 2012 に基づいているため、**<グループポリシーオブジェクト名\>** \> **ユーザーの構成** \> **ポリシー** \> **Windows の設定** \> **フォルダーリダイレクト** からフォルダーリダイレクトを設定します。

ポリシー	値
お気に入り	`\\FileServ2\Redirected\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Favorites`
マイドキュメント	`\\FileServ2\Redirected\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Documents`

%USERDOMAIN% がフォルダーリダイレクトパスに追加されました。このポリシーは NewDomain ユーザーにのみ適用されるため、この設定は不要です。しかし、将来的に OldDomain ユーザーを同じサーバーに移行することを決定した場合に役立つ可能性があります。今のところ、OldDomain ユーザーは OldDomain のフォルダーリダイレクトポリシーを引き続き使用し、そのポリシーによってフォルダーは `\\FileServ1` にリダイレクトされます。

フェーズ 6: ライブテスト

テストは 2 段階で実行します。

1. NewDomain のユーザーのプロファイルデータが正しく動作することを確認します。これらのユーザーは、クロスプラットフォーム設定ストアにデータが設定されていません。クロスプ

ラットフォーム設定を作成するためのポリシーソースが無効に設定されているため、プロファイルの変更は OldDomain に伝播されません。

2. OldDomain の数人のユーザーでテストします。初回ログオン時に、クロスプラットフォーム設定データがプロファイルにコピーされます。それ以降のログオンでは、いずれかのドメインからの変更がもう一方のドメインにコピーされます。OldDomain のユーザーが NewDomain にログオンし、プロファイルデータが存在しない場合（OldDomain が Profile Management 5.0 にアップグレードされて以来、ユーザーが OldDomain でプロファイルを使用していないため）、クロスプラットフォーム設定ストアは更新されません。このトピックで説明されている構成では、ユーザーがドメイン間で設定をローミングする前に、OldDomain にログオンする必要があります。これにより、ユーザー設定（おそらく長年にわたって作成されたもの）が NewDomain のデフォルト設定によって上書きされないようにします。

その他の考慮事項

このケーススタディで構成されているように、プロファイル管理は NewDomain の設定を使用してクロスプラットフォーム設定ストアを初期化しません。ストアの初期化には OldDomain の設定のみを使用できます。NewDomain に複数の種類のプロファイル（Windows 7 32ビットやWindows 7 64ビットなど）が含まれるまでは許容されます。あるいは、NewDomain のユーザーが OldDomain のリソースにアクセスする必要があるかもしれません。これらの場合、さらに多くの種類のマシンで、Source for creating cross-platform settings ポリシーを適切に有効にする必要があります。

> **注意：**
>
> もし クロスプラットフォーム設定を作成するためのソースが誤って設定されている場合、多くの蓄積された大切な設定を持つ既存のプロファイルを新しいプロファイルが上書きしてしまう可能性があります。したがって、このポリシーは一度に1つのプラットフォームタイプにのみ設定することをお勧めします。このプラットフォームは通常、ユーザーが最も保持したい設定が蓄積されている、より古い（成熟した）プラットフォームです。

> このケーススタディでは、いくつかの点を説明するために別々のドメインが使用されています。また、クロスプラットフォーム設定機能は、2つのOU間、あるいは単一のOU内の異なる種類のマシン間で設定のローミングを管理できます。この場合、異なるマシンタイプに対して、ポリシー「クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース」を異なる方法で設定する必要があるかもしれません。この設定はいくつかの方法で実現できます。

- .ini ファイルの CPMigrationsFromBaseProfileToCPStore 設定を使用して、各マシンタイプでポリシーを異なるように設定します。ポリシー「クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース」は設定しないでください。
- Use Windows Management Instrumentation (WMI) filtering to manage different GPOs on the same OU. You can configure the common settings in a GPO that applies to all machines in the OU. But you add only the policy Source for creating cross-platform settings to additional GPOs and filter using a WMI query.

アプリケーションプロファイラーを有効にする

この機能は、アプリケーションベースのプロファイル処理を定義します。この機能を有効にすると、定義ファイルで定義された設定のみが同期されます。

アプリケーションプロファイラーを有効にするには、次の手順を実行します。

1. **プロファイル管理**の下にある**Citrix Virtual Apps™最適化設定**フォルダーを開きます。
2. **Citrix Virtual Apps最適化を有効にする**ポリシーを有効にします。
3. **Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス**ポリシーを有効にします。
4. Citrix Virtual Apps最適化の定義ファイルが格納されているフォルダーを指定します。
5. ポリシーの展開を強制するには、`gpupdate /force`コマンドを実行します。

> **注:**
>
> 定義ファイルの作成については、「定義ファイルの作成」を参照してください。
>
> ログオフ時に、定義ファイル内の設定のみが同期され、その他のすべての設定は破棄されます。セッションでユーザーのドキュメントを表示または更新する場合は、フォルダーリダイレクトを使用します。フォルダーリダイレクトの構成については、「フォルダーリダイレクトの構成」を参照してください。

ユーザーのログオフを強制する

デフォルトでは、問題が発生した場合（たとえば、ユーザー ストアが利用できない場合）、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。ただし、代わりにProfile Managementを構成して、エ

ラーメッセージを表示し、ユーザーをログオフさせることもできます。エラーメッセージはトラブルシューティングに役立ちます。

1. **Profile Management**で、**詳細設定**フォルダーを開きます。
2. **問題が発生した場合にユーザーをログオフする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

ファイルセキュリティ属性を同期する

プロファイル管理が、プロファイルがインストールされているシステムとユーザー ストアの間で、ユーザー プロファイル内のファイルとフォルダーをコピーするときに、セキュリティ属性を同期できます。この機能は、セキュリティ属性間の不整合を防ぐことを目的としています。Windows 10以降、およびWindows Server 2016で必要です。

この機能はデフォルトで有効になっています。無効にするには、次の手順を実行します。

1. **UPMPolicyDefaults_all.ini**ファイルで、**General Settings**セクションに**SecurityPreserveEnabled=0**を追加します。
2. コマンドラインから、`gpupdate /force`コマンドを実行します。

プロファイル管理は、プロファイルの最終変更時刻に基づいてプロファイルの変更を同期します。変更がファイルのセキュリティ属性のみに対して行われた場合、プロファイル管理はファイルを同期しません。

ユーザーグループポリシーのログオン時の非同期処理を有効にする

Windowsは、ユーザーグループポリシーに同期と非同期の2つの処理モードを提供します。Windowsは、次回のユーザーログオン時の処理モードを決定するためにレジストリ値を使用します。レジストリ値が存在しない場合、同期モードが適用されます。

レジストリ値はマシンレベルの設定であり、ユーザーとともにローミングされません。そのため、ユーザーが以下の場合、非同期モードは期待どおりに適用されません。

- 異なるマシンにログオンする。
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するポリシーが有効になっている同じマシンにログオンする。

Citrix Profile Managementは、この問題を解決するために**ユーザーグループポリシーのログオン時の非同期処理を有効にする**ポリシーを提供します。このポリシーを有効にすると、Profile Managementはレジストリ値をユーザーとともにローミングします。その結果、ユーザーがログオンするたびに実際の処理モードが適用されます。

この機能は、WindowsおよびWindows Server OSの両方に適用されます。

前提条件

Windowsマシンで非同期モードを有効にするために、追加のアクションは必要ありません。ただし、Windows Serverマシンでこのモードを有効にするには、以下の要件を満たしていることを確認してください。

- リモートデスクトップセッションホストの役割がインストールされていること。
- グループポリシーが次のように設定されていること：
  - **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > システム > ログオン > コンピューターの起動とログオン時に常にネットワークを待機する**: 無効
  - **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > システム > グループポリシー > リモートデスクトップサービス経由でログオンする際に非同期ユーザーグループポリシー処理を許可する**: 有効

ポリシーを有効にする

ポリシーを有効にするには、以下の手順に従ってください。

1. Group Policy Management Editor を開き、**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management** にアクセスします。
2. Profile Management で、**詳細設定**をクリックします。
3. **ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
4. **有効**を選択します。
5. **OK**をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの対応する設定が使用されます。
2. この設定がここで構成されておらず、.ini ファイルでも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

フォルダーリダイレクトの構成

フォルダーリダイレクトは Microsoft Windows の機能であり、Profile Management とともに使用できます。これにより、ローカルフォルダーのパスを *ユーザー* の新しい場所にリダイレクトできます。次のフォルダーをリダイレクトできます。

- AppData(ローミング)
- デスクトップ
- スタートメニュー
- ドキュメント
- ピクチャ
- ミュージック
- ビデオ
- お気に入り
- 連絡先
- ダウンロード
- リンク
- 検索
- 保存されたゲーム

> **重要:**

> フォルダーリダイレクトは、Microsoft Active Directory (AD) GPOまたはCitrix®ポリシーのいずれかの方法のみを使用して構成してください。複数の方法を使用してフォルダーリダイレクトを構成すると、予期しない結果が生じる可能性があります。

> フォルダーリダイレクトを構成するには、次の手順に従います。

1. 該当するユーザーを、Profile Managementが管理するOUに移動します。
2. GPOを作成し、編集のために開きます。

3. **ユーザーの構成 > 管理用テンプレート > Citrixコンポーネント > Profile Management > フォルダーリダイレクト**に移動し、リダイレクトするフォルダーを選択します。
4. `Redirect the <folder name> folder`ポリシーを開き(たとえば、`Redirect the Desktop folder`ポリシー)、**有効**を選択し、リダイレクトターゲットパスを入力します。
   - リダイレクトターゲットパスを除外として追加しないでください。
   - パスにユーザー名やフォルダー名を追加しないでください。たとえば、**デスクトップ**フォルダーへのパスを`\\server\share\`として設定した場合、ユーザー環境内のフォルダーは`\\server\share\<user name>\Desktop`としてリダイレクトされます。
5. 変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。詳しくは、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

注:

- **ドキュメント**フォルダー。ユーザーのホームディレクトリにリダイレクトできます。
- **ミュージック**、**ピクチャ**、および**ビデオ**フォルダー。これらは、**ドキュメント**フォルダーを基準としたフォルダーにリダイレクトできます。
- フォルダーのリダイレクトターゲットパスを変更するには、上記と同様の手順に従います。デフォルトでは、ポリシーが有効になると、Profile Managementは以前の場所から新しい場所にコンテンツを転送します。この転送を防ぐには、**新しい場所へのコンテンツの移動を無効にする**を選択します。
- フォルダーリダイレクトを無効にするには、対応するポリシーを**無効**に設定します。または、ポリシーを**有効**のままにして、**ローカルユーザープロファイルへのリダイレクト**を選択することもできます。

リダイレクトされたフォルダーへのユーザーアクセスを許可する

フォルダーリダイレクトポリシーがユーザーに対して有効になっている場合、リダイレクトターゲットフォルダーには、そのユーザーとSYSTEMユーザーのみがアクセスできます。データ監査などの管理目的で、管理者にリダイレクトターゲットフォルダーへの**読み取り**アクセスを許可する必要がある場合があります。そのためには、**リダイレクトターゲットパスにアクセスするユーザーとグループ**ポリシーを使用して、特定のユーザーまたはグループにリダイレクトターゲットフォルダーに対する**読み取りと実行**のアクセス許可を付与できます。

> **注：**
>
> ユーザーにリダイレクトターゲットフォルダーへのアクセスを許可するには、**管理者権限の付与**ポリシーではなく、**リダイレクトターゲットパスにアクセスするユーザーとグループ**ポリシーを使用することをお勧めします。**管理者権限の付与**ポリシーは、ローカル管理者グループのメンバーにリダイレクトターゲットフォルダーへのアクセスを許可します。ただし、ユーザーをローカル管理者グループに追加すると、この役割に関連する広範なアクセス許可のために、セキュリティ上の懸念が生じる可能性があります。

タスクを完了するには、次の手順に従います。

1. **ユーザーの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > Profile Management > フォルダーリダイレクト**に移動します。
2. **リダイレクトターゲットパスにアクセスするユーザーとグループ**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **表示**をクリックします。ユーザーを指定するためのダイアログボックスが表示されます。
5. 「**値**」フィールドに、必要なドメインユーザーとグループを`<Domain name>\<User name or group name>`の形式で入力するか、それらの`Security Identifier (SID)`を使用します。「OK」を2回クリックして変更を保存します。
6. 変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、リダイレクトターゲットパスにはプロファイル所有者とSYSTEMユーザーのみがアクセスできます。

フォルダーリダイレクトが機能することを確認する

フォルダーリダイレクトが機能することを確認するには、次の手順を実行します。

1. セッションで、リダイレクトしたフォルダーに移動し、フォルダーを右クリックして、**［プロパティ］**を選択します。
2. プロパティウィンドウで、**［ショートカット］タブに移動し、［ターゲット］**フィールドを確認します。フィールドにリダイレクトされたパスが表示されている場合、フォルダーリダイレクトは機能しています。そうでない場合、フォルダーリダイレクトは機能していません。

フォルダーリダイレクトログ

> **注：**
>
> Profile Managementは、フォルダーリダイレクトが失敗した場合にのみ、Windowsイベントログに情報を書き込みます。

> Profile Managementは、Windowsイベントログに情報を書き込みます。Windowsイベントビューアーの**［アプリケーション］**ペインでイベントを表示できます。この情報は、フォルダーリダイレクト機能の使用時に発生する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

ポリシー

Profile Managementポリシー

この記事では、.admファイルと.admxファイルに含まれるポリシーの重要な側面について説明します。

プロファイル管理変数

このバージョンのProfile Managementでは、次の変数をグループポリシーと.iniファイルの両方で使用できます。

ファイルとレジストリエントリを定義するポリシーの場合、次の変数は次のように展開されます。

変数	バージョン1プロファイルの展開	バージョン2プロファイルの展開
`!ctx_localsettings!`	`Local Settings\Application Data`	`AppData\Local`
`!ctx_roamingappdata!`	`Application Data`	`AppData\Roaming`
`!ctx_startmenu!`	`Start Menu`	`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Start menu`
`!ctx_internetcache!`	`Local Settings\Temporary Internet Files`	`AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files`
`!ctx_localappdata!`	`Local Settings\Application Data`	`AppData\Local`

パスを構築するために使用されるポリシーの場合、`!ctx_osbitness!` 変数は、オペレーティングシステムに応じて x86 または x64 に展開されます。次の変数も展開されます。

- `!ctx_osname!` は、オペレーティングシステムに応じて次のように短い名前に展開されます。
- `!ctx_profilever!` は、オペレーティングシステムに応じて次のようにプロファイルバージョンに展開されます。

Profile Management Service が起動すると、長い名前はログファイルに書き込まれます。

長い名前	短い名前	プロファイルバージョン
`Windows 11`	Win11	v6
`Windows 10 Redstone 6`	ウィン10RS6	v6
`Windows 10 Redstone 5`	ウィン10RS5	v6
`Windows 10 Redstone 4`	ウィン10RS4	v6
`Windows 10 Redstone 3`	ウィン10RS3	v6
`Windows 10 Redstone 2`	ウィンテンアールエスツー	v6
`Windows 10 Redstone 1`	ウィンテンアールエスワン	v6
`Windows 10`	Win10	v5
`Windows 8.1`	Win8.1	v4 または v2
`Windows 8`	Win8	v3 または v2
`Windows 7`	Win7	v2
`Windows Server 2025`	Win2025	v6
`Windows Server 2022`	Win2022	v6
`Windows Server 2019`	Win2019	v6
`Windows Server 2016`	Win2016	v6
`Windows Server 2012 R2`	ウィン2012R2	v4 または v2
`Windows Server 2012`	Win2012	v3 または v2

長い名前	短い名前	プロファイルバージョン
`Windows Server 2008 R2`	Win2008	v2
`Windows Server 2008`	Win2008	v2

注記:

20H1以降のWindows 10の場合、長い名前はWindows10 \<postfix\>で、対応する短い名前はWin10_\<postfix\>です。\<postfix\>の値は、次の2つの特定のレジストリエントリから取得されます。

- エントリ: HKLM\Software\\Microsoft\\Windows NT\\CurrentVersion > 値の名前: DisplayVersion
- エントリ: HKLM\\Software\\Microsoft\\Windows NT\\CurrentVersion > 値の名前: ReleaseId

最初のレジストリエントリに値が含まれている場合、それは\<postfix\>として使用されます。そうでない場合、2番目のレジストリエントリの値が使用されます。

Windows 8、Windows 8.1、Windows Server 2012、およびWindows Server 2012R2の場合、実際のプロファイルバージョンは、`HLKM\System\CurrentControlset\Services\ProfSvc\Parameters`の下にある`UseProfilePathExtensionVersion`レジストリキーの設定によって変更される可能性があります。

- 1に設定されている場合、プロファイルバージョンはオペレーティングシステムによってv3またはv4になります。
- 設定されていないか、0に設定されている場合、プロファイルバージョンはv2になります。

バージョン別のポリシー

移行を支援するため、次の表に、Profile Managementの異なるバージョンで利用可能なポリシー、.adm（または.admx）ファイルおよび.iniファイル内の各ポリシーの場所、および各ポリシーが設計されている機能（または、すべての展開の基本構成の一部であるかどうか）を示します。

.admまたは.admxファイル内の場所は、`Citrix > Profile Management`を基準としています。

バージョン2603以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
BindLinkRedirection	\プロファイルコンテナ設定	注: 該当なし	BindLinkリダイレクトを有効にする

バージョン2511以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
HibernationSupport	\AdvancedSettings	注: 該当なし	マシンハイバネーションのマルチセッションサポートを有効にする

バージョン2503以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
ConfigurableProfileTimeoutEnabled	\AdvancedSettings	注: 該当なし	プロファイル読み込みタイムアウトを有効にする
NumOfStoresToSyncOnLogoff	\AdvancedSettings	注: 該当なし	ログオフ時のプロファイル同期を制限する

バージョン2411以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
QuotaMaxSize	\AdvancedSettings	注: 該当なし	プロファイルサイズがクォータを超過した場合にユーザーに通知する
QuotaAlertMessage	\AdvancedSettings	注: 該当なし	プロファイルサイズがクォータを超過した場合の通知メッセージ
PathToAppRepositoryContainerStore	\AdvancedSettings	PathToAppRepositoryContainerStore	AppXパッケージの読み込み高速化を有効にする
GroupsToAccessRedirectedFolders	\フォルダリダイレクト (ユーザー構成内)	注: 該当なし	リダイレクトされたターゲットパスにアクセスするユーザーとグループ

バージョン 2407 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
ProfileContainerFailOver	\AdvancedSettings	ProfileContainerFailOver	ユーザー ストア間でのセッション内プロファイル コンテナー フェールオーバーを有効にする

バージョン 2311 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
SelectBestPerfUS	\AdvancedSettings	SelectBestPerfUS	ユーザー ストアの選択方法

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
SharedStoreProfileContainerFileSizeLimit	\FileDeduplication	SharedStoreProfileContainerFileSizeLimit	ファイルの重複排除
PreventLoginWhenProfileContainerMountFailed	\ProfileContainerSettings	PreventLoginWhenProfileContainerMountFailed	ログオン中にプロファイル コンテナーが利用できない場合にユーザーをログオフする
GroupsToAccessProfileContainer	\ProfileContainerSettings	GroupsToAccessProfileContainer	プロファイル コンテナーにアクセスするユーザーとグループ

バージョン 2308 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
AutoExtend	\ProfileContainerSettings	AutoExtend	プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする
AutoExtendThreshold	\AdvancedSettings	AutoExtendThreshold	プロファイルコンテナの自動拡張しきい値
AutoExtendSize	\AdvancedSettings	AutoExtendSize	プロファイルコンテナの自動拡張増分
AutoExtendLimit	\AdvancedSettings	AutoExtendLimit	プロファイルコンテナの自動拡張制限
VhdCapacity	\AdvancedSettings	VhdCapacity	VHDコンテナの既定の容量
DisableConcurrentAccessToProfileContainer	\ProfileContainerSettings	DisableConcurrentAccessToProfileContainer	VHDコンテナへの排他アクセスを有効にする

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
DisableConcurrentAccessToOneDriveContainer	\ProfileContainerSettings	DisableConcurrentAccessToOneDriveContainer	VHDコンテナへの排他アクセスを有効にする
EnableUwpAppsRoaming	\AdvancedSettings	EnableUwpAppsRoaming	UWPアプリのローミング

バージョン2305から利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
UserGroupLevelConfigEnabled	\AdvancedSettings	UserGroupLevelConfigEnabled	ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする
OrderedGroups	\AdvancedSettings	OrderedGroups	ユーザーグループの優先順位を設定する

バージョン2303以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
PSMidSessionWriteBackSessionLock	\BasicSettings	PSMidSessionWriteBackSessionLock	セッションロック時および切断時のアクティブなライトバックを有効にする
AppAccessControl	\AppAccessControl	AppAccessControl	アプリのアクセス制御を有効にする
EnableVHDDiskCompaction	\ProfileContainerSettings	EnableVHDDiskCompaction	VHDディスクの圧縮を有効にする
FreeRatio4Compaction	\AdvancedSettings	FreeRatio4Compaction	VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
エヌログオフズ4コンパクション	\AdvancedSettings	エヌログオフズ4コンパクション	VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数
エヌデフラグフォーコンパクション	\AdvancedSettings	エヌデフラグフォーコンパクション	VHDディスクの圧縮のためのデフラグを無効にする

バージョン2209から利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
SharedStoreFileInclusionList	\ファイルの重複排除	SharedStoreFileInclusionList	重複排除のために共有ストアに含めるファイル
SharedStoreFileExclusionList	\ファイルの重複排除	SharedStoreFileExclusionList	共有ストアから除外するファイル

バージョン2206以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
SyncGpoStateEnabled	\AdvancedSettings	SyncGpoStateEnabled	ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする
OneDriveContainer	\AdvancedSettings	OneDriveContainer	ローミングOneDriveフォルダーを有効にする
OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	\AdvancedSettings	OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	複数セッションでのOutlook検索データローミングを有効にする

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
PSForPendingAreaEnabled	\ストリーム配信されるユーザープロファイル	PSForPendingAreaEnabled	保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする

バージョン2203以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
EnableVolumeReattach	\AdvancedSettings	EnableVolumeReattach	セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする

バージョン2112以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
ProfileContainerExclusionListFile	プロファイルコンテナ設定	ProfileContainerExclusionListFile	プロファイルコンテナからファイルを除外する
ProfileContainerInclusionListFile	プロファイルコンテナ設定	ProfileContainerInclusionListFile	プロファイルコンテナにファイルを含める
VhdStorePath	AdvancedSettings	PathToVhdStore	VHDXファイルのネットワークストレージの場所を指定します

バージョン2109以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
CredBasedAccessEnabled	AdvancedSettings	CredBasedAccessEnabled	ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

バージョン2106以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
AccelerateFolderMirroring	\FileSystemSettings\FSSynchronization	AccelerateFolderMirroring	フォルダーミラーリングの高速化
CredBasedAccessEnabled	AdvancedSettings	CredBasedAccessEnabled	ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする
MultiSiteReplication	AdvancedSettings	MultiSiteReplication	ユーザーストアをレプリケートする

バージョン 2103 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
PSForFoldersEnabled	\PsSettings	PSForFoldersEnabled	フォルダーのプロファイルストリーミング
ProfileContainerLocalCache	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerLocalCache	プロファイルコンテナーのローカルキャッシュ

バージョン 2009 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
ProfileContainerExclusionListDir	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerExclusionListDir	プロファイルコンテナー
ProfileContainerInclusionListDir	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerInclusionListDir	プロファイルコンテナー

バージョン 2003 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
FSLogixProfileContainerSupport	\AdvancedSettings	FSLogixProfileContainerSupport	**バージョン2103より前:** FSLogix Profile Container のマルチセッションライトバックを有効にする **バージョン2103以降:** Profile Containers のマルチセッションライトバックを有効にする

バージョン1909以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
MigrateUserStore		MigrateUserStore	ユーザー ストアの移行
OutlookEdbBackupEnabled	\AdvancedSettings	OutlookEdbBackupEnabled	Outlook 検索インデックスデータベース - バックアップと復元
ApplicationProfilesAutoMigration	\AdvancedSettings	ApplicationProfilesAutoMigration	既存のアプリケーションプロファイルの自動移行

バージョン 1903 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
ProfileContainer	**バージョン 2009 より前:** \FileSystemSettings\FSSynchronization	ProfileContainer	プロファイルコンテナ

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
	バージョン 2009 以降: \ProfileContainer		

バージョン 7.18 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
OutlookSearchRoamingEnabled	\AdvancedSettings	OutlookSearchRoamingEnabled	Outlook 検索ローミング

バージョン 7.16 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
XenAppOptimizationSettings	\XenAppOptimizationSettings	XenAppOptimizationSettings	Citrix Virtual Apps and Desktops のアプリケーション最適化
XenAppOptimizationDefinitionPath	\XenAppOptimizationSettings	XenAppOptimizationDefinitionPath	Citrix Virtual Apps and Desktops のアプリケーション最適化
LargeFileHandlingList	\FileSystemSettings	LargeFileHandlingList	大容量ファイルの処理

バージョン 7.15 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
LogonExclusionCheck	\FileSystemSettings	LogonExclusionCheck	ログオン除外チェック

バージョン 5.8 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
StreamingExclusionList	\PsSettings	StreamingExclusionList	プロファイルストリーミング除外リスト

バージョン 5.6 以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
`CEIPEnabled`	\AdvancedSettings	`CEIPEnabled`	CEIP
PSMidSessionWriteBackReg		PSMidSessionWriteBackReg	アクティブなライトバックレジストリ

バージョン 5.5 以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
デフォルトの除外リスト	\Registry	DefaultExclusionListRegistry	ベース
NTUSER.DAT	\Registry	LastKnownGoodRegistry	NTUSER.DATのバックアップ
デフォルトの除外リスト - ディレクトリ	\ファイルシステム	DefaultSyncExclusionListDir	ベース

バージョン 5.0〜5.4 で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
除外されたグループ		ExcludedGroups	除外されたグループ
自動構成を無効にする	\詳細設定	DisableDynamicConfig	自動構成

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
AppData (Roaming) フォルダーをリダイレクトする、`Desktop` フォルダーをリダイレクトする、...	\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成内)	注: 該当なし	XenDesktopとの統合
キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	\プロファイルの処理	ProfileDeleteDelay	基本

バージョン4.x以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	\クロスプラットフォーム設定	CPUserGroupList	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定を有効にする	\クロスプラットフォーム設定	`CPEnabled`	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定の作成元	\クロスプラットフォーム設定	CPMigrationFromBaseProfileToCPStore	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム定義へのパス	\クロスプラットフォーム設定	CPSchemaPath	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	\クロスプラットフォーム設定	`CPPath`	クロスプラットフォーム設定
オフラインプロファイルのサポート	\クロスプラットフォーム設定	OfflineSupport	オフラインプロファイル

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
問題が発生した場合にユーザーをログオフする	\詳細設定	LogoffRatherThanTempProfile	トラブルシューティングの改善

バージョン3.x以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
アクティブなライトバック		PSMidSessionWriteBack	アクティブプロファイルライトバック (バージョン4.0では「Active write back」に名称変更)
ミラーリングするフォルダー (バージョン3.1以降で利用可能)	\ファイルシステム\同期	MirrorFoldersList	フォルダーのミラーリング
ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する (バージョン3.1以降で利用可能)	\詳細設定	ProcessCookieFiles	フォルダーのミラーリング
リダイレクトされたフォルダーを削除する (バージョン3.2、3.2.2、および4.0で利用可能)	\詳細設定	DeleteRedirectedFolders	フォルダーリダイレクトのサポート
常にキャッシュ	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSAlwaysCache	ストリーム配信されたユーザープロファイル
プロファイルストリーミング	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	`PSEnabled`	ストリーム配信されたユーザープロファイル

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
保留中の領域ロックファイルのタイムアウト	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSPendingLockTimeout	ストリーム配信されたユーザープロファイル
ストリーム配信されたユーザープロファイルグループ	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSUserGroupsList	ストリーミングユーザープロファイル

バージョン2.xで利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
ユーザー保存場所へのパス		PathToUserStore	ベース
処理されたグループ		ProcessedGroups	ベース
ローカルプロファイルの競合処理	\プロファイル処理	LocalProfileConflictHandling	ベース
既存のプロファイルの移行	\プロファイル処理	MigrateWindowsProfilesToUserStore	ベース
テンプレートプロファイル	\プロファイル処理	テンプレートプロファイルパス, テンプレートプロファイルオーバーライドローミングプロファイル, テンプレートプロファイルオーバーライドローカルプロファイル	ベース
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除	\プロファイル処理	DeleteCachedProfilesOnLogoff	ベース

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
MFTキャッシュファイルのディレクトリ(バージョン5.0で削除)	\詳細設定	`USNDBPath`	ベース
同期するディレクトリ	\ファイルシステム\同期	SyncDirList	ベース
除外リスト	\レジストリ	ExclusionListRegistry	ベース
同期するファイル	\ファイルシステム\同期	SyncFileList	ベース
インクルージョンリスト	\レジストリ	InclusionListRegistry	ベース
除外リスト - ディレクトリ	\ファイルシステム	SyncExclusionListDir	ベース
除外リスト - ファイル	\ファイルシステム	SyncExclusionListFiles	ベース
ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数	\詳細設定	LoadRetries	ベース
ローカル管理者のログオンを処理する		ProcessAdmin	ベース
プロファイル管理を有効にする		ServiceActive	ベース
ログ記録を有効にする	\ログ設定	LoggingEnabled	ログ記録
ログ設定	\ログ設定	ログレベル	ログ記録
ログファイルの最大サイズ	\ログ設定	最大ログサイズ	ログ記録

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
ログファイルへのパス (バージョン2.1以降で利用可能)	\ログ設定	ログファイルへのパス	ログ記録

Profile Management ポリシーの説明と既定値

このトピックでは、Profile Management の .adm および .admx ファイルにあるポリシーについて説明します。

ポリシーの詳細については、Profile Management ポリシーを参照してください。

.adm および .admx ファイルのセクション

Profile Management ポリシーは、次のセクションにあります。

プロファイル管理

Profile Management\\フォルダーリダイレクト (ユーザーの構成)

プロファイル管理\プロファイル処理

プロファイル管理\詳細設定

プロファイル管理\ログ設定

プロファイル管理\レジストリ

プロファイル管理\ファイルシステム

プロファイル管理\ファイルシステム\同期

プロファイル管理\ファイルの重複排除

プロファイル管理\ストリーミングユーザープロファイル

プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定

グループポリシーオブジェクトエディターでは、ほとんどのポリシーが**コンピューターの構成 \> 管理用テンプレート \> クラシック管理用テンプレート \> Citrix**の下に表示されます。フォルダーリダイレクトポリシーは、**ユーザーの構成 \> 管理用テンプレート \> クラシック管理用テンプレート \> Citrix**の下に表示されます。

グループポリシーエディターでは、ポリシーが**ユーザーの構成**というラベルのセクションの下にある場合を除き、ポリシーは**コンピューターの構成**の下に表示されます。

プロファイル管理

プロファイル管理を有効にする

プロファイル管理を有効にできます。既定では、展開を容易にするため、プロファイル管理はログオンまたはログオフを処理しません。他のすべてのセットアップタスクを実行し、Citrix®ユーザープロファイルが環境でどのように動作するかをテストした後にのみ、プロファイル管理を有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイル管理はWindowsユーザープロファイルを一切処理しません。

処理されるグループ

プロファイルが処理されるユーザーを指定できます。次のユーザーグループを使用してユーザーを指定します。

- ドメイングループ (ローカル、グローバル、ユニバーサル) を`<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`の形式で
- ローカルグループを`GROUP NAME`の形式で

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されている場合、プロファイル管理は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。このポリシーが無効になっている場合、プロファイル管理はすべてのユーザーを処理します。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーグループのメンバーが処理されます。

除外されたグループ

プロファイルが処理されないユーザーを指定できます。以下のユーザーグループを使用してユーザーを指定できます。

- `<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`の形式のドメイングループ（ローカル、グローバル、ユニバーサル）
- `GROUP NAME`の形式のローカルグループ

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されている場合、Profile Managementはそれらのユーザーグループのメンバーを除外します。
2. この設定が無効になっている場合、Profile Managementはどのユーザーも除外しません。
3. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、どのグループのメンバーも除外されません。

ローカル管理者のログオンを処理する

Profile Managementが`BUILTIN\Administrators`グループのメンバーのログオンを処理するかどうかを指定できます。このポリシーを有効にすることは、ほとんどのユーザーがローカル管理者であるCitrix Virtual Desktops展開で推奨されます。

Citrix Virtual Apps環境は、マルチセッションオペレーティングシステムの典型的な使用例です。このポリシーがマルチセッションオペレーティングシステムで無効になっているか、構成されていない場合、Profile Managementはドメインユーザーのログオンを処理しますが、ローカル管理者のログオンは処理しません。Citrix Virtual Desktops™環境は、シングルセッションオペレーティングシステムの典型的な使用例です。シングルセッションオペレーティングシステムでは、Profile Managementはローカル管理者のログオンを処理します。

ローカル管理者権限を持つドメインユーザーは、通常、仮想デスクトップが割り当てられたCitrix Virtual Desktopsユーザーです。デスクトップでProfile Managementに関する問題が発生した場合、このポリシーにより、ユーザーはログオン処理をバイパスしてログオンし、問題をトラブルシューティングできます。

> **注:**
>
> ドメインユーザーのログオンは、通常、製品ライセンスへの準拠を確実にするために、グループメンバーシップによって課される制限の対象となる場合があります。

> 構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、Profile Management はローカル管理者によるログオンを処理しません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、管理者は処理されません。

ユーザー ストアへのパス

ユーザー ストアのストレージ パスを指定できます。ユーザー ストアは、ユーザー プロファイル (レジストリの変更と同期されたファイル) が保存される中央のネットワーク ロケーションです。

パスは次のいずれかです。

- ホームディレクトリに対する相対パス。ホームディレクトリは通常、Active Directory のユーザーの `#homeDirectory#` 属性として構成されます。
- UNC パス。通常、サーバー共有または DFS 名前空間を指定します。
- 無効または未構成。この場合、パスは `#homeDirectory#\Windows` です。

パス設定では、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数 (例: `%ProfVer%`)。システム環境変数は通常、追加のセットアップが必要です。
- ハッシュで囲まれた Active Directory ユーザー オブジェクトの属性 (例: `#sAMAccountName#`)。
- プロファイル管理変数。詳細については、プロファイル管理変数の製品ドキュメントを参照してください。

`%username%` と `%userdomain%` を除き、ユーザー環境変数は使用できません。場所やユーザーなどを完全に定義するために、カスタム属性を作成することもできます。属性では大文字と小文字が区別されます。

例:

- `\\server\share#sAMAccountName#` は、ユーザー設定を UNC パス `\\server\share\JohnSmith` に保存します（現在のユーザーの #sAMAccountName# が JohnSmith に解決される場合）。
- `\\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` は `\\server\profiles$\JohnSmith.DOMAINCONTROLLER1\Win8x64` に展開される場合があります。

重要: どの属性または変数を使用する場合でも、このポリシーが NTUSER.DAT を含むフォルダーの 1 レベル上のフォルダーに展開されることを確認してください。たとえば、このファイルが \\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64\UPM_Profile に存在する場合、ユーザー ストアへのパスを \\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64 に設定します（\UPM_Profile サブフォルダーではありません）。

ユーザー ストアへのパスを指定する際の変数の使用方法の詳細については、以下のトピックを参照してください。

- 複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する
- OU内およびOU間でプロファイルを管理する
- プロファイル管理による高可用性と災害復旧

構成の優先順位:

1. ユーザー ストアへのパスが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。このポリシーが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ホームドライブのWindowsディレクトリが使用されます。

ユーザー ストアの移行

Profile Managementが以前使用していたユーザー ストアの保存パスを指定できます（以前指定した`path to user store`設定）。

この設定が構成されている場合、以前のユーザー ストアに保存されていたユーザー設定は、現在のユーザー ストアに移行されます。

パスは、絶対UNCパスまたはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。

どちらの場合も、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数
- ハッシュ記号で囲まれたActive Directoryユーザーオブジェクトの属性

例:

- %ProfileVer%がW2K3に解決されるシステム環境変数である場合、`Windows\%ProfileVer%` フォルダーはユーザー設定をユーザー ストアの`Windows\W2K3`というサブフォルダーに保存します。
- 現在のユーザーに対して`#SAMAccountName#`がJohnSmithに解決される場合、`\\server\share#SAMAccountName#`はユーザー設定をUNCパス`\\server\share\<JohnSmith>`に保存します。

構成の優先順位:

1. パスでは、`%username%`と`%userdomain%`を除くユーザー環境変数を使用できます。この設定が無効になっている場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。
2. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルからの対応する設定が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

アクティブライトバック

アクティブライトバック機能を有効にできます。この機能が有効になっている場合、Profile Managementは、セッション中にローカルコンピューターで変更されたファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

アクティブライトバックレジストリ

セッション中にローカルコンピューターで変更されたレジストリエントリをユーザーストアに同期するように、プロファイル管理を有効にできます。このポリシーは、「**アクティブライトバック**」ポリシーと組み合わせて使用します。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定を構成しない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでこの設定を構成しない場合、または.iniファイルで構成しない場合、アクティブライトバックレジストリは無効になります。

セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック

このポリシーと「**アクティブライトバック**」ポリシーの両方が有効になっている場合、プロファイルファイルとフォルダーは、セッションがロックまたは切断されたときにのみ書き戻されます。

このポリシーと、「**アクティブライトバック**」および「**アクティブライトバックレジストリ**」の両方のポリシーが有効になっている場合、レジストリエントリは、セッションがロックまたは切断されたときにのみ書き戻されます。

構成の優先順位:

- ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、このポリシーは無効になります。

オフラインプロファイルのサポート

オフラインプロファイル機能を有効にできます。この機能により、プロファイルを可能な限り早くユーザー ストアと同期できます。

この機能は、頻繁にローミングするラップトップまたはモバイルデバイスのユーザーを対象としています。ネットワーク接続が切断されても、再起動または休止状態の後でも、プロファイルはラップトップまたはデバイス上でそのまま維持されます。モバイルユーザーがセッションを開始すると、プロファイルはローカルで更新されます。Profile Managementは、ネットワーク接続が復元された後にのみ、ユーザー ストアとプロファイルを同期します。

構成の優先順位:

- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、オフラインプロファイルは無効になります。

プロファイル管理\詳細設定

ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数

ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数を指定できます。

このポリシーを有効にする必要はほとんどありません。

ログオフ中に、ロックされたファイルがある場合、Profile Managementは指定された回数だけファイルにアクセスし、ユーザー ストアにコピーしようとします。しかし、通常、Profile Managementはコピー操作を成功させるためにファイルを読み取るだけであり（書き込みはしませ

ん）、ロックされたファイルが存在する場合、Profile Managementはローカルプロファイルを削除せず、代わりに「古い」状態のままにします（適切なポリシーが有効になっている限り）。

このポリシーを有効にしないことをお勧めします。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、デフォルト値の5回の再試行が使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値が使用されます。

ログオフ時にインターネットクッキーファイルを処理する

一部の展開では、`Index.dat` が参照しない余分なインターネットクッキーが残されます。継続的なブラウジングの後、ファイルシステムに残された余分なクッキーは、プロファイルの肥大化につながる可能性があります。このポリシーを使用すると、Profile Management を有効にして Index.dat の処理を強制し、余分なクッキーを削除できます。このポリシーはログオフ時間を増加させるため、この問題が発生した場合にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、Index.dat の処理は行われません。

自動構成を無効にする

Profile Management は、実行時に Citrix 環境を評価し、推奨されるグループポリシー設定を自動的に構成します。

自動構成は、展開を高速化し、最適化を簡素化するのに役立ちます。自動構成はデフォルトで *有効* になっています。通常、このポリシーを構成する必要はありません。ただし、次の場合には自動構成を無効にできます。

- すべてのカスタマイズされたポリシー設定を、構成されたとおりに正確に保持する必要があります。
- Profile Management の以前のバージョンからアップグレードしており、同じ有効な設定を維持したい場合。
- Profile Management に関連する問題のトラブルシューティングを行っている場合。

> **注:**
>
> 通常、自動構成を無効にすると、期待される動作を保証するために、関連するポリシーを手動で構成する必要がある場合があります。

> 自動構成は、動的な構成チェッカーとして機能します。実行時に環境に基づいてデフォルトのポリシー設定を調整します。実行時要因には以下が含まれます。

- Windows OS および OS のバージョン
- Citrix仮想デスクトップの存在
- パーソナルvDiskの存在
- インストールされているアプリケーション（例：Office 365）
- 既存のProfile Managementポリシー設定

詳細については、「自動構成の使用」を参照してください。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここで構成されておらず、.iniファイルでも構成されていない場合、自動構成が有効になります。この場合、環境が変更されるとProfile Managementの設定も変更される可能性があります。

問題が発生した場合にユーザーをログオフする

問題が発生した場合にProfile Managementがユーザーをログオフするかどうかを指定します。

このポリシーが無効になっているか、構成されていない場合、問題が発生するとProfile Managementはユーザーに一時プロファイルを提供します。たとえば、ユーザーストアが利用できない場合などです。

構成の優先順位:

1. この設定が有効になっている場合、エラーメッセージが表示され、ユーザーはログオフされます。この設定により、問題のトラブルシューティングが簡素化されます。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここで構成されておらず、.iniファイルでも構成されていない場合、一時プロファイルが提供されます。

問題が発生した場合にユーザーをログオフする

問題が発生した場合にProfile Managementがユーザーをログオフするかどうかを指定できます。

このポリシーが無効になっているか、構成されていない場合、問題が発生するとProfile Managementはユーザーに一時プロファイルを提供します。たとえば、ユーザー ストアが利用できない場合などです。

構成の優先順位:

1. この設定が有効になっている場合、エラーメッセージが表示され、ユーザーはログオフされます。この設定により、問題のトラブルシューティングが簡素化されます。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、一時プロファイルが提供されます。

カスタマーエクスペリエンス向上プログラム

デフォルトでは、カスタマーエクスペリエンス向上プログラムが有効になっており、匿名統計と使用状況データを送信することで、Citrix製品の品質とパフォーマンスの向上に役立てられます。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

Outlookの検索インデックスローミングを有効にする

このポリシーを有効にすると、Profile ManagementはOutlook検索データをユーザープロファイルとともに自動的にローミングすることで、ユーザーにネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供します。このポリシーは、Outlookの検索インデックスを保存するために追加のストレージを必要とします。

このポリシーを有効にするには、ログオフしてから再度ログオンしてください。

Outlook検索インデックスデータベース – バックアップと復元

「Outlookの検索インデックスローミングを有効にする」ポリシーが有効になっている場合に、ログオン中にProfile Managementが何を行うかを指定できます。

このポリシーが有効な場合、Profile Managementは、ログオン時に検索インデックスデータベースが正常にマウントされるたびに、そのデータベースをバックアップします。Profile Managementは、このバックアップを検索インデックスデータベースの正常なコピーとして扱います。検索インデックスデータベースのマウントがデータベースの破損により失敗した場合、Profile Managementは検索インデックスデータベースを最後に確認された正常なコピーに戻します。

注：

Profile Managementは、新しいバックアップが正常に保存された後、以前に保存されたバックアップを削除します。バックアップは、利用可能なVHDXストレージを消費します。

Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする

Profile Managementが、同じユーザーの同時セッションでネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供できるようにします。このポリシーは、Outlookの検索インデックスローミングポリシーと併用してください。

このポリシーが有効な場合、各同時セッションは個別のOutlook OSTファイルを使用します。

デフォルトでは、Outlook OSTファイルを保存するために使用できるVHDXディスクは2つのみです（ディスクごとに1ファイル）。ユーザーがさらにセッションを開始すると、そのOutlook OSTファイルはローカルユーザープロファイルに保存されます。Outlook OSTファイルを保存するためのVHDXディスクの最大数を指定できます。

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

マルチセッションシナリオでプロファイルコンテナのライトバックを有効にできます。

注：

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナは、Citrix Profile Management 2103以降で利用可能です。FSLogix Profile Containerは、Citrix Profile Management 2003以降で利用可能です。

このポリシーが有効な場合、すべてのセッションでの変更がプロファイルコンテナにライトバックされます。そうでない場合、プロファイルコンテナでは最初のセッションのみが読み取り/書き込みモードであるため、最初のセッションでの変更のみが保存されます。

FSLogix Profile Containerでこのポリシーを使用するには、次の前提条件が満たされていることを確認してください。

- FSLogix Profile Container機能がインストールされ、有効になっていること。
- FSLogixでプロファイルタイプが**読み取り/書き込みプロファイルを試行し、読み取り専用にフォールバックする**に設定されていること。

ユーザー ストアをレプリケートする

リモートユーザープロファイルストアを、ログオンおよびログオフごとに複数のパスにレプリケートできます。これにより、Profile Managementはユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供できます。

このポリシーを有効にすると、システムI/Oが増加し、ログオフ時間が長くなる可能性があります。

> **注：**
>
> この機能は、ファイルベースとコンテナベースの両方のプロファイル ソリューションで利用できます。

ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にできます。

デフォルトでは、Citrix Profile Managementは現在のユーザーを偽装してユーザー ストアにアクセスします。そのため、現在のユーザーがユーザー ストアにアクセスする権限を持っている必要があります。状況によっては、現在のユーザーがアクセス権を持たないストレージリポジトリ（Azure Filesなど）にユーザー ストアを配置したい場合があります。そのような場合は、このポリシーを有効にして、Profile Managementがストレージリポジトリの資格情報を使用してユーザーストアにアクセスできるようにします。

Profile Managementが資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできるようにするには、資格情報をWorkspace Environment Management™ (WEM) またはWindows資格情報マネージャーに保存します。Profile Managementを実行している各マシンで同じ資格情報を構成する必要をなくすために、Workspace Environment Managementを使用することをお勧めします。Windows資格情報マネージャーを使用する場合は、ローカルシステムアカウントを使用して資格情報を安全に保存してください。

> **注：**
>
> このポリシーは、ファイルベースとVHDXベースの両方のユーザー ストアで利用できます。Profile Managementバージョン2212より前のバージョンでは、このポリシーはVHDXベースのユーザー ストアでのみ利用できます。

> 構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、デフォルトで無効になります。

VHDXファイルのストレージパスを指定する

Profile Managementで使用されるVHDXファイルを保存するためのストレージパスを指定できます。

Citrix Profile Managementは、次のVHDXベースのポリシーを提供します: ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを有効にする、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ、およびフォルダミラーリングの高速化。デフォルトでは、VHDXファイルはユーザーストアに保存されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトで無効になります。

VHDコンテナのデフォルト容量

VHDコンテナのデフォルトのストレージ容量（GB単位）を指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトは50（GB）です。

セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする

このポリシーを有効にすると、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーの高い安定性を確保します。デフォルトでは、このポリシーは有効になっています。

このポリシーが有効になっている場合、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーによって使用されているVHDXディスクを監視します。いずれかのディスクがデタッチされた場合、Profile Managementはディスクを自動的に再アタッチします。

ログオン時にユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする

Windowsは、ユーザーグループポリシーに2つの処理モード（同期と非同期）を提供します。Windowsは、次のユーザーログオンの処理モードを決定するためにレジストリ値を使用します。レジストリ値が存在しない場合、同期モードが適用されます。レジストリ値はマシンレベルの設

定であり、ユーザーとともにローミングしません。したがって、ユーザーが次のいずれかの場合は、非同期モードは期待どおりに適用されません。

- 異なるマシンにログオンする。
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するポリシーが有効になっている同じマシンにログオンする。

このポリシーを有効にすると、レジストリ値はユーザーとともにローミングされます。その結果、ユーザーがログオンするたびに処理モードが適用されます。

VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率

VHDディスク圧縮を有効にするが有効な場合に適用されます。VHDディスク圧縮をトリガーする解放可能領域の比率を指定できます。ユーザーログオフ時に解放可能領域の比率が指定された値を超えると、ディスク圧縮がトリガーされます。

解放可能領域の比率 = (現在のVHDファイルサイズ – 必要な最小VHDファイルサイズ*) ÷ 現在のVHDファイルサイズ

* Microsoft Windowsオペレーティングシステムの`MSFT_Partition`クラスのGetSupportedSizeメソッドを使用して取得されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、デフォルト値の 20 (%) が使用されます。

VHDディスク圧縮をトリガーするログオフ回数

VHDディスク圧縮を有効にする が有効な場合に適用されます。VHDディスク圧縮をトリガーするユーザーログオフ回数を指定できます。

前回の圧縮以降のログオフ回数が指定された値に達すると、ディスク圧縮が再度トリガーされます。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値の5が使用されます。

VHDディスクの圧縮におけるデフラグを無効にする

VHDディスクの圧縮を有効にするが有効な場合に適用されます。VHDディスクの圧縮におけるファイルのデフラグを無効にするかどうかを指定できます。

VHDディスクの圧縮が有効な場合、VHDディスクファイルはまずWindowsに組み込まれている`defrag`ツールを使用して自動的にデフラグされ、その後圧縮されます。VHDディスクのデフラグはより良い圧縮結果をもたらしますが、無効にするとシステムリソースを節約できます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフラグはデフォルトで有効になります。

プロファイルコンテナの自動拡張しきい値

プロファイルコンテナが自動拡張をトリガーするストレージ容量の使用率を指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトはストレージ容量の90%です。

プロファイルコンテナの自動拡張増分

自動拡張がトリガーされたときに、プロファイルコンテナが自動的に拡張するストレージ容量（GB単位）を指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトは10 (GB)です。

プロファイルコンテナの自動拡張制限

自動拡張がトリガーされたときに、プロファイルコンテナが自動的に拡張できる最大ストレージ容量 (GB単位) を指定できます。

構成の優先順位:

- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトは80 (GB)です。

OneDriveコンテナを有効にする

OneDriveフォルダをユーザーと共にローミングできるようにします。

OneDriveコンテナは、VHDXベースのフォルダローミングソリューションです。Profile Managementは、ファイル共有上にユーザーごとにVHDXファイルを作成し、ユーザーのOneDriveフォルダをVHDXファイルに保存します。VHDXファイルは、ユーザーがログオンするときにアタッチされ、ログオフするときにデタッチされます。

UWPアプリのローミング

UWP (Universal Windows Platform) アプリをユーザーと共にローミングできるようにします。これにより、ユーザーは異なるデバイスから同じUWPアプリにアクセスできます。

このポリシーを有効にすると、Profile ManagementはUWPアプリを個別のVHDXディスクに保存することで、ユーザーと共にローミングできるようにします。これらのディスクは、ユーザーのログオン中にアタッチされ、ログオフ中にデタッチされます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、この機能は無効になります。

AppXパッケージのロード高速化を有効にする

UWPアプリのロードを高速化し、非永続環境での一貫性を向上させます。デフォルトでは、WindowsはUWPアプリの登録情報を各マシンにローカルに保存しますが、非永続環境では再起動時に失われる可能性があります。このポリシーを有効にすると、Profile Managementは各マシン用にVHDXコンテナを作成し、UWPアプリの登録データを保存することで、ユーザーログオンを高速化し、再起動時のデータ損失を防ぎます。

構成の優先順位:

1. この設定がGPO、Studio、またはWorkspace Experience Management (WEM) を使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする

このポリシーを有効にすると、マシンレベルのポリシー設定がユーザーレベルで機能し、ユーザーレベルの設定がマシンレベルの設定を上書きします。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

ユーザーグループの優先順位を設定する

ユーザーグループの優先順位を指定します。この順序は、ユーザーが異なるポリシー設定を持つ複数のグループに属している場合に、どのグループが優先されるかを決定します。

ユーザーが競合するポリシー設定を持つ複数のグループに属している場合、以下を考慮してください:

- ユーザーがこのポリシーで定義されている1つ以上のグループに属している場合、最も優先順位の高いグループが優先されます。
- ユーザーがこのポリシーで定義されているどのグループにも属していない場合、アルファベット順で最初にリストされているSIDを持つグループが優先されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、優先順位は指定されません。

ユーザーストアの選択方法

複数のユーザーストアが利用可能な場合に、ユーザーストアの選択方法を指定できます。オプションは次のとおりです。

- **構成順序。** Profile Managementは、最初に構成されたストア（構成順序で最も早いもの）を選択します。
- **アクセスパフォーマンス。** Profile Managementは、最高のアクセスパフォーマンスを持つストアを選択します。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、**構成順序**が使用されます。

ユーザーストア間のセッション内プロファイルコンテナフェイルオーバーを有効にする

デフォルトでは、複数のユーザーストアが展開されている場合、プロファイルコンテナのフェイルオーバーは*ユーザーログオン時のみ*発生します。その結果、プロファイルの冗長性はユーザーログオン時のみ利用可能です。このポリシーを使用すると、フェイルオーバーの範囲を*セッション全体*に拡大し、セッション全体でプロファイルの冗長性を確保できます。このポリシーが有効

になっている場合、セッション中にProfile Managementがアクティブなプロファイルコンテナへの接続を失うと、自動的に別の利用可能なコンテナに切り替わります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、設定は無効になります。

プロファイル読み込みタイムアウト

プロファイル読み込みタイムアウト機能を有効にし、タイムアウト期間を構成できます。Citrix Profile Managementは、一時プロファイルに切り替える前に、ユーザープロファイルが読み込まれるまで指定されたタイムアウト時間待機します。 デフォルトでは、**プロファイル読み込みタイムアウト**設定は45秒で、有効な範囲は0〜1800秒です。プロファイルの読み込みをバイパスして一時プロファイルを使用するには、タイムアウトを0秒に設定します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ポリシーはデフォルトで無効になります。

プロファイルサイズがクォータを超過した場合にユーザーに通知する

ユーザープロファイルのクォータを設定し、プロファイルサイズがそれを超えた場合にユーザーに通知できます。

プロファイルサイズがクォータを超過した場合の通知メッセージ

プロファイルサイズがクォータを超過した場合にユーザーに通知するポリシーが有効な場合に適用されます。ユーザーが受け取る通知メッセージを設定できます。

Profile Management\Citrix Virtual Apps最適化設定

Citrix Virtual Apps™最適化を有効にする

この機能を有効にすると、ユーザーが起動または終了する公開アプリケーションに固有の設定のみが同期されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Citrix仮想アプリの最適化設定は適用されません。

Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス

Citrix仮想アプリの最適化の定義ファイルを保存するフォルダーを指定できます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Citrix仮想アプリの最適化設定は適用されません。

> **注:**
>
> フォルダーはローカルストレージまたはSMBファイル共有に配置できます。

ログオフ時のプロファイル同期を制限する

ユーザーログオフ時に同期されるユーザーストアの数を指定できます。

デフォルトでは、Citrix Profile Managementはログオフ時にすべてのユーザーストアを同期し、すべてのストアでの同期が完了するまでログオフプロセスは完了しません。同期されるストアの数を制限すると、ログオフ時間が短縮されます。

*非永続的*なマシンでは、未同期のストアは次回のユーザーセッション中に更新されます。*永続的*なマシンでは、未同期のストアはログオフ後にバックグラウンドで同期されます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、`.ini`ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも`.ini`ファイルでも構成されていない場合、ポリシーはデフォルトで無効になります。

> **注:**
>
> このポリシーは、**ユーザー ストアのレプリケート**ポリシーが有効になっている場合にのみ有効になります。

マシン休止状態のマルチセッションサポートを有効にする

休止状態中にディスクの状態を維持することで、システム休止状態のサポートを有効にできます。これにより、休止状態のセッションで使用されているVHDXディスクが他のセッションに再割り当てされないようにします。その結果、マシンが休止状態から回復した後もユーザープロファイルを再開でき、一貫したセッションの継続性が保証されます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、設定は無効になります。

プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定

クロスプラットフォーム設定を有効にする

クロスプラットフォーム設定を有効にできます。クロスプラットフォーム設定機能は、主にWindows 7およびWindows Server 2008からWindows 8およびWindows Server 2012への移行に使用されます。この移行には、Microsoft Office 2003またはOffice 2007からOffice 2010への移行も含まれる場合があります。

デフォルトでは、展開を容易にするために、クロスプラットフォーム設定は無効になっています。このポリシーは、この機能の十分な計画とテストを行った後にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ

クロスプラットフォーム設定機能が適用されるWindowsユーザーグループを指定できます。たとえば、このポリシーを使用して、テストユーザーグループのプロファイルのみを処理できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが構成されている場合、Profile Managementのクロスプラットフォーム設定機能は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。このポリシーが無効になっている場合、この機能は「処理されるグループ」ポリシーで指定されたすべてのユーザーを処理します。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーグループが処理されます。

クロスプラットフォーム定義へのパス

定義ファイルが置かれているネットワークの場所を指定できます。

このパスはUNCパスである必要があります。ユーザーはこの場所への読み取りアクセス権を持ち、管理者は書き込みアクセス権を持っている必要があります。この場所は、Server Message Block (SMB) またはCommon Internet File System (CIFS) のファイル共有である必要があります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

クロスプラットフォーム設定ストアへのパス

クロスプラットフォーム設定ストアへのパスを指定できます。このストアとは、ユーザーのクロスプラットフォーム設定が保存されるフォルダーを指します。

このストアは、複数のプラットフォームで共有されるプロファイルデータが配置されているユーザーストア内にあります。ユーザーはストアへの書き込みアクセス権を持っている必要があります。パスは絶対UNCパス、またはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。「**ユーザーストアへのパス**」で使用される変数を使用できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、`Windows\PM_CP` パスが使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、既定値が使用されます。

クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース

このポリシーがそのプラットフォームのOUで有効になっている場合、プラットフォームをベースプラットフォームとして指定できます。このポリシーは、ベースプラットフォームのプロファイルからクロスプラットフォーム設定ストアにデータを移行します。既定では、このポリシーは無効になっています。

各プラットフォーム独自のプロファイルセットは、個別のOUに保存されます。クロスプラットフォーム設定ストアのシードとして使用するベースプラットフォームとして、どのプラットフォームのプロファイルデータを使用するかを決定します。

このポリシーが有効になっている場合、次のいずれかの状況が発生すると、Profile Management はシングルプラットフォームプロファイルからストアにデータを移行します。

- クロスプラットフォーム設定ストアにデータのない定義ファイルが含まれている。
- シングルプラットフォームプロファイルのキャッシュデータが、ストア内の定義データよりも新しい。

> **重要:**
>
> このポリシーが複数のOU、ユーザーオブジェクト、またはマシンオブジェクトで有効になっている場合、最初にユーザーがログオンするプラットフォームがベースプロファイルになります。

プロファイル管理\ファイルシステム

除外リスト - ファイル

Profile Managementが同期中に無視するファイルを指定できます。ファイル名は、ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスである必要があります。ワイルドカードが許可されており、再帰的に適用されます。

例:

- `Desktop\Desktop.ini` は、`Desktop` フォルダー内の `Desktop.ini` ファイルを無視します。
- `%USERPROFILE%*.tmp` は、プロファイル全体の `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
- `AppData\Roaming\MyApp*.tmp` は、プロファイルの一部にある `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを無視します。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。

3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

デフォルトの除外リストを有効にする - ディレクトリ

Profile Management が同期中に無視するディレクトリのデフォルトリストを指定できます。このポリシーを使用して、GPO 除外ディレクトリを手動で入力することなく指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーを無効にすると、Profile Management はデフォルトでどのディレクトリも除外しません。
2. このポリシーをここで構成しない場合、Profile Management は .ini ファイルの値を使用します。
3. このポリシーをここでも .ini ファイルでも構成しない場合、Profile Management はデフォルトでどのディレクトリも除外しません。

除外リスト - ディレクトリ

Profile Management が同期中に無視するフォルダーを指定できます。フォルダー名は、ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスとして指定する必要があります。

例:

- デスクトップはユーザープロファイルのデスクトップフォルダーを無視します

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、フォルダーは除外されません。
2. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

ログオン除外チェック

ユーザーストア内のプロファイルに除外されたファイルまたはフォルダーが含まれている場合に、Profile Managementが何を行うかを指定できます。

構成の優先順位:

1. この設定が無効になっているか、デフォルト値の**除外されたファイルまたはフォルダーを同期する**に設定されている場合、ユーザーがログオンすると、Profile Managementはそれらの除外されたファイルまたはフォルダーをユーザーストアからローカルプロファイルに同期します。

2. この設定が**除外されたファイルまたはフォルダーを無視する**に設定されている場合、Profile Managementはユーザーログオン時にユーザーストア内の除外されたファイルまたはフォルダーを無視します。この設定が**除外されたファイルまたはフォルダーを削除する**に設定されている場合、Profile Managementはユーザーログオン時にユーザーストア内の除外されたファイルまたはフォルダーを削除します。
3. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Profile Managementは除外されたファイルまたはフォルダーをユーザーストアからローカルプロファイルに同期します。

大容量ファイル処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル

シンボリックリンクとして作成されるファイルを指定できます。この設定は、ログオンパフォーマンスを向上させ、大容量ファイルを処理するために使用されます。

ファイルを参照するポリシーでワイルドカードを使用できます。例: `!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook*.OST`。

オフラインOutlookデータファイル (`*.ost`) を処理するには、**Outlook**フォルダーがProfile Managementで除外されていないことを確認してください。

これらのファイルは、複数のセッションで同時にアクセスすることはできません。

プロファイル管理\ファイルシステム\同期

同期するディレクトリ

親フォルダーが除外されている場合に、Profile Managementで同期するフォルダーを指定できます。

このリストのパスは、ユーザープロファイルに対する相対パスである必要があります。

Profile Managementは、インストールされているシステムとユーザーストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。ユーザープロファイルのサブフォルダーをこのリストに追加して含める必要はありません。

このポリシーを無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないフォルダーのみが同期されます。

同期するファイル

親フォルダーが除外されている場合に、Profile Managementで同期するファイルを指定できます。

このリストのパスは、ユーザープロファイルに対する相対パスである必要があります。ワイルドカードはファイル名とフォルダー名で使用できます。ただし、ワイルドカードはファイル名でのみ再帰的に適用されます。

例:

- AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat は、デフォルト設定で除外されているフォルダー内のファイルを指定します
- AppData\Local\MyApp*.cfg は、プロファイルフォルダー AppData\Local\MyApp およびそのサブフォルダー内の拡張子 .cfg を持つすべてのファイルを指定します

Profile Management は、インストールされているシステムとユーザー ストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。このリストにファイルを追加して、ユーザー プロファイルに含める必要はありません。

このポリシーを無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ユーザー プロファイル内の除外されていないファイルのみが同期されます。

ミラーリングするフォルダー

このポリシーは、トランザクション フォルダー（参照フォルダーとも呼ばれます）に関連する問題を解決するのに役立ちます。この種のフォルダーには、相互に依存するファイルが含まれており、あるファイルが他のファイルを参照しています。

このポリシーにより、Profile Management は、ユーザー プロファイルを同期する際に、トランザクション フォルダーとその内容を単一のエンティティとして処理します。

構成の優先順位：

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、フォルダーはミラーリングされません。

フォルダーミラーリングの高速化

このポリシーと**ミラーリングするフォルダー**ポリシーの両方を有効にすると、Profile Managementはミラーリングされたフォルダーを VHDX ベースの仮想ディスクに保存します。仮想ディスクはログオン時にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。このポリシーを有効にすると、ユーザー ストアとローカル プロファイルの間でフォルダーをコピーする必要がなくなり、フォルダー ミラーリングが高速化されます。

> **注：**

> Profile Management 2603および2507 CU2以降、このポリシーはデフォルトで**無効**になっています。バージョン2507から2511では、デフォルトで有効になっていました。

> 構成の優先順位：

1. このポリシーが明示的に構成されている（有効または無効）場合、Profile Managementは構成された選択に従います。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合：
    - Profile Management 2507、2507 CU1、または2511からのアップグレードの場合、ポリシーは**有効**のままです。
    - その他のすべてのシナリオ（新規インストール、2507より前のリリースからのアップグレード、または2603以降からのアップグレード）では、この機能は**無効**になります。

プロファイル管理\ファイル重複排除

ユーザー ストア内のさまざまなユーザープロファイル間で同一のファイルが存在する場合があります。ユーザー ストアにファイルの重複したインスタンスが保存されていると、ストレージ コストが増加します。

ファイル重複排除ポリシーを使用すると、Profile Managementはユーザー ストアから重複ファイルを削除し、それらの1つのインスタンスを中央の場所（*共有ストア*と呼ばれます）に保存できます。これにより、ユーザー ストアでのファイルの重複が回避され、ストレージ コストが節約されます。

重複排除のために共有ストアに含めるファイル

ファイル重複排除を有効にし、重複排除のために共有ストアに含めるファイルを指定できます。

共有ストアから除外するファイル

共有ストアから除外するファイルを指定できます。このポリシーは、*重複排除のために共有ストアに含めるファイル* ポリシーと併用してください。

プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズ

プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズを指定できます。このサイズは256 MB以上である必要があります。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、値は256になります。

プロファイル管理\ログ設定

ログ記録を有効にする

Profile Managementのログ記録を有効にするかどうかを指定できます。このポリシーは、Profile Managementのトラブルシューティングを行う場合にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、エラーのみがログに記録されます。このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、エラーのみがログに記録されます。

ログ設定

Profile Managementがログに記録するイベントまたはアクションを選択できます。Citrixの担当者から要求された場合にのみ、すべてを選択してください。

構成の優先順位:

1. ここでポリシーが構成されていない場合、Profile Management は .ini ファイルの値を使用します。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、エラーと一般情報がログに記録されます。

このポリシーのチェックボックスは、.ini ファイルの次の設定に対応しています: LogLevelWarnings, LogLevelInformation, LogLevelFileSystemNotification,

LogLevelFileSystemActions, LogLevelRegistryActions, LogLevelRegistryDifference, LogLevelActiveDirectoryActions, LogLevelPolicyUserLogon, LogLevelLogon, LogLevelLogoff, および LogLevelUserName。

ログファイルの最大サイズ

Profile Management ログファイルの最大サイズをバイト単位で指定できます。

Profile Management ログファイルの最大サイズのデフォルト値は 10 MB です。十分なディスク容量がある場合は、値を増やしてください。ログファイルが最大サイズを超えて大きくなった場合、次のようになります。

1. 既存のファイルのバックアップ (.bak) が削除されます。
2. ログファイルは .bak に名前が変更されます。
3. 新しいログファイルが作成されます。

ログファイルは `%SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager` または **ログファイルへのパス** ポリシーで指定された場所に作成されます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、デフォルト値の 10 MB が使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、デフォルト値が使用されます。

ログファイルへのパス

ログファイルを保存するための代替パスを構成できます。

パスはローカルドライブまたはネットワークベースのドライブ（UNCパス）を指すことができます。

- 大規模な分散環境ではリモートドライブが推奨されます。ただし、大量のネットワークトラフィックを生成する可能性があり、ログファイルには適さない場合があります。
- ローカルドライブは、永続的なハードドライブを持つプロビジョニングされた仮想マシンでよく使用されます。

この設定により、マシンの再起動時にログファイルが保持されます。永続的なハードドライブを持たない仮想マシンの場合、UNCパスを設定することでログファイルを保持できます。ただし、マシンのシステムアカウントはUNC共有への書き込みアクセス権を持っている必要があります。

オフラインプロファイル機能によって管理されるラップトップには、ローカルパスを使用してください。

ログファイルにUNCパスを使用する場合、Citrixはログファイルフォルダに適切なアクセス制御リストを適用することを推奨します。アクセス制御により、承認されたユーザーまたはコンピューターアカウントのみが保存されたファイルにアクセスできるようになります。

例:

- D:\LogFiles\ProfileManagement。
- \\server\LogFiles\ProfileManagement

ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトの場所 %SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager が使用されます。

プロファイル管理\プロファイルコンテナ設定

プロファイルコンテナー

VHDXベースのネットワークディスク（プロファイルコンテナ）を使用してユーザープロファイルを保存できます。ユーザープロファイル全体または一部を保存するために使用できます。ユーザーログオン時に、プロファイルコンテナはユーザー環境にマウントされ、プロファイルフォルダはすぐに利用可能になります。

プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする

Citrix Profile Managementのプロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にできます。このポリシーは、プロファイルコンテナがユーザープロファイル全体に対して有効になっている場合にのみ適用されます。

このポリシーを**有効**に設定すると、各ローカルプロファイルはCitrix Profile Managementプロファイルコンテナのローカルキャッシュとして機能します。プロファイルストリーミングが使用されている場合、ローカルにキャッシュされたファイルはオンデマンドで作成されます。それ以外の場合は、ユーザーログオン時に作成されます。

プロファイルコンテナから除外するフォルダ

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナから除外するフォルダを指定できます。

プロファイルコンテナに含めるフォルダ

親フォルダが除外されている場合に、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナに保持するフォルダを指定できます。

このリストのフォルダは、除外されたフォルダのサブフォルダである必要があります。そうしないと、この設定は機能しません。

この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

プロファイルコンテナに含めるファイル

親フォルダが除外されている場合に、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナに含めるファイルを指定できます。

このリストのファイルは、除外されたフォルダ内にある必要があります。そうしないと、この設定は機能しません。

プロファイルコンテナから除外するファイル

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナから除外するファイルを指定できます。

VHDディスクの圧縮を有効にする

Profile Management の VHD ディスク圧縮を有効にできます。有効にすると、特定の条件が満たされた場合に、ユーザーログオフ時に VHD ディスクが自動的に圧縮されます。このポリシーにより、プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびミラーフォルダコンテナによって消費されるストレージスペースを節約できます。

必要に応じて、利用可能なリソースに応じて、詳細設定にある**VHDディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率**、**VHDディスク圧縮をトリガーするログオフ回数**、および**VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする**ポリシーを使用して、デフォルトのVHD圧縮設定と動作を調整できます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、この機能は無効になります。

プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする

プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にするかどうかを指定できます。有効にすると、すべてのVHD自動拡張設定がプロファイルコンテナに適用されます。

構成の優先順位:

- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする

デフォルトでは、VHDコンテナは同時アクセスを許可します。この設定を有効にすると、一度に1つのアクセスのみが許可されます。この機能は、プロファイルコンテナとOneDriveコンテナに適用されます。

> **注:**

> コンテナベースのプロファイルソリューションでは、プロファイルコンテナに対してこの設定を有効にすると、*プロファイルコンテナのマルチセッション書き戻しを有効にする*設定が自動的に無効になります。

> 構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、この設定は無効になります。

プロファイルコンテナがログオン時に利用できない場合にユーザーをログオフする

ユーザーログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合に、ユーザーを強制的にログオフするかどうかを指定し、ユーザーに表示されるエラーメッセージをカスタマイズできます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、設定は無効になります。

プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ

どのADドメインユーザーとグループがプロファイルコンテナに対する読み取りおよび実行権限を持つかを指定できます。デフォルトでは、プロファイルコンテナはその所有者のみがアクセスできます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。

2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイルコンテナはその所有者のみがアクセスできます。

BindLinkリダイレクトを有効にする

プロファイルコンテナ内のファイルシステムリダイレクトを処理するためにMicrosoft BindLink APIを使用するかどうかを指定します。この機能はデフォルトで無効になっており、Windows 11 24H2、Windows Server 2025、またはそれ以降 (バージョン 10.0.25314.0 以降) でのみサポートされています。

プロファイル管理\プロファイル処理

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

ログオフ後にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するかどうかを指定できます。

このポリシーが有効になっている場合、ユーザーのローカルプロファイルキャッシュはユーザーログオフ後に削除されます。この設定はターミナルサーバーに推奨されます。このポリシーが無効になっている場合、キャッシュされたプロファイルは削除されません。

> **注:**
>
> ログオフ時にプロファイルキャッシュが削除されるタイミングは、「キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延」ポリシーを使用して制御できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、キャッシュされたプロファイルは削除されません。

キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルが削除されるまでの遅延に、オプションの延長を指定できます。遅延を延長すると、ログオフ中にプロセスがファイルまたはユーザーレジストリハイブを開いたままにしていることがわかっている場合に役立ちます。大規模なプロファイルの場合、この設定はログオフを高速化することもできます。

値が0の場合、ログオフプロセスの終了時にプロファイルが直ちに削除されます。

Profile Managementは1分ごとにログオフをチェックします。値が60の場合、最後のチェックが行われたタイミングに応じて、ユーザーログオフ後1〜2分以内にプロファイルが削除されることを保証します。

重要: このポリシーは、「ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する」が有効になっている場合にのみ機能します。

このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイルは直ちに削除されます。

既存のプロファイルの移行

ユーザーストアが空の場合に、Profile Managementがどの種類のユーザープロファイルをユーザーストアに移行するかを指定できます。

ユーザーがユーザーストアにプロファイルを持っていない場合、Profile Managementはログオン中に既存のプロファイルを「オンザフライ」で移行できます。ローミングプロファイルまたはリモートデスクトップサービスプロファイルを移行する場合は、**ローミング**を選択します。

ログオン中に以下のイベントが発生します。ユーザーがユーザー ストアにCitrixユーザー プロファイルではなくWindowsプロファイルを持っている場合、Profile ManagementはWindowsプロファイルをユーザー ストアに移行します。このプロセス後、Profile Managementは、現在のセッションおよび同じユーザー ストアへのパスで構成されている他のセッションでユーザー ストア プロファイルを使用します。

構成の優先順位:

1. この設定が有効な場合、プロファイルの移行は、ローミングプロファイルとローカルプロファイル（デフォルト）、ローミングプロファイルのみ、ローカルプロファイルのみに対してアクティブ化できます。または、プロファイルの移行を無効にすることもできます。
2. このポリシーが無効で、ユーザー ストアにCitrixユーザー プロファイルが存在しない場合、プロファイルを作成するための既存のWindowsメカニズムが使用されます。
3. プロファイルの移行が無効で、ユーザー ストアにCitrixユーザー プロファイルが存在しない場合、プロファイルを作成するための既存のWindowsメカニズムが使用されます。
4. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
5. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Profile Managementは既存のローカルプロファイルとローミングプロファイルをユーザー ストアに移行します。

既存のアプリケーションプロファイルの自動移行

この設定は、異なるオペレーティングシステム間での既存のアプリケーションプロファイルの自動移行を有効または無効にします。アプリケーションプロファイルには、**AppData**フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE`の下のレジストリエントリの両方が含まれます。この設定は、異なるオペレーティングシステム間でアプリケーションプロファイルを移行したい場合に役立ちます。

たとえば、オペレーティングシステム（OS）をWindows 10バージョン1803からWindows 10バージョン1809にアップグレードする必要があるとします。この設定が有効な場合、各ユーザーが最初にログオンしたときに、Profile Managementは既存のアプリケーション設定をWindows 10バージョン1809に自動的に移行します。**AppData**フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE`の下のレジストリエントリが移行されます。

既存のアプリケーションプロファイルが複数ある場合、Profile Managementは以下の優先順位で移行を実行します。

1. 同じOSタイプのプロファイル（シングルセッションOSからシングルセッションOS、マルチセッションOSからマルチセッションOS）。
2. 同じWindows OSファミリーのプロファイル（例：Windows 10からWindows 10、またはWindows Server 2016からWindows Server 2016）。
3. 以前のバージョンのOSのプロファイル（例：Windows 7からWindows 10、またはWindows Server 2012からWindows 2016）。
4. 最も近いOSのプロファイル。

> **注記:**

> ユーザー ストア パスに `!CTX_OSNAME!` 変数を含めることで、OS の短い名前を指定する必要があります。これにより、Profile Management は既存のアプリケーション プロファイルを特定できます。

> この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの設定が使用されます。

この設定がここで構成されていない場合も、.ini ファイルで構成されていない場合も、デフォルトで無効になります。

ローカル プロファイルの競合処理

ユーザー ストア内のプロファイルとローカルの Windows ユーザー プロファイル (Citrix ユーザー プロファイルではない) の両方が存在する場合に、Profile Management の動作を指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっているか、デフォルト値の「**ローカル プロファイルを使用**」に設定されている場合、Profile Management はローカル プロファイルを使用しますが、いかなる方法でも変更しません。
2. このポリシーが「**ローカル プロファイルを削除**」に設定されている場合、Profile Management はローカルの Windows ユーザー プロファイルを削除します。その後、ユーザー ストアから Citrix ユーザー プロファイルをインポートします。このポリシーが「**ローカル プロファイルの名前を変更**」に設定されている場合、Profile Management はローカルの Windows ユーザー プロファイルの名前を変更します (バックアップ目的)。その後、ユーザー ストアから Citrix ユーザー プロファイルをインポートします。
3. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。このポリシーがここで構成されていない場合も、.ini ファイルで構成されていない場合も、既存のローカル プロファイルが使用されます。

テンプレート プロファイル

テンプレートとして使用するプロファイルの保存パスを指定できます。このパスは、NTUSER.DAT レジストリ ファイルと、テンプレート プロファイルに必要なその他のフォルダーおよびファイルを含むフォルダーの完全パスです。

重要: パス設定に `NTUSER.DAT` を含めないでください。たとえば、`\\myservername\myprofiles\template\ntuser.dat` ファイルの場合、場所を `\\myservername\myprofiles\template` として設定します。 UNC パスまたはローカル コンピューター上のパスである絶対パスを使用します。後者を使用すると、たとえば、Citrix Provisioning™ Services イメージにテンプレート プロファイルを永続的に指定できます。相対パスはサポートされていません。

このポリシーは、Active Directory 属性、システム環境変数、または `%USERNAME%` および `%USERDOMAIN%` 変数の展開をサポートしていません。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、テンプレートは使用されません。
2. このポリシーが有効になっている場合、Profile Management はユーザープロファイルを作成するときに、ローカルのデフォルトプロファイルの代わりにテンプレートを使用します。ユー

ザーに Citrix ユーザープロファイルがないが、ローカルまたは移動 Windows ユーザープロファイルが存在する場合、デフォルトではローカルプロファイルが使用されます。このポリシーが無効になっていない場合、ローカルプロファイルはユーザーストアに移行されます。この設定は、**テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする** または **テンプレートプロファイルが移動プロファイルを上書きする** チェックボックスを有効にすることで変更できます。また、テンプレートを Citrix 強制プロファイルとして識別することは、Windows 強制プロファイルと同様に、変更が保存されないことを意味します。

3. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、テンプレートは使用されません。

プロファイル管理\レジストリ

除外リスト

Profile Management がログオフ時に無視する HKCU ハイブ内のレジストリキーを指定できます。

例: Software\Policies

構成の優先順位:

- このポリシーが無効になっている場合、レジストリキーは除外されません。
- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、レジストリキーは除外されません。

含めるリスト

Profile Management がログオフ時に処理する HKCU ハイブ内のレジストリキーを指定できます。

例: Software\Adobe。

設定の優先順位:

1. このポリシーが有効な場合、このリストのキーのみが処理されます。このポリシーが無効な場合、HKCU ハイブ全体が処理されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、HKCU のすべてが処理されます。

デフォルトの除外リストを有効にする - Profile Management 5.5

Profile Management がユーザープロファイルに同期しない HKCU ハイブ内のレジストリキーを指定できます。このポリシーを使用して、GPO 除外ファイルを手動で入力することなく指定できます。

設定の優先順位:

1. このポリシーを無効にすると、Profile Management はデフォルトでレジストリキーを除外しません。
2. このポリシーをここで構成しない場合、Profile Management は .ini ファイルの値を使用します。
3. このポリシーをここでも .ini ファイルでも構成しない場合、Profile Management はデフォルトでレジストリキーを除外しません。

NTUSER.DAT のバックアップ

NTUSER.DAT の最後に正常だったコピーのバックアップを有効にし、破損が発生した場合にロールバックできるようにします。

このポリシーをここで構成しない場合、Profile Management は .ini ファイルの値を使用します。このポリシーをここでも .ini ファイルでも構成しない場合、Profile Management は NTUSER.DAT をバックアップしません。

プロファイル管理\アプリのアクセス制御

ルールを使用して、ファイル、フォルダー、レジストリキー、および値へのユーザーアクセスを制御したり、ファイル、フォルダー、レジストリキー、および値のマシンレベルのリダイレクトを実装したりできます。

ルールを作成するには、次の方法を使用します。

- GUIベースのツール – **WEM ツールハブ > アプリケーションアクセス制御用ルールジェネレーター**
- PowerShellツール – Profile Managementインストールパッケージに含まれています

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

プロファイル管理\ストリーミングユーザープロファイル

プロファイルストリーミング

プロファイルストリーミング機能を有効にできます。この機能を有効にすると、ユーザープロファイル内のファイルは、ユーザーがアクセスしたときにのみユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされます。`NTUSER.DAT`ファイルと保留領域にあるファイルは例外です。これらはすぐにフェッチされます。NTUSER.DATにはレジストリエントリが格納されます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする

ユーザープロファイル内のフォルダーに対してプロファイルストリーミング機能を有効にできます。

このポリシーと**プロファイルストリーミング**ポリシーの両方が**有効**に設定されている場合、ユーザープロファイル内のフォルダーは、ユーザーがアクセスしたときにのみユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

常にキャッシュ

ログオン直後にユーザー ストアからローカル コンピューターにフェッチされるファイルのサイズの最小制限を指定できます。

プロファイル ストリーミング機能が有効になっている場合、ユーザーがアクセスすると、ユーザー プロファイル内のファイルがローカル コンピューターにフェッチされます。このオンデマンドのファイル フェッチ メカニズムは、ユーザーが要求するファイルが大きい場合に読み込みが遅くなる原因となります。このポリシーを有効にすると、Profile Management は、指定されたサイズより大きいファイルをログオン直後にローカル コンピューターにフェッチします。

ログオン直後にプロファイル全体をローカル コンピューターにフェッチするには、この制限をゼロに設定します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

保留領域ロックファイルのタイムアウト

Profile Management がユーザーのファイルを解放するまでのタイムアウト期間 (日数) を指定できます。タイムアウトが発生すると、ストレージ サーバーが応答しなくなったときにユーザー ストアがロックされたままの場合、ユーザーのファイルは保留領域からユーザー ストアに書き込まれます。このポリシーを使用して、保留領域の肥大化を防ぎ、ユーザー ストアに常に最新のファイルが含まれるようにします。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値の1日が使用されます。

ストリーミングされるユーザープロファイルグループ

ユーザープロファイルがストリーミングされるWindowsユーザーグループを指定できます。

このポリシーは、OU内のWindowsユーザーグループのサブセットのプロファイルをストリーミングします。その他のすべてのグループのユーザーのプロファイルはストリーミングされません。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、すべてのユーザーグループが処理されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーが処理されます。

プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ

プロファイルストリーミングが無視するフォルダーを指定できます。フォルダー名は、ユーザープロファイルに対する相対パスとして指定する必要があります。

例: `Desktop` と入力すると、ユーザープロファイル内の `Desktop` ディレクトリが無視されます。

構成の優先順位:

1. この設定が無効になっている場合、フォルダーは除外されません。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

注:

プロファイルストリーミングの除外は、構成されたフォルダーがプロファイル処理から除外されることを意味しません。Citrix Profile Managementは引き続きそれらを処理します。

保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする

保留領域内のファイルおよびフォルダーに対してプロファイルストリーミング機能を有効にできます。

保留領域は、プロファイルストリーミングが有効になっている間、プロファイルの整合性を確保するために使用されます。同時セッションで変更されたプロファイルファイルとフォルダーを一時的に保存します。

デフォルトでは、このポリシーは無効になっており、保留領域内のすべてのファイルとフォルダーはログオン時にローカルプロファイルにフェッチされます。このポリシーを有効にすると、保留領域内のファイルは要求されたときにのみローカルプロファイルにフェッチされます。同時セッションシナリオで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、このポリシーをプロファイルストリーミングポリシーと組み合わせて使用します。

このポリシーは、フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にするポリシーが有効になっている場合、保留領域内のフォルダーに適用されます。

プロファイル管理\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成)

プロファイルに一般的に表示されるフォルダーをリダイレクトするかどうか、およびリダイレクトターゲットを指定できます。ターゲットは、UNC パス (サーバー共有または DFS 名前空間の場合) またはユーザーのホームディレクトリに対する相対パスとして指定します。ホームディレクトリは通常、Active Directory の `#homeDirectory#` 属性で構成されます。

ここでポリシーが構成されていない場合、プロファイル管理は指定されたフォルダーをリダイレクトしません。

注:

- フォルダーリダイレクトに UNC パスを使用する場合、#homedirectory# 変数はサポートされません。「**ユーザーのホームディレクトリにリダイレクト**」ポリシーを選択した後、パスを指定する必要はありません。

- リダイレクトターゲットフォルダーへのユーザーアクセスを許可するには、「**管理者権限の付与**」ポリシーではなく、「**リダイレクトターゲットパスにアクセスするユーザーとグループ**」ポリシーを使用することをお勧めします。「管理者権限の付与」ポリシーは、ローカル管理者グループのメンバーにリダイレクトターゲットフォルダーへのアクセスを許可します。ただし、ユーザーをローカル管理者グループに追加すると、この役割に関連する広範な権限のためにセキュリティ上の懸念が生じる可能性があります。

`<folder-name>` フォルダーのリダイレクトポリシーを使用すると、`<folder-name>` フォルダーをリダイレクトする方法を指定できます。これを行うには、「**有効**」を選択し、リダイレクトされたパスを入力します。

注意:

データ損失が発生する可能性があります。

ポリシーが有効になった後でパスを変更したい場合があります。ただし、変更する前に潜在的なデータ損失を考慮してください。変更されたパスが以前のパスと同じ場所を指している場合、リダイレクトされたフォルダーに含まれるデータが削除される可能性があります。

例えば、連絡先のパスを`path1`として指定します。その後、`path1`を`path2`に変更します。`path1`と`path2`が同じ場所を指している場合、ポリシーが有効になった後、リダイレクトされたフォルダーに含まれるすべてのデータが削除されます。

潜在的なデータ損失を避けるために、次の手順を実行してください。

1. Active Directoryグループポリシーオブジェクトを介して、Profile Managementが実行されているマシンにMicrosoftポリシーを適用します。詳細な手順は次のとおりです。

   a. グループポリシー管理コンソールを開きます。

   b. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Windows コンポーネント > エクスプローラー**に移動します。

   c. **リダイレクトする前に、古いフォルダーリダイレクトターゲットと新しいフォルダーリダイレクトターゲットが同じ共有を指していることを確認する**を有効にします。

2. 該当する場合、Profile Managementが実行されているマシンにホットフィックスを適用します。詳細については、`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/977229>`および`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2799904>`を参照してください。

ファイルベースおよびコンテナベースのソリューションのポリシー

Profile Managementは、ファイルベースおよびコンテナベースのプロファイルソリューションを提供します。次の表に、Profile Managementのポリシーと、各ソリューションでの利用可能性を示します。

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
NA	プロファイルのリセット	Y	Y	この設定は、ポリシー設定ではなく、Profile Management WMIプラグインによって提供されるWMIコマンドです。コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、Profile Managementはユーザープロファイルを作成し、`Downloads`や`Pictures`などのプロファイルフォルダー内のレガシーコンテンツを復元しません。
プロファイル管理	プロファイル管理を有効にする	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	処理されたグループ	Y	Y	
	除外されたグループ	Y	Y	
	ローカル管理者ログオンの処理	Y	Y	
	ユーザーストアへのパス	Y	Y	
	ユーザーストアの移行	Y	N	
	アクティブライトバック	Y	N	
	アクティブライトバックレジストリ	Y	N	
	セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック	Y	N	
	オフラインプロファイルサポート	Y	N	
プロファイル管理\詳細設定	ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数	Y	N	
	ログオフ時にインターネットクッキーファイルを処理する	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	自動構成を無効にする	Y	N	
	問題が発生した場合にユーザーをログオフする	Y	Y	
	カスタマーエクスペリエンス向上プログラム	Y	Y	
	ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする	Y	Y	
	ユーザーグループの優先順位を設定する	Y	Y	
	Outlook の検索インデックスローミングを有効にする	Y	Y	
	Outlook 検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする	Y	Y	
	プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする	Y	Y	
	ユーザーストアをレプリケートする	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする	Y	Y	
	VHDX ファイルのストレージ パスをカスタマイズする	Y	Y	
	プロファイル サイズがクォータを超過した場合にユーザーに通知する	Y	N	
	プロファイル サイズがクォータを超過した場合の通知メッセージ	Y	N	
	アプリのアクセス制御	Y	Y	
	セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする	Y	Y	
	ログオン時にユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする	Y	Y	
	OneDriveコンテナを有効にする	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域比率	Y	Y	
	VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数	Y	Y	
	VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする	Y	Y	
	プロファイルコンテナの自動拡張しきい値	Y	Y	
	プロファイルコンテナの自動拡張増分	Y	Y	
	プロファイルコンテナの自動拡張制限	Y	Y	
	UWPアプリのローミング	Y	Y	
	AppXパッケージのロード高速化を有効にする	Y	Y	
	VHDコンテナのデフォルト容量	Y	Y	
	ユーザーストアの選択方法	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	ユーザーストア間でのセッション内プロファイルコンテナフェイルオーバーを有効にする	N	Y	
	プロファイルロードのタイムアウト	Y	Y	
	ログオフ時のプロファイル同期を制限する	Y	Y	
	マシンの休止状態に対するマルチセッションサポートを有効にする	Y	Y	
プロファイル管理\アプリアクセス制御	アプリアクセス制御	Y	Y	
プロファイル管理\Citrix Virtual Appsの最適化	Citrix Virtual Appsの最適化を有効にする	Y	N	
	Citrix Virtual Apps™ 最適化定義へのパス	Y	N	
プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定	クロスプラットフォーム設定を有効にする	Y	N	
	クロスプラットフォーム設定	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	ユーザーグループ			
	クロスプラットフォーム定義へのパス	Y	N	
	クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	Y	N	
	クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース	Y	N	
プロファイル管理\ファイル重複排除	重複排除のために共有ストアに含めるファイル	Y	Y	
	共有ストアから除外するファイル	Y	Y	
	プロファイルコンテナから重複排除するファイルの最小サイズ	Y	Y	
プロファイル管理\ファイルシステム	除外リスト - ファイル	Y	N	
	デフォルトの除外リストを有効にする - ディレクトリ	Y	N	
	除外リスト - ディレクトリ	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	ログオン除外チェック	Y	N	
	大容量ファイルの処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル	Y	N	
プロファイル管理\ファイルシステム\同期	同期するディレクトリ	Y	N	
	同期するファイル	Y	N	
	ミラーリングするフォルダー	Y	N	
	フォルダーミラーリングの高速化	Y	N	
プロファイル管理\ログ設定	ログを有効にする	Y	Y	
	ログ設定	Y	Y	
	ログファイルの最大サイズ	Y	Y	
	ログファイルへのパス	Y	Y	
プロファイル管理\プロファイルコンテナ設定	プロファイルコンテナ	N	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	プロファイルコンテナから除外するフォルダー	N	Y	
	プロファイルコンテナに含めるフォルダー	N	Y	
	プロファイルコンテナから除外するファイル	N	Y	
	プロファイルコンテナに含めるファイル	N	Y	
	プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする	N	Y	このポリシーがコンテナベースのソリューションで有効になっている場合、ファイルベースのソリューションに適用されるすべてのポリシー設定は、プロファイルストリーミングやアクティブライトバックなど、コンテナベースのソリューションでも機能します。
	VHDディスクの圧縮を有効にする	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする	Y	Y	
	VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする	Y	Y	
	ログオン時にプロファイルコンテナが利用できない場合、ユーザーをログオフする	N	Y	
	プロファイルコンテナにアクセスするユーザーとグループ	Y	Y	
	BindLink リダイレクトを有効にする	Y	Y	
プロファイル管理\プロファイル処理	ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する	Y	N	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ポリシーが無効になっていても、ユーザーログオフ時にローカルプロファイルは常に自動的に削除されます。
	キャッシュされたプロファイル	Y	Y	コンテナベースのソリューションが有効になっ

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	を削除するまでの遅延			ている場合、ポリシーが無効になっていても、ユーザーログオフ時にローカルプロファイルは常に自動的に削除されます。
	既存のプロファイルの移行	はい	いいえ	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ユーザーのログオフ時にローカルプロファイルは自動的にコンテナに移行されます。
	既存のアプリケーションプロファイルの自動移行	はい	いいえ	
	ローカルプロファイルの競合処理	はい	いいえ	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ユーザーのログオフ時にローカルプロファイルは自動的にコンテナに移行されます。
	テンプレートプロファイル	はい	はい	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
プロファイル管理\レジストリ	除外リスト	Y	Y	
	デフォルトの除外リストを有効にする	Y	Y	
	包含リスト	Y	Y	
	NTUSER.DAT のバックアップ	Y	N	
プロファイル管理\ストリーミングされたユーザープロファイル	プロファイルストリーミング	Y	N	
	フォルダのプロファイルストリーミングを有効にする	Y	N	
	保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする	Y	N	
	常にキャッシュする	Y	N	
	保留領域ロックファイルのタイムアウト (日数)	Y	N	
	ストリーミングされたユーザープロファイルグループ	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ	Y	N	

統合

プロファイル管理と Citrix Virtual Apps™

Citrix Virtual Apps サーバーでこのバージョンの Profile Management を使用する場合は、Profile Management EULA に従う必要があります。Profile Management をローカルデスクトップにインストールして、ユーザーがローカルプロファイルを公開リソースと共有できるようにすることもできます。

注: Profile Management は Citrix virtual desktops™ で自動的に構成されますが、Citrix virtual apps 環境では構成されません。Citrix Virtual Apps の展開における Profile Management の設定を調整するには、グループポリシーまたは .ini ファイルを使用してください。

Profile Management は、Remote Desktop Services（以前は Terminal Services として知られていました）を使用する Citrix Virtual Apps 環境で機能します。これらの環境では、サポートされている各オペレーティングシステムに対して OU を設定する必要があります。詳細については、Microsoft のドキュメントを参照してください。

In farms that contain different versions of Citrix Virtual Apps or that run different operating systems, Citrix recommends using a separate OU for each server that runs each version or operating system.

Important: Including and excluding folders that are shared by multiple users (for example, folders containing shared application data published with Citrix Virtual Apps) is not supported.

ストリーミングアプリケーション

アプリケーションがユーザーデバイスに直接ストリーミングされる環境、またはCitrix Virtual Apps™サーバーにストリーミングされ、そこからユーザーに公開される環境で、Profile Managementを使用できます。

Citrix Virtual Appsにおけるクライアント側アプリケーション仮想化テクノロジーは、アプリケーションを自動的に分離するアプリケーションストリーミングに基づいています。アプリケーションストリーミング機能により、アプリケーションをCitrix Virtual Appsサーバーおよびクライアントデバイスに配信し、保護された仮想環境で実行できます。アプリケーションの競合を防ぐために、ユーザーデバイス上でのアプリケーションの相互作用を制御する機能など、ユーザーにストリーミングされるアプリケーションを分離する理由は多数あります。たとえば、同じアプリケーショ

ンの異なるバージョンが存在する場合、ユーザー設定の分離が必要です。Microsoft Office 2003がローカルにインストールされ、Office 2007がユーザーのデバイスにストリーミングされる場合があります。ユーザー設定を分離しないと競合が発生し、両方のアプリケーション（ローカルおよびストリーミング）の機能に深刻な影響を与える可能性があります。

ストリーミングアプリケーションでの Profile Management の使用に関する要件については、システム要件 を参照してください。

プロファイル管理とCitrix Virtual Desktops™

重要: Citrix Virtual Desktops に統合されている Profile Management の機能を使用することをお勧めします。詳しくは、 Citrix Virtual Desktops のドキュメントを参照してください。このトピックの情報は、別の展開、つまり、Profile Management コンポーネントが別途インストールおよび構成されている Citrix Virtual Desktops の使用に適用されます。

Citrix Virtual Desktops 展開での Profile Management のインストールとアップグレード

このバージョンの Profile Management を Citrix Virtual Desktops で使用するには、Profile Management の EULA に従う必要があります。EULA の条項に従い、Citrix Virtual Desktops 環境で Citrix Virtual Apps™ とともに Profile Management を使用することもできます。

Citrix Virtual Desktops 展開で Profile Management をアップグレードする場合、Profile Management のアップグレードで説明されているように、ログファイルの場所への影響を考慮してください。

Quick Deploy セットアップの Citrix Virtual Desktops については、構成の決定の推奨事項を参照してください。

Citrix Virtual Desktops 展開での Profile Management の構成

イメージが展開される前に Profile Management が正しく構成されていない場合、グループポリシーが適用される前に Profile Management Service が起動します。これを回避するには、イメージを実稼働環境に投入する前に、文書化された手順を使用して構成を実行してください。

重要: 複数のユーザーで共有されるフォルダー（たとえば、複数の仮想デスクトップで共有できるデータを含むフォルダー）の包含と除外はサポートされていません。

Personal vDisk 展開での Profile Management の構成

Citrix Virtual Desktops の Personal vDisk 機能を使用する場合、Citrix ユーザープロファイルはデフォルトで仮想デスクトップの Personal vDisk（通常は P: ドライブ）に保存されます。プロファイルはユーザーの C: ドライブには保存されません。しかし、Profile Management はプロファイルを C: ドライブにあると想定しています。そのため、Virtual Delivery Agent のインストールまたはアップグレード中に、マスターイメージのレジストリを変更する必要があります。さらに、Personal vDisk の空き容量を増やしたため、マスターイメージ上のアプリケーションのデフォルトのディスク容量割り当てを増やすことも推奨されます。これらの変更に関する手順については、「Citrix Virtual Desktops の管理」ドキュメントを参照してください。

Personal vDisk にコピーが残っている間に、ユーザーストア内のプロファイルのコピーを削除しないでください。これを実行すると、Profile Management エラーが発生し、仮想デスクトップへのログオンに一時プロファイルが使用されます。詳しくは、一般的な問題のトラブルシューティングの「ユーザーが新規または一時プロファイルを受け取る」を参照してください。

ウィンドウズ アプリ - マイクロソフトストア

Citrix Virtual Desktops 環境では、Microsoft Store のアプリケーション（UWP アプリとも呼ばれる）がサポートされています。プールされたマシン（プールランダム、静的、または RDS）で Microsoft Store アプリケーションを使用するには、グループポリシー管理エディターを開き、**［ポリシー］\>［管理用テンプレート］\>［従来の管理用テンプレート（ADM）］\>［Citrix］\>［Profile Management］\>［ファイルシステム］\>［同期］**で次の設定を構成します。

- ミラーリングするフォルダーを有効にし、`appdata\local\packages` をミラーリングするフォルダーのリストに追加します
- 「ファイルを同期する」を有効にし、`!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*` を同期するファイルのリストに追加します

ユーザーのプロファイルが別のデスクトップで既に作成されている場合に、Personal vDisk (推奨ソリューション) を使用して専用デスクトップにアクセスすると、Microsoft Store アプリケーションが動作しない可能性があります。

Citrix Virtual Desktops の設定例

このトピックでは、一般的な Citrix Virtual Desktops 展開で使用される Profile Management ポリシー設定を一覧表示します。Windows 7 仮想デスクトップは Citrix Provisioning™ Services で作成され、複数のユーザーで共有されます。この例では、プールされたランダムカタログから作成され、ログオフ時に削除されるデスクトップは、静的ワークステーション (モバイルノートパソコンではない) での使用を目的としており、パーソナル vDisk は使用されません。

ポリシーがリストされていない場合、グループポリシーで選択または入力は行われておらず、デフォルト設定が適用されます。

次の点に注意してください。

- **ユーザーストアへのパス** - Profile Management 変数をユーザーストアへのパスに組み込むことができます。この例では、パスが解釈されるときにそれぞれ Win7 と x86 に展開される \!CTX_OSNAME\! と \!CTX_OSBITNESS\! を使用しています。AD 属性 #sAMAccountName# もユーザー名を指定するために使用されます。
- **ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する** - このポリシーを無効にしても安全です。デスクトップにはパーソナル vDisk が含まれておらず、ユーザーがログオフすると削除されるためです。したがって、ローカルにキャッシュされたプロファイルを保持する必要はありません。(デスクトップがログオフ時に破棄されない場合は、このポリシーを有効にしてください。)
- **プロファイルストリーミング** - この設定を有効にすると、この展開でのログオン時間が改善されます。
- **アクティブライトバック** - このポリシーは、この展開のプールされたデスクトップがユーザーに一時的にのみ割り当てられるため、有効になっています。そのため、ユーザーはプロファイルを変更しても、デスクトップセッションを閉じるのを忘れたり (または気にしなかったり) する可能性があります。この設定を有効にすると、プロファイル内のローカルファイルの変更は、ログオフ前にユーザーストアにミラーリングされます。

注: アクティブライトバックポリシーを有効にすると、セッション内で多数のファイル操作 (ファイルの作成、ファイルのコピー、ファイルの削除など) を実行すると、システム I/O アクティビティが高くなり、Profile Management がファイルの変更をユーザーストアに同期している間、一時的なパフォーマンスの問題が発生する可能性があります。

- **ローカル管理者ログオンを処理する** - この設定を有効にすることは、ほとんどのユーザーがローカル管理者である Citrix Virtual Desktops 展開で推奨されます。
- **処理されるグループ** - すべてのドメインユーザーのプロファイルは Profile Management によって管理されます。
- **除外リスト - ディレクトリ** (ファイルシステム) および **除外リスト** (レジストリ) - これらの設定は、リストされた一時ファイルまたはキャッシュファイル、およびリストされたレジストリエントリが処理されるのを防ぎます。これらのファイルとエントリは、通常、ユーザープロファイルに保存されます。
- **同期するディレクトリ** および **同期するファイル** - ユーザーのアプリケーションデータがどこに保存されているかを知ることで、これらの設定を定義するのに役立ちました。

重要: Citrix Virtual Desktops の展開はさまざまであるため、決定する Profile Management ポリシー設定は、この例のものとは異なる可能性があります。設定を計画するには、 構成を決定する のアドバイスに従ってください。

Citrix/プロファイル管理

Profile Management を有効にする

> 有効

処理されるグループ

> `MyDomainName\Domain Users`

ユーザーストアへのパス

> `\\MyServer.MyDomain\MyUserStore#sAMAccountName#\!CTX_OSNAME!_!CTX_OSBITNESS!`!

アクティブライトバック

> 有効

ローカル管理者によるログオンの処理

> 有効

Citrix/プロファイル管理/プロファイルの処理

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

> 無効

Citrix/プロファイル管理/詳細設定

ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する

> 有効

Citrix/プロファイル管理/ファイルシステム

除外リスト - ディレクトリ

```
$Recycle.Bin


`AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files`


`AppData\Local\Microsoft\Outlook`


`AppData\Local\Temp`


`AppData\LocalLow`


`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Start Menu`


`AppData\Roaming\Sun\Java\Deployment\cache`


`AppData\Roaming\Sun\Java\Deployment\log`


`AppData\Roaming\Sun\Java\Deployment\tmp`
```

Citrix/プロファイル管理/ファイルシステム/同期

同期するディレクトリ

> `AppData\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\Dazzle Apps`

ミラーリングするフォルダー

> `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`

Citrix/プロファイル管理/ストリーム配信ユーザープロファイル

プロファイルストリーミング

> 有効

プロファイル管理とUE-V

Profile Management 5.x と Microsoft User Experience Virtualization (UE-V) 2.0 は、同じ環境で共存できます。UE-V は、複数のプロファイルバージョンが存在する場合（たとえば、バージョン1とバージョン2のプロファイル）、役立ちます。このため、UE-V が存在する場合は、Citrix Profile Management のクロスプラットフォーム設定機能を使用しないでください。UE-V は、より多くのアプリケーション、ユーザーセッション中の同期、およびアプリケーションの XML 構成と生成をサポートするため、その機能よりも優先される場合があります。

Profile Management が UE-V と共存する場合、クロスプラットフォーム設定機能が有効になっているかどうかにかかわらず、次の点に注意してください。

- `AppData\Local\Microsoft\UEV` フォルダーを除外します。UE-V によってキャプチャされたプロファイル設定は、Profile Management によってキャプチャされたプロファイル設定を上書きします。
- UE-V によって制御されるプロファイルを、Profile Management のみによって制御されるプロファイルと共有しないでください。共有すると、「最後の書き込みが優先されます」。つまり、プロファイルを同期する最後のコンポーネント（UE-V または Profile Management）が、どのデータが保存されるかを決定するため、データ損失につながる可能性があります。

注： UE-V には Microsoft Desktop Optimization Pack (MDOP) が必要です。

プロファイル管理とCitrix Content Collaboration™

この記事の情報は、Citrix Content Collaborationの展開におけるProfile Managementの使用に適用されます。その一部は、他のインターネットベースのファイル共有システムにも役立つ場合があります。

Profile Management 4.1.2以降でCitrix Content Collaborationを使用できます。Citrix Content Collaborationはオンデマンドモードでのみサポートされています。

インストール

ShareFile 2.7を使用している場合、互換性の問題を回避するために、Profile Managementをインストールする前にまずこのバージョンをインストールしてください。このインストール依存関係はShareFile 2.6には存在しません。

除外

Citrix Content Collaborationは、構成データをローカルの`\AppData\Roaming\ShareFile`フォルダーに保存します。Citrixユーザープロファイルを持つユーザーの場合、ユーザー固有のCitrix Content Collaboration構成が永続化されるように、このデータはユーザープロファイルとともにローミングする必要があります。この`ShareFile`フォルダーはプロファイルの一部であるため、Profile Managementの構成は必要ありません。構成データはデフォルトでローミングされます。

しかし、Citrix Content Collaborationによって管理されるユーザーデータは、プロファイルのルートにある`ShareFile`フォルダー（`%USERPROFILE%\ShareFile`）に含まれています。このデータはCitrix Content Collaborationサーバーによって管理され、同期されるため、プロファイルとともにローミングしてはなりません。したがって、このフォルダーをProfile Managementの除外対象として追加する必要があります。除外設定の手順については、「項目の含める/除外」を参照してください。

パーソナル vDisk

Personal vDiskを使用して仮想デスクトップを作成する場合、vDisk上のユーザーデータの場所でCitrix Content Collaborationを構成します。これにより、デスクトップとCitrix Content Collaborationサーバー間でファイル同期が行われるようになります。デフォルトでは、Personal vDiskはデスクトップ上でP:ドライブとしてマッピングされるため、データは`P:\Users\<user`name\>に配置される可能性があります。この場合、Citrix Content CollaborationのLocalSyncFolderポリシーを使用して場所を設定します。

重要: 不要な同期を防ぐために（これはProfile ManagementとPersonal vDiskのパフォーマンスに悪影響を与える可能性があります）、仮想デスクトップ上で同期する必要がある場合を除き、大

きなファイルを含むフォルダーには**Folder-ID**設定を使用することをお勧めします。これはShareFileの設定です。

プロファイル管理とApp-V

Microsoft Application Virtualization 5.x (App-V 5.x) と同じ環境でProfile Managementを使用できます。

> **注:**
>
> Profile Managementは、グローバルに公開されたApp-Vのみをサポートします。

> Profile Managementの除外機能を使用して、以下の項目を除外します。

- プロファイル管理\\ファイルシステム\\除外リスト\\ディレクトリ:
  - `AppData\Local\Microsoft\AppV`
  - `AppData\Roaming\Microsoft\AppV\Client\Catalog`
- プロファイル管理\\レジストリ\\除外リスト:
  - `Software\Microsoft\AppV\Client\Integration`
  - `Software\Microsoft\AppV\Client\Publishing`

除外設定の手順については、「項目の包含と除外」を参照してください。

App-Vで**UserLogonRefresh**設定が有効になっている場合、Profile Managementのプロファイルストリーミングポリシーを無効にしてください。この制限は、**UserLogonRefresh**とプロファイルストリーミングの非互換性によるものです。

App-Vアプリケーションをシーケンスする方法の例については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows/application-management/app-v/appv-sequence-a-new-application>`を参照してください。

App-Vが有効なサードパーティ製Profile Managementソリューションの構成については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/microsoft-desktop-optimization-pack/appv-v5/performance-guidance-for-application-virtualization-50>`を参照してください。
Microsoft Windows 10システムでは、`Software\Classes`を含めないでください。

プロファイル管理とプロビジョニングサービス

この記事には、Citrix Provisioning Servicesで作成された仮想ディスク（vDisk）上のCitrixユーザープロファイルを維持するためのアドバイスが含まれています。このアドバイスに従う前に、(/ja-jp/profile-management/current-release/plan/upm-plan-decide-4a.html)に記載されているように、vDisk構成がProfile Management構成にどのように影響するかを理解してください。

サポートされているモード

Profile Managementは、標準イメージモードおよびプライベートイメージモードで実行されているvDiskで使用できますが、差分ディスクイメージモードでは使用できません。

マスターターゲットデバイスから不要なローカルキャッシュプロファイルを削除するには

不要なローカルキャッシュプロファイルが保存されないようにするには、マスターターゲットデバイスイメージを取得する前に、標準イメージモードで実行されているvDiskからこれらのプロファイルを削除してください。ただし、現在ログオンしているローカル管理者のプロファイルは削除しないでください。これを実現する良い方法は次のとおりです。この手順中に、エラーメッセージが表示される場合があります。

1. コンピューターを右クリックします。
2. プロパティを選択します。
3. システムの詳細設定をクリックします。
4. 詳細設定タブで、ユーザープロファイルのをクリックします。
5. 削除する各プロファイルを強調表示し、をクリックします。

vDiskイメージからログファイルを取得する

このトピックでは、Citrix Provisioning™ Servicesで作成された共有（vDisk）イメージに存在するログファイルの使用に関するガイダンスを提供します。Profile Managementはログオフ時にファイルを保存します。ただし、vDiskイメージを使用する場合、ベースイメージがリセットされる可能性があり、その結果ログファイルが削除されることに注意してください。したがって、ファイルを回復するために何らかの措置を講じる必要があります。講じる措置は、ログファイルがログオン時に削除されるかログオフ時に削除されるかによって異なります。

vDiskイメージの使用は、Citrix virtual desktops™の展開で一般的であるため、このトピックのガイダンスでは、その製品を例として使用します。

ログオフ時に削除されるログファイルを取得するには

プロファイル全体またはその一部がネットワーク上のユーザーストアに保存されない場合、ログファイルもそこに保存されません。

Provisioning Services のライトキャッシュが Provisioning Services を実行しているコンピューターに保存されている場合、この問題は発生しません。そして、ログファイルはユーザー ストアに保存されます。

ライトキャッシュがローカルに保存されている場合、この手順ではユーザーと同じデバイスからログオンする必要があるかもしれません。ただし、ライトキャッシュがRAMにローカルに保存されている場合は、これも失敗する可能性があります。

ライトキャッシュが Provisioning Services を実行しているコンピューター上にない場合、vDisk イメージのコピーを作成する必要があるかもしれません。それを新しい仮想マシンに割り当て、そのコンピューターに保存されるようにイメージ上のライトキャッシュを変更します。

1. Citrix Virtual Desktops で、デスクトップグループを作成し、仮想マシンを1台追加して、vDisk イメージを指すようにします。
2. 仮想マシンへのアクセスを、1人のテストユーザーと管理者に付与します。
3. デスクトップグループのアイドルプール数を終日1に変更します（電源管理によるマシンのシャットダウンを防ぐため）。ログオフ動作を「何もしない」に設定します（マシンの再起動やイメージのリセットを防ぐため）。
4. テストユーザーとして仮想デスクトップにログオンし、その後ログオフします。
5. XenCenter® または VMware コンソールから管理者としてログオンし、ログファイルを取得します。

デスクトップグループの作成とプロパティの変更に関する詳細については、Citrix Virtual Desktops のドキュメントを参照してください。

ログオン時に削除されるログファイルを取得するには

プロファイルがネットワーク上のユーザー ストアで最新であるにもかかわらず、ユーザーがログオンしたときに正しくロードされない場合、ログファイルのエントリは失われます。

1. `\\<vmhostname>\C$` にドライブをマップし、ユーザーがセッションからログオフする前にログファイルを特定します。ログファイルは完全ではありませんが（一部のエントリが欠落している可能性があります）、トラブルシューティングしている問題がログオン時である場合、問題の原因を特定するのに十分な情報を提供できます。

Provisioning Services のログファイルを再配置するには

標準イメージモードを使用している場合、システムがシャットダウンすると Provisioning Services のイベントログファイルは失われます。これを防ぐためにファイルのデフォルトの場所を変更する方法については、Knowledge Center の記事 CTX115601を参照してください。

プロビジョニングされたイメージでプロファイル管理を事前構成する

Citrix Provisioning Services、Citrix XenServer、VMware ESXなどのプロビジョニングソフトウェアを使用すると、プロファイル管理がプリインストールされたイメージを構築できます。その際、イメージのセットアップ中にレジストリにグループポリシー設定の一部が取り込まれる可能性があります。たとえば、Provisioning Servicesでプライベートイメージモードの場合に発生します。イメージを展開しても、設定はそのまま残ります。たとえば、Provisioning Servicesで標準イメージモードに戻した場合などです。理想的には、仮想マシンが実行を開始したときの状態と、ユーザーがログオンしたときの要件に適したデフォルトを選択してください。少なくとも、(/ja-jp/profile-management/current-release/plan/upm-plan-decide-4a.html)で説明されているポリシーに対して適切なデフォルトが設定されていることを確認してください。

Citrix Profile Management Serviceが開始される前に`gpupdate`が実行されない場合、デフォルトが使用されます。したがって、ほとんどの場合に適切なデフォルトであることを確認するのが最善です。この手順を使用して、イメージに保持したいこれらの設定やその他の設定を事前構成します。

注: Provisioning Servicesを使用している場合は、まずProfile Managementの.iniファイルでイメージを事前構成することをお勧めします。そして、テストが成功したことが確認されてから、設定を.admまたは.admxファイルに転送してください。

1. .admまたは.admxファイルを使用する場合は、適切なGPOでファイルを使用して目的の設定を変更します。.iniファイルを使用する場合は、この手順を省略します。変更は後の手順で行います。
2. ログレベルに同じ変更を加えます。
3. 次のいずれかを実行します。
    - イメージをプライベートイメージモード（Citrix Provisioning™ Services）に切り替え、その上でオペレーティングシステムを起動します。
    - オペレーティングシステムを起動します（Citrix XenServer®またはVMware ESX）。

4. 管理者アカウント（設定した可能性のあるテストユーザーアカウントではない）を使用してログオンし、`gpupdate /force`を実行します。この手順により、レジストリが正しく構成されます。
5. .iniファイルを使用する場合は、ファイル内の目的の設定を変更します。
6. Profile Management Serviceを停止します。
7. 新しく作成されるログファイルとの混同を避けるため、古いProfile Managementログファイルと構成ログファイルを削除します。これらは古いイメージの名前を使用するファイル名を持っています。更新されたイメージには新しいファイル（新しいイメージの名前を持つ）があるため、これらは冗長です。
8. 次のいずれかを実行します。
    - イメージを標準イメージモード（Citrix Provisioning Services）に戻します。
    - 更新されたイメージ (Citrix XenServer または VMware ESX) を保存します。
9. イメージ上でオペレーティングシステムを起動します。

プロファイル管理とセルフサービスプラグイン

デフォルトでは、プロファイル管理はWindowsの**スタートメニュー**フォルダーを除外します。Citrixセルフサービスプラグインのユーザーは、購読しているアプリケーションを**スタートメニュー**で確認できません。このデフォルトの動作を調整するには、**除外リスト - ディレクトリ**ポリシーからフォルダー`%APPDATA%\Microsoft\Windows\Start Menu`を削除します。さらに、構成にGPOを使用する場合は、Profile Managementの.iniファイルを削除することをお勧めします。これらの操作により、購読しているアプリケーション（およびユーザーが作成したサブフォルダー）を含む**スタートメニュー**フォルダーがプロファイル管理によって処理されるようになります。

注：グループポリシーではなくProfile Managementの.iniファイルを使用している場合は、そのファイルのデフォルトの除外リストからこのエントリを削除してください。

プロファイル管理とOutlook

この記事では、Microsoft Outlookをローミングプロファイルと統合するためのベストプラクティスについて説明します。

ユーザーがOutlookデータをネットワーク共有やローカルではなくサーバーに保存するようにすることは、良い習慣です。

ローミングプロファイルでは、環境変数 `%UserProfile%` で定義された場所（ローカルコンピューター上）のファイルとフォルダーは、`%UserProfile%\Local Settings` という1つのフォルダーを除いて、ユーザーとともにローミングします。この例外はOutlookユーザーに影響します。Microsoftの推奨により、デフォルトで一部のOutlookデータ（例えば、`.ost`、`.pst`、および `.pab` ファイル）がこの非ローミングフォルダーに作成されるためです。

重要: この場所のファイルは通常サイズが大きく、ローミングプロファイルのパフォーマンスを妨げます。

以下のプラクティスは、Outlookでのローミングプロファイルのトラブルシューティングを減らし、ユーザーと管理者による適切なメール管理を促進します。

- 可能であれば、`.pst` ファイルの使用を禁止するMicrosoft Office用のADMテンプレートを使用してください。
- ユーザーがより多くのスペースを必要とする場合は、ネットワーク共有ではなくMicrosoft Exchangeサーバーのストレージを増やしてください。
- 個々のユーザーに `.pst` ファイルの例外を許可したり、個人のストレージ容量を増やしたりするのではなく、会社全体でメール保持ポリシー（会社全体のメールストレージサーバーを含むもの）を定義し、適用します。このポリシーは、ユーザーが受信トレイへのメール復元を簡単に要求できるようにすることで、`.pst` ファイルへの依存を抑制する必要もあります。
- `.pst` ファイルを禁止できない場合は、プロファイル管理またはローミングプロファイルを構成しないでください。**Outlookの検索インデックスローミングを有効にする**機能は、`.pst` ファイル向けには設計されていません。

Password Manager とシングルサインオンで Windows プロファイルを使用する

この記事には、Profile Management に固有の情報は含まれていません。Citrix Single Sign-on がローカルプロファイル、移動プロファイル、強制プロファイル、またはハイブリッドプロファイルで最適に動作するように、特定の Windows オプションを構成する方法について説明します。このトピックは、Citrix Single Sign-on 4.8 または 5.0 に適用されます。

ローカルプロファイル

ローカルプロファイルは、ユーザーがログオンしたローカルサーバーに保存されます。Password Manager とシングルサインオンは、ユーザーレジストリの `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Citrix\MetaFrame Password Manager` ハイブにレジストリ情報を保存します。

`%SystemDrive%\Documents` および `Settings\%username%\NTUSER.DAT`。

ファイルは次の場所にも保存されます。

`%SystemDrive%\Documents and Settings\%username%\Application Data\Citrix\MetaFrame Password Manager`。

Windows 7 では、シングルサインオンは以下を使用します。

`%APPDATA%\Roaming\Citrix\MetaFrame Password Manager`

重要: シングルサインオンが以下のファイルに対してフルコントロールアクセス権を持つことが不可欠です。

ファイル名	説明
%username%.mmf	aelist.ini へのポインターを持つユーザーの資格情報ファイル。
entlist.ini	同期ポイントまたは Active Directory でエンタープライズレベルで作成されたアプリケーション定義ファイル。
aelist.ini	ユーザーのローカルアプリケーション定義ファイル (applist.ini) とエンタープライズアプリケーション定義 (entlist.ini) をマージして作成されたアプリケーション定義ファイル。

ローミングプロファイル

ローミングプロファイルはネットワーク共有に保存され、ユーザーがログオンするたびにローカルサーバーのコピーと同期されます。ローミングプロファイルの展開が成功するための特徴には、SAN (System Area Network) や NAS (Network Area Storage) のような高速ネットワーク接続が含まれます。その他の一般的な展開には、プロファイルが高可用性サーバーに保存されるクラスタリングソリューションがあります。

ローミングプロファイルと強制プロファイルの展開には、次の2つの問題があります。

- 単一のローミングプロファイルは、1つのファイル同期ポイントでのみ使用できます。複数の同期ポイントが使用されると、メモリマップトファイル (MMF) 内のデータが破損する可能性があります。

- ローミングプロファイルが複数の同時セッションで使用される場合、バックエンドのMMFを共有します。すべてのアクティブなセッションは、再試行ロックカウンター、最終使用データカウンター、イベントログエントリなどの共通セッションデータを共有します。

強制プロファイルまたはハイブリッドプロファイル

強制プロファイルは、定義上、ユーザーの読み取り専用プロファイルです。シングルサインオンは、**Application Data** の下のプロファイルフォルダーへの書き込み権限を必要とします。強制プロファイルでは、ユーザーが変更を加えることはできますが、ログオフ時にその変更はプロファイルに保存されません。強制プロファイルでシングルサインオンが正しく機能するためには、Application Data フォルダーをリダイレクトする必要があります。

レジストリの変更は、ユーザーがログオンするたびに書き込まれます。資格情報が同期ポイントと同期されますが、変更はプロファイルに保存されません。

Windows 2000以降、Microsoftは**Application Data** フォルダーをリダイレクトするメカニズムを提供しています。ただし、Windows NT4ドメインを使用する場合は、**Application Data** フォルダーの場所を変更できるログオンスクリプトが必要です。これを実現するには、`Kix` や `VBScript` などのツールを使用して、**Application Data** フォルダーの書き込み可能な場所を定義します。

次の例では、`Kix` を使用して、ユーザーログオン時に**Application Data** フォルダーをリダイレクトします。

重要: このサンプルスクリプトは情報提供のみを目的としています。環境でテストする前に使用しないでください。

```
$LogonServer = "%LOGONSERVER%"

$HKCU = "HKEY_CURRENT_USER"

$ShellFolders_Key =

"$HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\Shell

Folders"

$UserShellFolders_Key =

"$HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\User
```

```
Shell Folders"

$UserProfFolder =

"$LogonServer\profiles\@userID"

$UserAppData =

"$LogonServer\profiles\@userID\Application Data"

$UserDesktop =

"$LogonServer\profiles\@userID\Desktop"

$UserFavorites =

"$LogonServer\profiles\@userID\Favorites"

$UserPersonal = "X:\My Documents"

$UserRecent =

"$LogonServer\profiles\@userID\Recent"

if (exist("$UserAppData") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserAppData"'

endif

if (exist("$UserDesktop") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserDesktop"'

endif

if (exist("$UserRecent") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserRecent"'

endif

if (exist("$UserFavorites") = 0)
```

```
shell '%ComSpec% /c md "$UserFavorites"'

endif
```

ハイブリッドプロファイルは、強制プロファイルの問題に対するもう1つの解決策です。ユーザーがログオンすると、強制プロファイルがロードされ、カスタムアプリケーションがユーザーに利用可能なアプリケーションに基づいてユーザーレジストリハイブをロードおよびアンロードします。強制プロファイルと同様に、ユーザーはセッション中にレジストリのそれらの部分を変更できます。強制プロファイルとの違いは、ユーザーがログオフするときに変更が保存され、再度ログオンするときに再ロードされることです。

ハイブリッドプロファイルを使用する場合、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Citrix\MetaFramePassword` レジストリキーはログオンおよびログオフプロセスの一部としてインポートおよびエクスポートする必要があります。

フォルダーリダイレクト

フォルダーリダイレクトは、グループポリシーオブジェクトとActive Directoryを使用して実装されます。ユーザープロファイルの一部であるフォルダーの場所を定義するためにグループポリシーを使用します。

次の4つのフォルダーをリダイレクトできます。

- マイドキュメント
- アプリケーションデータ
- デスクトップ
- スタートメニュー

グループポリシーを使用して、基本リダイレクトと高度なリダイレクトの2つのリダイレクトモードを構成できます。どちらもシングルサインオンでサポートされています。Windows 2000では、アプリケーションデータを格納する共有を `%username%` 変数を使用して参照する必要があります（例: `\\servername\sharename\%username%`）。

フォルダーリダイレクトはユーザーに対してグローバルであり、そのユーザーのすべてのアプリケーションに影響します。**Application Data** フォルダーを使用するすべてのアプリケーションがこれをサポートしている必要があります。

フォルダーリダイレクトの詳細については、以下のMicrosoftの記事を参照してください。

HOW TO: フォルダーリダイレクトを使用して安全なリダイレクトフォルダーを動的に作成する

Windows のフォルダーリダイレクト機能

管理者がリダイレクトされたフォルダーにアクセスできるようにする

ベストプラクティス

- 可能な場合は、Application Data フォルダーをリダイレクトします。このアプローチにより、ネットワークパフォーマンスが向上し、ユーザーがログオンするたびにこれらのフォルダーのデータをコピーする必要がなくなります。
- Password Manager Agent のトラブルシューティングを行う際は、ログオンしているユーザーが自身の Application Data フォルダーに対してフルコントロールのアクセス許可を持っていることを常に確認してください。

トラブルシューティング

Profile Management の設定を確認する

問題のトラブルシューティングの最初のステップとして、現在のProfile Management設定を次のように確認します。

1. Citrix Directorでトラブルシューティングを開始します。このコンソールには、問題の診断と修正に役立つプロファイルのプロパティが表示されます。
2. UPMConfigCheckツールを使用して、稼働中のProfile Management展開を調査し、最適に構成されているかどうかを判断します。

   このツールのインストールと使用方法の詳細については、Knowledge Centerの記事CTX132805を参照してください。
3. Profile Managementの.iniファイルが使用されている場合は、影響を受けるマシンでその構成を確認します。
4. リストとして入力するProfile Managementポリシー（たとえば、除外リストや包含リスト）を非アクティブ化するには、ポリシーを「無効」に設定します。「未構成」に設定しないでください。
5. 影響を受けるマシンで`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies`レジストリエントリを確認します。GPタトゥーイングの問題により古いポリシーがある場合は、それらを削除します。タトゥーイングは、ポリシーがGPから削除されてもレジストリに残る場合に発生します。
6. 各ユーザーに適用されているProfile Management設定を含むUPMSettings.iniファイルを確認します。このファイルは、ユーザーストア内の各Citrixユーザープロファイルのルートフォルダーに存在します。

Profile Managementログファイルを確認する

ログファイルは、システム動作のトラブルシューティングを行う際に役立ちます。(/ja-jp/profile-management/current-release/troubleshoot/self-troubleshoot.html)後、Profile Managementのログ記録を有効にし、問題を再現してログファイルを確認します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. すべてのイベントとアクションについて(#enable-profile-management-logging)を有効にします。
2. マシンで問題を再現します。
3. `%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager`フォルダーにあるProfile Managementログファイル（例: #computername#.#domainname#_pm.log）でエラーと警告を確認します。それぞれ「ERROR」または「WARNINGS」という単語を検索して見つけます。

   ログファイルの詳細は、この記事の後半にある(#reference)を参照してください。
4. ユーザー ストアへのパスが正しいことを確認します。
5. Active Directoryからのすべての情報が正しく読み取られたことを確認します。
6. タイムスタンプを確認して、時間がかかりすぎているアクションがないか調べます。

> **ヒント:**
>
> Microsoft Excelを使用してProfile Managementログファイルを確認できます。詳細については、Knowledge CenterのCTX200674の記事を参照してください。

Profile Managementのログ記録を有効にする

Profile Management展開で問題のトラブルシューティングを行う場合にのみ、すべてのイベントとアクションについてProfile Managementのログ記録を有効にしてください。問題が解決したら、ログ記録を無効にし、機密情報が含まれている可能性があるためログファイルを削除してください。

このセクションでは、GPOと`UPMPolicyDefaults_all.ini`を使用して、すべてのイベントとアクションのログ記録を有効にする方法について説明します。

この目標は、Citrix Studio と Workspace Environment Management (WEM) を使用しても達成できます。詳細については、Profile Management を集中管理する場所を決定する を参照してください。

GPO を使用してログ記録を有効にする

GPO を使用してすべてのイベントとアクションの Profile Management ログ記録を有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開き、グループポリシーオブジェクトを作成します。

2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ログ設定** にアクセスします。
3. 次のように Profile Management のログ記録を有効にします。
   a. **ログ記録を有効にする** をダブルクリックします。
   b. **有効** をクリックします。
   c. **OK** をクリックします。
4. Profile Management ですべてのイベントとアクションをログに記録するように有効にします。
   a. **ログ設定** をダブルクリックします。
   b. すべてのイベントとアクションを選択します。それらの説明の詳細については、イベントとアクション を参照してください。
   c. **OK** をクリックします。
5. ログファイルのデフォルトの最大サイズを変更するには、次の手順に従います。
   a. **ログファイルの最大サイズ** をダブルクリックします。
   b. 「**有効にする**」をクリックし、「**最大サイズ（バイト単位）**」フィールドにサイズを入力します。
   c. 「**OK**」をクリックします。

   > **ヒント:**
   >
   > 最大サイズに達すると、Profile Management はバックアップファイルを1つ保持します（例：Logfilename.log.bak）。
6. マシンで `gpupdate /force` コマンドを実行します。

   これらのポリシーはマシンで有効になります。

ログ設定ポリシーについて詳しくは、「Profile Management のポリシーの説明とデフォルト」を参照してください。

.ini ファイルを使用してログを有効にする

`UPMPolicyDefaults_all.ini` を使用してすべてのイベントとアクションの Profile Management ログを有効にするには、次の手順に従います。

1. Profile Management のインストールフォルダー（デフォルトでは C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager）で `UPMPolicyDefaults_all.ini` を開きます。
2. **Log settings** を検索して設定を見つけます。

```
; Log settings
;
;LoggingEnabled=
;LogLevelWarnings=
;LogLevelInformation=
;LogLevelFileSystemNotification=
;LogLevelFileSystemActions=
;LogLevelRegistryActions=
;LogLevelRegistryDifference=
;LogLevelActiveDirectoryActions=
;LogLevelPolicyUserLogon=
;LogLevelLogon=
;LogLevelLogoff=
;LogLevelUserName=
;MaxLogSize=
;PathToLogFile=
```

3. `LoggingEnabled` に `1` を入力します。
4. `LogLevelWarnings` から `LogLevelUserName` までの各パラメーターに `1` を入力します。これらのパラメーターについて詳しくは、「イベントとアクション」を参照してください。
5. ログファイルのデフォルトの最大サイズを変更するには、必要に応じて `MaxLogSize` にサイズを入力します。
6. ログファイルのデフォルトフォルダを変更するには、必要に応じて`PathToLogFile`のパスを入力します。

参照

このセクションでは、以下の情報を提供します。

- ログの種類
- イベントとアクション
- Profile Managementログファイルのフィールド

ログの種類

この表は、Profile Managementのトラブルシューティングに使用できるログを一覧表示します。

通称	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
Profile Management ログファイル	#computername#.#domainname#_pm.log	%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager	情報メッセージ、警告、エラーは、Profile Management ログファイルに書き込まれます。ドメイン名はコンピューターのドメインです。コンピューター名を特定できない場合、このログファイルはUser Profile Manager.logという名前になります。コンピューター名が利用可能であるにもかかわらずドメインを特定できない場合、ログファイルは#computername#_pm.logという名前になります。
Profile Management 構成ログファイル	#computername#.#domainname#_pm_config.log	%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager	構成ログファイルは、ログ記録がオフになっている場合でも、GPOおよび.iniファイルの設定をキャプチャします。コンピューター名を特定できない場合、ファイルはUserProfileManager_pm_configという名前になります。コンピューター名が利用可能であるにもかかわらずドメインを特定できない場合、ログファイルは#computername#_p

通称	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
			m_config.logという名前になります。
Windowsイベントログ	Application.evtx	%SystemRoot%\System32\winevt\Logs	Microsoftイベントビューアーで表示するWindowsイベントは、主にエラー報告に使用されます。エラーのみが書き込まれます。

イベントとアクション

この表は、Profile Managementがログに記録できるイベントとアクションを示します。

種類	説明	.INIのパラメーター
一般的な警告	すべての一般的な警告。	LogLevelWarnings
一般的な情報	すべての一般的な情報。	LogLevelInformation
ファイルシステム通知	処理されたファイルまたはフォルダーが変更されるたびに、1つのログエントリが作成されます。	LogLevelFileSystemNotification
ファイルシステムアクション	Profile Managementによって実行されるファイルシステム操作。	LogLevelFileSystemActions
レジストリアクション	Profile Managementによって実行されるレジストリアクション。	LogLevelRegistryActions
ログオフ時のレジストリの相違点	セッション中に変更されたHKCUハイブ内のすべてのレジストリキー。重要: この設定はログファイルに大量の出力を生成します。	LogLevelRegistryDifference

種類	説明	.INIのパラメーター
Active Directoryアクション	Profile ManagementがActive Directoryを照会するたびに、エントリがログファイルに書き込まれます。	LogLevelActiveDirectoryActions
ポリシー値	Profile Managementサービスが開始されるか、ポリシーの更新が行われると、ポリシー値がログファイルに書き込まれます。	LogLevelPolicyUserLogon
ログオン	ログオン中のアクションの系列がログファイルに書き込まれます。	LogLevelLogon
ログオフ	ログオフ中のアクションの系列がログファイルに書き込まれます。	LogLevelLogoff
パーソナライズされたユーザー情報	該当する場合、ユーザー名とドメイン名はログファイルの専用列に記録されます。	LogLevelUserName

ログファイルフィールド

Profile Managementログファイルの各行には、セミコロンで区切られた複数のフィールドがあります。この表は、ログファイルフィールドの一覧です。

フィールド	説明
日付	ログエントリの日付
時刻	ログエントリの時刻（ミリ秒を含む）
重大度	INFORMATION、WARNING、またはERRORのいずれか
ドメイン	ユーザーのドメイン（該当する場合）
ユーザー名	ユーザー名（該当する場合）

フィールド	説明
セッションID	セッションID（該当する場合）
スレッドID	この行を作成したスレッドのID
関数と説明	その時点で実行されていたProfile Management関数の名前とログメッセージ

Windowsイベントの確認

Profile Managementによってログに記録されたWindowsイベントは、トラブルシューティングのための診断情報も提供します。Windowsイベントは、`%SystemRoot%\System32\winevt\Logs\`フォルダーの下にあるApplication.evtxファイルに保存されます。

Windowsイベントビューアーを使用してイベントを表示するには、次の手順に従います。

1. Windowsマシンで**イベントビューアー**を起動します。
2. 左ペインで**Windowsログ > アプリケーション**ノードを選択します。

   イベントは右ペインに表示されます。

イベントのリスト

Profile Managementによってログに記録されたイベントは、すべてが連続して番号付けされているわけではなく、このバージョンのProfile Managementですべてが使用されているわけではありません。ただし、以前のバージョンからアップグレードした場合にログに記録される可能性があります。

イベントID	説明	原因	アクション
5	Citrix Profile Managementがユーザーログオン時に選択したユーザーストアとネットワークの遅延を示します。	Citrix Profile Managementがユーザーログオン時にユーザーストアを選択しました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
6	Citrix Profile Managementサービ	Citrix Profile Managementサービスが開始されました。これは、自動開	開始または再起動が計画されていなかった場合は、イベントログでエラーを確認

イベントID	説明	原因	アクション
	スが開始されました。	始、手動開始、または再起動の結果である可能性があります。	し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
7	Citrix Profile Managementサービスが停止しました。	Citrix Profile Managementサービスが停止しました。これは、手動停止の結果であるか、シャットダウン処理の一部である可能性があります。	サービス停止が計画されていなかった場合は、イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
8	ユーザーのプロファイルは、Citrix Profile Managementの新しいバージョンによって変更されており、このバージョンでは使用できません…	このマシンのCitrix Profile Managementサービスは、Profile Managementの新しいバージョンがユーザーストア内のユーザープロファイルを変更したことを検出しました。データ損失の可能性を防ぐため、以前のバージョンのProfile Managementは一時プロファイルの使用に戻ります。	このコンピューター（およびユーザーストアを共有し、以前のバージョンのProfile Managementを使用している他のすべてのコンピューター）をアップグレードして、最新バージョンを使用してください。
9	ログオンフックの検出で問題が発生しました…	Citrix Profile Managementサービスは、ログオン通知の設定中に問題が検出されました。Citrix Profile Managementサービスでは、イン	Citrix Profile Managementをスペースのないパスに再インストールするか、Profile Managementがインストールされている

イベントID	説明	原因	アクション
		ストールパスにスペースが含まれていないこと、またはサービスがインストールされているボリュームで8.3ファイル名サポートが有効になっていることが必要です。	ボリュームで8.3ファイル名サポートを有効にしてください。
10	ユーザーストアへのユーザーパスは…	指定された場所に有効なCitrixユーザープロファイルが見つかりました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
11	spsMain: CreateNamedPipeが失敗しました…	（このイベントは使用されなくなりました。）	なし。
12	StartMonitoringProfile: ログオン中にWindows変更ジャーナル管理で問題が検出されました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
13	StopMonitoringProfile: ログオフ中に	Citrix Profile Managementサービ	Profile Managementによって管理されて

イベントID	説明	原因	アクション
	Windows変更ジャーナル管理で問題が検出されました…	スは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーの監視を停止できませんでした。Windows変更ジャーナル管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。ユーザーのファイルおよびレジストリの変更は同期されません。	いるすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
14	CJIncreaseSizeIfNecessary: 変更ジャーナルの作成/サイズ変更に失敗しました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルを作成またはサイズ変更しようとしたときに問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。

イベントID	説明	原因	アクション
15	CJInitializeForMonitoring: ジャーナルをクエリできません…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルをクエリしているときに問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
16	CJInitializeForMonitoring: 初期MFTスキャンがエラーで終了しました。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの初期スキャンを実行しているときに問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユー	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。

イベントID	説明	原因	アクション
		ザープロファイルが使用されます。	
17	CJInitializeForMonitoring: サービス開始以降のFS変更の処理に失敗しました。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの更新スキャンを実行中に問題が検出されました。このエラーは、サービスが変更を監視するのを妨げません。Citrix Profile Managementは、このディレクトリを通常どおり処理します。	このエラーはProfile Managementの動作を妨げるものではありませんが、念のためエラーを確認してください。Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示されている是正措置を講じてください。
18	CJProcessAvailableRecords: 内部エラー…	Citrix Profile Managementサービスで、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視中に障害が発生しました。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの更新スキャンを実行中に問題が検出され、サービスが最近の変更を監視できなくな	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Management

イベントID	説明	原因	アクション
		りました。Citrix Profile Managementは、このフォルダーの処理を完了しません。重要なデータを手動でバックアップしてください。	は、このフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。
19	USNChangeMonitor: 変更ジャーナルの初期化に失敗しました…	Citrix Profile Managementサービスで、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視中に障害が発生しました。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの初期スキャンを準備中に問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementは、このディレクトリの処理を完了しません。重要なデータを手動でバックアップしてください。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementは、このフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。
20	CADUser::Init: DNSドメインとADsPathの決定に失敗しました…	ログオンしているユーザーに関する情報をActive Directoryに問い合わせ中に問題が発生しました。Citrix Profile Managementは、このフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	コンピューターがドメインコントローラーへの機能するネットワークパスを持っていることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile

イベントID	説明	原因	アクション
			Managementのトラブルシューティング手順を含む、示された是正措置を講じてください。
21	DNSドメインとADsPathの特定に失敗しました…	この問題は、Microsoft TechNetの記事263693に記載されているように、メモリ割り当ての制限によって引き起こされる可能性があります。	この問題の解決策は、Citrix Knowledge Centerの記事CTX124953に記載されています。
22	ファイルアクセスが遅くなりました。ユーザーは、ユーザーストアからファイルがフェッチされる際に遅延を経験しました。	ユーザーがファイルにアクセスしようとしましたが、Profile Managementはこの操作に遅延を検出しました。ユーザーは警告メッセージを受け取りました。このエラーは、アンチウイルスソフトウェアがユーザーストア内のファイルへのアクセスを妨げていることが原因である可能性があります。	エンタープライズアンチウイルス製品に関するトラブルシューティングと構成のアドバイスについては、Profile Managementのドキュメントを参照してください。
23	ファイルアクセスが拒否される可能性があります。ユーザーは、ユーザーストアからファイルがフェッチされる際に長い遅延を経験しました。	ユーザーがファイルにアクセスしようとしましたが、Profile Managementはこの操作に非常に大きな遅延を検出し、アクセスが拒否される可能性があります。ユーザーはエラーメッセージを受け取	エンタープライズアンチウイルス製品に関するトラブルシューティングと構成のアドバイスについては、Profile Managementのドキュメントを参照してください。

イベントID	説明	原因	アクション
		りました。このエラーは、アンチウイルスソフトウェアがユーザーストア内のファイルへのアクセスを妨げていることが原因である可能性があります。	
24	RevertToSelfがエラーコードで失敗し、Profile Managementがシャットダウンされました。	一部のログオンおよびログオフ処理は、偽装を使用して実行されます。通常、偽装が完了するとRevertToSelf関数が呼び出されます。この際、この関数が呼び出されませんでした。そのため、セキュリティ上の理由から、Profile Managementソフトウェアはシャットダウンされました。ユーザーにはエラーメッセージが表示されました。	セキュリティ侵害が疑われる場合は、組織の手順に従って対処し、Profile Managementを再起動してください。
25	ユーザーのプロファイルはCitrix Profile Managementによって管理されていますが、ユーザーストアに到達できません…	このコンピューター上のCitrix Profile Managementサービスは、指定されたユーザーストアに到達できません。これは通常、ネットワークの問題、またはユーザーストアをホストしているサーバーが利用できないことが原因です。	ユーザーストアをホストしているサーバーが利用可能であり、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作していることを確認してください。

イベントID	説明	原因	アクション
26	デフォルトのプロファイル場所が無効です。この場所にあるプロファイルは正しく監視できません…	このコンピューター上のプロファイルは、ドライブ文字（例: C:）にマウントされたディスク上にある必要があります。	このコンピューター上のプロファイルをドライブ文字にマウントされたディスクに移動し、Profile Managementを再起動してください。
27	ユーザーのプロファイルフォルダーがデフォルトのプロファイル場所にありません…	レジストリでは、このユーザーのプロファイルの場所とデフォルトプロファイルの場所が一致しません。これは、たとえば、Profile Managementサービスを実行しているマシン上の異なるボリューム間でプロファイルが移動された場合に発生する可能性があります。	このユーザーのプロファイルがデフォルトのフォルダー場所の下にあることを確認してください。必要に応じて適切なツールを使用し、ファイルシステム内のプロファイルデータがプロファイルのレジストリ設定と一致するようにしてください。
28	ユーザーのレジストリハイブのセキュリティ権限をリセットしようとしているときにエラーが発生しました。	このCitrixユーザープロファイルを作成するために使用されたデフォルトまたはテンプレートプロファイルのレジストリに、権限の問題がある可能性があります。	必要に応じて、SetAclなどのサードパーティユーティリティを使用して、Profile Managementユーザーストア内のユーザーのレジストリハイブのセキュリティ権限をリセットしてください。
29	テンプレートプロファイルのパスが構成されていますが、プロファイルが見つかりませんでした…	指定されたフォルダーにはNTUSER.DATファイルが含まれていないため、テンプレートプロファイル設定で使用できません。こ	テンプレートプロファイルを含むフォルダーへの有効なパスが構成されていることを確認してください。パスにNTUSER.DATが含ま

イベントID	説明	原因	アクション
		の問題は、NTUSER.DATファイルを含むフォルダーではなく、NTUSER.DATファイルのフルパスが構成されている場合に頻繁に発生します。テンプレートプロファイル設定は、Active Directory属性、システム環境変数、または `%USERNAME%` および `%USERDOMAIN%` 変数の展開をサポートしていません。	れていることを確認してください。このファイルが有効であり、すべてのファイルへの読み取りアクセスを許可するようにフォルダーのアクセス権が正しく設定されていることを確認してください。
33	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにあるローカルプロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました	指定された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
34	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにある移動プロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました	指定された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
35	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにあるテンプレートプロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました	指定された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています

イベントID	説明	原因	アクション
36	USERの既存のプロファイルフォルダーを、このユーザーの新しいCitrix強制プロファイル用に準備できません。可能であれば、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。	Citrix強制プロファイルは、ログオンごとにテンプレートプロファイルのコピーを使用します。既存のプロファイルはすべて削除され、Citrix強制プロファイルは指定されたテンプレートの場所からコピーされます。このプロセスは失敗しました。	既存のプロファイルフォルダーを手動で削除してください。ファイルの削除が失敗する原因となる別のプロセスによってファイルがロックされている場合は、コンピューターを再起動する必要があるかもしれません。テンプレートフォルダーが存在し、ユーザーがその内容を読み取る権限を持っていることを確認してください。
37	ユーザーのユーザーストアパスに到達できません。このユーザーには一時プロファイルが作成され、このユーザーストアのプロファイルへの変更は保存されません。	このコンピューター上のCitrix Profile Management Serviceは、指定されたユーザーストアに到達できません。これは通常、ネットワークの問題、またはユーザーストアをホストしているサーバーが利用できないためです。	ユーザーストアをホストしているサーバーが利用可能であり、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作していることを確認してください。
38	ユーザーのプロファイルはCitrix Profile Managementによって管理されていますが、ユーザーストアパスが見つかりません。このユーザーには一時プロファイルが作成され、このユーザーストアのプ	このコンピューター上のCitrix Profile Management Serviceは、指定されたユーザーストア内のプロファイルを見つけることができません。これは、ネットワークの問題、またはユーザーストアをホ	ユーザー ストアをホストしているサーバーが利用可能であることを確認してください。また、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作しており、ユーザー ストアへのパスが既存のプ

イベントID	説明	原因	アクション
	ロファイルへの変更は保存されません。	ストしているサーバーが利用できないためである可能性があります。しかし、ユーザーストア内のプロファイルが削除または移動されたためである可能性もあります。あるいは、ユーザーストアへのパスが変更され、既存のユーザーストア内のプロファイルを正しく指していない可能性もあります。	ロファイルを指していることを確認してください。ユーザーストア内のプロファイルが削除されている場合は、ローカルマシンのプロファイルを削除してください。
41	Citrix Profile Managementサービスは、ユーザー '%1\%2' のプロファイルコンテナを <%3> からローカルプロファイルフォルダにロードできませんでした。ユーザーのために一時プロファイルが作成され、プロファイルコンテナ内のプロファイルへの変更は保存されません。	Citrix Profile Managementサービスはプロファイルコンテナのロードに失敗しました。ローカルプロファイルフォルダが利用できないか、プロファイルコンテナが破損しています。	詳細については、Citrix Profile Managementログを確認してください。
42	ユーザー `<userdomain>\<username>` のポリシー設定を更新しようとしているときにエラーが発生しました。ポリシー設定が正しく適用されていない可能性がありま	Citrix Profile Managementは、Citrixグループポリシー設定の更新に失敗しました。	Citrix Group Policy Client-Side Extensionがインストールされ、正しく動作していることを確認してください。

イベントID	説明	原因	アクション
	す。エラーコード : `<error code>`		
3005	`<path1>` からアクセスポイント `<path2>` への仮想ディスクのマウント試行が失敗しました。	Citrix Profile Managementは、仮想ディスクをアクセスポイントにマウントできませんでした。この問題は、仮想ディスクにアクセスできない場合、アクセスポイントが空でない場合、または仮想ディスクがすでにマウントされている場合に発生する可能性があります。	マシンを再起動し、問題が解決したかどうかを確認してください。解決しない場合は、CDFトレースを収集し、Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。
3008	`<path1>` からアクセスポイント `<path2>` への検索データベースのマウント試行が失敗しました。	Windows Search サービスが検索データベースをマウントできませんでした。この問題は、検索データベースが破損している場合に発生する可能性があります。	CDF トレースを収集し、Citrix テクニカルサポートにお問い合わせください。
5000	ローカルホストとユーザー ストア <"%3"> 間のネットワーク遅延は <%2> ミリ秒です。セッション ID は %1 です。	NA	NA
5001	現在のプロファイルサイズは <%1> バイトです。セッション ID のイベントデータ	NA	NA

イベントID	説明	原因	アクション
	を参照してください。		
5002	保留中の領域サイズは <%1> バイトで、<%2> 個のファイル、<%3> 個のフォルダー、セッション ID <%4>、およびユーザー名 <%5> で構成されています。	NA	NA
5003	保留領域の同期が開始されました。セッションID: <%1>。ユーザー名: <%2>。	NA	NA
5004	保留領域の同期が完了しました。セッションID: <%1>。ユーザー名: <%2>。	NA	NA
5009	デスクトップウィンドウが表示されています。セッションID: <%1>。	NA	NA

一般的な問題のトラブルシューティング

この記事では、一般的なProfile Managementの問題をトラブルシューティングする方法について説明します。

ログオンが遅い

ユーザーのログオンが遅い場合は、次の手順でトラブルシューティングを行ってください。

1. Citrix Directorのログオン期間パネルでプロファイルの読み込み時間を確認します。予想よりも大幅に長い場合は、ユーザープロファイルの読み込みが原因でログオンが遅くなっています。

   詳細については、「ユーザーログオンの問題の診断」を参照してください。
2. Citrix Profile Managementログファイルでプロファイル処理時間を確認します。

`C:\Windows\System32\Log Files\User Profile Manager`にあるProfile Managementログファイルで、`DispatchLogonLogoff`で始まるエントリを見つけます。次の例は、ログオン処理時間が10.22秒であることを示しています。

`DispatchLogonLogoff: ---------- Finished logon processing successfully in [s]: <10.22>.`.

3. 推奨されるProfile Managementポリシーが適用されていることを確認します。

   「ユーザーログオンパフォーマンスの向上」に記載されているログオンパフォーマンスを向上させるための推奨事項に従ってください。

4. Citrixテクニカルサポートに問い合わせる。

   ログオンの遅延が続く場合は、Citrixテクニカルサポートに連絡して、さらにサポートを受けてください。詳細については、「Citrixテクニカルサポートへのお問い合わせ」を参照してください。

プロファイルがストリーミングされていることを確認する

ストリーミングユーザープロファイルを有効にしており、この機能がユーザーのプロファイルに適用されていることを確認したい場合は、次の手順を実行します。

1. Profile Managementログファイルで次の種類のエントリを確認します。

   ```
   2010-03-16;16:16:35.369;INFORMATION;;;;1140;ReadPolicy: Configuration
   value read from policy: PSEnabled=<1>
   ```

   最後の項目は、機能が有効になっている場合、PSEnabled=\<1\> に設定する必要があります。

2. Profile Management ログファイルで、ユーザーの次のエントリを確認します。

   ```
   2010-03-16;20:17:30.401;INFORMATION;<domain name>;<user
   name>;2;2364;ProcessLogon: User logging on with Streamed Profile
   support enabled.
   ```

   ストリーミングされたユーザープロファイルが適用されていない場合、項目には「ProcessLogon: User logging on with Streamed Profile support disabled」と表示されます。

適用されているポリシーを特定する

UPMSettings.ini ファイルを使用して、適用されている Profile Management ポリシーを特定します。このファイルは、ユーザーストア内の各 Citrix ユーザープロファイルのルートフォルダーに存在します。このファイルを調べることは、ポリシーの結果セット (RSoP) を使用するよりも便利な場合があります。特に、GPO と .ini ファイル設定を組み合わせてポリシーを決定している場合に便利です。

UPMFRSettings.ini ファイルを使用して、除外リストにあるため処理されないプロファイルフォルダーを特定します。UPMFRSettings.ini ファイルもルートフォルダーに存在します。

破損したプロファイルデータを除外する

ユーザープロファイルが破損しており、特定ファイルまたはフォルダーに問題があると確信している場合は、同期プロセスから除外します。その方法は、ファイルまたはフォルダーを除外リストに追加することです。

レジストリエントリへの接続をクリーンアップする

一部のシナリオ (Profile Management に関連するものだけでなく) では、ユーザーがログオフした後もレジストリプロファイルデータへの接続が保持されます。この保持により、ログオフが遅くなったり、ユーザーセッションが完全に終了しなかったりする可能性があります。Microsoft の User Profile Hive Cleanup (`UPHClean`) ツールは、これらのシナリオの解決に役立ちます。

ローカルプロファイルを削除する

Microsoft Delprof.exe と Sepago Delprof2 は、ユーザープロファイルの削除に役立つツールです。

プロファイルが保存されている場所を特定する

プロファイルの問題を診断するには、ユーザープロファイル内のファイルがどこに保存されているかを特定する必要があります。次の手順は、プロファイルが保存されている場所をすばやく特定する方法を提供します。

1. イベントビューアーで、左ペインの をクリックします。
2. 右ペインの「ソース」の下で、目的のCitrix Profile Managementイベントを見つけてダブルクリックします。
3. イベントに関連付けられているユーザー ストアへのパスは、「全般」タブにリンクとして表示されます。
4. ファイルを探索したい場合は、リンクをたどってユーザー ストアを参照してください。

サーバーの確認

サーバーがユーザーのログオンとログオフを正しく処理しているかどうかを確認するには、ユーザー ストア内のユーザー プロファイルにある PmCompatibility.ini というファイルを確認します。このファイルはプロファイルのルート フォルダーにあります。ファイルの最後のエントリは、ユーザーが最後にログオフしたサーバーの名前です。たとえば、サーバーが Profile Management 5.0 を実行している場合、エントリは次のようになります。

```
[LastUpdateServerName]

5.0=<computer name>
```

ロールバック

Profile Management の以前のバージョンにロールバックするには、ユーザー ストアをホストしているファイル サーバーのコマンド ラインから **del /s** を実行します。このコマンドは、各プロファイルから PmCompatibility.ini ファイルを削除します。たとえば、ユーザー ストアへのローカル パスが `D:\UpmProfiles` の場合、次を実行します。

```
del /s D:\UpmProfiles\pmcompatibility.ini
```

コマンドが完了すると、ユーザーは以前のバージョンを実行しているコンピューターにログオンし、ユーザー ストアからプロファイルを受け取ることができます。

ユーザー ストア内の除外フォルダー

除外されたフォルダーはユーザー ストアに表示されます。これは想定される動作であり、修正措置は不要です。除外リストにあるフォルダーはユーザー ストアに作成されますが、その内容は同期されません。

ログファイルの情報不足

デバッグモードをアクティブにしても、完全なログ記録が自動的に有効になるわけではありません。ログ設定で、ログに記録するイベントのすべてのチェックボックスが選択されていることを確認してください。

ヒント: リストの最後のチェックボックスを有効にするには、下にスクロールする必要がある場合があります。

GPO設定が機能しない

GPO設定を変更しても、Citrix Profile Management Serviceを実行しているコンピューターで有効になりません。この問題は、GPがすぐに更新されず、展開で指定されたイベントまたは間隔に基づいて更新されるために発生します。GPをすぐに更新するには、コンピューターで `gpupdate /force` を実行します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

ユーザーが新規プロファイルまたは一時プロファイルを受け取る

デフォルトでは、問題が発生した場合（例：ユーザーストアが利用できない場合）に、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。または、Profile Managementを構成して、エラーメッセージを表示し、ユーザーをログオフさせることもできます。このアプローチはトラブルシューティングに役立ちます。

この機能の構成方法については、「ユーザーのログオフを強制する」を参照してください。

特定の状況では、ユーザーがログオンしたときに、キャッシュされたプロファイルの代わりに新しいプロファイルを受け取ることがあります。

ユーザーストア内のコピーが削除された後にローカルプロファイルが存在する場合、ユーザーは一時プロファイルを受け取ることもあります。この状況は、ユーザーストアがクリアされたにもかかわらず、ログオフ時にローカルプロファイルが削除されない場合に発生する可能性があります。

Profile Managementは、このような部分的なプロファイルの削除をネットワーク、共有、または権限のエラーとして扱い、ユーザーに一時プロファイルを提供します。このため、部分的な削除は推奨されません。この問題を回避するには、影響を受けるコンピューターにログオンし、プロファイルを手動で削除してください。

展開にパーソナルvDiskが含まれている場合、これらのディスクのデフォルト処理が正しく調整されていないと、ユーザーは一時プロファイルを受け取る可能性があります。詳細については、「ユーザープロファイルの移行」を参照してください。

仮想デスクトップセッションが応答しなくなったときにプロファイルデータが失われる

Citrix仮想デスクトップの展開では、リモートデスクトッププロトコル（RDP）セッションから切断すると、仮想デスクトップが応答しなくなったり、再起動したりする可能性があります。この動

作は、セッション終了時にプロファイルデータが失われるため、Profile Managementに影響を与えます。この問題は、Citrix Virtual Delivery Agentバージョン3.1.3242以降で修正されています。

ユーザーがログオンできない（イベントID：1000、ソース：Userenv）

ユーザーがCitrix環境にログオンできず、「Windows did not load your roaming profile and is attempting to log you on with your local profile... Contact your network administrator.」というエラーメッセージが表示されます。このエラーは、Windowsアプリケーションイベントログ（イベントID：1000、ソース：Userenv）に表示されます。

印刷

Citrix virtual desktops™環境では、ユーザーはデフォルトプリンターを選択できますが、ログオン間でその選択が保持されないことがあります。この問題は、標準イメージモードのCitrix Provisioning Services Personal vDiskに基づいたプールされた仮想デスクトップでプリンターを設定するために、Citrix仮想デスクトップのポリシーが使用されている場合に確認されています。

この問題はProfile Managementに起因するものではありません。Profile Managementのログファイルには、プリンターのレジストリエントリがログオフ時にコピーされたことが示されていますが（これは予期される動作です）、ユーザーのNTUSER.datにはそのエントリが含まれていません（これは予期されない動作です）。この問題は実際には、Citrix仮想デスクトップが `DefaultPmFlags` レジストリ設定を使用する方法に起因しています。

プロファイルに予期しないプリンターが追加されることがあります。ユーザーがそれらを削除しても、次のログオン時にプリンターが再表示されます。詳細については、Profile Managementサポートフォーラムを参照してください。

複数のプラットフォームでのアプリケーション設定に関する問題

複数のプラットフォーム間でアプリケーション設定が正しくローミングされないという問題が発生する可能性があります。通常、これらの問題は次の原因で発生します。

- あるシステムから別のシステムに適用できない設定。たとえば、すべてのシステムに存在するわけではないハードウェア固有の設定などです。
- 異なるシステムに異なる方法でインストールされているアプリケーション。例：
    - あるシステムではC:ドライブにインストールされているが、別のシステムではD:ドライブにインストールされているアプリケーション。
    - あるシステムでは `C:\Program Files` にインストールされているが、別のシステムでは `C:\Program Files (x86)` にインストールされているアプリケーション。

    - あるシステムにはインストールされているが、別のシステムにはインストールされていないExcelアドイン。

- 設定情報をプロファイルに保存しないアプリケーション。たとえば、ローカルマシンの設定内またはユーザープロファイルの外部に保存されている情報などです。
- レジストリに保存されている言語固有の構成設定。Profile Management は、バージョン1プロファイルの言語固有のフォルダー名を自動的に翻訳しますが、レジストリ内のものは翻訳しません。

ほとんどの場合、これらの問題を引き起こすシステムの標準化を改善することで、問題を最小限に抑えることができます。ただし、多くの場合、問題はOSまたはそれぞれのアプリケーションの（複数のプラットフォームとの）固有の非互換性に起因します。問題のある設定が重要でない場合は、プロファイルから除外することで問題が解決する可能性があります。

不明なアカウントが所有するプロファイル

まれに、プロファイルが不明なアカウントに属しているように見えることがあります。コンピューターの ダイアログボックスの タブで、 の をクリックすると、 と表示されます。この問題は、イベントログエントリ 「*Profile notification of event Create for component \<application ID\> failed, error code is???*」 とともに発生します。レジストリでは、アプリケーションIDはMicrosoftコンポーネントであるSHACCTプロファイル通知ハンドラーを指します。

この問題が環境で発生していることを確認するには、Profile Management がデータを処理しないユーザーとしてログオンし、これらの症状を確認します。

これは Profile Management の問題ではありませんが、Active Directory が仮想マシンのスナップショットと適切に連携しない結果である可能性があります。Citrix ユーザープロファイルの操作には影響ありません。ユーザーはログオンおよびログオフでき、プロファイルの変更は保持されます。

高度なトラブルシューティングを実行する

現在のProfile Management設定を確認し、Profile Managementログが有用な情報のソースではないことを確認したら、このチェックリストを使用してさらにトラブルシューティングを行います。

- 分析対象のマシンからポリシーの結果セット（RSoP）レポートを確認し、すべてのGPOが期待どおりに適用されていることを確認します。

  レポートを生成するには、マシンで`gpresult`コマンドを実行します。

- Profile Managementの最新バージョンがインストールされていることを確認します。詳しくは、「Profile Managementのバージョンを確認する」を参照してください。
- 他のユーザーからの解決策については、Profile Managementサポートフォーラムを確認してください。
- 影響を受けるマシンと同じオペレーティングシステムを持つクリーンなマシンで問題を再現してみてください。ソフトウェア製品を1つずつインストールし、各インストール後に問題が再現できるかどうかを確認します。詳しくは、「テスト環境にProfile Managementを展開する」を参照してください。

Profile Managementのバージョンを確認する

バージョン情報を確認するには、次の手順に従います。

1. WindowsエクスプローラーでUserProfileManager.exeファイルを右クリックします。
2. ［プロパティ］>［バージョン］ をクリックします。
3. 最新バージョンでない場合は、My Accountサイトから最新バージョンをダウンロードします。Citrix®製品を選択し、ダウンロードセクションからProfile Managementをダウンロードします。

> **ヒント:**
>
> アップグレード後、必要に応じて後続の機能を有効にできます。

テスト環境にProfile Managementを展開する

ログファイルが問題のトラブルシューティングに役立たない場合は、次の例で使用されているトラブルシューティングアプローチを試してください。このアプローチは、次の目的で使用できます。

- どの構成設定が読み取られているかを特定します。
- 構成設定がどこから読み取られているかを特定します（複数のADMファイルが存在する場合）。
- ログファイルがプロファイルに加えられた変更を正しく追跡していることを確認します。

展開例

この例での展開は次のとおりです。

- Citrix virtual apps™ サーバーはWindows Server 2022で実行されています。
- ユーザーは、Citrix Workspace app for Windowsを使用して公開リソースに接続しています。
- INIファイルベースの構成ではなく、OUベースのGPOが使用されます。

> **注意:**
>
> レジストリを誤って編集すると、オペレーティングシステムの再インストールが必要になるような深刻な問題が発生する可能性があります。レジストリエディターの不適切な使用によって生じた問題が解決できることを保証することはできません。レジストリエディターの使用は自己責任で行ってください。編集する前に必ずレジストリをバックアップしてください。

トラブルシューティングのワークフロー

この例には、サーバーが1台のみの小さなテストOUが含まれています。サーバーのプロファイル設定を編集できます。その後、ログファイルとポリシーの結果セット（RSoP）レポートで設定の変更を追跡します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. 実稼働環境から、CitrixユーザープロファイルをホストしているCitrix virtual appsサーバーの1つを削除します。次に、そのサーバーを新しいOUに追加します。
2. サーバーからProfile Managementを削除し、再インストールします。
3. ドメイン管理者としてサーバーにログオンします。
4. ローカルポリシーを調べて、このレベルのADMファイルを削除します。
5. 新しいOUに割り当てられているGPOへのリンクをすべて削除します。
6. サーバーで、レジストリエディターからキーとすべてのサブキーを削除します: `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies\Citrix\UserProfileManager\`。
7. Profile Managementの.iniファイルをすべて削除します。
8. **マイ コンピューター \> プロパティ \> 詳細設定**を使用して、テストしたいプロファイル以外のすべてのプロファイルを削除します。表示されるエラーを調査します。
9. Authenticated Usersグループにファイルのフルコントロールを付与します。これにより、ユーザーとしてログオンしたときにProfile Managementのログファイルを確認できます。ログファイルは `C:\Windows\System32\LogFiles\UserProfileManager\<domainname>#<computername>_pm.log`

です（\<domainname\>はコンピューターのドメイン、\<computername\>はその名前です）。ドメインを特定できない場合、ログファイルはUserProfileManager.logです。

10. 次の設定のみを含むGPOを作成し、新しいOUにリンクします。GPOがAuthenticated Usersグループに割り当てられていることを確認します。これらの設定を有効にして構成します。

    a. Profile Managementを有効にします。

    b. ユーザーストアへのパス。

    c. ログ記録を有効にします。

    d. ログ設定。すべてのイベントとアクションを選択します。

    e. 既存のプロファイルの移行。ローミングプロファイルとローカルプロファイルを選択します。

    f. ローカルプロファイルの競合処理。ローカルプロファイルの名前を変更を選択します。

    g. ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除します。

    h. *ローカル管理者ログオンの処理*設定を無効にします。これにより、Profile Managementが誤って構成され、ユーザーのログオンが妨げられた場合でも、管理者としてログオンできます。

11. OUを右クリックし、**継承のブロック**を選択して、GPOリンクがOUに適用される方法を制御します。

12. サーバーに一度もログオンしたことがなく、ローカル管理者グループのメンバーではないドメインテストユーザーを作成します。

13. このユーザーにフルデスクトップを公開し、ユーザーがRemote Desktop Usersグループに属していることを確認します。

14. ドメインに複数のドメインコントローラー (DC) がある場合は、サーバーと同じサイト内のすべてのDC間でADレプリケーションを強制します。

15. ドメイン管理者としてサーバーにログオンし、ログファイルを削除し、Citrix Profile Managementサービスを再起動して、`gpupdate /force` を実行します。

16. レジストリを確認し、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies\Citrix\UserProfileManager\` の値が新しいGPOの値のみであることを確認します。

17. 管理者としてログアウトします。

18. Internet Explorerの設定をいくつか変更し、My Docsフォルダーに空のテストファイルを作成します。

19. Profile Managementログファイルへのショートカットを作成します。それを開いてエントリを調べます。注意が必要な項目を調査します。
20. ログアウトしてから、ドメイン管理者として再度ログオンします。
21. `gpresult` を実行して、テストユーザーとサーバーのRSoPレポートを生成します。

レポートに期待する内容が含まれていない場合は、注意が必要な項目を調査します。

Citrixテクニカルサポートに問い合わせる

このセクションのトラブルシューティングの助言を確認し、発生した問題がProfile Managementに起因すると考えられる場合は、Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。常に以下のファイルと、可能な限り多くのその他の情報を収集して提供してください。

Profile Managementログファイルを収集する

詳細な手順は次のとおりです。

1. すべてのイベントとアクションをログに記録するように、マシンでProfile Managementを有効にします。詳細については、「Profile Managementログの有効化」を参照してください。
2. 影響を受けるマシンで問題を再現します。
3. %SystemRoot%\\System32\\Logfiles\\UserProfileManagerからProfile Managementログファイルとそのバックアップファイルを収集します。

影響を受けるマシンからのログファイルには、少なくとも以下の情報が含まれています。

- サービスの開始（Profile Managementのバージョンとビルド番号を含む）
- サービスによる構成の読み取り
- 影響を受けるユーザーの完全なログオンプロセス
- 問題発生時にユーザーが行ったアクティビティ
- 影響を受けるユーザーの完全なログオフプロセス

Windowsイベントログファイルを収集する

影響を受けるマシンで問題を再現した後、以下の手順に従ってWindowsイベントログファイルを収集します。

1. `%SystemRoot%\System32\winevt\Logs` フォルダーを見つけます。
2. Application.evtxファイルを集めます。

インストールされているソフトウェアの詳細を収集する

影響を受けるマシンにインストールされている以下のソフトウェアの詳細を収集します。

- オペレーティングシステム、言語、およびバージョン。
- Citrix製品およびバージョン。

.iniファイルを集める

Profile Managementに関連付けられている.iniファイルを集めるには、次の手順に従います。

1. ユーザー ストア内の各Citrixユーザープロファイルのルートフォルダーを見つけます。
2. 次の.iniファイルを集めます。
    - UPMSettings.ini
    - UPMFRSettings.ini
    - PmCompatibility.ini

Always On Tracingログファイルを集める

Always On Tracing (AOT) ログは、Profile Managementに関する重大な問題を特定するのに役立つ情報を提供するため、問題を再現する必要性を減らします。

AOTログファイル収集の手順は次のとおりです。

1. 問題が発生したマシンで、`C:\ProgramData\Citrix\TelemetryService\CitrixAOT`に移動します。すべてのAOTログファイルが表示されます。

    > **注:**
    >
    > マシンにAOTが有効になっている他のCitrixコンポーネントがインストールされている場合、AOTログファイルにはそれらのコンポーネントからのログも含まれます。

2. 最新のログファイルを手動で生成するには、次の手順に従います。
    a. **Windows PowerShell**を管理者として実行します。
    b. コマンドを実行します: `Restart-Service -Name "Citrix Telemetry Service"`
3. すべてのAOTログファイルを収集し、Citrixテクニカルサポートに送信してください。

CDFControlを使用して診断トレースログを収集する

CDFControlを使用して診断トレースログを収集するには、次の手順に従います。

1. Knowledge Centerの記事CTX111961からCDFControlツールをダウンロードします。
2. CDFControl実行可能ファイルを実行します。
3. 表示されるウィンドウで、必要に応じて1つ以上のトレースモジュールを選択します。機能の説明の詳細については、次の表を参照してください。
4. ****をクリックします。
5. 問題を再現します。
6. 「**トレースの停止**」をクリックします。
7. トレースログは、CDFControl実行可能ファイルと同じフォルダーにあります。

この表は、CDFControlにおける追跡モジュールの機能を示しています。

トレースモジュール	説明
UPM_DLL_GPCSE	Profile ManagementからCitrixグループポリシーのクライアント側拡張機能に送信されたユーザーグループポリシー評価要求をトレースします。
UPM_DLL_OUTLOOK_HOOK	OutlookのProfile Managementフックモジュールをトレースします。Outlook検索インデックスのローミング機能に関する問題をトレースするには、これを選択します。
UPM_DLL_Perfmon	Profile Managementに関連付けられたWindowsパフォーマンスモニターカウンターと、Profile Managementによって生成されたエラーをトレースします。
UPM_DLL_SearchSvc_Hook	Windows Search ServiceのProfile Managementフックモジュールをトレースします。Outlook検索インデックスのローミング機能に関する問題をトレースするには、これを選択します。
UPM_DLL_WfShell	公開アプリケーションのデスクトップ準備完了イベントを報告するProfile Management `Wfshell` プラグインをトレースします。

トレースモジュール	説明
UPM_Driver	Citrix ストリーミングユーザープロファイルドライバーが使用されるたびに、ファイルシステムの変更をトレースします。
UPM_Service	Profile Management Service が呼び出されるたびに情報をトレースします。例としては、ログオン時、ログオフ時、またはセッション中の同期や定期メンテナンスが行われる場合などがあります。
UPM_SessionLaunchEvaluation	Profile Management の一意のトランザクション ID に関連付けられた起動イベントをトレースします。
UPM_WMI	Profile Management VDA WMI プラグインイベントをトレースします。

その他の情報の収集

可能であれば、以下の情報を収集してください。

- 影響を受けるマシンとユーザーのポリシーの結果セット (RSoP) レポートを、`gpresult` コマンドを実行して取得します。
- アプリケーションイベントログ。
- 利用可能な場合は、**Userenv** デバッグファイル。このツールに関する情報は、Microsoft のドキュメントを参照してください。

注記:

Citrix Provisioning Services が展開の一部であり、プロファイルが初期化されているときに問題が発生する場合、データ収集は複雑になる可能性があります。そのシナリオでは、.ini ファイルで前述の構成更新を行い（GPOログ設定を無効にし）、プロビジョニングされたイメージでのProfile Managementの事前構成 の指示に従うことをお勧めします。

方法

新しいMicrosoft Teamsのローミングを有効にする

この記事では、Profile Management を使用して新しい Microsoft Teams (バージョン 2.1 以降) のローミングを有効にする方法について説明します。プロセスは、選択するインストーラーの種類によって異なります。

- マシンごとのインストーラーを使用してインストールおよび構成する
- ユーザーごとのインストーラーを使用してインストールおよび構成する

マシンごとのインストーラーを使用してインストールおよび構成する

要件: Profile Management バージョン 2402 以降。

管理者として、次の手順に従ってマシンを作成します。

1. マスターイメージにマシンごとのインストーラーを使用して新しい Microsoft Teams をインストールします。

   インストールに関する詳細については、このMicrosoft の記事を参照してください。
2. マスターイメージに Profile Management バージョン 2402 以降をインストールする。
3. マスターイメージを使用してマシンを作成します。
4. Microsoft Teams のローミングを有効にするために必要な設定を構成する。

ユーザーごとのインストーラーを使用してインストールおよび構成する

要件: Profile Management バージョン 2308 以降。

管理者として、次の手順に従ってマシンを準備します。

1. Profile Management をバージョン 2308 以降にアップグレードします。
2. プロファイルローミング機能がユーザーに対して正しく機能することを確認します。
3. **UWP アプリのローミングを有効にする**ポリシー（**Profile Management > 詳細設定**の下）を有効にします。詳細については、「UWP アプリのローミングを有効にする」を参照してください。

4. Microsoft Teams のローミングを有効にするために必要な設定を構成する。

複数のマシンで新しい Microsoft Teams を使用したいユーザーは、新しい Microsoft Teams をそれらのマシンのうち *1 台にのみ* インストールする必要があります。

1. マシンにログオンします。
2. ユーザーごとのインストーラーを使用して、新しい Microsoft Teams をインストールします。

   Profile Management は、インストールされた Microsoft Teams をキャプチャし、コンテナ化します。別のマシンにログオンすると、Profile Management は Microsoft Teams コンテナをそのマシンに自動的にマウントします。

必要な設定を構成する

ファイルベースとコンテナベースの両方のプロファイルソリューションは、新しい Microsoft Teams でのローミングをサポートしています。ローミングを有効にするには、以下の必要な設定を適切に完了してください。

- ファイルベースのプロファイルソリューションに必要な設定
- コンテナベースのプロファイルソリューションに必要な設定

ファイルベースのプロファイルソリューションに必要な設定

Microsoft Teams のローミングを有効にするには、以下の必要な設定を実行します。

1. **ミラーリングするフォルダー**ポリシー（**Profile Management > ファイルシステム > 同期**の下）に以下のフォルダーを追加します。
   - `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies`
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache`
   - `AppData\Local\Microsoft\Vault`
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\Caches`
   - `AppData\Local\Packages`
2. 「**Accelerate folder mirroring**」ポリシー（**Profile Management > File system > Synchronization**配下）が無効になっている場合、フォルダーを除外するには、Microsoft の推奨事項に従ってください。
3. 「**Accelerate folder mirroring**」ポリシーが有効になっている場合、以下の考慮事項に従って除外リストを構成してください。

- フォルダーを除外するためのMicrosoftの推奨事項には従わないでください。
- `AppData\Local\Packages`または`AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe`が「**Folders to mirror**」ポリシー（**Profile Management > File system > Synchronization**配下）に含まれている場合、`AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe`配下のフォルダーが除外リストに含まれていないことを確認してください。
- Microsoft Teams のトラブルシューティングガイドを確認してください - ステップ3：AppDataフォルダー内の以下のすべてのディレクトリに読み取り権限があることを確認してください。`AppData\LocalLow`配下のフォルダーを除き、リスト内のすべてのフォルダーが除外リストに**含まれていない**ことを確認してください。（注：`AppData\LocalLow`フォルダーを除外リストに含めるかどうかは、ユーザーが決定できます）。

4. 以下のフォルダーを「**Profile streaming exclusion list - directories**」ポリシー（**Profile Management > Streamed user profiles**配下）に追加してください。
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\AC`
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\AppData`
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\LocalCache`
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\LocalState`
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\RoamingState`
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\Settings`
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\SystemAppData`
   - `AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe\TempState`
5. スタートメニューに新しいMicrosoft Teamsアイコンが表示されない場合 (特にWindows Server 2019または2022およびWindows 10の場合)、次の設定を構成します。
   - Windows Server 2022およびWindows 10の場合、次のパスを除外リストに追加します。

     `AppData\Local\Packages\Microsoft.Windows.StartMenuExperienceHost_cw5n1h2txyewy\TempS`
   - Windows Server 2019の場合、次のパスを除外リストに追加します。

     `AppData\Local\Packages\Microsoft.Windows.ShellExperienceHost_cw5n1h2txyewy\TempState`
   - 次のレジストリキーを **1 (DWORD)** に設定します。

     `HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\ImmersiveShell\StateStore\ResetCache`

6. VDAのバージョンが2402より前の場合、新しいMicrosoft Teamsクライアントを最適化するために、次のレジストリキーを展開します。このレジストリキーがない場合、新しいMicrosoft Teamsクライアントは非最適化モード (サーバー側レンダリング) で動作します。

   - 場所: HKLM\SOFTWARE\WOW6432Node\Citrix\WebSocketService
   - キー (REG_Multi_SZ): ProcessWhitelist
   - 値: msedgewebview2.exe

コンテナベースのプロファイルソリューションに必要な設定

Microsoft Teams のローミングを有効にするには、以下の必要な設定を構成します。

1. **プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする**ポリシー（**Profile Management > プロファイルコンテナ設定**内）が無効になっている場合は、以下の考慮事項に基づいて除外リストを構成します。

   - フォルダーを除外するための Microsoft の推奨事項に従わないでください。`AppData\Local\Packages\MSTeams_8wekyb3d8bbwe` の下のフォルダーがコンテナ除外リストに含まれていないことを確認してください。
   - Microsoft Teams のトラブルシューティングガイド - ステップ 3: AppData フォルダー内の以下のすべてのディレクトリに読み取り権限があることを確認する を確認してください。リスト内のすべてのフォルダーがコンテナ除外リストに**含まれていない**ことを確認してください。

2. **プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする**ポリシーが有効になっている場合は、以下の手順に従ってください。

   a. フォルダーを除外するには、Microsoft の推奨事項 に従ってください。

   b. 以下のフォルダーを**ミラーするフォルダー**ポリシー（**Profile Management > ファイルシステム > 同期**内）に追加します。

      - `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`
      - `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies`
      - `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache`
      - `AppData\Local\Microsoft\Vault`
      - `AppData\Local\Microsoft\Windows\Caches`
      - `AppData\Local\Packages`

3. スタートメニューに新しいMicrosoft Teamsアイコンが表示されない場合（特にWindows Server 2019または2022およびWindows 10の場合）、以下の設定を構成してください。

   - Windows Server 2022およびWindows 10の場合、以下のパスを除外リストに追加します。

     ```
     AppData\Local\Packages\Microsoft.Windows.StartMenuExperienceHost_cw5n1h2txyewy\TempS
     ```

   - Windows Server 2019の場合、以下のパスを除外リストに追加します。

     ```
     AppData\Local\Packages\Microsoft.Windows.ShellExperienceHost_cw5n1h2txyewy\TempState
     ```

   - 以下のレジストリキーを **1 (DWORD)** に設定します。

     ```
     HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\ImmersiveShell\StateStore\ResetCache
     ```

4. VDAバージョンが2402より前の場合、新しいMicrosoft Teamsクライアントを最適化するために、以下のレジストリキーを展開することをお勧めします。このレジストリキーがない場合、新しいMicrosoft Teamsクライアントは非最適化モード（サーバー側レンダリング）で動作します。

   - 場所: HKLM\SOFTWARE\WOW6432Node\Citrix\WebSocketService
   - キー (REG_Multi_SZ): ProcessWhitelist
   - 値: msedgewebview2.exe

ユーザーログオンパフォーマンスの向上

Profile Managementは、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるためのさまざまなポリシーを提供します。例としては、**ストリーム配信ユーザープロファイル**、**フォルダーミラーリングの高速化**、および**プロファイルコンテナ**ポリシーがあります。これらのポリシーは、ユーザープロファイルが日常的に使用されることで増大し続けるシナリオで役立ちます。

このセクションでは、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるための2つのProfile Managementソリューションを提供します。

ストリーム配信プロファイルを有効にし、フォルダーミラーリングを高速化する

環境にユーザーストアを展開した後、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるために次のポリシーを有効にします。

1. **Profile Management > ストリーム配信ユーザープロファイル** に移動し、**プロファイルストリーミング** と **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする** を有効にします。

2. **Profile Management > ファイルシステム** に移動し、**フォルダーミラーリングの高速化** を有効にします。

完全なプロファイルのためにプロファイルコンテナを有効にする

VHDXベースのCitrix®プロファイルソリューション（プロファイルコンテナと呼ばれます）を展開して、ログオンパフォーマンスを向上させることができます。これらのVHDXファイルは、ユーザーログオン時に動的にアタッチされます。 VHDXベースのソリューションを展開するには、次のように、完全なユーザープロファイルを保存するためにプロファイルコンテナを有効にします。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナ設定** に移動します。
2. **プロファイルコンテナ** を有効にし、プロファイルコンテナリストにアスタリスク（*）を入力します。

パフォーマンスの比較

標準的なユーザープロファイルでのテストに基づき、前述のソリューションをお勧めします。詳細については、Knowledge Centerの記事 CTX463658 を参照してください。次の表に示すように、いずれかのソリューションを展開した後、ユーザーログオンおよびログオフ時間が大幅に短縮されました。

ストリーム配信ユーザープロファイル および **フォルダーミラーリングの高速化** ポリシーを有効にしたテスト結果：

パラメーター	変更前	変更後
ログオン時間 / 合計ログオン時間	53.81 秒 / 56.48 秒	1.80 秒 / 4.45 秒
ログオフ時間 / 合計ログオフ時間	42.49 秒 / 43.67 秒	5.62 秒 / 6.89 秒

完全なプロファイルに対して**プロファイルコンテナ**ポリシーを有効にした場合のテスト結果:

パラメータ	変更前	変更後
ログオン時間 / 合計ログオン時間	53.81 秒 / 56.48 秒	2.66 秒 / 5.26 秒
ログオフ時間 / 合計ログオフ時間	42.49 秒 / 43.67 秒	3.63 秒 / 4.99 秒

ファイルの重複排除を使用してストレージ容量を節約する

ユーザー ストア内のさまざまなユーザー プロファイルに、同一のファイルが存在する場合があります。たとえば、異なるユーザーが同じファイルをダウンロードしたり、同じソフトウェアをユーザー プロファイルにインストールしたりします。**ファイル重複排除**ポリシーを使用すると、Profile Managementは、ユーザー ストアからファイルの重複インスタンスを中央の場所（*共有ストア*と呼ばれます）に移動し、その他を削除します。そのため、ストレージ コストが削減されます。

前提条件

ファイルの重複排除を有効にするには、以下を確認してください。

- **ユーザー ストアへのパス**設定で**%username%**または**#samaccountname#**を使用し、共有ストアが自動的に作成されるようにします。
- Citrix Profile Managementバージョン2209以降をインストールします。

ファイル重複排除ポリシーを有効にして構成する

Workspace Environment Management™ (WEM) Webコンソールを例にとります。コンソールを使用してファイルの重複排除を有効にして構成するには、次の手順に従います。

1. **プロファイル > Profile Management設定 > ファイル重複排除**に移動します。
2. **ファイルの包含を有効にする**を選択し、重複排除するファイルを指定します。必要に応じて、**ファイルの除外を有効にする**を選択し、含まれるファイルから除外するファイルを指定します。詳細については、「ファイルの重複排除を有効にする」を参照してください。

変更頻度の低いファイルのみを重複排除することをお勧めします。たとえば、次のとおりです。

- ユーザーがインストールするプログラムファイル:

  `AppData\Local\Microsoft\Teams*.exe`,
  `AppData\Local\Microsoft\Teams*.dll`,
  `AppData\Local\Microsoft\OneDrive*.exe`,
  `AppData\Local\Microsoft\OneDrive*.dll`

- ユーザーがダウンロードするインストーラーファイルまたはイメージファイル:

  `Downloads*.exe`, `Downloads*.msi`, `Downloads*.iso`

以下のファイルの重複排除は推奨しません。

- ユーザーが頻繁に編集する可能性のあるドキュメント:

`Documents*.xlsx`、`Documents*.docx`

- 頻繁に変更される可能性のあるデータファイル:

  `AppData\Local*.dat`

> **注:**
>
> ファイルの重複排除の効果は、ユーザー環境や重複排除に指定するファイルによって異なります。実際の状況に基づいてファイル設定をカスタマイズすることをお勧めします。

権限設定を変更する

共有ストアフォルダーを作成すると、Profile Management はそのフォルダーに以下のプリンシパルへのアクセス権を付与します。

- ドメインコンピューター (フルコントロールアクセス権付き)
- ドメインユーザー (読み取りアクセス権付き)

これらのデフォルトの権限設定では、ファイルの重複排除はドメイン参加済みマシンでのみ機能します。ドメインに参加していないマシンで機能させるには、共有ストアフォルダーへのフルコントロールアクセス権を持つユーザーアカウントをそれらのマシンに割り当てる必要があります。詳細な手順は次のとおりです。

1. 共有ストアサーバーで、ユーザーアカウント (例: `admin0`) に共有ストアフォルダーへのフルコントロールアクセス権を付与します。
2. 各VDAで、`admin0` ユーザーアカウントが共有ストアフォルダーにサインインするためのWindows資格情報を追加します。これを行うには、Windows資格情報マネージャーまたはWorkspace Environment Managementを使用します。詳細については、ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする に記載されている手順を参照してください。
3. (オプション) 共有ストアサーバーで、共有ストアフォルダーを見つけて、ドメインコンピューターの権限エントリを削除します。

重複排除されたファイルのデータ変更のサポート

この機能は、重複排除されたファイルへのデータ変更を処理できます。たとえば、2人のユーザーがソフトウェアXYZバージョン1をインストールし、それをファイル重複排除に含めるとします。その後、1人のユーザーがバージョン2にアップグレードすると、Profile Managementは共有スト

アにファイルの新しいバージョンを作成します。もう1人のユーザーもバージョン2にアップグレードすると、Profile Managementは古いバージョンのファイルを削除します。

__index__

アクティブライトバックを構成する

デフォルトでは、Profile Managementは、ユーザーがログオフするときに、ローカルユーザープロファイルに加えられた変更をユーザーストアに書き戻します。ユーザーが最初のセッションからログオフする前に2番目のセッションを開始した場合、最初のセッションで行われたローカルプロファイルの変更は2番目のセッションでは利用できません。

同時セッション間でのプロファイルの一貫性を向上させるには、アクティブライトバック機能を有効にできます。この機能により、Profile Managementは、ユーザーがログオフするまで待つのではなく、*セッション中に*ローカルプロファイルの変更をユーザーストアに書き戻します。

概要

Profile Managementは、**アクティブライトバック**ポリシーと、以下の2つの拡張ポリシーを提供します。

- **アクティブライトバック**。ローカルの*プロファイルファイルとフォルダー*に加えられた変更をユーザーストアに書き戻すようにProfile Managementに指示します。デフォルトでは、Profile Managementは5分ごとにアクティブライトバックを実行します。
- **アクティブライトバックレジストリ**。**アクティブライトバック**ポリシーと組み合わせて使用します。ローカルの*レジストリエントリ*に加えられた変更をユーザープロファイルに書き戻すようにProfile Managementに指示します。
- **セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック**。**アクティブライトバック**ポリシーと組み合わせて使用します。Profile Managementに、5分ごとではなく、セッションがロックまたは切断された場合にのみアクティブライトバックを実行するように指示します。

アクティブライトバックを有効にする

GPOを使用してアクティブライトバックを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrixコンポーネント > Profile Management**にアクセスします。
3. **アクティブライトバック**をダブルクリックします。

4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。 デフォルトでは、アクティブライトバックは5分ごとに発生します。
5. レジストリエントリのアクティブライトバックを有効にするには、次の手順に従います。
   a. 「**Active write back registry**」をダブルクリックします。
   b. 表示されるポリシーウィンドウで、**Enabled** を選択し、**OK** をクリックします。
6. セッションがロックまたは切断されている場合にのみ、Profile Management でアクティブライトバックを実行させるには、次の手順に従います。
   a. 「**Active write back on session lock and disconnection**」をダブルクリックします。
   b. 表示されるポリシーウィンドウで、**Enabled** を選択し、**OK** をクリックします。

> **注：**
>
> ベストプラクティスとして、「**Active write back on session lock and disconnection**」ポリシーを有効にすることをお勧めします。

アクティブライトバックポリシーの構成の優先順位は次のとおりです。

- GPO、Studio、またはWorkspace Environment Management™ (WEM) を使用して設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- 設定がどこにも構成されていない場合、Profile Management は動的に構成します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

クロスプラットフォーム設定を構成する

重要: この機能に関する以下の重要な情報に注意してください。

- Profile Management のクロスプラットフォーム設定は、サポートされているオペレーティングシステム (OS) とアプリケーションのセットをサポートします。この機能は、本番環境でのみ構成してください。
- Microsoft Office の設定は、そのアプリケーションのバージョン間ではローミングされません。詳細については、「クロスプラットフォーム設定でサポートされるオペレーティングシステムとアプリケーション」を参照してください。

- この機能は、レジストリ設定およびアプリケーション設定に適しています。ファイルやフォルダー、またはフォルダーリダイレクトで通常使用されるオブジェクト (ブラウザーのお気に入り、デスクトップ、スタートメニューの設定など) には適していません。
- この機能を使用して、プロファイルバージョンが異なるシステム間でユーザープロファイルを移行する場合は、すべてのユーザーの移行が完了した後にこの機能を無効にしてください。この機能を使用すると、主にログオフ時にパフォーマンスへの影響があります。そのため、プロファイルバージョン間のローミングをサポートしない限り、無効にしておくのが最善です。

このトピックでは、クロスプラットフォーム設定を構成するために実行できる手順の例を示します。詳細なケーススタディについては、「クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ」を参照してください。

ヒント: この機能を本番環境に導入する前に、少数のテストユーザーに限定することをお勧めします。 **クロスプラットフォーム設定のユーザーグループ**オプションを使用してこれを実現します。この設定が構成されている場合、Profile Management のクロスプラットフォーム設定機能は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。この設定が無効になっている場合、この機能は、 処理対象グループ設定で指定されたすべてのユーザーを処理します。 **クロスプラットフォーム設定のユーザーグループ**がグループポリシーまたは .ini ファイルで構成されていない場合、すべてのユーザーグループが処理されます。

1. すべてのプラットフォームに共通する設定については、共通のグループポリシーオブジェクト (共通 GPO) を作成し、それを Profile Management の .adm または .admx ファイルにリンクして、必要に応じて設定を構成します。この設定は、後のトラブルシューティングを困難にする可能性のある重複する設定を最小限に抑えるため、ベストプラクティスです。要件に応じて、**ユーザーストアへのパス**を除くすべての Profile Management 設定が複数のプラットフォームで機能します。バージョン 1 とバージョン 2 のプロファイルのユーザーストア構造が異なるため、ユーザーストアへのパスはプラットフォームごとに個別に構成してください。共通 GPO では、この設定を未構成のままにします。
2. 異なるプラットフォーム用に個別の OU を作成します。たとえば、Windows 7 から Windows 8 に移行する場合は、これらのオペレーティングシステム用に個別の OU を作成し、各 OU でユーザーストアへのパスを適切に設定します。
3. プラットフォーム間で機能させたいパーソナライズを持つサポート対象アプリケーションの定義 (.xml) ファイルを見つけます。これらのファイルは、ダウンロードパッケージの CrossPlatform フォルダーにあります。独自のアプリケーション定義ファイルを作成できます。詳細については、「定義ファイルの作成」を参照してください。
4. .xml ファイルをネットワーク上の適切な場所にコピーします。

5. グループポリシー管理エディターで共通 GPO を編集します。Profile Management の下にある「クロスプラットフォーム設定」フォルダーを開き、次の設定を構成します。

   - クロスプラットフォーム設定のユーザーグループ。クロスプラットフォーム設定を体験するユーザーを制限します。この設定はオプションです。この機能をテストする場合や、段階的に展開する場合に役立ちます。
   - クロスプラットフォーム定義へのパス。ダウンロードパッケージからコピーした定義ファイルのネットワーク上の場所を識別します。このパスは UNC パスである必要があります。ユーザーはこの場所への読み取りアクセス権を持ち、管理者は書き込みアクセス権を持っている必要があります。この場所は、Server Message Block (SMB) または Common Internet File System (CIFS) ファイル共有である必要があります。
   - クロスプラットフォーム設定ストアへのパス。これは、複数のプラットフォームで共有されるプロファイルデータが格納されるユーザー ストアの共通領域です。ユーザーはこの領域への書き込みアクセス権を持っている必要があります。パスは、絶対UNCパスまたはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。**ユーザー ストアへのパス**と同じ変数を使用できます。

6. そのプラットフォームのOUで「クロスプラットフォーム設定作成元」が「有効」に設定されていることを確認して、ベースプラットフォームを指定します。この設定は、ベースプラットフォームのプロファイルからクロスプラットフォーム設定ストアにデータを移行します。他のプラットフォームのOUでは、このポリシーを「無効」または「未構成」に設定します。各プラットフォーム独自のプロファイルセットは、個別のOUに保存されます。クロスプラットフォーム設定ストアのシードに使用するプラットフォームのプロファイルデータを決定する必要があります。これがベースプラットフォームと呼ばれます。クロスプラットフォーム設定ストアにデータのない定義ファイルが含まれている場合、または単一プラットフォームプロファイルのキャッシュデータがストア内の定義データよりも新しい場合、この設定を無効にしない限り、Profile Managementは単一プラットフォームプロファイルからストアにデータを移行します。 重要: 次の場合 複数のOUで「クロスプラットフォーム設定作成元」が有効になっている場合、最初にユーザーがログオンするプラットフォームがベースプロファイルになります。
7. 「クロスプラットフォーム設定を有効にする」を「有効」に設定します。既定では、展開を容易にするため、この設定をオンにするまでクロスプラットフォーム設定は無効になっています。
8. グループポリシーの更新を実行します。
9. プロファイルをプラットフォーム間で移行するが、それらのローミングをサポートしない場合は、移行が完了したら、「クロスプラットフォーム設定を有効にする」を**無効**に設定します。

ここで「クロスプラットフォーム定義へのパス」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここまたは.iniファイルでこの設定が構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

「クロスプラットフォーム設定ストアへのパス」が無効になっている場合、既定のパス `Windows\PM_CP` が使用されます。ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここまたは.iniファイルでこの設定が構成されていない場合、既定のパスが使用されます。

ここで「クロスプラットフォーム設定を有効にする」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここまたは.iniファイルでこの設定が構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

例: Windows Server 2008とWindows 7間でのMicrosoft Office設定のローミング

この例では、バージョン2プロファイルを作成する2つのオペレーティングシステム間でユーザーのアプリケーション設定をローミングできるようにするための主要な手順について説明します。Microsoft Office 2010が例のアプリケーションであり、Windows Server 2008上のCitrix XenApp 6.5とWindows 7の間でローミングが行われます。両方のOSは64ビットです。

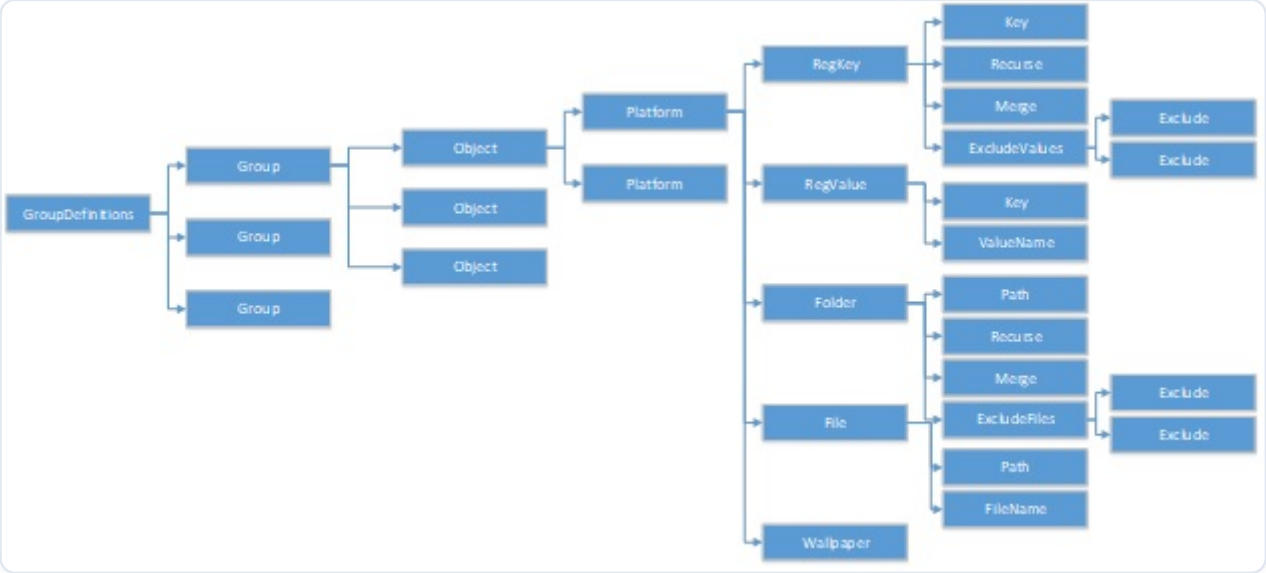
1. ユーザーは、Citrix virtual apps™サーバー上の公開アプリケーションとしてOffice 2010およびInternet Explorer 9にアクセスすることに慣れており、これらのアプリケーションでいくつかの設定を変更します。たとえば、Officeでメールの署名を変更したり、Internet Explorerで新しいホームページを選択したりします。
2. 将来、仮想デスクトップ（Citrix Virtual Desktops™で作成）が作成されますが、まだユーザーにはリリースされていません。デスクトップはWindows 7を実行し、Office 2010およびInternet Explorer 9がプリインストールされています。
3. ユーザーは、新しいデスクトップでも設定が同じであることを期待しています。このトピックの手順に従って、クロスプラットフォーム設定機能を構成します。これには、Windows Server 2008のOUで「クロスプラットフォーム設定作成元」を有効にすることが含まれます。
4. ユーザーが次にアプリケーションの公開バージョン（新しい仮想デスクトップではない）を実行すると、その設定はクロスプラットフォーム設定ストアにコピーされます。
5. その後、新しいデスクトップがユーザーにリリースされます。ユーザーがログオンしてOfficeおよびInternet Explorerのローカルバージョンを実行すると、以前のWindows Server 2008セッションの設定が使用されます。ユーザーが変更したメールの署名とホームページは、Windows 7マシンで利用できます。

6. ユーザーは仮想デスクトップからInternet Explorerで閲覧し、ホームページを再度変更することにしました。
7. ユーザーはログオフして退社します。彼らは自宅では仮想デスクトップにアクセスできませんが、リモートで公開版のInternet Explorer 9を実行できます。彼らは、前のステップでWindows 7で作成された最新のホームページが保持されていることを確認します。

アプリケーション定義ファイルの構造

この記事では、プロファイル管理アプリケーション定義ファイルのXML構造について説明します。この構造は、アプリケーションプロファイラーとクロスプラットフォーム設定の両方に適用されます。

アーキテクチャ図



- XML宣言とエンコーディング属性

  XML宣言では、属性 \<?xml version="1.0"\> を指定する必要があります。

  Encoding="UTF-8" は推奨される属性です。

- GroupDefinitions

  グループのコレクションのコンテナ。XMLドキュメントのルート要素として機能します。その属性にはversionとGUIDが含まれます。これらは必須属性です。

- グループ

  サブアプリケーションの設定を定義します。その属性はnameとGUIDです。これらは必須属性です。

- オブジェクト

サブアプリケーションの1つの設定を定義します。その属性はnameとGUIDです。これらは必須属性です。

- プラットフォーム

  Platformは、異なるオペレーティングシステムで異なる定義を提供します。オペレーティングシステムを指定するために、オプションの属性OSVersionNumberを使用できます。属性がない場合、すべてのプラットフォームは設定の内部定義を受け入れます。Platformには、次のいずれかの要素が含まれている必要があります: RegKey、RegValue、File、Folder、および Wallpaper。

- RegKey

  設定をレジストリ内のキーとして定義します。Key要素を含める必要があります。オプションのサブ要素として、RecurseとMergeの2つが含まれます。RecurseとMergeは、Profile Managementがキーをローミングする際のパフォーマンスを定義します。別のオプションのサブ要素はExcludeValuesです。ExcludeValuesは、除外できるレジストリ値を定義します。

- RegValue

  設定をレジストリ内の値として定義します。親キーのパスを指定するためにKeyを含める必要があります。

- フォルダー

  設定をフォルダーとして定義します。フォルダーのパスを指定するためにPathを含める必要があります。オプションのサブ要素として、`Recurse`と`Merge`があります。RecurseとMergeは、Profile Managementがフォルダーをローミングする際のパフォーマンスを定義します。別のオプションのサブ要素は`ExcludeFiles`で、これは除外できるファイルを定義します。

- ファイル

  設定をファイルとして定義します。親フォルダーのパスを指定するためにPathを含め、ファイルのパスを指定するために`FileName`を含める必要があります。

- 壁紙

  すべての壁紙設定を定義します。属性やサブ要素は不要です。Profile Managementはこれらの設定を自動的にローミングします。

- Key

  レジストリキーのパス、または親レジストリキーのパスを指定します。KeyはRegKeyとRegValueのサブ要素です。

- ValueName

レジストリ値の名前を指定します。RegValueのサブ要素です。

- パス

  フォルダのパスまたは親フォルダのパスを指定します。FolderとFileのサブ要素です。Profile Managementの変数を適用できます。

- FileName

  ファイル名を指定します。Fileのサブ要素です。

- 再帰

  RegKeyとFolderのオプションのサブ要素です。この要素が存在する場合、Profile Managementはキーとフォルダを再帰的にローミングします。

- マージ

  RegKeyとFolderのオプションのサブ要素です。この要素が存在する場合、Profile Managementはキーとフォルダをマージします（ただし、置換はしません）。

- ExcludeValues

  RegKeyのオプションのサブ要素です。キーをローミングする際に除外できる値を指定します。

- ExcludeFiles

  Folderのオプションのサブ要素です。フォルダをローミングする際に除外できるファイルを指定します。

- 除外

  ExcludeValuesとExcludeFilesのサブ要素です。ファイルまたはレジストリ値の除外項目を指定します。

注記

ドキュメントが正しい構文形式であることを確認してください。これらのファイルがロードされる際、Profile ManagementはCPSValidationSchema.xsd検証ファイルを使用してこれらのファイルをチェックします。検証ファイルはProfile Managementのインストールパスにあります。Profile Managementは不正なファイルを無視し、エラーメッセージをログに記録します。

サンプル

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>



<!-- Copyright 2011 Citrix Systems, Inc. All Rights Reserved. -->



&lt;GroupDefinitions GUID="748E63D3-426E-4796-9C32-420B25DB2D9F"
Version="4.0.0.0">



<!-- Application Settings -->



&lt;Group GUID="0FCCCF29-0A0E-482d-A77E-3F39A8A854A6" Name="Application
Settings">



<!-- Registry Key Setting Example -->



&lt;Object GUID="637EC13C-2D47-4142-A8EB-3CEA6D53522A"
Name="Software\Application\certain key">



&lt;Platform>



&lt;RegKey>



&lt;Key>Software\Microsoft\Office\certain key&lt;/Key>
```

```
&lt;Merge/>

&lt;Recurse/>

&lt;ExcludeValues>

&lt;Exclude>excluded value 1&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded value 2&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded value 3&lt;/Exclude>

&lt;/ExcludeValues>

&lt;/RegKey>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>

<!-- Registry Value Setting Example -->
```

```
&lt;Object GUID="3C896310-10C4-4e5f-90C7-A79F4E653F81"
Name="Software\Application\certain value">


<!-- Folder Setting Example -->


&lt;Object GUID="7F8615D0-5E63-4bd0-982D-B7740559C6F9" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\setting folder">


&lt;Platform>


&lt;Folder>


<!-- We can use Citrix variable if necessary -->


&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\setting folder&lt;/Path>


&lt;Merge/>


&lt;Recurse/>


&lt;ExcludeFiles>
```

```
&lt;Exclude>excluded file 1&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded file 2&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded file 3&lt;/Exclude>

&lt;/ExcludeFiles>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>

<!-- File Setting Example -->

&lt;Object GUID="7F8615D0-5E63-4bd0-982D-B7740559C6F9" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\file.txt">

&lt;Platform>

&lt;File>
```

```
<!-- We can use Citrix variable if necessary -->

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application&lt;/Path>

&lt;FileName>file.txt&lt;/FileName>

&lt;/File>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>

<!-- Setting based on different OS -->

&lt;Object GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\%osname%\folder">

<!-- Assuming that the folder locates differently when in different
platforms -->

&lt;Platform OSVersionNumber="6.1">
```

```
<!-- Win7 -->

&lt;Folder>

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder&lt;/Path>

&lt;Recurse/>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>

&lt;Platform OSVersionNumber="10.0">

<!-- Win10 -->

&lt;Folder>

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder&lt;/Path>

&lt;Recurse/>
```

```
&lt;/Folder>


&lt;/Platform>


&lt;/Object>


&lt;/Group>


&lt;/GroupDefinitions>
```

定義ファイルを作成する

定義ファイルは、同期するフォルダー、ファイル、またはレジストリを定義します。独自のアプリケーション定義ファイルを作成できます。

Microsoft UE-V テンプレートジェネレーターを使用して、UE-V テンプレートファイルを作成します。

1. Microsoft の Web サイト から Windows 10 用の **Windows Assessment and Deployment Kit** (Windows ADK) をダウンロードします。
2. Windows ADK をインストールします。**Microsoft User Experience Virtualization (UE-V) Template Generator** を選択します。**インストール** をクリックします。インストールが完了したら、**完了** をクリックしてウィザードを閉じます。
3. **スタート** をクリックし、**Microsoft User Experience Virtualization** をクリックし、次に **Microsoft User Experience Virtualization Generator** をクリックします。
4. **設定場所テンプレートの作成** をクリックします。
5. ウィザードに従って、アプリケーション関連のパラメーターを指定します。**次へ** をクリックして続行します。

   メモ帳を例にとります。ファイルパスを `C:\Windows\System32\notepad.exe` として指定します。

6. 指定したアプリケーションが起動したら、閉じます。
7. プロセスが完了したら、**次へ** をクリックして続行します。
8. 左ペインで **場所の確認** を選択します。標準および非標準のレジストリ/ファイルのリストにあるすべてのチェックボックスを選択します。
9. **作成** をクリックして、テンプレート XML ファイルを保存します。

   メモ帳を例にとります。テンプレート XML ファイルを **Notepad.xml** として保存します。

> **注**
>
> 1 つの UE-V テンプレートファイルに複数のアプリケーションが定義されている場合があります。

> UE-V テンプレートファイルをクロスプラットフォーム定義ファイルに変換するには、次の手順を実行します。

1. 変換ツールを こちら からダウンロードします。
2. コマンドプロンプトから、コマンド **convert show filename** を実行して、定義ファイル内のすべてのアプリケーション名を表示します。
3. UE-V テンプレートファイルを定義ファイルに変換するには、次のコマンドを実行します。

   convert source destination \[/Index\] \[/V\]

   \[/Index\]: インデックス番号で指定されたアプリケーションのみを変換します。

   既定では、このツールは UE-V テンプレート内のすべてのアプリケーションを変換します。

   \[/V\]: 変換の詳細情報を表示します。

クロスプラットフォーム設定の場合、他のオペレーティングシステムに対しても前述の手順を繰り返し、定義ファイルを1つにマージする必要があります。ファイルをマージするには、**OSVersionNumber** 属性を持つ **Platform** 要素を使用できます。Windows 7 では、設定フォルダーは `AppData\Application\Win7\folder` にあります。Windows 10 では、`AppData\Application\Win10\folder` にあります。

Windows 7 では、作成した定義ファイルは次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">



        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">



            <Platform>



                <Folder>



                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder</
Path>



                    <Recurse/>



                </Folder>



            </Platform>
```

```
        </Object>



    </Group>



</GroupDefinitions>
```

Windows 10 では、作成した定義ファイルは次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">



        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">



            <Platform>



                <Folder>



                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder</
Path>
```

```
                    <Recurse/>


                </Folder>


            </Platform>


        </Object>


    </Group>


</GroupDefinitions>
```

マージ後、定義ファイルの内容は次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">



        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\%osname%\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">
```

```
            <!-- Assuming that the folder locates differently when in
different platforms -->

            <Platform OSVersionNumber="6.1"> <!-- Win7 -->

                <Folder>

                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder</
Path>

                    <Recurse/>

                </Folder>

            </Platform>

            <Platform OSVersionNumber="10.0"> <!-- Win10 -->

                <Folder>

                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder</
Path>
```

```
                    <Recurse/>


                </Folder>


            </Platform>


        </Object>


    </Group>


</GroupDefinitions>
```

クロスプラットフォーム設定の構成に関する情報については、クロスプラットフォーム設定の構成 を参照してください。

定義ファイルのアーキテクチャに関する情報については、アプリケーション定義ファイルの構造 を参照してください。

アプリケーションプロファイラーの有効化に関する情報については、アプリケーションプロファイラーの有効化 を参照してください。

クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ

クロスプラットフォーム設定機能は、主にWindows 7およびWindows Server 2008からWindows 8およびWindows Server 2012への移行に使用されます。この移行では、Microsoft Office 2003またはOffice 2007からOffice 2010への移行も含まれる場合があります。Windows 2003システムへの一般的な投資を考慮すると、相当な共存期間が予想されます。この機能は、移行と継続的な共存の両方をサポートすることが期待されます。

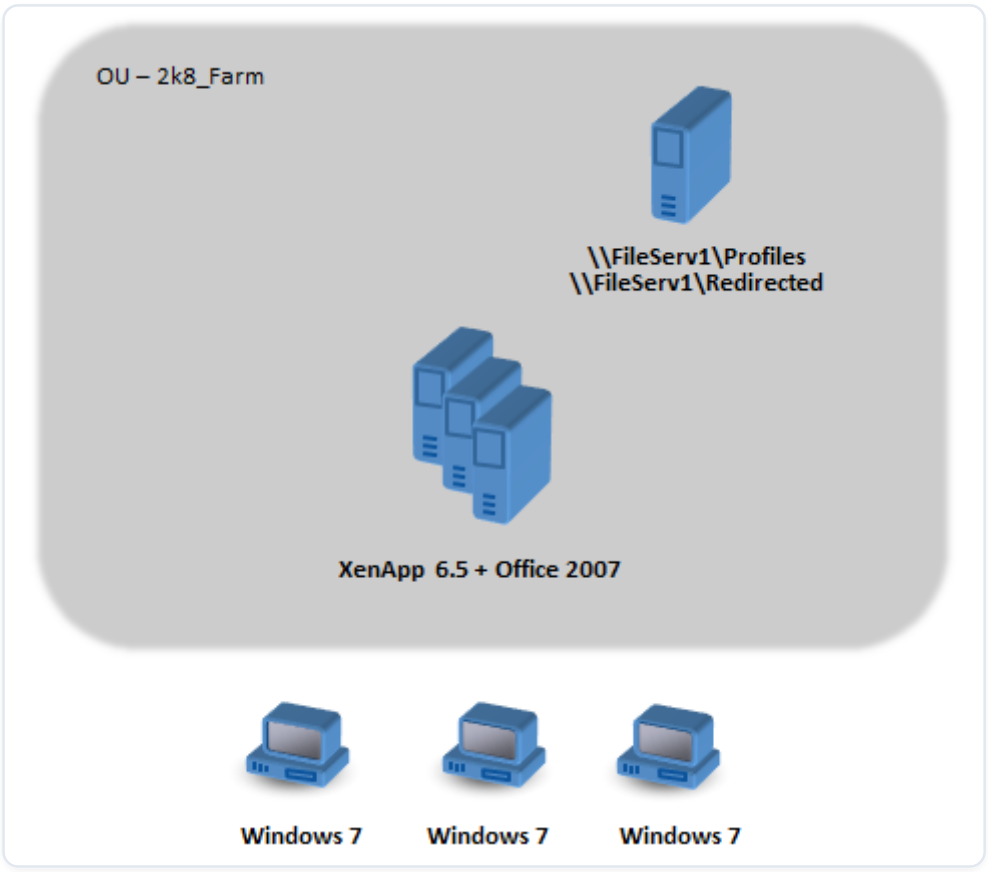
このケーススタディは、既存のWindows 7およびWindows 2008環境でOffice 2007が稼働している状態から始まり、Windows 8の共有プロビジョニング済み仮想デスクトップを追加します。

このケーススタディは以下で構成されます。

- 初期構成
- 新しいサイトの計画
- 計画の実行
- その他の考慮事項

初期構成

次の図は、このケーススタディにおける環境構成を示しています。



Windows 7マシンは、Citrix XenApp 6.5で公開されているOffice 2007を使用するように構成されています。

ドメインには、Windows 2008レベルでActive Directoryを実行しているWindows 2008ドメインコントローラーが含まれています。すべてのマシンは2k8_FarmというOUに属しており、Profile Management 5.0の.admファイルは2k8_Farm_POというGPOに追加されています。以下のポリシーが構成されています。

ポリシー	値
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ1\Profiles#sAMAccountName#\%ProfVer%`
プロファイルストリーミング	有効
アクティブライトバック	有効

システム環境変数`%ProfVer%`を設定するマシンログオンスクリプトは、OU内のすべてのマシンで実行されます。

マシンタイプ	%PROFVER%
Windows 2008上のXenApp®サーバー	Win2008
Windows 7デスクトップ	Win7

たとえば、ユーザーjohn.smithは、Windows 7デスクトップ用に`\\FileServ1\Profiles\john.smith\Win7`に、Citrix仮想アプリサーバー用に`\\FileServ1\Profiles\john.smith\Win2008`にプロファイルを持っています。デスクトップとサーバー用に個別のプロファイルが維持されています。管理者は、ワークステーションとマルチセッションオペレーティングシステム間でプロファイルがローミングする際に問題があることを認識しており、慎重に対応しています。

フォルダーリダイレクトは、**ユーザーの構成** \> **ポリシー** \> **Windowsの設定** \> **フォルダーリダイレクト**でグループポリシーを使用して設定されます。

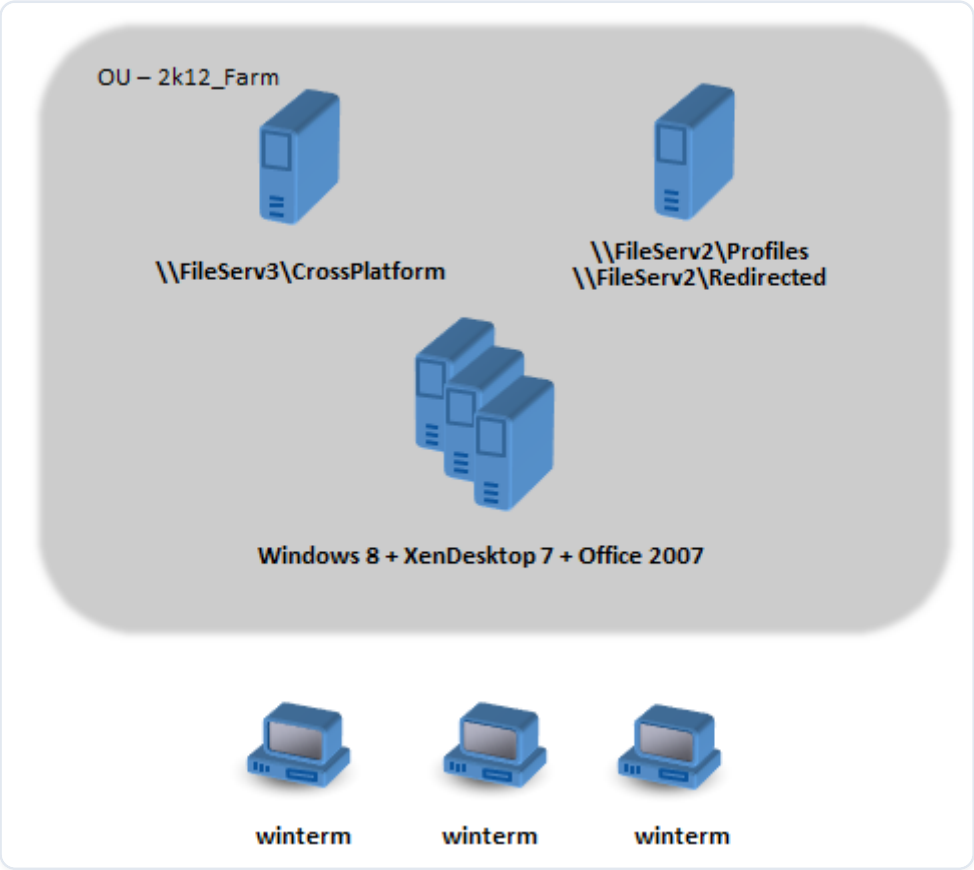
新しいサイトの計画

ネットワーク管理者は、Windows Server 2012ドメインコントローラーとActive Directory 2012に基づいた新しい環境のために、新しいドメインをセットアップすることを決定しました。最終的には、Windows Server 2012で仮想アプリを実行する新しい仮想アプリサイトが計画されています。しかし、今のところ、新しいドメインはWindows 7仮想デスクトップサイトのみに使用されています。

このサイトは、XenServer（旧Citrix Hypervisor™）環境でホストされ、Windowsターミナルからアクセスされる共有のWindows 7ベースイメージに基づいています。Office 2007はベースイメージに含まれています。

両方のドメインのユーザーが新しいドメインを使用することが想定されているため、OldDomainとNewDomainの間に双方向の信頼関係が設定されています。両方のドメインは同じADフォレストに属している必要があります。

次の図は、新しい仮想デスクトップサイトの構成を示しています。



用語集

この記事では、Profile Managementソフトウェアおよびドキュメントで使用される用語と定義を一覧表示します。他のCitrix®ソフトウェアで使用されるプロファイル関連の用語も含まれています。Windowsユーザープロファイルに関連するその他の概念を理解するには、MicrosoftのWebサイトをご覧ください。

用語	定義
ベースプラットフォーム	クロスプラットフォーム設定ストアを参照してください。
ベースプロファイル	ベースプロファイルは、ユーザーストア内のプロファイルへのUNCパスによって定義されます。クロスプラットフォーム設定機能が使用されている場合、レジストリ設定とファイル

用語	定義
	は、ベースプロファイルのサブセットからプラットフォーム間で共有できます。このサブセットはクロスプラットフォーム設定ストアにコピーされ、そこから移行またはローミングのターゲットとして使用されるプロファイルに追加されます。クロスプラットフォーム設定ストアにはベースプロファイルのサブセットが含まれていますが、これ（およびターゲットプロファイル）は常に完全なプロファイルとして保存されます。必要に応じて、標準のWindowsローミングプロファイルまたはローカルプロファイルとして使用できます。ただし、ストリーム配信ユーザープロファイル機能が使用されている場合、ベースプロファイルは一時的に不完全になる可能性があることに注意してください。ユーザーがログオフするまで、一部のファイルは保留領域に存在する可能性があります。ローミングシナリオでベースプロファイルを定義する際の考慮事項については、「ローミング」を参照してください。
キャッシュ	キャッシュと同期という用語は、ユーザーストアからファイルをダウンロードする、またはユーザーストアにファイルをアップロードする行為を指します。フェッチという用語はより具体的で、ストリーム配信ユーザープロファイル機能が、ログオン後いつでもユーザーが必要とするときに、ユーザーストアからファイルのサブセットをダウンロードする方法を指します。
Citrix強制プロファイル、Citrixローミングプロファイル、Citrixユーザープロファイル	Citrixユーザープロファイルは、Profile Managementがインストールされ有効になっているときにユーザーが受け取るプロファイルの総称です。Citrixユーザープロファイルには、Citrixローミングプロファイルと Citrix強制プロファイルの2種類があります。Citrixローミングプロファイルは、ユーザーが日常業務でカスタマイズし、ログオフ時にユーザーストアに保存され、Profile Managementポリシーに

用語	定義
	よって処理されるファイル、フォルダー、およびレジストリ設定の標準的なコレクションです。Citrix強制プロファイルは、Profile Managementがそれらを処理する方法においてCitrixローミングプロファイルに似ています。しかし、ログオフ時にユーザーストアに変更は保存されません。ログオン時には、強制プロファイルの新しいコピーが読み込まれます。Citrixユーザープロファイルは、Microsoftローカルプロファイル、Microsoftローミングプロファイル、またはMicrosoft強制プロファイルとは異なります。
コンピューター	これらのProfile Managementトピックで使用される「コンピューター」という一般的な用語は、Citrix Profile Management Serviceがインストールされている任意のコンピューターを指すことができます。これは、ユーザーデバイス、仮想デスクトップ（Citrix Virtual Desktops™仮想マシンからプロビジョニングされた可能性のあるもの）、または公開アプリケーションをホストするCitrix仮想アプリサーバーである可能性があります。
クロスプラットフォーム定義ファイル	このファイルは、クロスプラットフォーム設定機能を動作させるために必要な情報を含む、Profile Managementに付属の.xmlファイルです。サポートされているアプリケーションごとに1つのファイルがあります。
クロスプラットフォーム設定ストア	この場所は、ユーザーストアとは別に、クロスプラットフォーム設定機能が構成されると、サポートされているアプリケーションの設定を保持します。どのプラットフォームのプロファイルデータを使用してクロスプラットフォーム設定ストアをシードするかを選択します。それがベースプラットフォームです。
フェッチ	キャッシュを参照。

用語	定義
レガシーアプリケーション	レガシーアプリケーションとは、設定を非標準の場所に保存するため、適切に動作しないアプリケーションのことです。これには、一時的なアプリケーションデータをユーザープロファイルに保存し、それによってプロファイルの肥大化を引き起こすシステムが含まれます。
移行	移行とは、プロファイルをあるプラットフォームから別のプラットフォームへ（例：Windows XPからWindows 7へ）計画的に一方向で移動させることです。
プロファイルの肥大化	Windowsユーザープロファイルは、一時ファイルが削除されないとサイズが増大する可能性があります。これはログオンの遅延を引き起こし、「プロファイルの肥大化」と呼ばれます。
ローミング	ローミングとは、複数のコンピューターまたはセッションから異なるベースプロファイルを使用することです（例：Windows 2008 R2を実行しているコンピューター用のベースプロファイルと、Windows 7用の別のベースプロファイル）。ユーザーは、異なるベースプロファイルを持つコンピューターまたはセッション間を行き来して接続するときにローミングします。組織単位（OU）の構成方法によっては、ベースプロファイルをプラットフォーム間で共有できます。たとえば、Windows 2008 R2とWindows 7の両方のOUで同じプロファイルを使用できます。この場合、同じベースプロファイルが共有されているため、ユーザーはローミングしません。ベースプロファイルは、同じプロファイルバージョン（バージョン1またはバージョン2プロファイル）のオペレーティングシステムでのみ共有できます。バージョン1とバージョン2の両方のプロファイルがアクティブな場合、ユーザーは常にローミングします。

用語	定義
同期	キャッシュを参照。
ユーザー ストア	ユーザー ストアは、Citrixユーザープロファイルを保存するための中央ネットワークロケーションです。クロスプラットフォーム設定ストアも参照してください。
vディスク、パーソナルvディスク	vDiskは、Citrix Provisioning™ Servicesによってマスターイメージから作成される仮想ディスクです。Personal vDiskは、Citrix仮想デスクトップがプロファイル、ユーザーがインストールしたアプリケーションおよび部門別アプリケーション、ユーザーデータを保存するために使用するディスクです。Personal vDiskは、オペレーティングシステム、レジストリ、および基本アプリケーションに使用されるディスクとは別個のものです。
Version 1プロファイル、Version 2プロファイル	Microsoft Windows XPおよびWindows Server 2003のプロファイルはVersion 1プロファイルとして知られています。Windows Vista、Windows 7、Windows Server 2008、およびWindows Server 2008 R2のプロファイルはVersion 2プロファイルとして知られています。Version 1プロファイルとVersion 2プロファイルは異なる名前空間を持ち、その構成のいくつかの側面に影響を与えます。

プロファイルについて

Windowsユーザープロファイルは、ユーザーアカウントでログオンするユーザーの環境を定義する、フォルダー、ファイル、レジストリ、および構成設定のコレクションです。これらの設定は、管理構成に応じてユーザーがカスタマイズできます。カスタマイズできる設定の例は次のとおりです。

- 壁紙やスクリーンセーバーなどのデスクトップ設定
- ショートカットとスタートメニューの設定
- Internet Explorerのお気に入りおよびホームページ
- Microsoft Outlookの署名

- プリンタ

一部のユーザー設定とデータは、フォルダーリダイレクトによってリダイレクトできます。ただし、フォルダーリダイレクトが使用されていない場合、これらの設定はユーザープロファイル内に保存されます。

プロファイルの種類

Windowsには、いくつかの種類のプロファイルが含まれています。

プロファイルの種類	保存場所	構成場所	アプリケーション	変更を保存しますか？
ローカル	ローカルデバイス	ローカルデバイス	ローカルデバイスのみ	はい
ローミング	ネットワーク	アクティブディレクトリ	アクセスされた任意のデバイス	はい
強制 (強制ローミング)	ネットワーク	アクティブディレクトリ	アクセスされた任意のデバイス	いいえ
一時的	該当なし	該当なし	ローカルデバイスのみ	いいえ

一時プロファイルは、特定のプロファイルタイプを割り当てられない場合にのみ割り当てられます。強制プロファイルを除き、通常、ユーザーごとに異なるプロファイルが存在します。強制プロファイルでは、ユーザーはカスタマイズを保存できません。

Remote Desktop Services ユーザーの場合、Remote Desktop Services セッションとローカルセッションで同じプロファイルがユーザーに割り当てられた場合に発生する可能性のある問題を回避するために、特定のローミングプロファイルまたは強制プロファイルを割り当てることができます。

プロファイルのバージョン

Microsoft Windows ユーザープロファイルのバージョンは次のとおりです。

- バージョン 6 – Windows 11、Windows 10 1607 以降、Windows サーバー 2016、Windows サーバー 2019、および Windows サーバー 2022
- バージョン 5 – Windows 10 RTM
- バージョン 4 – Windows 8.1 および Windows Server 2012 R2

- バージョン 3 - Windows 8 および Windows Server 2012
- バージョン 2 - Windows Vista、Windows 7、Windows サーバー 2008、および Windows サーバー 2008 R2
- バージョン 1 – Windows Vista および Windows Server 2008 より前のオペレーティングシステム

Microsoft のバージョン 1 プロファイルのフォルダー構造 (または名前空間) は、ほとんど互換性があります。たとえば、Windows XP と Windows Server 2003 のフォルダーはほぼ同じです。同様に、バージョン 2 プロファイルの構造もほとんど互換性があります。

ただし、バージョン 1 とそれ以降のプロファイルでは名前空間が異なります。このフォルダー構造は、ユーザーおよびアプリケーションデータ用に分離されたユーザー固有のフォルダーを提供するために、後のオペレーティングシステムで変更されました。バージョン 1 プロファイルは、ルートフォルダーの **Documents and Settings** にデータを保存します。バージョン 2 プロファイルは、より直感的な名前の **Users** というフォルダーにデータを保存します。たとえば、Windows Vista の **AppData\Local** のフォルダーの内容は、Windows XP の `Documents and Settings\<username>\Local Settings\Application Data` の内容と同じです。

バージョン 1 とそれ以降のプロファイルの違いの詳細については、「ローミングユーザーデータ展開ガイドの管理」を参照してください。

インストールとセットアップ

この記事では、インストーラーを使用してProfile Managementをインストールするための一般的なワークフローについて説明します。また、Profile Managementをセットアップするためのベストプラクティスも提供します。

Profile Managementをインストールするための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. インストールパッケージをダウンロードする(/ja-jp/profile-management/current-release/install-and-set-up/files-in-download.html)
2. Profile Managementをインストールする(/ja-jp/profile-management/current-release/install-and-set-up/install.html)

Profile Managementをセットアップする際は、以下のベストプラクティスを参照してください。

- ローカルGPOでProfile Managementをテストする(/ja-jp/profile-management/current-release/install-and-set-up/test-with-local-gpo.html)
- ユーザーストアを作成する(/ja-jp/profile-management/current-release/install-and-set-up/create-user-store.html)

ユーザー ストアを作成する

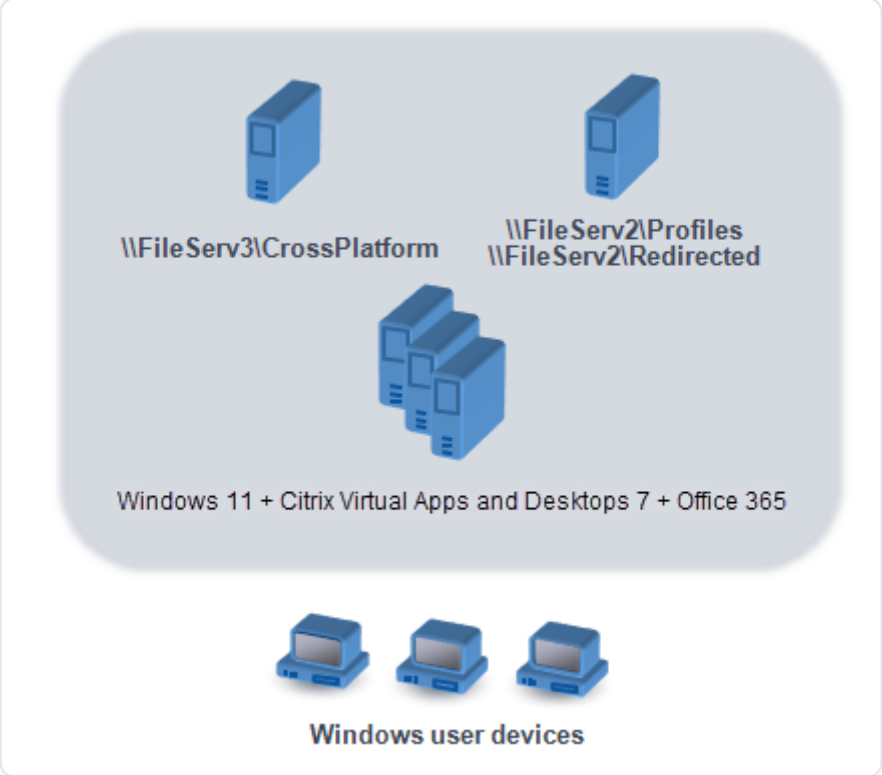
この記事では、組織に最適な方法でユーザー ストアを作成するのに役立ちます。ここにある情報を確認するだけでなく、ユーザー ストアへのパスを可能な限り効率的に構成するようにしてください。たとえば、変数を適切に使用してパスを構成します。この件に関するアドバイスと例については、「ユーザー ストアへのパスを指定する」を参照してください。

ユーザー ストアは、Citrix® ユーザー プロファイルを保存するための中央のネットワーク ロケーションです。

任意のサーバー メッセージ ブロック (SMB) または共通インターネット ファイル システム (CIFS) ファイル共有をユーザー ストアに使用できます。ベスト プラクティスは、以下を確実にすることです。

- 共有が、Citrix ユーザー プロファイルで使用されるアカウントからアクセス可能であること。
- 共有が、プロファイル データを保存するのに十分な大きさであること。
- 共有が、ディスクまたはネットワーク障害の場合に堅牢であること。

この図は、リダイレクトされたフォルダー アイテムのストレージ、クロスプラットフォーム設定ストア (別のファイル サーバー上)、および Microsoft Office を実行している Windows 11 仮想デスクトップ (Citrix Virtual Desktops™ で公開) に関連するユーザー ストアの例を示しています。仮想デスクトップにアクセスするユーザー デバイスも参照用に示されています。



セキュアなユーザー ストアの作成に関する推奨事項は、Microsoft TechNet Web サイトの「移動ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高いレベルのセキュリティを保証します。また、ユーザー ストアへのアクセスを構成する際には、Citrix ユーザー プロファイルを変更または削除するために必要な Administrators グループを含めます。

展開に複数のプラットフォームが含まれている場合は、「複数のプラットフォームの計画」でバージョン 1 およびバージョン 2 のプロファイル タイプに関する情報を確認してください。ユーザー ストアの構造については、「Profile Management のアーキテクチャ」を参照してください。

注：アプリケーションがユーザー プロファイル内のファイルのアクセス制御リスト (ACL) を変更しても、Profile Management はそれらの変更をユーザー ストアにレプリケートしません。この動作は、Windows 移動プロファイルと一貫しています。

このビデオを見て詳細を確認してください。

展開を計画する

Profile Managementの展開を計画するには、環境とユーザーに適した構成を形成する一連のポリシー設定を決定します。自動構成機能は、Citrix仮想デスクトップ展開におけるこの意思決定の一部を簡素化します。あらゆる展開でこの重要なタスクを実行するためのガイドとして、「構成を決定する」を参照してください。

構成を決定し、それをレビューおよびテストした後、一般的な展開は次の要素で構成されます。

1. ユーザー ストアの作成
2. Profile Managementのインストール
3. Profile Managementの有効化

.iniファイルを使用したパイロット スタディの計画

以下の情報は、パイロット スタディまたは評価中にProfile Managementの.iniファイルを使用する際に役立つことを目的としています。

重要：評価目的で.iniファイル（UPMPolicyDefaults_all.ini）を使用する予定がある場合は、実稼働環境でグループポリシー（GP）の使用に切り替える前に、ファイルの名前を変更してください。たとえば、ファイル名をUPMPolicyDefaults_all_old.iniに変更します。ファイルの名前を変更

することで、実稼働設定のみが適用され、評価中に指定した設定が使用されないことを確実にできます。

ファイルの名前が変更されない場合、Profile Managementはグループポリシーで構成されていない設定がないかファイルを調べ、見つかった非デフォルト設定を採用します。したがって、不要な設定が導入されるリスクを排除するには、実稼働環境で使用したいすべての設定を.iniファイルではなくグループポリシーを使用して構成してください。

.iniファイルには、.admファイルおよび.admxファイルと同じポリシーが含まれていますが、ポリシーの名前は異なります。GPの名前になじみがあり、.iniファイルを使用したパイロット スタディを計画している場合は、「Profile Managementポリシー」の表を使用して名前を比較してください。

.iniファイルの展開の詳細については、「Profile Managementのアップグレード」および「ローカルGPOを使用したProfile Managementのテスト」を参照してください。

ベストプラクティス

Windowsユーザープロファイルは、特定のユーザーアカウントでログオンするユーザーの環境を定義する、フォルダー、ファイル、レジストリ、および構成設定の集合です。ユーザーは、管理構成に応じてこれらの設定をカスタマイズできます。

Profile Managementを1か所から構成する

Profile Managementを構成できる場所は3つあります。Profile Managementを構成するには、次のいずれかの方法を使用します。

- Active Directory のグループポリシーオブジェクト
- Citrix Studioのポリシー
- ワークスペース環境管理™

Profile Managementを構成するには、3つの場所のうちいずれか1つのみを選択することをお勧めします。

このビデオを見て詳細を確認してください:



Cookieの処理

Profile Managementは、Internet Explorer 10およびInternet Explorer 11の古いCookieの削除をサポートしています。**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーを使用して、古いCookieを削除し、Cookieフォルダーの肥大化を防ぐことができます。さらに、ミラーリングするフォルダーのリストに次のフォルダーを追加します。

- AppData\\Local\\Microsoft\\Windows\\INetCookies
- AppData\\Local\\Microsoft\\Windows\\WebCache
- AppData\\Roaming\\Microsoft\\Windows\\Cookies

詳細については、「ログオフ時にインターネットクッキーファイルを処理する」(/ja-jp/profile-management/current-release/policies/descriptions-and-defaults.html#process-internet-cookie-files-on-logoff)を参照してください。

アウトルックとオフィス 365

Microsoft は、オンラインとオフラインで一貫した Microsoft Outlook エクスペリエンスを可能にするために、キャッシュされた Exchange モードを推奨しています。キャッシュされた Exchange モードは、Microsoft Outlook クライアントから有効にできます。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/exchange/outlook/cached-exchange-mode>` を参照してください。

キャッシュされた Exchange モードを使用すると、ユーザーの Exchange メールボックスのコピーが常にオフライン Outlook データファイル (*.ost) に保存されます。このファイルは大きくなる可能性があります。

Microsoft Outlook データをローカルまたは共有ドライブに保存することは避けることをお勧めします。代わりに「ネイティブ Outlook 検索エクスペリエンスを有効にする」機能を使用してください。この機能を使用すると、オフライン Outlook データファイル (*.ost) とユーザー固有の Microsoft 検索データベースがユーザープロファイルとともにローミングされます。この機能により、Microsoft Outlook でメールを検索する際のユーザーエクスペリエンスが向上します。この機能の使用に関する詳細については、「ネイティブ Outlook 検索エクスペリエンスを有効にする」(/ja-jp/profile-management/current-release/configure/enable-native-outlook-search-experience.html) を参照してください。

Microsoft Credentials Roaming が有効なプロファイルストリーミング

既定では、構成ファイル内の次のフォルダーはプロファイルストリーミングから除外されます。

- AppData\\Local\\Microsoft\\Credentials

- Appdata\\Roaming\\Microsoft\\Credentials
- Appdata\\Roaming\\Microsoft\\Crypto
- Appdata\\Roaming\\Microsoft\\Protect
- Appdata\\Roaming\\Microsoft\\SystemCertificates

プロファイルストリーミングの除外を手動で構成する場合は、上記のフォルダーを「Profile streaming exclusion list–directories.」に追加してください。

スタートメニューのローミング

スタートメニューにピン留めされたアプリケーションは、数回のログオン後に以下のオペレーティングシステムで消えることがあります。

- Windows 10 バージョン 1607 以降、32ビットおよび64ビット
- Windows 11、32ビットおよび64ビット
- Windows Server 2016 Standard および `Datacenter` エディション
- Windows Server 2019 Standard および `Datacenter` エディション
- Windows 10 エンタープライズ 仮想デスクトップ用

> **注：**
>
> Windows 10/11 と Windows Server 2016/2019 の両方に同じポリシーを使用することはできません。VDI および共有デスクトッププラットフォームには個別のポリシーを構成するか、Profile Management 2103 以降を使用している場合は、自動構成を使用してください。

スタートメニューのローミングを自動的に有効にする

Profile Management 2103 以降を使用している場合、**Disable automatic configuration** ポリシーをデフォルト値 (**Disabled**) のままにしておくと、*スタートメニューのローミング* が自動的に有効になります。

Profile Management 2106 以降を使用している場合は、**Profile Management \> File system \> Synchronization** にある **Accelerate folder mirroring** ポリシーを有効にすることをお勧めします。この設定により、フォルダーミラーリング機能のユーザーログオンおよびログオフエクスペリエンスが向上します。詳細については、「Accelerate folder mirroring」を参照してください。

Windows 10 および Windows 11 のスタートメニューのローミングを手動で有効にする

Disable automatic configuration ポリシーが有効になっている場合、以下の手順で Windows 10 または Windows 11 の *スタートメニューのローミング* を手動で有効にできます。

1. **プロファイル管理 \> ファイルシステム \> 同期** に移動します。
2. **Folders to mirror** ポリシーを **Enabled** に設定し、以下のフォルダーをミラーリングするフォルダーのリストに追加します。
   - `Appdata\Local\Packages`
   - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\Caches`
   - `!ctx_localappdata!\TileDataLayer` (Windows 10 バージョン 1607 以前にのみ適用可能)

> **注:**
>
> Citrix Profile Management 1912以降、**デフォルトの除外リスト - ディレクトリ**または**除外リスト - ディレクトリ**に追加されたフォルダーは、**ミラーするフォルダー**に追加しても同期できません。これらのフォルダー、またはその親フォルダーや祖先フォルダーが除外リストに含まれている場合は、**同期するディレクトリ**リストに追加してください。

3. **同期するファイル**ポリシーを**有効**に設定し、次のファイルを同期するファイルのリストに追加します。
   - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*`

Windowsサーバー向けにスタートメニューのローミングを手動で有効にする

自動構成を無効にするポリシーが有効になっている場合、以下の手順を使用して、Windowsサーバー向けに*スタートメニューのローミング*を手動で有効にできます。

1. **Profile Management \> 詳細設定**に移動し、**自動構成を無効にする**ポリシーを**有効**に設定します。
2. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**に移動します。
3. **ミラーするフォルダー**ポリシーを**有効**に設定し、次のフォルダーをミラーするフォルダーのリストに追加します。
   - `Appdata\Local\Packages`
   - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\Caches`

> **注:**
>
> Citrix Profile Management 1912以降、**デフォルトの除外リスト - ディレクトリ**または**除外リスト - ディレクトリ**に追加されたフォルダーは、**ミラーするフォルダー**に追加しても同期できません。これらのフォルダー、またはその親フォルダーや祖先フォルダーが除外リストに含まれている場合は、**同期するディレクトリ**リストに追加してください。

4. 「**同期するファイル**」ポリシーを「**有効**」に設定し、同期するファイルのリストに次のファイルを追加します。

   - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*`

プロファイルを効率的に同期する

不十分に同期されたユーザープロファイルは、ログオンの遅延、ユーザー設定の損失、プロファイルの破損につながる可能性があります。また、過剰な管理作業が必要になることもあります。プロファイルを効率的に同期するには、この記事で説明されている推奨事項に従ってください。

フォルダーリダイレクト

フォルダーリダイレクトは、Profile Management とともに使用できる Microsoft Windows の機能です。フォルダーリダイレクトは、プロファイルソリューションを成功させる上で重要な役割を果たします。

フォルダーリダイレクトを使用するには、関連するユーザーが Profile Management が管理する OU にいることを確認してください。Active Directory の GPO を使用してフォルダーリダイレクトを構成することをお勧めします。

たとえば、「**ユーザーの構成 \> 管理用テンプレート \> クラシック管理用テンプレート (ADM) \> Citrix \> Profile Management \> フォルダーリダイレクト**」の下にある対応するポリシーを有効にすることで、次のフォルダーをリダイレクトできます。

ドキュメント、ピクチャ、ミュージック、ビデオ、お気に入り、連絡先、ダウンロード、リンク、検索、保存したゲーム

> **注：**

- フォルダーリダイレクトにより、ユーザーがログオンするたびにこれらのフォルダー内のデータをコピーする必要がなくなり、ユーザーログオンが高速化されます。
- **AppData (Roaming)** および **スタートメニュー** の**フォルダーリダイレクト**を有効にしないことを強くお勧めします。アプリケーションやスタートメニューで問題が発生する可能性があります。
- **デスクトップ**フォルダーが大きすぎる場合はリダイレクトしないでください。そうしないと、ユーザーがログオンしたときに黒い画面が表示されることがあります。

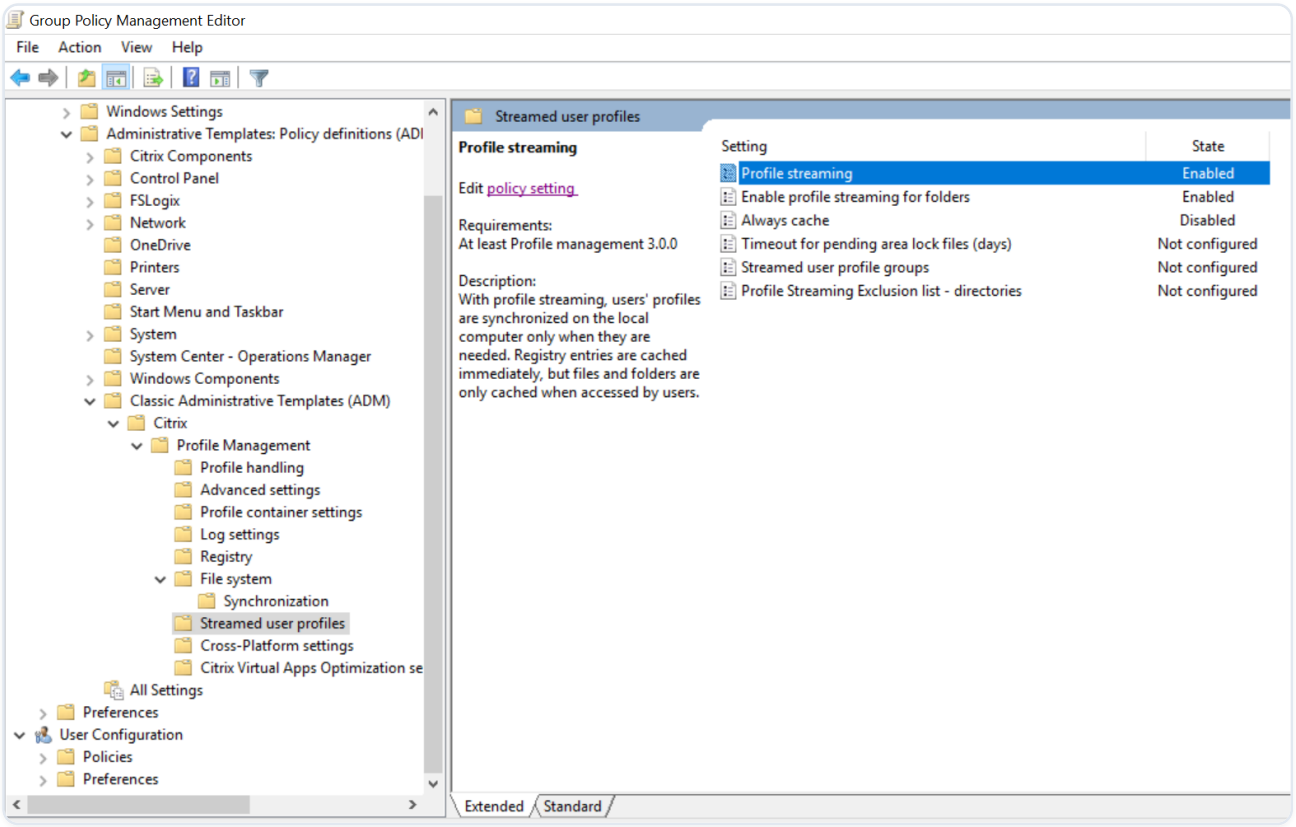
ファイルとフォルダーを含める/除外する

Profile Management を使用すると、含めるリストと除外するリストをカスタマイズすることで、同期したくないファイルとフォルダーを指定できます。プロファイルの肥大化を避けるため、サードパーティアプリケーションのキャッシュファイル（例：Appdata\Local\Google\Chrome\UserData\Default\Cache にある Chrome キャッシュファイル）を除外してください。詳しくは、「アイテムを含める/除外する」を参照してください。

プロファイル ストリーミング

プロファイル管理は、ユーザーがログオン後にアクセスしたときにのみ、ユーザー ストアからローカル コンピューターにプロファイル内のファイルをフェッチします。これにより、ログオンプロセスが高速化され、プロファイル サイズが削減されます。たとえば、ファイルが使用されない場合、ローカル プロファイル フォルダーにコピーされることはありません。ストリーミングされるファイルのサイズに下限を設けるには、**常にキャッシュ**ポリシーを使用することもできます。このサイズ以上のファイルは、ログオン後できるだけ早くローカルにキャッシュされます。

フォルダーのプロファイル ストリーミングを有効にするポリシーと**プロファイル ストリーミング**ポリシーの両方を有効にすることで、アクセスされていないフォルダーをフェッチする必要がなくなります。



アクティブなライトバックとレジストリ

この機能は、特に変更されたファイルが多い場合に、プロファイル ストリーミング機能と比較してログオフ時間を短縮します。この機能は、セッション中に、ログオフする前に、変更されたファイルとフォルダー (レジストリ エントリは除く) をユーザー ストアに同期します。

トラブルシューティングのベストプラクティス

潜在的な構成エラーを特定するには、プロファイル管理構成チェッカー ツール (UPMConfigCheck) を常に使用してください。

プロファイル管理が機能しない場合は、まず、構成されているユーザー ストアにアクセスできるかどうかを確認してください。

Windows 10 スタートメニューのカスタマイズ

部分的なロックダウン カスタマイズ レイアウトを使用し、グループ ポリシーを通じてカスタマイズを展開することをお勧めします。スタート メニューのレイアウトのカスタマイズの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-hardware/customize/desktop/customize-start-layout>` を参照してください。

セキュリティ

このトピックでは、Profile Management を保護するための推奨されるベストプラクティスについて説明します。一般に、Citrix® ユーザープロファイルデータへの不正なアクセスを防ぐため、ユーザー ストアが配置されているサーバーを保護してください。

安全なユーザー ストアの作成に関する推奨事項は、Microsoft TechNet ウェブサイトの「移動ユーザープロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項により、基本的な操作において高レベルのセキュリティが確保されます。また、ユーザー ストアへのアクセスを構成する際には、Citrix ユーザープロファイルを変更または削除するために必要な Administrators グループを含めてください。

権限

Citrix は、ユーザー ストアとクロスプラットフォーム設定ストアに対して、次のアクセス許可をテストし、推奨しています。

- 共有アクセス許可: ユーザー ストアのルートフォルダーに対するフルコントロール
- Microsoft が現在推奨している次の NTFS アクセス許可:

グループまたはユーザー名	アクセス許可	適用先
作成者/所有者	フルコントロール	サブフォルダーとファイルのみ
Profile Management の制御下にあるアカウントのグループ	フォルダーの内容の一覧表示 / データ読み取りおよびフォルダーの作成 / データ追加	このフォルダーのみ
ローカルシステム	フルコントロール	このフォルダー、サブフォルダー、およびファイル

継承が無効になっていない場合、これらの権限により、アカウントはストアにアクセスできます。また、アカウントはユーザープロファイル用のサブフォルダーを作成し、必要な読み取りおよび書き込み操作を実行できます。

この最小限の要件を超えて、サブフォルダーとファイルのみを完全に制御する管理者グループを作成することで、管理を簡素化することもできます。そうすれば、プロファイルの削除（一般的なトラブルシューティングタスク）がそのグループのメンバーにとって容易になります。

テンプレートプロファイルを使用する場合、ユーザーはそれに対する読み取りアクセス権が必要です。

アクセス制御リスト (ACL)

クロスプラットフォーム設定機能を使用する場合、定義ファイルを保存するフォルダーにACLを次のように設定します。認証済みユーザーには読み取りアクセス権、管理者には読み取り/書き込みアクセス権。

Windowsローミングプロファイルは、ネットワーク上のプロファイルデータを含むフォルダーから管理者権限を自動的に削除します。Profile Managementは、ユーザーストア内のフォルダーからこれらの権限を自動的に削除しません。組織のセキュリティポリシーによっては、手動で削除できます。

注：アプリケーションがユーザープロファイル内のファイルのACLを変更しても、Profile Managementはそれらの変更をユーザーストアにレプリケートしません。これはWindowsローミングプロファイルの動作と一致しています。

プロファイルストリーミングとエンタープライズウイルス対策製品

Citrix Profile Managementのストリーム配信ユーザープロファイル機能は、高度なNTFS機能を使用して、ユーザープロファイルから欠落しているファイルの存在をシミュレートします。この点において、この機能は階層型ストレージマネージャー (HSM) と呼ばれる製品群に似ています。HSMは通常、磁気テープや書き換え可能な光ストレージなどの低速大容量ストレージデバイスに、あまり使用されないファイルをアーカイブするために使用されます。そのようなファイルが必要な場合、HSMドライバーは最初のファイル要求を傍受し、要求を行っているプロセスを一時停止し、アーカイブストレージからファイルをフェッチします。そして、ファイル要求の続行を許可します。この類似性から、ストリーム配信ユーザープロファイルドライバーであるupmjit.sysは、実際にはHSMドライバーとして定義されています。

このような環境では、ウイルス対策製品がHSMドライバーを認識するように構成する必要があり、ストリーム配信ユーザープロファイルドライバーも例外ではありません。最も高度な脅威から防御するために、ウイルス対策製品はデバイスドライバーレベルで一部の機能を実行する必要があります。そして、HSMドライバーと同様に、ファイル要求を傍受し、元のプロセスを一時停止し、ファイルをスキャンして再開することで機能します。

ウイルス対策プログラムを誤って構成すると、ストリーム配信ユーザープロファイルドライバーのようなHSMを中断させ、ユーザーストアからのファイルのフェッチを妨げ、ログオンがハングアップする原因となることが比較的容易に起こります。

幸いなことに、エンタープライズ向けウイルス対策製品は、HSMなどの高度なストレージ製品の可能性を念頭に置いて作成されています。そして、HSMがその作業を完了するまでスキャンを遅延するように構成できます。家庭用ウイルス対策製品はこの点ではそれほど高度ではありません。そのため、家庭用およびSoHo（小規模オフィス/ホームオフィス）のウイルス対策製品は、ストリーミングされたユーザープロファイルではサポートされていません。

ストリーミングされたユーザープロファイルで使用するためにウイルス対策製品を構成するには、次のいずれかの製品機能を探してください。機能名はあくまで目安です。

- **信頼済みプロセスリスト**。ウイルス対策製品にHSMを識別させ、HSMがファイル取得プロセスを完了できるようにします。ウイルス対策製品は、信頼されていないプロセスによってファイルが最初にアクセスされたときにファイルをスキャンします。
- **オープンまたはステータスチェック操作時にスキャンしない**。ウイルス対策製品を構成して、データがアクセスされたとき（たとえば、ファイルが実行または作成されたとき）にのみファイルをスキャンするようにします。その他の種類のファイルアクセス（たとえば、ファイルが開かれたときやそのステータスがチェックされたとき）は、ウイルス対策製品によって無視されます。HSMは通常、ファイルオープンおよびファイルステータスチェック操作に応答してアクティブ化されるため、これらの操作でのウイルススキャンを無効にすると、潜在的な競合が解消されます。

Citrixは、主要なエンタープライズ向けウイルス対策製品のバージョンでストリーミングされたユーザープロファイルをテストし、Profile Managementとの互換性を確保しています。これらのバージョンには以下が含まれます。

- マカフィー ウイルススキャン エンタープライズ 8.7
- シマンテック エンドポイント プロテクション 11.0
- トレンドマイクロ オフィススキャン 10

これらの製品の以前のバージョンはテストされていません。

他のベンダーのエンタープライズ向けウイルス対策製品を使用している場合は、それがHSM対応であることを確認してください。スキャンを実行する前にHSM操作が完了するように構成できます。

一部のウイルス対策製品では、管理者が読み取り時にスキャンするか書き込み時にスキャンするかを選択できます。この選択は、パフォーマンスとセキュリティのバランスを取るものです。ストリーミングされたユーザープロファイル機能は、この選択の影響を受けません。

ストリーミングおよびウイルス対策展開におけるProfile Managementのトラブルシューティング

ログオンがハングアップしたり、時間がかかったりするなどの問題が発生した場合、Profile Managementとエンタープライズ向けウイルス対策製品との間に構成の誤りがある可能性があります。次の手順をこの順序で試してください。

1. Profile Managementの最新バージョンを使用していることを確認してください。問題はすでに発見され、修正されている可能性があります。
2. Profile Managementサービス (UserProfileManager.exe) を、エンタープライズ向けウイルス対策製品の信頼済みプロセスリストに追加します。
3. HSM操作（開く、作成、復元、ステータスチェックなど）でのウイルスチェックをオフにします。読み取りまたは書き込み操作でのみウイルスチェックを実行します。
4. その他の高度なウイルスチェック機能をオフにします。たとえば、アンチウイルス製品は、実際のファイルタイプを特定するために、ファイルの最初の数ブロックをクイックスキャンする場合があります。これらのチェックは、ファイルの内容を宣言されたファイルタイプと照合しますが、HSM操作を妨げる可能性があります。
5. 少なくともプロファイルがローカルドライブに保存されているフォルダーについては、Windowsの検索インデックス作成サービスをオフにします。このサービスは不要なHSM取得を引き起こし、ストリーミングされたユーザープロファイルとエンタープライズアンチウイルス製品との間で競合を引き起こすことが確認されています。

これらの手順のいずれも機能しない場合は、ストリーミングされたユーザープロファイルをオフにします（**Profile streaming**設定を無効にすることで）。それで機能する場合は、その機能を再度有効にし、エンタープライズアンチウイルス製品を無効にします。それでも機能する場合は、機能しないケースのProfile Management診断情報を収集し、Citrixテクニカルサポートに連絡してください。彼らはエンタープライズアンチウイルス製品の正確なバージョンを知る必要があります。

Profile Managementの使用を継続するには、エンタープライズアンチウイルスを再度有効にし、ストリーミングされたユーザープロファイルをオフにすることを忘れないでください。この構成では、Profile Managementの他の機能は引き続き機能します。プロファイルのストリーミングのみが無効になります。

システム要件

ソフトウェア要件

Profile Managementを実行するシステムは、以下のいずれかのオペレーティングシステムに基づいている必要があります。

- **デスクトップ** - Microsoft Windows 11、Windows 10

  Citrix Virtual Desktops™環境では、Windowsストアアプリケーション（UWPアプリとも呼ばれる）がサポートされています。

- **サーバー** - ウィンドウズ サーバー 2025、ウィンドウズ サーバー 2022、ウィンドウズ サーバー 2019、ウィンドウズ サーバー 2016 の スタンダード および データセンター エディション

> **注:**
>
> Citrix Profile Managementは、製造元によってサポートされているオペレーティングシステムのバージョンでのみサポートされます。オペレーティングシステムの製造元から拡張サポートを購入する必要がある場合があります。

> 拡張保護モード（EPM）が有効な場合、Windows 7以降ではMicrosoft Internet Explorer 10以降のCookieはサポートされません。EPMが有効な場合、Profile ManagementはCookieを処理または操作しません。

すべてのユーザーは、プロファイルが一元的に保存されるネットワークフォルダーであるユーザーストアにアクセスできる必要があります。または、必要に応じて、プロファイルをユーザーのホームドライブに保存することもできます。詳細については、「Profile Managementのアーキテクチャ」を参照してください。

Profile ManagementがCitrix Studioに統合されているXenDesktop 7を使用する場合を除き、構成にはActive Directory（AD）グループポリシーオブジェクト（GPO）が必要です。Windows Server 2008およびWindows Server 2012ネイティブモードのADフォレスト機能レベルおよびドメイン機能レベルがサポートされています。詳細については、「Profile Managementでのドメインとフォレストのサポート」を参照してください。または、構成設定にローカルの.iniファイルを使用することもできますが、一般的に.iniファイルはテスト目的でのみ使用されます。.iniファイルの設定は、GPOで構成されていない設定、つまり「未構成」状態のままになっているグループポリシー設定に適用されます。

Profile Managementで使用しているCitrix製品またはコンポーネントで短いファイル名（8.3形式のファイル名とも呼ばれる）が必須である場合、Profile Managementの展開で短いファイル名のサポートを無効にしないでください。無効にすると、ユーザーストアとの間でファイルをコピーする際に問題が発生する可能性があります。

Profile Managementサービスを実行しているコンピューターでは、プロファイルをドライブ文字でマウントされた単一のディスクに保存します。ディスクがユーザープロファイルを保存するため

に使用されるフォルダーにマウントされている場合（一般的な例は`C:\Users`）、サービスからマスクされ、処理されない可能性があります。

Citrix製品の互換性

Profile Managementは、以下のCitrix製品で使用できます。

- シトリックス バーチャルデスクトップ
- シトリックス バーチャルアプリ™
- シトリックス バーチャルアプリおよびデスクトップ™
- Citrix DaaS™ (旧 Citrix バーチャルアプリおよびデスクトップ サービス)

Profile ManagementとCitrix Virtual Apps and Desktopsの互換性マトリックスについては、「Citrix Profile Managementの追加ライフサイクル情報」を参照してください。

このCurrent Release (CR)をLong Term Service (LTSR)環境で使用する方法やその他のFAQについては、Knowledge Centerの記事を参照してください。

ダウンロード

Profile Managementをダウンロードするには

1. Citrixダウンロードページに移動します。
2. マイアカウントにログオンします。お客様のアカウントは、展開したCitrix製品のライセンス資格に関連付けられている必要があります。アカウントがライセンス資格に関連付けられていない場合は、Citrixカスタマーサービスにお問い合わせください。
3. 「ダウンロードの検索」で製品を選択し、ダウンロードの種類として「コンポーネント」を選択します。
4. Profile Managementの最新バージョンをダウンロードします。

診断機能

Citrix Diagnostic Facilityを使用してトレースログをキャプチャする前に、監視するプロファイルを持つデバイス、仮想デスクトップ、またはCitrixサーバーで使用されているCitrix製品またはコンポーネントで利用可能であることを確認してください。

クロスプラットフォーム設定

このリリースでクロスプラットフォーム設定機能を使用するには、Profile Management Serviceを実行しているすべてのコンピューターにMicrosoft Core XML Services (MSXML) 6.0 Service Pack

1以降をインストールします。このコンポーネントはMicrosoft .NET Framework 3.5の一部であり、定義ファイルを処理するために必要です。

この機能は、サポートされているオペレーティングシステムとアプリケーションのセットでのみ使用してください。詳細については、「クロスプラットフォーム設定でサポートされているオペレーティングシステムとアプリケーション」を参照してください。

既存のプロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行する

以下のプロファイルタイプからCitrixユーザープロファイルへの移行がサポートされています。

- Windowsローミングプロファイル
- 以下のいずれかのオペレーティングシステムに基づくローカルプロファイル:
  - ウィンドウズ 11
  - ウィンドウズ 10
  - ウィンドウズ 8
  - ウィンドウズ 7
  - ウィンドウズ ビスタ
  - ウィンドウズ XP
  - ウィンドウズ サーバー 2025
  - ウィンドウズ サーバー 2022
  - Windows サーバー 2019
  - Windows サーバー 2016
  - ウィンドウズ サーバー 2012 R2
  - Windows サーバー 2012
  - Windows サーバー 2008 R2
  - ウィンドウズ サーバー 2008
  - ウィンドウズ サーバー 2003
- User Profile Manager 2.0で作成されたCitrixユーザープロファイル

以下のプロファイルタイプからCitrixユーザープロファイルへの移行はサポートされていません。

- Microsoft 強制プロファイル。 ヒント: Profile Management のテンプレートプロファイル機能を使用して、Microsoft 強制プロファイルを Citrix 強制プロファイルとして構成できます。Citrix 強制プロファイルはすべてのログオンで使用され、ユーザーの変更が保存されない点を

除いて、通常の Citrix ユーザープロファイルとまったく同じように機能します。詳しくは、 テンプレートまたは強制プロファイルの指定を参照してください。

- Citrix強制プロファイル。
- User Profile Managerのテクニカルプレビューリリースまたはベータリリースで作成されたCitrixユーザープロファイル。
- サードパーティプロファイル（sepagoPROFILEを含む）。

32ビットのCitrixユーザープロファイルから64ビットのプロファイルにアップグレードすることはできません。

トラブルシューティング

このセクションでは、Profile Management のトラブルシューティング方法について説明します。

一般的なトラブルシューティングのワークフローは次のとおりです。

1. Profile Management の設定を確認する。
2. Profile Management のログファイルを確認する。
3. Profile Management によってログに記録された Windows イベントを確認する。
4. 一般的な問題をトラブルシューティングする。
5. 高度なトラブルシューティングを実行する。
6. 上記の手順を試しても問題が解決しない場合は、できるだけ多くの診断情報を収集し、Citrix テクニカルサポートに問い合わせてください。

アップグレードと移行

このセクションでは、Profile Managementソフトウェアをアップグレードする手順と、既存のWindowsユーザープロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行するための情報について説明します。たとえば、これらの手順を使用して、バージョン3.xからバージョン5.xに簡単にアップグレードできます。

アップグレードする前に、アップグレード元およびアップグレード先のリリースで利用可能なProfile Managementの機能と設定を理解してください。この情報を確認するには、「Profile Managementのポリシー」を参照してください。.iniファイルからグループポリシーへのアップグレードを容易にするため、このトピックでは.iniファイルの設定を.admファイルおよび.admxファイルの設定にマッピングしています。

アップグレード中にProfile Managementを構成しないでください（グループポリシーまたは.iniファイルのいずれでも）。まず展開をアップグレードし、次に必要に応じて設定を構成することで、これら2つのタスクを分離してください。理想的には、「構成の決定」の質問に答えることで設定を構成します。

ヒント：Profile Management 2.1.1以降の展開は、最新バージョンにアップグレードすることでホットフィックスできます。アップグレード後、必要に応じて以降の機能を有効にできます。

混在展開

異なるバージョンのProfile Managementが共存する展開では、次の操作を行います。

- 混在展開が存在する期間を最小限に抑えます。
- 最新バージョンの.admまたは.admxファイルを、すべてのドメインコントローラー上の各グループポリシーオブジェクトに追加します。すべての新機能が無効になっていることを確認し、新しいポリシーが伝播する時間を確保してください。
- すべてのコンピューターを最新バージョンのProfile Managementにアップグレードしてから、ポリシーを有効にしてください。

バージョン5.xと3.2を含む混在展開はサポートされています。ただし、このような展開は、以前のバージョンから新しいバージョンへの移行中に存在する一時的な状態として扱ってください。

重要： バージョン5.xとバージョン2.1.1以前のバージョン（Citrix Technical Previewまたはベータリリースを含む）が混在する展開はサポートされていません。ただし、アップグレードできず、これらのバージョンが展開内で共存する必要がある場合は、このトピックの残りの部分が役立つかもしれません。

Profile Management 2.1.1以前を含む混在展開

このトピックの残りの部分では、Profile Management 2.1.1以前とProfile Management 3.xまたは5.xの共存に関する情報が含まれています。あるバージョンから別のバージョンへ移行する方法について説明します。このトピックでは、これらのバージョンの略語としてバージョン2とバージョン5という用語を使用します。

各バージョンを別々のOUに分離し、各バージョンを実行しているコンピューター用に別々のユーザーストアを維持します。あるいは、単一のユーザーストアが両方のバージョンを実行しているコンピューターにサービスを提供する場合、すべてのコンピューターがバージョン5にアップグレードされるまで、すべてのバージョン5の設定が無効になっていることを確認してください。「混在」ユーザーストアでバージョン4の設定を有効にすると、ユーザーはバージョン2を実行しているコンピューターにログオンできます。しかし、一時的なWindowsユーザープロファイル（ネットワーク上のCitrix®ユーザープロファイルではない）を受け取り、そのプロファイルへの変更は

保存されません。混在展開は一時的なものと見なし、アップグレードが完了するまでの期間を最小限に抑える必要があります。

別のOUとユーザー ストアを使用すると不便な場合があります。これらの制約を回避するには、次の2つの戦略のいずれかを使用できます。Profile Managementの適切なバージョンで、処理済みグループ設定を使用して各グループを構成します。戦略2は戦略1よりも手間がかかります。前者の場合、バージョン5の処理済みユーザーグループを更新し続ける必要があります。また、2つのアプリケーションとデスクトップのセットを維持します（ただし、Citrix virtual apps™からアプリケーション定義をエクスポートすることで自動化できます）。利点は、移行に時間をかけることができる点です。

注：以下の戦略の代替として、Windows Server 2008 Active Directoryでは、WMIフィルタリングを使用してOU内のコンピューターのサブセットにGPOを適用し、インストールされているProfile Managementのバージョンを判別できます。これにより、適用されるポリシーをバージョンに合わせて自動的に調整できます。

戦略1：一括移行

このシナリオでは、ある程度のダウンタイムが許容されることを前提としています。すべてのコンピューターが同時に移行されます。

移行戦略は次のとおりです。

1. バージョン2のADMファイルをバージョン5のファイルに置き換えます。バージョン5のファイルは以前のバージョンと互換性があるため、バージョン2のコンピューターは引き続き正常に動作します。
2. すべてのバージョン5の設定が無効になっていることを確認します。デフォルトの**無効**に依存しないでください。
3. すべてのコンピューターをバージョン2からバージョン5にアップグレードし始めます。これは通常のメンテナンスおよび更新スケジュールに合わせてください。1つの例外を除き、バージョン5の設定を有効にするまでは、バージョン5はバージョン2として動作します。例外は次のとおりです。これはまれですが、このアップグレード手順が長期間にわたって段階的に行われる場合に発生する可能性が高くなります。ユーザーが複数のサーバーからCitrixユーザープロファイルにアクセスすると、複数のバージョン4セッションが作成されます。たとえば、最初にワークステーションを使用してあるサーバー上の仮想デスクトップにアクセスし、次にラップトップを使用して別のサーバー上の公開アプリケーションにアクセスする場合です。Profile Managementは、2番目のラップトップセッションに保留領域を使用する必要があります。この時点で、OU全体がバージョン5の展開として扱われます（ただし、バージョン5の機能は何

も構成されていません）。そして、PmCompatibility.iniがこの変更を反映するように更新されます。

4. オプションで、バージョン5の処理済みユーザーグループを、小規模なパイロットグループのメンバーのみを含むように設定します。ADグループポリシーの変更がネットワーク全体に伝播するのを待ちます（たとえば、週末にかけて）。この変更が行われている間、他のユーザーのアクセスを妨げる必要はありません。パイロットグループのプロファイルをバックアップします。その後、パイロットグループにProfile Managementをテストさせます。
5. パイロットグループの結果に満足したら、他のユーザーのプロファイルをバックアップしたことを確認してください。
6. 次のスケジュールされたメンテナンス期間を使用して、残りのユーザーをバージョン5の処理済みユーザーグループに追加します。ADグループポリシーの変更が伝播するのに十分な時間を確保し、残りのユーザーがログオンできるようにします。

戦略2：段階的移行

このシナリオでは、すべてのマシンまたはユーザーを一度に新しいバージョンに移行できないため、ユーザーのサブセットを選択してバッチで移行することを前提としています。複数のデータセンターや地理的に分散したユーザーがいる展開に適しています。

移行戦略は次のとおりです。

1. バージョン2のADMファイルをバージョン5のファイルに置き換えます。バージョン5のファイルは以前のバージョンと互換性があるため、バージョン2のコンピューターは引き続き正常に動作します。
2. すべてのVersion 5設定が無効になっていることを確認します。デフォルトの「無効」に依存しないでください。
3. いくつかのコンピューター（最初のバッチ）をVersion 5にアップグレードします。または、新しいコンピューターにVersion 5をインストールします。デフォルトでは、Version 5で処理されるユーザーグループには空のグループが含まれているため、どのユーザーもVersion 5ユーザーとして処理されません。フェーズ移行でコンピューターをアップグレードする場合にも適用される可能性がある、戦略1で説明されている例外に注意してください。
4. Version 5コンピューターから新しいアプリケーション（Citrix Virtual Appsを使用）または仮想デスクトップ（Citrix Virtual AppsまたはCitrix Virtual Desktops™を使用）を公開します。これらのアプリケーションとデスクトップは、名前を除いて、以前にVersion 2コンピューターから公開されたものと同一です。これらの名前は、Version 5ユーザーが使用するためのものであることを示します。

5. このバッチで選択されたユーザーは、アプリケーションまたはデスクトップにログオンします（たとえば、Web Interfaceを使用）。彼らは新しいアプリケーションを選択します。（ユーザー名またはグループメンバーシップに基づいて、Web Interfaceを使用してこの手順を強制します）。その結果、彼らのセッションはVersion 4コンピューターで実行されますが、Version 2の設定で処理されます。
6. すべてのユーザープロファイルをバックアップしたことを確認してください。
7. ユーザーをVersion 2処理済みユーザーグループからVersion 4グループに移動します。ADグループポリシーの変更がVersion 5コンピューターに伝播するのを待ちます。次回ログオンするとき、ユーザーのセッションはVersion 5の設定で処理されます。
8. 前述のとおり、次のバッチのコンピューターをアップグレードし、次のバッチのユーザーを移行します。

ユーザープロファイルを移行する

この記事では、次の2つの移行ワークフローについて説明します。

- Citrix®コンテナベースのプロファイルソリューションへの移行
- Windowsローミングプロファイルソリューションへの移行

移行戦略の詳細については、「アップグレードと移行」を参照してください。

Citrixコンテナベースのプロファイルソリューションへの移行

Profile Managementインストールパッケージに含まれる移行ツールを使用して、以下のプロファイルソリューションからCitrixコンテナベースのプロファイルソリューションにユーザープロファイルを移行できます。

- Windowsローカルプロファイルソリューション
- Citrixファイルベースのプロファイルソリューション
- FSLogix プロファイルコンテナ
- Windowsローミングプロファイルソリューション

移行ワークフロー

現在のプロファイルソリューションをCitrixコンテナベースのプロファイルソリューションに移行するには、次の手順に従います。

1. ストレージサーバー上にCitrixユーザーストアをセットアップし、そのWindowsアクセス制御リスト（ACL）を構成します。

   詳細については、「ユーザーストアの作成」を参照してください。

2. Profile Managementに付属の移行ツールを使用してユーザープロファイルを移行します。

   詳細については、例: FSLogix Profile Container のユーザープロファイルを移行するを参照してください。

3. お使いのマシンにProfile Managementをインストールします。

   詳細については、インストールとセットアップを参照してください。

4. 特定のProfile Managementポリシーを構成して、コンテナベースのプロファイルソリューションをセットアップします。基本的なワークフローは次のとおりです。

   a. Profile Managementを有効にする
   b. ユーザーストアへのパスを指定します (ユーザーストアへのパス)
   c. ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にします（プロファイルコンテナ）

   プロファイルコンテナの詳細設定については、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナを参照してください。

5. (FSLogix Profile Containerの場合) マシン上のFSLogix Profile Containerを無効にします。無効にしないと、Citrixコンテナベースのソリューションが正しく機能しません。詳細な手順は次のとおりです。

   a. **レジストリエディター**で、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\FSLogix\Profiles`に移動します。
   b. **Enabled** を **0** に設定します。

例: FSLogix Profile Container のユーザープロファイルを移行する

このセクションでは、VHDXベースのFSLogix Profile ContainerからCitrixコンテナベースのプロファイルソリューションにユーザープロファイルを移行する方法について詳しく説明します。

開始する前に、次の要件を満たしていることを確認してください。

- ストレージサーバー上にCitrixユーザーストアをセットアップし、そのWindowsアクセス制御リスト (ACL) を構成していること。
- FSLogix Profile ContainerのVHDXの場所を把握していること。
- ドメイン管理者の資格情報を持っていること。

詳細な手順は次のとおりです。

1. ドメイン管理者アカウントを使用してマシンにログオンします。

2. **Windows PowerShell ISE** を管理者として実行します。
3. PowerShell コンソールで、Profile Management インストールパッケージ内の **\tool** フォルダーにアクセスし、**CPM_ProfileContainer_Migration_Tool.ps1** を実行します。
4. プロンプトが表示されたら、移行タイプ **3** を選択します。これは、FSLogix Profile Container (VHDX) から Citrix コンテナベースのプロファイルソリューションへのユーザープロファイルの移行を表します。
5. 移行するユーザーとグループをコンマで区切って入力します。例: `<DOMAIN NAME>\<USER NAME1>,<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME1>`
6. FSLogix Profile Container の VHDX の場所を入力します。
7. Citrix VHDX ストアへのパスを入力します。

> **注:**
>
> - Citrix VHDX ストアとして、Citrix ユーザー ストアまたは別のネットワーク ストレージのいずれかを使用できます。
> - すべての変数の中で、`%USERNAME%` のみがサポートされています。

8. マシンの Windows OS バージョンを短縮名で指定します。Windows OS バージョンの短縮名については、「Profile Management policies」を参照してください。

> **注:**
>
> 指定された OS タイプを持つユーザープロファイルのみが移行されます。

> 完了すると、移行結果が画面に表示されます。

Windows ローミングプロファイルへの移行

Citrix ユーザープロファイルを Windows ローミングプロファイルにいつでも移行できます。プロファイルデータを、ローミングプロファイルが保存されているネットワークの場所に移動します。移行後、Profile Management はユーザーログオンやアプリケーション設定の処理に関与しません。

1. すべてのユーザーがログオフしていることを確認します。

2. ソフトウェアが管理するすべてのコンピューターからProfile Management Serviceを削除します。
3. ユーザーストアで、`\UPM_Profile`の内容をローミングプロファイルの場所に移動します。クロスプラットフォーム設定ストアの内容を移動する必要はありません。
4. （バージョン1プロファイルのみ）`\UPM_Profile`のすべてのサブフォルダーから_upm_varサフィックスを削除します。 注：スクリプトを使用すると、この手順が簡素化される場合があります。

新機能

2603の新機能

このリリースには、以下の新機能と機能強化が含まれています。また、全体的なパフォーマンスと安定性の向上に役立ついくつかの問題も解決されています。

自動構成の機能強化

自動構成の機能強化により、スマートなデフォルト設定の適用とカスタマイズの保持によってProfile Managementが簡素化され、労力の削減、展開の迅速化、より迅速なオンボーディングと一貫した運用のための最適化されたプロファイルの提供が実現します。 詳細については、「自動構成の使用」を参照してください。

OneDriveおよびOutlookコンテナのセッション内フェールオーバーサポート

デフォルトでは、複数のユーザーストアが構成されている場合、OneDriveおよびOutlookコンテナのフェールオーバーはユーザーログオン時にのみ発生します。**ユーザーストア間のセッション内プロファイルコンテナフェールオーバーを有効にする**ポリシーにより、これらのコンテナのセッション内シナリオへのフェールオーバーサポートが拡張されました。

このポリシーが有効になっている場合、セッション中にProfile ManagementがアクティブなOneDriveまたはOutlookコンテナへの接続を失うと、自動的に別の利用可能なユーザーストアにフェールオーバーします。これにより、ユーザーがログオフすることなく、プロファイルの継続的な可用性が保証されます。

詳細については、「ユーザーストア間のセッション内プロファイルコンテナフェールオーバーを有効にする」を参照してください。

新しいポリシー: BindLinkリダイレクトを有効にする

新しい**BindLinkリダイレクトを有効にする**ポリシーを使用すると、Microsoft BindLink APIを使用してプロファイルコンテナ内のファイルシステムリダイレクトを処理できます。このポリシーはデフォルトで無効になっており、Windows 11 24H2およびWindows Server 2025以降（バージョン10.0.25314.0以降）でのみサポートされています。

BindLinkは、プロファイルコンテナの互換性とリダイレクトの信頼性を向上させ、より正確なコンテナの包含および除外制御を提供し、構成作業を削減します。詳細については、「BindLinkリダイレクトを有効にする」を参照してください。

StateRepositoryの自動回復によるAppXパッケージロード高速化の強化

この機能強化により、OSアップデート、予期せぬシャットダウン、またはストレージの不整合後にStateRepositoryを自動的に回復することで、AppXパッケージロード高速化の信頼性が向上します。これにより、ロードの失敗が減少し、より安定した一貫性のあるユーザーログオンエクスペリエンスが提供されます。

詳細については、「UWPアプリのロード高速化を有効にする」を参照してください。

Profile Managementのドキュメント履歴

次の表に、Profile Management 2407のドキュメントに対する重要な変更点を示します。これらの更新に関する通知を受け取るには、RSSフィードを購読してください。

日付	変更	説明
31 Jul 2024	Profile Management 2407の初期リリース	詳しくは、「新機能」を参照してください。